

# 下野郷館跡

—五間堀川河川改修事業に伴う発掘調査報告書—



## 例　　言

- 1 本書は宮城県岩沼市下野郷地内に所在する下野郷館跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、宮城県が計画する五間堀川河川改修事業に先立ち、記録保存を目的として実施されたものである。
- 3 現地調査は、仙台土木事務所からの委託を受けて、岩沼市教育委員会生涯学習課が2012年（平成24）12月3日～2017年（平成29）5月19日にかけて実施した。調査は岩沼市教育委員会生涯学習課が担当した。
- 4 出土品整理及び報告書作成については、2017年（平成29）7月4日～2018年（平成30）9月21日まで、岩沼市文化財整理室にて行った。
- 5 本書の執筆・編集は、生涯学習課内の協議の上、川又隆央・永井三郎・武田裕光・太田昭夫が担当した。執筆担当については以下の通りである。  
第I章：武田 第II章～第VIII章：川又・永井・太田  
第IX章 2：川又・永井・太田 第X章 1、3～6：川又  
また第IX章自然科学分析については、古代の森研究会が分析・執筆した。
- 6 石製品の石材鑑定については、東北大学名誉教授 蟹澤聰史氏に御協力・御教示を賜った。
- 7 発掘調査及び整理に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます。  
(五十音順・敬称略)  
秋本 雅彦、浅野 晴樹、飯村 均、石黒 伸一朗、石橋 宏、岡田 清一、押木 弘己、菅野 崇之、菅野 智則、熊谷 満、後藤 光亀、小山 美紀、今野 賀章、佐々木 健策、佐藤 洋、斎木 秀雄、斎野 裕彦、柴田 恵子、白鳥 良一、高桑 登、田中 則和、千葉 孝弥、千葉 宗久、豊村 幸宏、藤沢 敦、松本 秀明、八重樫 忠郎、吉井 宏、宮城県教育庁文化財課、株式会社バスク
- 8 本報告書における遺構・遺構挿図等の指示は次の通りである。
  - (1) 遺構の用語及び略称については、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき』に準拠した。
  - (2) 遺構実測図の水系高は海拔を示す。
  - (3) 縮尺は図に示す通りである。
  - (4) 土層及び土器の色調は「新版標準土色帳」（小川・竹原：1973）による。
- 9 遺跡の調査成果については、これまでに平成28年宮城県遺跡調査成果発表会で内容の一部を報告しているが、これと本書の内容が異なる場合は本書が優先する。

## 調査要項

所在 地 岩沼市下野郷字館内ほか

調査原因 五間堀川河川改修事業

調査主体 岩沼市教育委員会

### 【平成 24 年度】

調査期間：平成 25 年 1 月 8 日～平成 25 年 1 月 31 日

調査面積：242 m<sup>2</sup>

調査担当：川又 隆央、熊谷 篤 現場調査参加者：伊藤 和雄、加藤 哲男、佐藤 トシ子、菅原 孝子、高橋 正人、早坂 富美子

### 【平成 25 年度】

調査期間：平成 25 年 11 月 7 日～平成 25 年 12 月 25 日

調査面積：244 m<sup>2</sup>

調査担当：川又 隆央

現場調査参加者：伊藤 和雄、斎藤 新彌、佐藤 トシ子、南城 美代子、渡辺 幹雄

### 【平成 26 年度】

調査期間：平成 26 年 9 月 1 日～平成 27 年 3 月 14 日

調査面積：600 m<sup>2</sup>

調査担当：川又 隆央 現場調査参加者：伊藤 和雄、塙谷 信行、小林 国子、郷内 妙子、斎藤 新彌、佐藤 トシ子、佐藤 肇香、菅原 孝子、長田 孝子、永浜 盛明、南城 美代子、蓮沼 秀夫、早坂 富美子、松田 崇志、渡辺 幹雄

### 【平成 27 年度】

調査期間：平成 27 年 8 月 1 日～平成 27 年 12 月 26 日

調査面積：833 m<sup>2</sup>

調査担当：川又 隆央、川島 秀義 現場調査参加者：伊藤 和雄、塙谷 信行、大友 和男、草薙 敏宏、小林 国子、斎藤 新彌、佐藤 悅子、佐藤 トシ子、佐藤 光善、高橋 紀美子、永浜 盛明、南城 美代子、蓮沼 秀夫、蓮沼 秀子、宮城 富子、吉田 姥紹子、渡辺 純子、渡辺 幹雄

### 【平成 28 年度】

調査期間：平成 28 年 5 月 9 日～平成 28 年 9 月 30 日

調査面積：1,757 m<sup>2</sup>

調査担当：川又 隆央 現場調査参加者：伊藤 和雄、塙谷 信行、大友 和男、草薙 敏宏、小林 国子、斎藤 新彌、佐藤 悅子、佐藤 トシ子、佐藤 光善、高橋 紀美子、南城 美代子、蓮沼 秀夫、蓮沼 秀子、宮城 富子、吉田 姥紹子、渡辺 純子

### 【平成 29 年度】

調査期間：平成 29 年 4 月 4 日～平成 29 年 5 月 19 日

調査面積：310 m<sup>2</sup>

調査担当：永井 三郎、太田 昭夫 現場調査参加者：塙谷 信行、大友 和男、草薙 敏宏、小林 国子、斎藤 新彌、佐藤 悅子、佐藤 トシ子、佐藤 光善、斎藤 正人、高橋 紀美子、南城 美代子、蓮沼 秀子、渡辺 純子、渡辺 幹雄

## 目 次

### 例 言

### 調査要項

第Ⅰ章	遺跡の概要	1
1.	位置と地理的環境	1
2.	岩沼市の遺跡と歴史的環境	2
第Ⅱ章	調査に至る経緯と調査方法	8
1.	調査に至る経緯	8
2.	調査経過	8
3.	基本土層	9
第Ⅲ章	平成 24 年度の調査成果	10
1.	東区の調査	10
2.	西区の調査	13
3.	平成 24 年度調査のまとめ	13
	写真図版	14
第Ⅳ章	平成 25 年度の調査成果	17
1.	土坑	17
2.	溝跡	19
3.	流路跡	38
4.	その他の出土遺物	39
5.	平成 25 年度調査のまとめ	39
	写真図版	40
第Ⅴ章	平成 26 年度の調査成果	49
1.	掘立柱建物跡	49
2.	井戸跡	61
3.	堅穴遺構	64
4.	土坑	65
5.	溝跡	66
6.	ピット	70
7.	サブレンチ出土遺物	70
8.	その他の出土遺物	71
9.	平成 26 年度調査のまとめ	76
	写真図版	77
第VI章	平成 27 年度の調査成果	81
1.	掘立柱建物跡	81
2.	井戸跡	90
3.	堅穴遺構	93

4. 性格不明遺構	93
5. 土坑	93
6. 溝跡	96
7. ピット	102
8. トレンチ調査	102
9. その他の出土遺物	103
10. 平成 27 年度調査のまとめ	104
写真図版	105
<b>第VII章 平成 28 年度の調査成果</b>	112
1. 据立柱建物跡	112
2. 井戸跡	133
3. 護岸施設	153
4. 性格不明遺構	163
5. 土坑	163
6. 溝跡	168
7. ピット	196
8. その他の出土遺物	197
9. 平成 28 年度調査のまとめ	202
写真図版	203
<b>第VIII章 平成 29 年度の調査成果</b>	215
1. A 区の調査	215
2. B 区の調査	225
3. 平成 29 年度調査のまとめ	229
写真図版	239
<b>第IX章 自然科学分析 - 出土材の樹種</b>	244
はじめに	244
1. 平成 27 年度の調査	244
2. 平成 28 年度の調査	244
3. 平成 27 年度及び平成 28 年度で同定された樹種の細胞構造学的記載	246
写真図版	249
<b>第X章 総 括</b>	254
1. 遺跡の概要	254
2. 出土遺物について	257
3. 遺構の変遷と年代	261
4. SX01 護岸施設について	264
5. 井戸跡について	268
6. まとめ	270
引用・参考文献	271

## 挿 図 目 次

第1図	岩沼市の地形分類	1	第37図	SB 02～04	53
第2図	岩沼市遺跡地図	4	第38図	SB 02 土層断面図	53
第3図	下野郷館跡調査区位置図	8	第39図	SB 03・04 土層断面図	54
第4図	平成24年度調査 トレンチ配置図	10	第40図	SB 05・06	55
第5図	E2Tr SD02 土層断面図	11	第41図	SB 05 土層断面図	55
第6図	E8Tr SK01 土層断面図	12	第42図	SB 06 土層断面図	56
第7図	E9Tr SD01 土層断面図	12	第43図	SB 07	57
第8図	平成25年度遺構全体図	17	第44図	SB 07 土層断面図	57
第9図	西壁土層断面図	18	第45図	SB 08	58
第10図	SD 01、SK 01・SD 02 土層断面図	19	第46図	SB 08 土層断面図	58
第11図	SK01出土遺物	19	第47図	SB 09～11、SA 01	59
第12図	SD 01 出土遺物1	20	第48図	SB 09～11、SA 01 土層断面図	60
第13図	SD 01 出土遺物2	21	第49図	SE 01・02、土層断面図	62
第14図	SD 01 出土遺物3	22	第50図	SE 02 出土遺物	63
第15図	SD 01 出土遺物4	23	第51図	SE 03 土層断面図	63
第16図	SD 01 出土遺物5	24	第52図	SX 02、土層断面図	64
第17図	SD 01 出土遺物6	25	第53図	SX 02 出土遺物	65
第18図	SD 01 出土遺物7	26	第54図	SK 01・02・07 土層断面図	65
第19図	SD 01 出土遺物8	28	第55図	SK 02 出土遺物	66
第20図	SD 01 出土遺物9	29	第56図	SD 01～07・10・11・13・15 土層断面図	67
第21図	SD 01 出土遺物 10	30			
第22図	SD 01 出土遺物 11	31	第57図	SD 02 出土遺物	68
第23図	SD 01 出土遺物 12	32	第58図	SD 02 出土石製品	68
第24図	SD 01 出土遺物 13	33	第59図	SD 12 出土遺物	68
第25図	SD 01 出土遺物 14	34	第60図	SD 15 出土遺物	69
第26図	SD 01 出土遺物 15	35	第61図	SD 15 出土石製品	69
第27図	SD 01 出土遺物 16	35	第62図	SD 16 出土遺物	70
第28図	SD 01 出土遺物 17	36	第63図	ピット出土遺物	71
第29図	SD 01 出土遺物 18	37	第64図	サブトレンチ出土遺物	71
第30図	SD 01 出土遺物 19	37	第65図	精査出土遺物	72
第31図	SD 01 出土石製品	38	第66図	精査出土金属製品	72
第32図	その他の出土遺物	39	第67図	掘り下げ出土遺物1	73
第33図	平成26年度グリッド配置図	49	第68図	掘り下げ出土遺物2	74
第34図	SB 01	50	第69図	掘り下げ出土石製品	74
第35図	SB 01 土層断面図	50	第70図	その他の出土遺物	75
第36図	平成26年度調査遺構全体図	51	第71図	その他の出土金属製品	76

第 72 図	平成 27 年度グリッド配置図	81	第 110 図	SB 10・11 土層断面図	129
第 73 図	15 A 区遺構全体図	82	第 111 図	SB 12・13 土層断面図	130
第 74 図	15 C 区遺構全体図	83	第 112 図	SB 12・13	131
第 75 図	SB 01、土層断面図	84	第 113 図	SE・SX・SK配置図	134
第 76 図	SB 02、土層断面図	85	第 114 図	SE 01、土層断面図	134
第 77 図	SB 03・04、SB 03 土層断面図	86	第 115 図	SE 01 出土遺物 1	135
第 78 図	SB 04 土層断面図	87	第 116 図	SE 01 出土遺物 2	136
第 79 図	SB 05・05、土層断面図	88	第 117 図	SE 01 出土遺物 3	137
第 80 図	SB 07・08、土層断面図	89	第 118 図	SE 01 出土遺物 4	138
第 81 図	SE 01 出土遺物	90	第 119 図	SE 01 出土遺物 5	139
第 82 図	SE 01～03 土層断面図	91	第 120 図	SE 01 出土木製品	140
第 83 図	SE 02 出土木製品	92	第 121 図	SE 02 出土遺物	140
第 84 図	SX 01・02 土層断面図	94	第 122 図	SE 03、土層断面図	141
第 85 図	SX 01 出土遺物	95	第 123 図	SE 03 出土遺物	141
第 86 図	SX 02 出土遺物	95	第 124 図	SE 04、土層断面図	142
第 87 図	SK 02・03 土層断面図	95	第 125 図	SE 04 出土遺物 1	143
第 88 図	SD 01・02・04・05 土層断面図	97	第 126 図	SE 04 出土遺物 2	144
第 89 図	SD 03 出土遺物	98	第 127 図	SE 05、土層断面図	146
第 90 図	SD 03 出土木製品	99	第 128 図	SE 06 出土木製品	147
第 91 図	SD 04 出土遺物	100	第 129 図	SE 07、土層断面図	147
第 92 図	SD 04 出土石製品	100	第 130 図	SE 07 出土木製品	148
第 93 図	SD 04 出土金属製品	101	第 131 図	SE 09、土層断面図	149
第 94 図	SD 05 出土遺物	101	第 132 図	SE 09 出土遺物	149
第 95 図	ビット出土遺物	102	第 133 図	SE 02・06・08・10・11・12	
第 96 図	平成 27 年度調査区・トレチ配置図	102		土層断面図	150
第 97 図	カクラン出土遺物	103	第 134 図	SE 11 出土遺物	152
第 98 図	カクラン出土石製品	103	第 135 図	SE 12 出土遺物	153
第 99 図	平成 28 年度グリッド配置図	112	第 136 図	SX 01	154
第 100 図	平成 28 年度遺構全体図	113	第 137 図	SX 01 出土遺物 1	155
第 101 図	SB 01	115	第 138 図	SX 01 出土遺物 2	156
第 102 図	SB 01 土層断面図	117	第 139 図	SX 01 出土遺物 3	157
第 103 図	SB 02、土層断面図	119	第 140 図	SX 01 出土木製品 1	158
第 104 図	SB 03～05、SA 01	121	第 141 図	SX 01 出土木製品 2	159
第 105 図	SB 03・04 土層断面図	123	第 142 図	SX 01 出土木製品 3	160
第 106 図	SB 05、SA 01 土層断面図	124	第 143 図	SX 01 出土木製品 4	161
第 107 図	SB 06・07、土層断面図	125	第 144 図	SX 01 出土木製品 5	162
第 108 図	SB 08・09 土層断面図	126	第 145 図	SX 02、土層断面図	164
第 109 図	SB 08～11	127	第 146 図	SX 02 出土遺物	164

第 147 図	SK 04・06・11・12・20 土層断面図	165	第 184 図	ピット出土遺物	196
第 148 図	SK 01・03・07～10・13～15 土層断面図	166	第 185 図	ピット出土金属製品	197
第 149 図	SK 16～19 土層断面図	167	第 186 図	精査出土石製品	197
第 150 図	SK 11 出土遺物	167	第 187 図	精査出土遺物	198
第 151 図	SK 12 出土遺物	167	第 188 図	表土出土遺物1	199
第 152 図	SK 19 出土遺物	168	第 189 図	表土出土遺物2	200
第 153 図	SD配置図	169	第 190 図	表土出土鉄製品	201
第 154 図	SD 01 土層断面図	169	第 191 図	その他の出土遺物	201
第 155 図	SD 01 出土遺物1	170	第 192 図	平成 29 年度調査区配置図	215
第 156 図	SD 01 出土遺物2	171	第 193 図	調査区全体図	216
第 157 図	SD 01 出土遺物3	172	第 194 図	A 区全体図	217
第 158 図	SD 01 出土遺物4	173	第 195 図	A 区 SA34、土層断面図	218
第 159 図	SD 01 出土遺物5	174	第 196 図	A 区 SK03・09・10・12・13 土層断面図	219
第 160 図	SD 01 出土遺物6	175	第 197 図	A 区 SK03 出土遺物	220
第 161 図	SD 01 出土遺物7	176	第 198 図	A 区 SK10 出土石製品	220
第 162 図	SD 01 出土遺物8	177	第 199 図	A 区 SD、土層断面図	221
第 163 図	SD 01 出土遺物9	178	第 200 図	A 区 SD01 出土遺物	222
第 164 図	SD 01 出土遺物 10	179	第 201 図	A 区 SD01 出土石製品	223
第 165 図	SD 01 出土遺物 11	180	第 202 図	A 区 SD02 出土遺物	223
第 166 図	SD 01 出土遺物 12	181	第 203 図	A 区 SD02 と SD04 の合流点 出土遺物	223
第 167 図	SD 01 出土石製品	182	第 204 図	A 区 SD05 出土遺物	224
第 168 図	SD 03 土層断面図	183	第 205 図	A 区 SD15 出土遺物	224
第 169 図	SD 03 出土遺物	184	第 206 図	B 区全体図	226
第 170 図	SD 04 出土金属製品	184	第 207 図	B 区 SB35、ピット土層断面図	227
第 171 図	SD 06 出土遺物	185	第 208 図	B 区 SK、土層断面図	228
第 172 図	SD 07・09 土層断面図	185	第 209 図	B 区 SK25 出土遺物	229
第 173 図	SD 07 出土遺物1	186	第 210 図	B 区 SD23・24、土層断面図	230
第 174 図	SD 07 出土遺物2	187	第 211 図	B 区 SD23 出土遺物1	231
第 175 図	SD 09 出土遺物	189	第 212 図	B 区 SD23 出土遺物2	232
第 176 図	SD 10 出土遺物	190	第 213 図	B 区 SD23 出土遺物3	233
第 177 図	SD 11 出土遺物	190	第 214 図	B 区 SD23 出土石製品	234
第 178 図	SD 18・19 土層断面図	191	第 215 図	B 区 SD24 出土遺物	235
第 179 図	SD 18 出土遺物	192	第 216 図	B 区 SD22・30・31、 土層断面図	236
第 180 図	SD 18 出土木製品1	193	第 217 図	B 区 SD30 出土遺物	236
第 181 図	SD 18 出土木製品2	193	第 218 図	B 区 その他の出土遺物	237
第 182 図	SD 19 出土遺物	194			
第 183 図	SD 19 出土石製品	195			

第 219 図 下野郷館跡第1～3地点合成図	256	第 224 図 平成 28 年度調査区遺構変遷図	263
第 220 図 クサビの形状	260	第 225 図 SX01 護岸施設模式図	265
第 221 図 クサビの先端部角度	260	第 226 図 SX01 各部位の計測値	266
第 222 図 クサビの長さと幅、厚さの分布状況	261	第 227 図 SX01と志賀沢川旧流路推定図	267
第 223 図 平成 28 年度調査区遺構相関図	262		

## 表 目 次

第1表	岩沼市内遺跡一覧	5	第 36 表	平成 26 年度調査 溝跡属性表	70
第2表	SK01 出土遺物観察表	19	第 37 表	ピット出土遺物観察表	71
第3表	SD01 出土遺物観察表1	20	第 38 表	サブレンチ出土遺物観察表	71
第4表	SD01 出土遺物観察表2	21	第 39 表	精査出土遺物観察表	72
第5表	SD01 出土遺物観察表3	22	第 40 表	精査出土金属製品観察表	72
第6表	SD01 出土遺物観察表4	24	第 41 表	掘り下げ出土遺物観察表1	73
第7表	SD01 出土遺物観察表5	24	第 42 表	掘り下げ出土遺物観察表2	74
第8表	SD01 出土遺物観察表6	25	第 43 表	掘り下げ出土石製品観察表	74
第9表	SD01 出土遺物観察表7	27	第 44 表	その他の出土遺物観察表	75
第 10 表	SD01 出土遺物観察表8	29	第 45 表	その他の出土金属製品観察表	76
第 11 表	SD01 出土遺物観察表9	29	第 46 表	平成 27 年度調査 挖立柱建物跡属性表	90
第 12 表	SD01 出土遺物観察表10	30	第 47 表	SE01 出土遺物観察表	90
第 13 表	SD01 出土遺物観察表11	31	第 48 表	SE02 出土木製品観察表	92
第 14 表	SD01 出土遺物観察表12	32	第 49 表	平成 27 年度調査 井戸跡属性表	93
第 15 表	SD01 出土遺物観察表13	33	第 50 表	平成 27 年度調査 積穴遺構	
第 16 表	SD01 出土遺物観察表14	34		性格不明遺構・土坑属性表	94
第 17 表	SD01 出土遺物観察表15	35	第 51 表	SX01 出土遺物観察表	95
第 18 表	SD01 出土遺物観察表16	35	第 52 表	SX02 出土遺物観察表	95
第 19 表	SD01 出土遺物観察表17	36	第 53 表	SD03 出土遺物観察表	98
第 20 表	SD01 出土遺物観察表18	37	第 54 表	SD03 出土木製品観察表	99
第 21 表	SD01 出土遺物観察表19	37	第 55 表	平成 27 年度調査 溝跡属性表	99
第 22 表	SD01 出土石製品観察表	38	第 56 表	SD04 出土遺物観察表	100
第 23 表	その他の出土遺物観察表	39	第 57 表	SD04 出土木製品観察表	100
第 24 表	平成 26 年度調査 挖立柱建物跡属性表	61	第 58 表	SD04 出土金属製品観察表	101
第 25 表	SE02 出土遺物観察表	63	第 59 表	SD05 出土遺物観察表	101
第 26 表	平成 26 年度調査 井戸跡属性表	63	第 60 表	ピット出土遺物観察表	102
第 27 表	SX02 出土遺物観察表	65	第 61 表	カクラン出土遺物観察表	103
第 28 表	SK02 出土遺物観察表	66	第 62 表	カクラン出土石製品観察表	103
第 29 表	平成 26 年度調査 積穴遺構・ 土坑属性表	66	第 63 表	平成 28 年度調査 挖立柱建物跡属性表	133
第 30 表	SD02 出土遺物観察表	68	第 64 表	SE01 出土遺物観察表1	135
第 31 表	SD02 出土石製品観察表	68	第 65 表	SE01 出土遺物観察表2	136
第 32 表	SD12 出土遺物観察表	68	第 66 表	SE01 出土遺物観察表3	137
第 33 表	SD15 出土遺物観察表	69	第 67 表	SE01 出土遺物観察表4	138
第 34 表	SD15 出土石製品観察表	69	第 68 表	SE01 出土遺物観察表5	139
第 35 表	SD16 出土遺物観察表	70	第 69 表	SE01 出土木製品観察表	140
			第 70 表	SE02 出土遺物観察表	140

第 71 表	SE03 出土遺物観察表 .....	141	第 108 表	SD06 出土遺物観察表 .....	185
第 72 表	SE04 出土遺物観察表1 .....	145	第 109 表	SD07 出土遺物観察表1 .....	188
第 73 表	SE04 出土遺物観察表2 .....	145	第 110 表	SD07 出土遺物観察表2 .....	188
第 74 表	SE06 出土木製品観察表 .....	147	第 111 表	SD09 出土遺物観察表 .....	189
第 75 表	SE07 出土木製品観察表 .....	148	第 112 表	SD10 出土遺物観察表 .....	190
第 76 表	SE09 出土遺物観察表 .....	150	第 113 表	SD11 出土遺物観察表 .....	190
第 77 表	SE11 出土遺物観察表 .....	152	第 114 表	SD18 出土遺物観察表 .....	192
第 78 表	平成 28 年度調査 井戸跡属性表 .....	152	第 115 表	SD18 出土木製品観察表1 .....	193
第 79 表	SE12 出土遺物観察表 .....	153	第 116 表	SD18 出土木製品観察表2 .....	193
第 80 表	SX01 出土遺物観察表1 .....	155	第 117 表	SD19 出土遺物観察表 .....	194
第 81 表	SX01 出土遺物観察表2 .....	156	第 118 表	SD19 出土石製品観察表 .....	195
第 82 表	SX01 出土遺物観察表3 .....	157	第 119 表	平成 28 年度調査 溝跡属性表 .....	195
第 83 表	SX01 出土木製品観察表1 .....	158	第 120 表	ピット出土遺物観察表 .....	196
第 84 表	SX01 出土木製品観察表2 .....	159	第 121 表	ピット出土金属製品観察表 .....	197
第 85 表	SX01 出土木製品観察表3 .....	160	第 122 表	精査出土石製品観察表 .....	197
第 86 表	SX01 出土木製品観察表4 .....	161	第 123 表	精査出土遺物観察表 .....	198
第 87 表	SX01 出土木製品観察表5 .....	162	第 124 表	表土出土遺物観察表1 .....	199
第 88 表	SX02 出土遺物観察表 .....	164	第 125 表	表土出土遺物観察表2 .....	201
第 89 表	SK11 出土遺物観察表 .....	167	第 126 表	表土出土金属製品観察表 .....	201
第 90 表	SK12 出土遺物観察表 .....	167	第 127 表	その他の出土遺物観察表 .....	201
第 91 表	SK19 出土遺物観察表 .....	168	第 128 表	A 区 SK03 出土遺物観察表 .....	220
第 92 表	平成 28 年度調査 護岸施設・ 性格不明遺構・土坑属性表 .....	168	第 129 表	A 区 SK10 出土石製品観察表 .....	220
第 93 表	SD01 出土遺物観察表1 .....	170	第 130 表	A 区 SD01 出土遺物観察表 .....	222
第 94 表	SD01 出土遺物観察表2 .....	171	第 131 表	A 区 SD01 出土石製品観察表 .....	223
第 95 表	SD01 出土遺物観察表3 .....	172	第 132 表	A 区 SD02 出土遺物観察表 .....	223
第 96 表	SD01 出土遺物観察表4 .....	173	第 133 表	A 区 SD02 と SD04 の 合流点付近出土遺物観察表 .....	223
第 97 表	SD01 出土遺物観察表5 .....	174	第 134 表	A 区 SD05 出土遺物観察表 .....	224
第 98 表	SD01 出土遺物観察表6 .....	175	第 135 表	A 区 SD15 出土遺物観察表 .....	224
第 99 表	SD01 出土遺物観察表7 .....	176	第 136 表	B 区 SK25 出土遺物観察表 .....	229
第 100 表	SD01 出土遺物観察表8 .....	177	第 137 表	B 区 SD23 出土遺物観察表1 .....	231
第 101 表	SD01 出土遺物観察表9 .....	178	第 138 表	B 区 SD23 出土遺物観察表2 .....	232
第 102 表	SD01 出土遺物観察表 10 .....	179	第 139 表	B 区 SD23 出土遺物観察表3 .....	233
第 103 表	SD01 出土遺物観察表 11 .....	180	第 140 表	B 区 SD23 出土石製品観察表 .....	234
第 104 表	SD01 出土遺物観察表 12 .....	181	第 141 表	B 区 SD24 出土遺物観察表 .....	235
第 105 表	SD01 出土石製品観察表 .....	182	第 142 表	B 区 SD30 出土遺物観察表 .....	236
第 106 表	SD03 出土遺物観察表 .....	184	第 143 表	B 区 その他の出土遺物観察表 .....	237
第 107 表	SD04 出土金属製品観察表 .....	184	第 144 表	A 区・B 区遺構属性表 .....	238

- 第145表 平成27年度下野郷館跡  
出土木製品の樹種 ..... 244
- 第146表 平成28年度下野郷館跡  
出土木製品の樹種 ..... 245
- 第147表 器種別樹種集計表（平成28年度） ..... 246

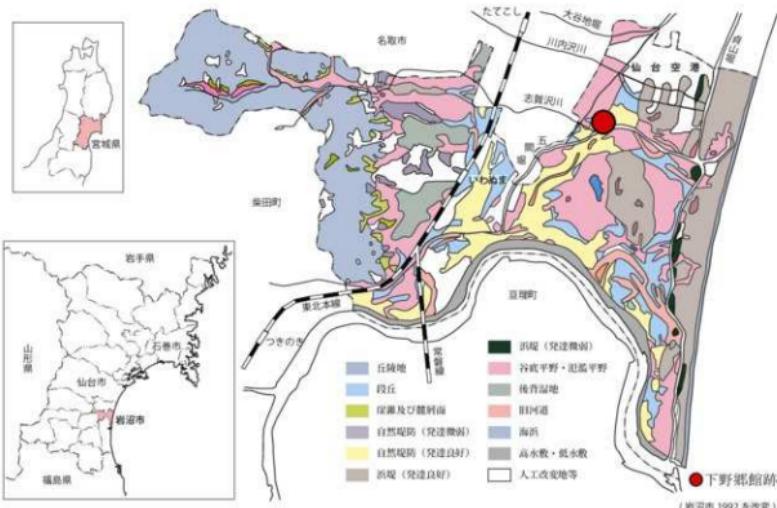


## 第Ⅰ章 遺跡の概観

### 1. 位置と地理的環境（第1図）

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は、福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5,400 km<sup>2</sup>を測る。本市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったが、現在でも国道4号と同6号、JR東北本線と同常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる岩沼西部丘陵（標高100～300m）と高館丘陵（標高200～300m）、これらの丘陵から東へ舌状に張り出す標高10～30mほどの長岡丘陵、二木・朝日丘陵と呼称している小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は仙台平野南部域に相当する。岩沼西部丘陵の東縁から太平洋まで7～8kmの幅をもち、3列の浜堤列が発達している。この沖積平野は阿武隈川のほか、中小河川の堆積作用によって形成され、沿岸では自然堤防の発達が顕著である。本報告対象となる下野郷館跡は、阿武隈川左岸から旧河道に沿って北に延びる標高0.3～1.8mほどの自然堤防および第II浜堤列上に立地し、東流する五間堀川と志賀津川の合流点に位置している。



第1図 岩沼市の地形分類

## 2. 岩沼市の遺跡と歴史的環境（第2図、第1表）

岩沼市域では、現在のところ、縄文時代から近現代にかけての遺跡が66箇所確認されている。近年、東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査や、平成23年（2011）から平成26年（2014）にかけて行われた、岩沼市史編纂専門委員会考古部会における学術調査（以下、市史編纂事業）により、地域の歴史を解明するための新たな成果が報告されている。以下にこれまでの発掘調査などによって得られた知見について、時代順にその概略を記す。

### 縄文時代

縄文時代の遺跡は、市域西側の丘陵部に点在し、晩期の遺物が多量に発見された下塩ノ入遺跡【15】など、特に志賀沢川流域の志賀・小川地区にまとまって分布している。また、沖積地を臨む丘陵上に立地する山畠南貝塚【10】や畠堤上貝塚【35】では、汽水域に生息するヤマトシジミを主体とした貝層の形成もみられる。北原遺跡【8】では、平成4年（1992）の県道改良工事に伴う発掘調査の際、中期後葉の土坑が50基近く検出され、曲線的な磨消縄文を特徴とする土器のほか、石錐や石棒などが発見された。鶴ヶ崎城跡【23】では、平成16年（2004）の宅地造成に伴う第4地点の発掘調査において、土星下に埋没した遺物包含層から、鶴ヶ島台式や梨木式に比定される早期末の土器群が見つかっている（岩沼市教育委員会2005、岩沼市史編纂委員会2015）。

### 弥生時代

弥生時代の遺跡は、縄文時代と同様、市域西側の丘陵部に多く分布している。しかしながら、上根崎遺跡【29】や朝日山古墳群【36】、平野部に位置するかめ塚西遺跡【3】でも土器の散布が認められるなど、人間の営みが徐々に太平洋側へ拡大する様子をうかがい知ることができる。鶴ヶ崎城跡【23】では、平成16年（2004）の発掘調査において、中期後葉と考えられる堅穴住居跡や、十三塚式に比定される土器および石包丁などの石器が発見されている。北原遺跡【8】では、平成23年（2011）の市史編纂事業に伴う試掘調査において、堅穴住居跡から表面に特殊な撓糸文を施した土器が見つかっている。この土器は北開東を中心で分布する十王台式に平行するものとみられ、年代は後期後半と推量されている。また、杉の内遺跡【7】でも同様に試掘調査が行われ、ここでは中期後葉から後期にかけての土器が複数出土している。過去に柳痕のある土器も採集されている。岩沼市域における弥生時代の考古資料は近年徐々に蓄積されつつあるが、墓壙や水田跡といった、葬送や生産に関わる遺構は現在も発見されていない（岩沼市教育委員会2005、岩沼市史編纂委員会2015）。

### 古墳時代

古墳時代の遺跡は、高塚古墳、横穴墓、集落跡などが市内各所にみられ、市域東側の玉浦地区でも遺跡の分布が認められる。高塚古墳のうち、県指定史跡のかめ塚古墳【2】では、平成24年（2012）の市史編纂事業に伴う古墳周溝の発掘調査において、土師器や須恵器といった遺物のほか、底面から一本二



写真1 山畠南貝塚の貝層



写真2 北原遺跡出土土器

又鋤が出土した。また、地表に顯在する全長約39mの墳丘は後世に削られたものであり、本来は全長約48mを測る前方後円墳であったと推定されている。造成時期はこれまで中期と考えられてきたが、遺物の年代などから前期にさかのぼる可能性がある。横穴墓は、岩沼西部丘陵から派生する低位丘陵の斜面に多く造られ、これまでに10箇所の横穴墓群が確認されている（消滅した横穴墓群を含む）。このうち、長谷寺【11】、丸山【4】、二木【9】、土ヶ崎【22】、引込【30】などの横穴墓群は過去に発掘調査が行われ、造営時期はいずれも7世紀前半から8世紀前半と考えられている。北原遺跡【8】をはじめとする長岡丘陵遺跡群は前期の集落跡として知られるが、そこから南へ約500mの位置に所在する熊野遺跡【16】でも、平成25年（2013）の駐車場整備工事に伴う発掘調査において、同時期の竪穴住居跡群が発見された。また、孫兵衛谷地遺跡【13】では、平成24年（2012）の河川改修工事に伴う確認調査の際、前期の塙釜式に位置付けられる土師器を含む遺物包含層の存在が明らかとなつた。なお、これまで古墳と考えされていた東平王塚古墳、白山古墳、にら塚古墳については、平成26年（2014）末までに行なった市史編纂事業に伴う調査の結果、墳丘積土が確認されず古墳と認められなかつた。そのため、現在はそれぞれ、白山塚【39】、にら塚遺跡【41】と遺跡名称を変更し、東平王塚古墳は岩沼市遺跡地図（第3図）ならびに市内遺跡一覧（表1）に非掲載としている（岩沼市教育委員会2013c、岩沼市史編纂委員会2015）。

## 古代

古代の遺跡については、近年、震災復興事業や市史編纂事業による発掘調査が増加傾向にあり、なかでも高大瀬遺跡と原遺跡については、学術的に注目される調査事例として特筆される。高大瀬遺跡では、本書の内容のほか平成26年（2014）のいわぬま臨空メガソーラー事業に伴う発掘調査では、東日本大震災の津波堆積物を詳細に観察した結果、津波における砂泥の堆積構造は地形的要因などによって一様でないことを明らかにしている。原遺跡【51】では、平成28年（2016）～平成30年（2018）の調査によって、新旧2時期の重複がある梁行3間（約7m）×桁行10間（約20m）の長大な掘立柱建物跡が検出され、その柱穴跡は方形で、一边約1mを測る。また、木材断跡や3時期の作り替えを確認できる南北方向の大溝跡などが検出されている。さらに、東海地方で生産されたと考えられる円面硯や、福島県会津地方で生産された長頸壺、古代瓦片などが見つかつ



写真3 かめ塚古墳出土木製品



写真4 引込横穴墓群の調査



写真5 熊野遺跡で出土した土器

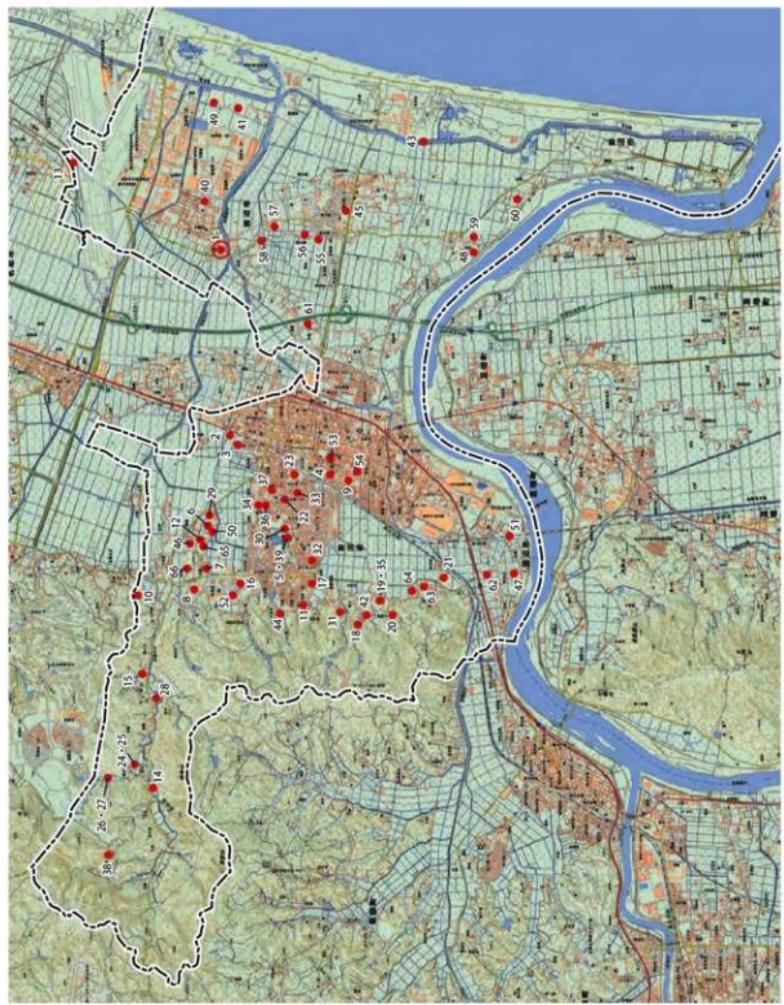


写真6 原遺跡円面硯出土状況



写真7 原遺跡で発見された柱列跡

第21図 岩沼市遺跡地図



第1表 岩沼市内遺跡一覧

岡中番号	登録番号	遺跡名	所在地	種別	時代
2	15001	かめ塚古墳	字鬼塚	古墳	古墳
3	15002	かめ塚西遺跡	字鬼塚	遺物散布地	弥生・古代・近世
4	15003	丸山横穴墓群	二木二丁目	横穴墓	古墳
5	15004	白山横穴墓群	土木二丁目ほか	横穴墓	古墳
6	15005	新明塚古墳	長岡字坂體	古墳	古墳
7	15006	村の内遺跡	三色吉字村の内ほか	集落跡	弥生・古墳・古代
8	15007	北原遺跡	長岡字中原ほか	集落跡・貝塚	縄文・弥生・古墳・古代
9	15008	二木横穴墓群	二木二丁目	横穴墓	古墳
10	15009	山畠南貝塚	小川字山畠南ほか	集落跡・貝塚	縄文・古代
11	15010	長谷寺横穴墓群	北長谷字塙向山	横穴墓	古墳・古代
12	15011	長塙古墳	長岡字台	古墳	古墳
13	15012	孫兵衛谷地遺跡	下野字小谷地	遺物散布地	古墳
14	15013	大日遺跡	志賀字新大日	集落跡	縄文
15	15014	下塙ノ久遺跡	志賀字下塙ノ久ほか	集落跡	縄文
16	15015	熊野遺跡	三色吉字熊野ほか	集落跡	古墳・古代
17	15016	平笠山横穴墓群	三色吉字松崎	横穴墓	古墳
18	15017	新船跡	北長谷字綱下	城船跡	中世
19	15018	堀壁上横穴墓群	北長谷字堀壁上	横穴墓	古墳
20	15019	根方泉遺跡	南長谷字泉	遺物散布地	弥生・近世
21	15020	長谷字船跡	南長谷字綱	城船跡	中世
22	15022	土ヶ崎横穴墓群	土ヶ崎二丁目	横穴墓	古墳・古代
23	15023	御ヶ崎船跡	栄町一丁目ほか	城船跡	縄文・弥生・中世・近世
24	15025	八森A遺跡	志賀字八森	集落跡	縄文
25	15026	八森B遺跡	志賀字八森	集落跡	縄文
26	15027	銅谷A遺跡	志賀字銅谷	集落跡・製鉄跡	縄文・近世
27	15028	銅谷B遺跡	志賀字銅谷	集落跡・製鉄跡	縄文・近世
28	15029	新宮A遺跡	志賀字新宮下	集落跡	縄文
29	15030	上根崎遺跡	長岡字上根崎ほか	集落跡	縄文・弥生・古墳・中世
30	15031	引込横穴墓群	土ヶ崎四丁目	横穴墓	古墳
31	15032	古閑山遺跡	北長谷字古閑山	遺物散布地	弥生・古墳・古代
32	15033	新田遺跡	北長谷字新田ほか	遺物散布地	縄文・古代
33	15034	石垣山横穴墓群	朝日二丁目	横穴墓	古墳
34	15035	駒崎横穴墓群	朝日二丁目	横穴墓	古墳
35	15036	堀壁上貝塚	北長谷字堀壁上	集落跡・貝塚	縄文・弥生・古墳・古代
36	15037	朝日古墳群	朝日二丁目	古墳・墓・遺物散布地	弥生・古墳・中世・近世
37	15038	朝日遺跡	朝日二丁目	遺物散布地	古墳・古代・中世
38	15039	岩藏寺遺跡	志賀字岩藏	集落跡・寺院跡	縄文・古墳・中世
1	15040	下野郡都跡	下野字宇館内・飯外ほか	城船跡	古代・中世・近世
39	15041	白山塚	字朝日	塚	近畿?
40	15042	岸外遺跡	下野字岸外	遺物散布地	古代・近畿
41	15043	にら塚遺跡	下野字にら塚ほか	遺物散布地	古代
42	15044	新船前遺跡	北長谷字堀壁上	遺物散布地	縄文・古代
43	15045	白山塚(小鬼塚)	稻の釜・納経	遺跡	近畿?
44	15046	竹倉部遺跡	三色吉字竹倉部	遺物散布地	弥生・古墳・古代
45	15047	新田東遺跡	押分子字田東	遺物散布地	古代・近畿
46	15048	長塙ノ久遺跡	長岡字ノ久	遺物散布地	縄文・古墳・古代
47	15049	南玉崎遺跡	南長谷字北上ほか	遺物散布地	古代・近世
48	15050	西瀬賀原遺跡	早駿字西瀬賀原ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
49	15051	高大瀬遺跡	下野字高大瀬ほか	遺物散布地	古代・近世
50	15052	長徳寺前遺跡	長岡字御園	經塚	近畿?
51	15053	原遺跡	南長谷字中原ほか	遺物散布地	古墳・古代
52	15054	中ノ原遺跡	三色吉字中ノ原ほか	墓	中世
53	15055	丸山遺跡	二木二丁目ほか	集落跡	中世・近畿
54	15056	竹飼神社境内遺跡	稲荷町	社寺跡	中世・近畿
55	15057	新筒下遺跡	押分子下筒下ほか	遺物散布地	古代・近畿
56	15058	沿前遺跡	押分子沿前ほか	遺物散布地	古代・中世・近畿
57	15059	西土手遺跡	押分子土手ほか	遺物散布地	中世・近畿
58	15060	前條遺跡	下野字前條	遺物散布地	古代・近畿
59	15061	刈原遺跡	早駿字刈原ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
60	15062	高原遺跡	寺島字高原	遺物散布地	中世・近畿
61	15063	上中條遺跡	下野字上中條ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
62	15064	種遺跡	南長谷字ほか	遺物散布地	縄文・古墳・古代・中世・近世
63	15065	柳遺跡	南長谷字柳	遺物散布地	古墳・古代・近世
64	15066	台遺跡	南長谷字台	遺物散布地	縄文・弥生・古墳・古代
65	15067	長塙遺跡	長岡字台	遺物散布地	縄文・古墳
66	15068	上小瀬遺跡	長岡字上小瀬ほか	集落跡	弥生・古墳・古代

たほか、土師器や須恵器が大量に出土するなど、遺構や遺物の特徴から官衙的な施設の存在が示唆される。10世紀に成立した『延喜式』に東山道の駅家として記載された「玉前駅家」や、多賀城跡より出土した9世紀代と考えられる過所本簡でその名が知られる「玉前刻（閥）」は、本市南長谷地区の玉崎に存在が比定されており、原遺跡ではこれらの中核的な施設が営まれていた可能性がある。上記の遺跡以外では、熊野遺跡【16】で実施された平成27年（2015）の駐車場整備（拡張）工事に伴う発掘調査において、10世紀前半のものと思われる住居跡が発見された。また、市史編纂事業の一環で行われた試掘調査により、桶遺跡【62】、柳遺跡【63】、台遺跡【64】が古代の遺跡として新たに登録された。ところで、これら遺跡【41】では、過去に土師器、須恵器、製塙土器が採取されており、古代の製塙関連遺跡であった可能性がある。しかしながら、平成26年（2014）に行なったいわぬま臨空メガソーラー事業に伴う発掘調査では、当該地の地形は過去に大きく改変され、從来の姿を留めていないことが確認された。原因は昭和50年代に行なわれた土砂採取事業によるものと考えられるが、このことは、埋蔵文化財の記録保存を適切に行わない開発行為が、後世へどれほどの文化的な損失を与えるのかを如実に示している（岩沼市教育委員会2016b・2017b・2018、岩沼市史編纂委員会2015、宮城県多賀城跡調査研究所1985）。

### 中世

中世の遺跡は、過去に朝日山古墳群【36】、朝日遺跡【37】、鶴ヶ崎城跡【23】、丸山遺跡【53】、竹駒神社境内遺跡【54】、下野郷館跡【1】、西須賀原遺跡【48】、中ノ原遺跡【52】などで発掘調査が行なわれている。近年の調査事例としては、上根崎遺跡【29】で平成23年（2011）に県道自歩道整備事業に伴う発掘調査が実施され、屋敷地を区画したとみられる溝跡、土壙墓や地下室（ムロ）状の土坑、掘立柱建物や堀の可能性のある小穴群などの遺構が検出された。土壙墓の年代は出土した陶器から中世の可能性があり、そのほかの遺構も中世以降のものと思われる。岩蔵寺遺跡【38】では、平成25年（2013）に市史編纂事業に伴う発掘調査を実施している。この調査では、薬師堂の裏手に所在する板碑、および集石遺構付近から、火葬骨片が入ったピットを確認したことから、当該地が葬送や供養の場として機能していたと推量されている。刈原遺跡【59】では、平成26年（2014）に実施した農山漁村地域復興基盤総合整備事業に伴う発掘調査において、農業用の水溜施設と考えられる遺構の覆土中より白石古窯跡群のものと考えられる甕片が出土している。熊野遺跡【16】では、平成27年（2015）の発掘調査において長軸3.9m、短軸2.4mを測る方形竪穴遺構が確認された。これは倉庫的な性格を持つ遺構と推定されるが、底面からは龍泉窯系の鍋蓋弁文青磁碗片が出土していることから当該地周辺の中ノ原遺跡で発見された板碑を伴う葬骨器に納められた被葬者と関わりを持つ在地富裕層などが存在した可能性がある（岩沼市教育委員会2013c・2016a、岩沼市史編纂室2015・2018a）。

### 近世

本市は近世において城下町、宿場町として発展し、竹駒神社の門前町としても賑わいを見せたといわれ、調査実績もほかの時代に比べて近世遺跡が多い傾向にある。過去には、鶴ヶ崎城跡【23】、丸山遺跡【53】、



写真8 熊野遺跡の方形竪穴遺構



写真9 岩蔵寺遺跡の集石遺構

竹駒神社境内遺跡【54】、下野郷館跡【1】、西須賀原遺跡【48】などで発掘調査が行われ、仙台藩政期の社会を研究する上で貴重な成果が得られている。近年では、平成 26 年（2014）に西土手遺跡【57】、新筒下遺跡【55】、刈原遺跡【59】、高原遺跡【60】などで農山漁村地域復興基盤総合整備事業に伴う発掘調査を行い、それぞれの遺跡で近世遺物や同時期の遺構を確認している。鶴ヶ崎城跡【23】の第 1 地点では、東北福祉大学吉井ゼミナールが発掘調査を行い、南北方向の溝跡やそれと併走する石積み遺構、根石群と柱穴、碗埋納遺構（完形の陶器碗にかわらけをかぶせ、意図的に正位の状態で埋められたと推測される）などが検出された。遺物の大半は肥前や瀬戸・美濃の磁器、相馬焼の陶器など 18 世紀後半～19 世紀前半の陶磁器が多い。第 4 地点では岩沼市教育委員会が土塁の発掘調査を行い、土塁の構築時期が中世まで遡ることや 4 時期の補・改修痕跡を確認している。中・近世の遺物の出土量は多くはないが、15 世紀前半頃の龍泉窯系青磁盤や天目釉を施した瀬戸産小壺、13～15 世紀頃の常滑産陶器甕、16 世紀末～17 世紀前半頃の志野焼染付風陶器などが出土している（岩沼市教育委員会 2005、岩沼市史編纂委員会 2015）。また、竹駒神社境内遺跡【54】では市指定有形文化財である竹駒神社向唐門の解体修復及び耐震補強工事に伴う発掘調査が行われ、宝永 7 年（1710）に伊達吉村によって本殿が修造された際に行われたと考えられる整地面で、幅 2.2 m ほどの旧参道跡や区画施設の柱列跡、アワビ貝が埋納された神事関連遺構等が検出された。大堀相馬や肥前等の陶磁器が出土しており、近世の遺物が大半を占めている。特に瓦やかわらけの出土量が多く、江戸期の竹駒神社では小規模な建物や堀などの区画施設の一部に瓦を用いていた可能性がある。また、かわらけの出土量の多さは神社境内で行われる神事と密接に繋がった結果であると考えられる（岩沼市教育委員会 2009）。

#### 近現代

貞山堀【43】では、平成 24 年（2012）から平成 27 年（2015）にかけて、排水機場の復旧事業、および護岸施設等の復旧事業に際して調査が実施されている。これらの調査では、昭和 42 年（1967）以降に築堤された堤防に先行する時期の堤防積土が、左岸を中心に残されていることを確認している。また蒲崎橋より南側の東岸の一部では、市内で唯一の石積みによる護岸施設が確認されているが、断面観察の結果から残存する堤防としては最古段階の護岸施設であることが判明している（岩沼市教育委員会 2017）。



写真 10 竹駒城跡の土塁



写真 11 竹駒神社境内遺跡の旧参道



写真 12 竹駒神社境内遺跡のアワビ



写真 13 貞山堀の石積護岸施設

## 第 II 章 調査に至る経緯と調査方法

### 1. 調査に至る経緯

平成 23 年 2 月に五間堀川河川改修事業についての照会が仙台土木事務所からあり、岩沼市教育委員会では五間堀川の左岸一帯が下野郷館跡の範囲に含まれている旨を回答した。その後仙台土木事務所より平成 23 年 2 月 16 日付けで「五間堀川河川改修計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が提出された。協議書の提出後に宮城県教育庁文化財保護課と宮城県仙台土木事務所、そして岩沼市教育委員会の三者による現地協議が 2 月下旬に行われ、工事対象地が遺跡範囲内に多く含まれていることから事前に確認調査を実施して、遺構・遺物の有無、遺構密度及び遺構分布範囲などを把握する必要性があるとの指摘を宮城県教育庁文化財保護課より受けた。

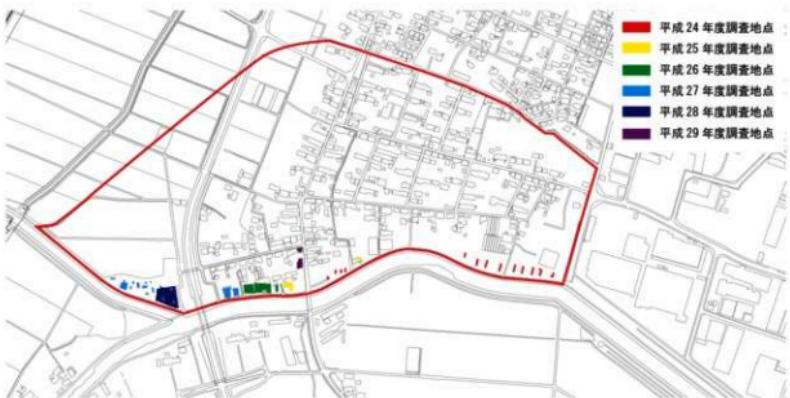
ついで文化財保護法第 94 条に基づく発掘通知を準備している段階の 3 月 11 日、東日本大震災の発生により、関係各機関とも震災対応に追われることとなってしまった。その後発掘通知は 4 月 11 日付で提出されたが、当然ながら復旧工事を最優先に行つた結果、調査環境が整うままでに若干の時間を要することになった。

### 2. 調査経過（第3図）

現地調査は宮城県仙台土木事務所の計画的な用地取得に合わせ、対象地区の東側から着手した。

平成 24 年度の調査は、平成 24 年 11 月に宮城県仙台土木事務所から岩沼市へ埋蔵文化財確認調査についての依頼が寄せられ、その後 11 月 27 日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台土木事務所と岩沼市によって締結されることを受け、12 月下旬に調査対象地点の草木の伐採を行い、平成 25 年 1 月 8 日から 1 月 31 日にかけて実施した。調査面積は 242 m<sup>2</sup>である。調査対象地はこれまで近隣で実施した確認調査などの結果から遺構・遺物が希薄である可能性が高く、トレチによる確認調査に留まっている。

平成 25 年度の調査は、平成 25 年 8 月 23 日に「埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台土木事務所と岩沼市によって締結されたことを受け、平成 25 年 11 月 7 日から平成 26 年 1 月 27 日にかけて実施した。調査面積は 244 m<sup>2</sup>である。調査地は昭和 61 年 8 月 5 日の水害時に五間堀川堤防が被害を受けたことから、応



第3図 下野郷館跡調査区位置図

急处置のために設置する大型土のうの採土地となっており、南側では遺構・遺物はすでに失われていたことから、北側部分の調査である。

平成 26 年度の調査は、平成 26 年 9 月 1 日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台土木事務所と岩沼市によって締結されたことを受け、平成 26 年 9 月 2 日から平成 27 年 3 月 10 日にかけて実施した。調査面積は 600 m<sup>2</sup>である。残土の関係上、調査区は3分割（15 A～15 C区）と設定したが、本報告ではA・B区については一括して記述する。なお、C区については遺構・遺物とも未発見であったことから記述については割愛した。

平成 27 年度の調査は、平成 27 年 7 月 14 日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台土木事務所と岩沼市によって締結されたことを受け、平成 27 年 8 月 1 日から平成 28 年 1 月 31 日にかけて実施した。調査面積は 833 m<sup>2</sup>である。調査は五間堀川沿いのA・B区、さらに志賀沢川沿いに設置したトレンチ調査の結果を受けて新たに設定したC区で本調査を実施しており、本報告書では各遺構位置等を記す場合には調査区名も 15 A、15 B、15 C区と呼称している。

平成 28 年度の調査は、平成 28 年 3 月 31 日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台土木事務所と岩沼市によって締結されたことを受け、平成 28 年 5 月 9 日から 9 月 30 日にかけて実施した。調査面積は 1,757 m<sup>2</sup>である。調査は平成 27 年度に志賀沢川沿いで実施したトレンチ調査の結果から、遺構・遺物が濃密に確認できた範囲に設定したものである。

平成 29 年度の調査は、平成 28 年 2 月 24 日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台土木事務所と岩沼市によって締結されたことを受け、平成 29 年 4 月 6 日から 5 月 19 日にかけて実施した。調査面積は 310 m<sup>2</sup>である。なお、生活道路の関係からA・Bの2区に分割しているため、それぞれの調査区名称で報告する。

### 3. 基本土層

第 I 章で述べたように、本遺跡地は阿武隈川・五間堀川・志賀沢川によって形成された自然堤防、さらには仙台平野沿岸部で顕著に発達する浜堤上から後背湿地にかけて展開している。また土地利用のあり方についても宅地、畑地、水田などとして利用されており、上層部分については地点ごとの相違が著しい。しかしながら、今回の調査対象地については五間堀川・志賀沢川に面した地点であることから、大半の調査区での遺構確認面は海拔 0.8 m 前後で検出される自然堤防を形成するにぶい黄褐色シルト層（第IV層）上面であり、また調査地の東側及び北側では浜堤形成砂の褐色微粒砂（第VI層）が確認面となる。

第 I 層：現代表土。宅地、畑地、水田として利用されており、層厚は 20 ~ 30 cm ほどである。

第 II 層：I 層直下で見られる客土。宅地化に伴う盛土と考えられ、層厚は 20 cm ほどである。

第 III 層：畑地の耕作土とみられる黒褐色、または暗褐色の砂質シルト層。ほぼ全域で確認されており、微量の炭化物がみとめられる。層厚は 20 ~ 50 cm ほどである。

第 IV 層：調査範囲の大部分で確認されたにぶい黄褐色シルト層。水成堆積とみられる。北から南へかけて傾斜し、北側では層厚 5 cm ほどと薄くなるが、南側では 20 ~ 40 cm ほどの厚みが確認できる。中世以降の遺構・遺物の確認面。

第 V 層：平成 29 年度の調査で確認されたにぶい黄褐色砂質シルト層。層厚は 10 cm ほどであるが、層中より古墳時代中期の南小泉式の坏が出土しており、堆積時期としては古墳時代中期頃と考えられる。

第 VI 層：調査範囲の北側のみの確認。仙台平野沿岸部で形成される第 II 浜堤列形成砂とみられる。平成 24 年度の調査では自然堤防形成土によって切られれていることが確認されている。中世以降の遺構・遺物の確認面。

## 第III章 平成 24 年度の調査成果

平成 24 年度の調査は、対象面積は広大であるものの、近隣の調査で遺構・遺物の分布が主に東側であることから、遺構・遺物の有無を判断するため五間堀川直交するトレントを設定し、調査を実施した。なお、五間堀川が北に張り出す地点で調査区が大きく分断されることから、調査時にはこの地点より東側の調査区を「東区」、西側の調査区を「西区」と呼称している。また東区では計 9 本、西区では 4 本のトレントを設定しているが、各トレントの名称は東区では東から E1 ~ E9、西区では西から W1 ~ W4 と付している。

調査はまず対象地内の刈り払いを平成 24 年 12 月 27・28 日、平成 25 年 1 月 4 日にかけて実施し、その後 1 月 7 日にトレントの設定を行った。重機を用いた掘削は 1 月 8 日からであり、表土を除去した後に人力で壁面及び確認面の精査を行った。また必要に応じて遺構の性格把握や、確認面以下での遺構面の有無を掴むことを目的として堆積土層の掘り下げを部分的に行った。さらに随時記録のために写真撮影を行い、各トレントの図面を作成している。なお調査期間は厳冬期であり、1 月 14 日に大雪に見舞われたことをはじめとして、毎日のように地面が凍ついたことから作業は困難を極めたが、1 月 29 日に現地作業を終了し、1 月 31 日に埋戻しを完了している。以下に各トレントの調査内容を記す。



第4図 平成 24 年度調査 トレント配置図

### 1. 東区の調査

#### E1トレント

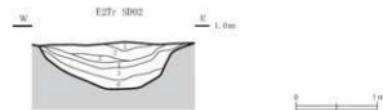
当初は東西 3m、南北 11m で設定していたが、その後調査区を南北に縦走する溝跡が確認されたことから、その立ち上がりを掴むために南側において 3.5m ほど部分的に拡張した。

トレント内の東側では浜堤形成層の一種である青灰色砂層が確認され、西側では黄褐色粘土ブロックを多量に含む黒褐色粘質土を覆土とする溝跡が確認されている。溝内からは丸太材の先端を加工している杭が出土している。南壁際で土層確認を行う予定であったが、湧水が激しく、また壁面が崩落したことにより断念している。なお、このトレントの確認面より上層の土層堆積は湿地性の堆積を示していた。

### E2トレーニング (第5図)

E2トレーニングも当初は東西3m、南北15.5mで設定していたが、その後調査区を南北に縦走する溝跡が確認されたことから、その立ち上がりを掘むために北側において4.5mほど部分的に拡張した。

耕作土下で検出したにぶい黄褐色シルト層を確認面として遺構精査を行い、灰黄褐色粘質シルトを覆土とする溝跡が存在していたことを確認した。しかしながら土層観察の結果、この溝跡は耕作土を掘り込んでつくられていることが判明した。遺物の出土は無い。



E2Tr SD02 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 性
1	褐色	粘質シルト	しまりやや弱い、マンガンを少量含む。
2	褐色	粘質シルト	しまりやや弱い、マンガンをやや多く含む。
3	褐色	シルト	しまり弱い、暗褐色土ブロックを少量含む。
4	黒褐色	砂質シルト	しまりやや弱い、マンガンを多量含む。
5	灰黄褐色	砂質シルト	しまりやや弱い、マンガンを多量含む。
6	褐灰色	砂質シルト	しまりやや強い、マンガンを多量、灰黄褐色土ブロックを少量含む。

第5図 E2TrSD02 土層断面図

### E3トレーニング

東西3m、南北18mで設定した。耕作土下の自然堆積層を確認面としているが、南側ではにぶい黄褐色シルト層、中央から北側にかけては黄褐色砂層となっている。検出遺構は中央付近を東西に走る溝跡1条のほかは、畑耕作時の天地返しと思われる溝状遺構のみである。溝跡の覆土は灰黄褐色粘土ブロックを含む褐灰色砂であり、幅60cm、確認面からの深さは約10cmである。遺物の出土は無い。

### E4トレーニング

東西3m、南北17.5mで設定した。耕作土下の自然堆積層を確認面としており、E3トレーニング同様に南側ではにぶい黄褐色シルト層であり、中央から北側にかけては褐灰色砂層となっている。このトレーニングでも畑耕作時の天地返しと思われる溝状遺構が多数見られるが、中央付近には耕作土直下から掘り込まれている、東西方向に走る溝跡が検出されている。両隣に設定しているE3・E5トレーニングでも、この延長線上に同様の規模の溝跡があることから、一連の遺構である可能性が高い。溝跡の覆土は黄褐色粘質シルトとマンガンをやや多く含む褐灰色砂であり、幅60cm、確認面からの深さは約10cmである。遺物の出土は無い。

### E5トレーニング

東西3m、南北17.5mで設定した。耕作土下の自然堆積層を確認面としており、E4トレーニング同様に南側ではにぶい黄褐色シルト層、中央から北側にかけては褐灰色砂層となっている。中央より北側では黒褐色粘土が集中して分布していたが、これらは以前に行われた耕地整理時の重機による掘削痕であった。またE3・E4トレーニング同様に中央付近には耕作土直下から掘り込まれている、東西方向に走る溝跡が検出されている。遺物の出土は無い。

### E6トレーニング

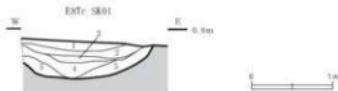
東西3m、南北18mで設定した。耕作土下の自然堆積層を確認面としており、南側ではにぶい黄褐色シルト、黒褐色粘土、中央から北側にかけては褐灰色砂層となっている。遺構・遺物は発見されなかった。

**E7トレント**

東西3m、南北17.5mで設定した。耕作土下の自然堆積層を確認面としており、南側では黄灰色シルト、暗褐色粘土、灰黄褐色粘土、中央から北側にかけては褐灰色砂層となっている。中央付近にはE5トレントと共に通する黒褐色粘土が分布するが、現代擾乱と考えられる。南側の粘質土の部分では畑耕作時の天地返しと思われる溝状構造がみられる。遺物の出土は無い。

**E8トレント（第6図）**

東西3m、南北15mで設定した。耕作土下の褐色砂を確認面としている。他のトレントで認められた南側のシルト層は確認されていない。遺構は北側で土坑を1基確認している。上層には人頭大の礫が露頭しており、当初は石組井戸の可能性を考慮したが、掘り下げた結果では確認面より約50cmで底面が確認できたことから土坑であると判断した。直径は1.8mほどで円形を呈し、覆土はにぶい黄褐色、灰黄褐色粘土で構成されている。このほかには遺構は検出されていない。遺物は土坑内より埴焼の鉢の小片が1点出土している。



E8Tr-SK01 土層注記			
層No.	土 色	土 質	特 備
1	灰黄褐色	10YR5/2	粘質シルト しまりやや弱い。耕作土を少量混入。
2	灰黄褐色	10YR5/2	粘質シルト しまりやや弱い。マンガンをやや多く含む。
3	灰黄褐色	10YR2/2	粘質シルト しまり・粘性強い。マンガンをやや多く含む。
4	褐色	10YR4/1	粘質シルト しまりやや弱い。マンガンをやや多く含む。
5	褐色	10YR4/1	粘質シルト しまり強い。マンガンを微量含む。

第6図 E8Tr-SK01 土層断面図

**E9トレント（第7図）**

東西3.5m、南北9.5mで設定した。耕作土下の褐色砂を確認面としている。他のトレントで認められた南側のシルト層は確認されていない。遺構は調査区東壁に沿う形で溝跡が南北方向に存在しているが、東肩は調査区外へ展開するために規模は不明である。覆土はマンガンをやや多く含んでいる灰黄褐色粘土粒である。このほかには遺構は検出されていない。遺物は溝跡内より砥石小片が1点出土している。



E9Tr-SD01 土層注記			
層No.	土 色	土 質	特 備
1	褐色	10YR2/3	砂質シルト しまりやや弱い。耕作土を少量混入。
2	暗褐色	2.5YR4/2	砂質シルト しまりやや弱い。マンガンをやや多く含む。
3	褐色	10YR4/1	砂質シルト しまり強い。マンガンをやや多く含む。
4	褐色	10YR4/1	砂質シルト しまりやや強い。マンガンを多量。灰化物を微量含む。

第7図 E9Tr-SD01 土層断面図

## 2. 西区の調査

### W1トレンチ

東西3m、南北7mで設定した。現代表土の下に旧建造物に伴う盛土が存在し、その下には約50cmの厚みを持つ近世耕作土が存在する。この耕作土中には近世陶磁器や鼈甲製櫛片が含まれている。確認面はこの近世耕作土下で検出した自然堆積層上面としており、南側では黒褐色粘質土、北側は褐色砂層となっている。南側では耕作土を掘り込む土坑が1基検出されているが、土坑内からの遺物の出土は無い。

### W2トレンチ

東西3m、南北8mで設定した。現代表土の下には厚く耕作土が存在する。調査区中央及び南側の一部は擾乱によって大きく失われている。確認面は耕作土下で検出したにぶい黄褐色シルト層としており、人力による精査を行ったが遺構・遺物は確認できなかった。

### W3トレンチ

東西2.5m、南北7.5mで設定した。現代表土の下には厚く耕作土が存在する。確認面は耕作土下で検出した褐色砂である。精査を行ったところ、当初は東西方向の溝状遺構の可能性を考えていたプランが存在していたが、サブトレンチの結果から耕作痕と判断した。なお、自然堆積土層は南から北側へかけて緩やかな傾斜を示していることから、本トレントの北側付近に落込みが存在していることが推定できる。遺物は表土及び耕作土掘削時に近世～近代陶磁器小片が出土している。

### W4トレンチ

東西2.5m、南北8mで設定した。現代表土の下には厚く耕作土が存在するが、耕作土は厚さ3～5mm程度の炭化物層を間層として挟んでいる。確認面は耕作土下で検出した褐色砂である。W3トレント同様、当初は東西方向の溝状遺構の可能性を考えていたプランが存在していたが、サブトレンチの結果から耕作痕と判断した。なお、サブトレンチで確認した自然堆積土層は、中央部では南から北へかけて緩やかな傾斜を示しているが、北側では北から南への傾斜となっており、両者ともに立ち上がりと考えられることから本トレントとW3トレント間に落込みが存在していることが推定できる。遺物は表土、及び耕作土掘削時に近世～近代陶磁器小片が出土している。

## 3. 平成24年度調査のまとめ

- ・東区では大半のトレントで現在の耕作土直下より浜堤形成砂が確認された。この中ではE6トレントなどで設定したサブトレントにおいて、粘土層が南へ向かって傾斜している状況も確認されている。
- ・東区で確認された遺存状況が良好な遺構はE8トレントの土坑1基、E9トレントの溝跡1条である。E3～E5トレントで確認した溝跡は、確認面から底面まで約10～20cmほどであり、著しく削平を受けていることが確認された。
- ・西区では、W2トレントにおいて大規模な擾乱が存在していることが明らかとなった。またすべてのトレントで近世耕作土が厚く存在していることが判明した。
- ・確認調査を行った東区・西区とも、遺物の出土量は少なく、また遺構は極めて希薄であることから、今回の対象地は生産域、あるいは荒蕪地のような土地利用状況であったと推察される。



調査地点周辺の状況（南側上空から）



下野郷館跡の全景（東側上空から）



E1トレンチ全景（南から）



E2トレンチ全景（南から）



E3トレンチ全景（南から）



E4トレンチ全景（南西から）



E5トレンチ全景（南から）



E6トレンチ全景（南から）



E6トレンチ南側の土層堆積状況（南東から）



E 7 トレンチ南側の土層堆積状況（北東から）



E 7 トレンチ全景（南から）



E 8 トレンチ全景（南から）



E 9 トレンチ全景（南から）



W 1 トレンチ全景（北から）



W 2 トレンチ全景（北から）

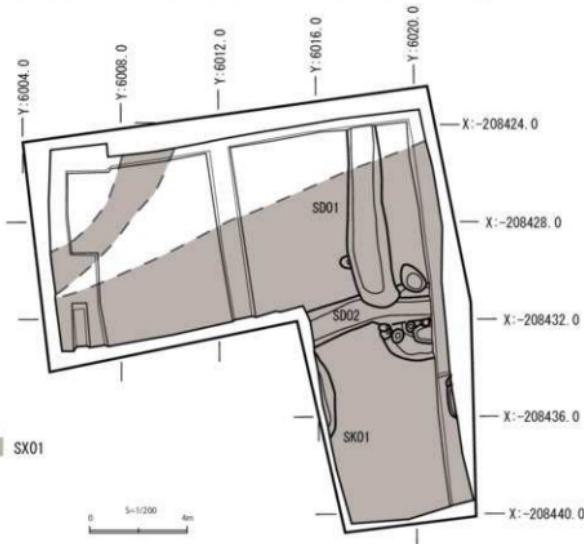


W 3 トレンチ全景（北から）

## 第IV章 平成25年度の調査成果

平成25年度の調査地点は、矢の目橋の西側で本調査（13 A区）、東側の住宅移転が完了した箇所でトレンチによる確認調査（13 B区）を実施した。調査面積は計244m<sup>2</sup>である。

13 A区での調査では溝跡2条、土坑3基、柱穴3口が発見されたほか、旧河道と考えられる落ち込みを検出し、近世陶磁器、近代陶磁器、金属製品、石製品などの遺物が発見されている。



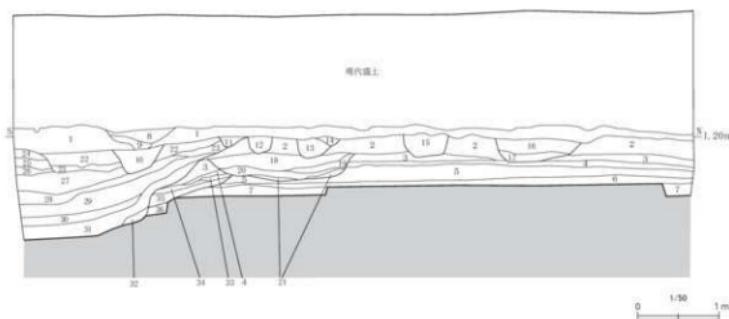
第8図 平成25年度遺構全体図

### 1. 土坑

SK01土坑（第8・10・11図、第2表）

南側調査区の西壁付近に位置する。調査区外へ展開するため、平面形状・規模については不明であるが、検出した範囲での確認面からの深さは約50cmであり、断面形状は皿形を呈する。堆積上は概ね4層に分層でき、すべて人為的理上である。

第11図はSK01から出土した磁器碗の蓋で、外面瑠璃釉に赤の色絵を描く。19世紀末以降。

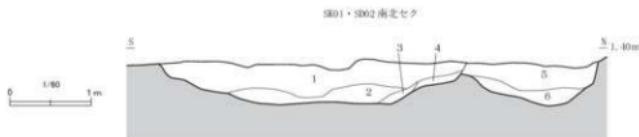


第9図 西壁土層断面図

SD01 東西セク

SD01 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト シジミを主体とする貝殻を極めて多量。石器～近代陶磁器を多量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト しまりやや弱い。近世陶磁器・炭化物を少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト しまりやや弱い。オリーブ黒色土を少量含む。



SK01・SD02 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	オリーブ黒色	3D1/1	しまりやや弱い。炭化物をやや多く。暗褐色土粒を少量含む。
2	暗灰黄色	2.5D4/2	粘質シルト しまりやや弱い。炭化物を少量含む。
3	オリーブ黒色	3D1/1	砂 しまり弱い。暗灰黄色土粒ブロックを少量含む。
4	黒褐色	2.5D3/2	シルト しまりやや強い。黒褐色土粒を少量含む。炭化物を微量含む。
5	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや強い。炭化物を少量含む。近世・近代陶磁器を含む。
6	オリーブ黒色	3D1/2	粘質シルト しまりやや弱い。炭化物を少量含む。石器・近代陶磁器を含む。

第10図 SD01、SK01・SD02 土層断面図



第11図 SK01 出土遺物

第2表 SK01 出土遺物観察表

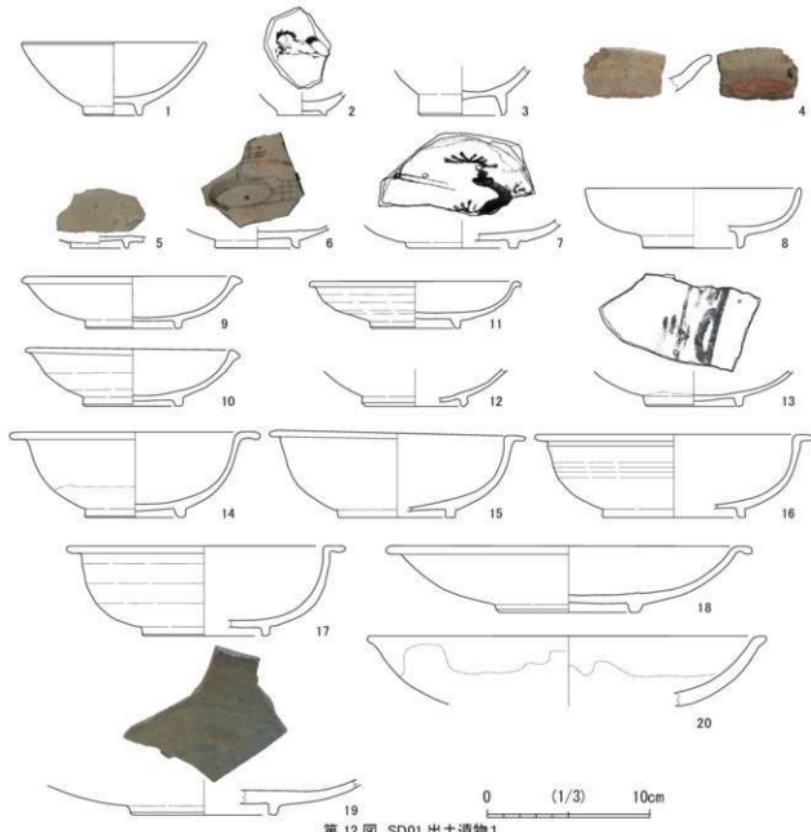
番 号	遺構・層位	種 別	認 種	産 地	特 徴	法 庫 (cm)		
						口 径	つまみ径	高 度
1	塗付罐底	瓶	輪 戸 美 漢	高付罐の底、外面墨縁模、魚文、19世紀末以降。		10.6	4.2	2.7

## 2. 溝跡

SD01溝跡（第8・10・12～31図、第3～22表）

調査区北側から南側にかけて直線的にのびる溝跡である。北側では調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約9.4mにわたって検出している。主軸方位は真北である。検出面での規模は上幅2.2m、下幅1.3m、確認面よりの深さは約30cmを測る。断面形状は箱形を呈し、南側から北側へ緩やかに傾斜している。堆積土は3層に分層でき、すべて人為的埋土である。なお、1層では大量のシジミの貝殻が北側を中心として確認され、2層では全面に渡って近現代陶磁器が大量に出土しているが、多量の炭化木材や焼けた壁土、焼土塊なども含まれていることから、火災後に構内に投棄された可能性が考えられる。

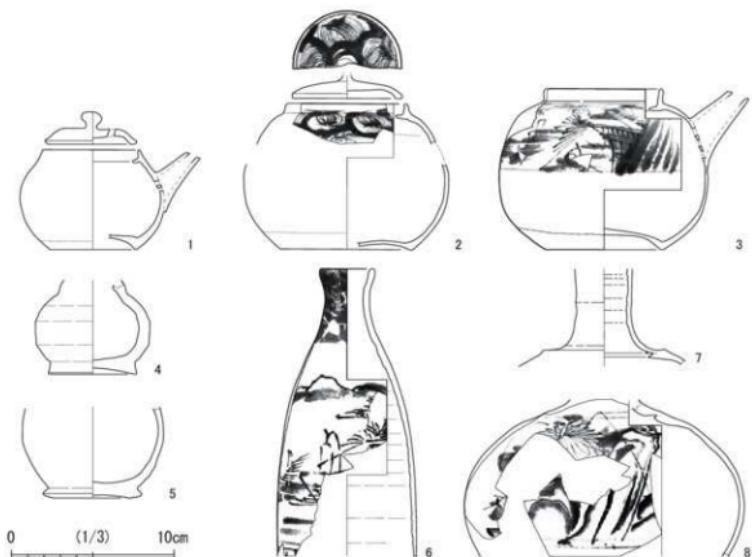
第12～31図はすべてSD01からの出土である。第12図は陶器の碗および皿で、大堀相馬焼の灰釉碗、鉄絵皿と、見込みに駒絵を描いた碗がある。3は肥前陶器の器皿手碗で17世紀後半、4は瀬戸美濃産輪禪皿で17世紀後半である。9～18は産地不明であるが、軟質で精良な胎土で薄く焼き上げられ、柔らかい質感を有する。口縁部を揃まんで三角形に仕上げたり、折り曲げて長く伸ばすところに特徴がある。19は磁器質に焼きしまった皿、20は小野相馬焼の皿である。第13図は大堀相馬焼の土瓶と徳利、産地不明の壺あるいは徳利である。大堀相馬焼の土瓶は、肩が張り落とし蓋であることから19世紀中葉である。第14・15図は陶器の捕鉢である。第14図と第15図1～9は堤焼で18世紀末以降、10・11は胎土は堤焼に近似するが口縁部の形態に違いがみられる。12は口唇部下一条の隆起が巡る。同様の特徴は堤焼の古い段階にみられるとしている。13は還元焰焼成された丹波産捕鉢で17世紀後葉。16図は陶器の鉢形おおよび甕である。胎土の特徴から1は小野相馬焼、2・6は堤焼であろう。図17は灯火具である。1は皿とも考



第12図 SD01出土遺物1

第3表 SD01出土遺物観察表1

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						(1)径	底径	
1	SD01	陶器	碗	大崩御馬	19世紀末~	11.10	(3.6)	4.5
2	SD01	陶器	大崩御馬	見込に難波塗付、高台内に濃墨色化現れ。		3.0		(2.45)
3	SD01	陶器	碗	肥前小	足底手彌谷、内外面反繩(縦白線)、足込に鉛鉢、底外側に墨書き。	15.2		(3.0)
4	SD01	陶器	碗	無	輪牛彌谷、輪足、笠込第3小頭~第5小頭、17世紀後半。			(2.7)
5	SD01	陶器	瓶	不明	内外面反繩(縦白線)、足込に鉛鉢、底外側に墨書き。19世紀初頭~中葉。	3.6		(1.8)
6	SD01	陶器	瓶	不明	足込に鉛鉢、底外側に不明墨書き。18世紀末~19世紀中葉。	5.2		(1.4)
7	SD01	陶器	瓶	大崩御馬	鉛鉢底、足込に鉛鉢、19世紀初頭~中葉。	16.80		(1.8)
8	SD01	陶器	瓶	不明	内外面に鉛鉢、足込に鉛鉢。18世紀末~19世紀初。	(13.4)	(6.2)	3.7
9	SD01	陶器	瓶	不明	内外面に鉛鉢、底外側に不明墨書き。時期不明。	13.6	5.6	3.1
10	SD01	陶器	瓶	不明	内外面に鉛鉢、足込に鉛鉢の鉛鉢。時期不明。	13.2	6.0	3.6
11	SD01	陶器	瓶	不明	内外面に鉛鉢、足込に鉛鉢の鉛鉢。底外側に不明墨書き。時期不明。	13.0	5.4	2.9
12	SD01	陶器	碗	不明	内外面に鉛鉢、底外側に墨書き。時期不明。			(6.6)
13	SD01	陶器	瓶	不明	内外面にやや青みがかった灰釉、足込に鉛鉢。底外側に墨書き(長)。足村ハバ鉛鉢。	6.0		2.25
14	SD01	陶器	钵	不明	内外面に鉛鉢、底外側に墨書き。時期不明。	15.4	6.2	5.3
15	SD01	陶器	钵	不明	内面に長崎給山文火、底部外側に墨書き。時期不明。	(15.8)	(7.2)	5.4
16	SD01	陶器	钵	不明	内面に長崎給山文火。時期不明。	(17.2)	(8.0)	5.05
17	SD01	陶器	钵	不明	内面に長崎給山文火。時期不明。	(17.0)	7.6	5.5
18	SD01	陶器	瓶	不明		22.6	9.0	4.15
19	SD01	陶器	瓶	不明	幾何彫りがく、磁質質。			(4.6)
20	SD01	陶器	瓶	小野和馬	轮/日輪済/折枝大瓶。18世紀中葉~後葉。	24.6		(4.0)

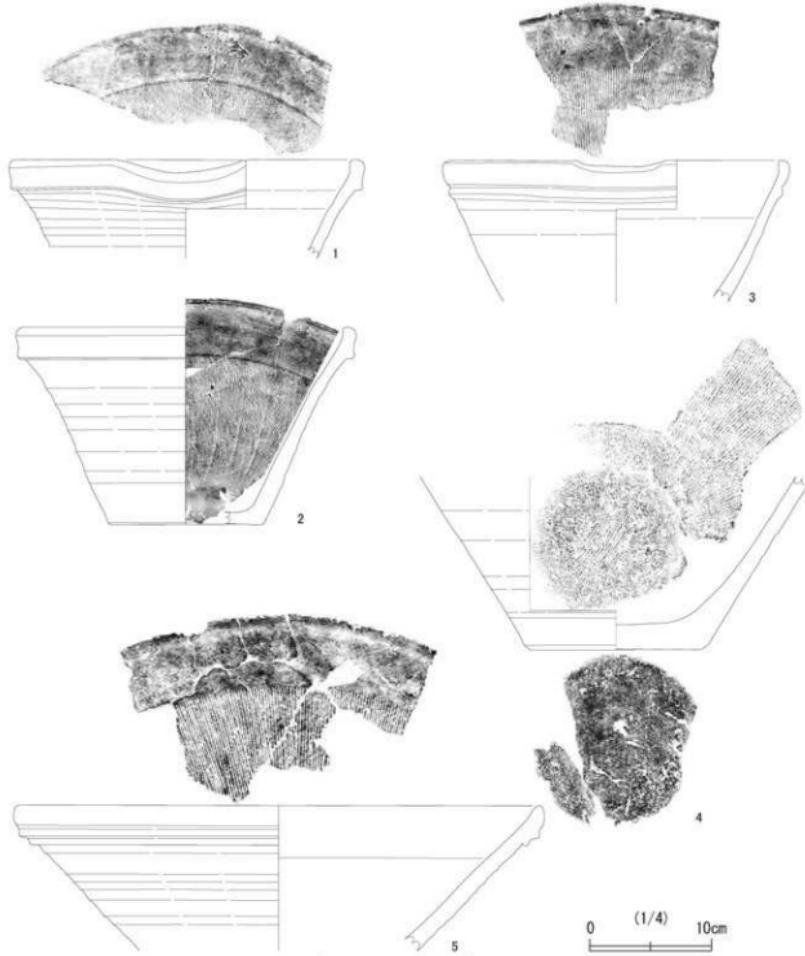


第13図 SD01 出土遺物観察表2

第4表 SD01 出土遺物観察表2

番号	遺物・部位	種別	認定種	産地	特徴			出量(tm)
					口径	底径	高さ	
1 SD01	陶器	土瓶	19世紀中葉。	大庭相馬	6.1	5.3	6.15	
2 SD01	陶器	土瓶	大庭相馬の 外面白磁釉。	大庭相馬	7.3	6.2	(9.0)	
3 SD01	陶器	土瓶	19世紀中葉。	大庭相馬	7.4	7.1	9.5	
4 SD01	陶器	蓋	不明				5.4	(5.8)
5 SD01	陶器	蓋	不明	飯土縣丘。焼き痕が良い。磁器質。底部外面を除き、内外面に灰被。			6.1	(5.6)
6 SD01	陶器	圓形利	大庭相馬	19世紀中葉。			2.3	(17.8)
7 SD01	陶器	池利	大庭相馬 飛脚。	19世紀中葉。				(6.2)
8 SD01	陶器	他利	大庭相馬	19世紀中葉。				(9.2)

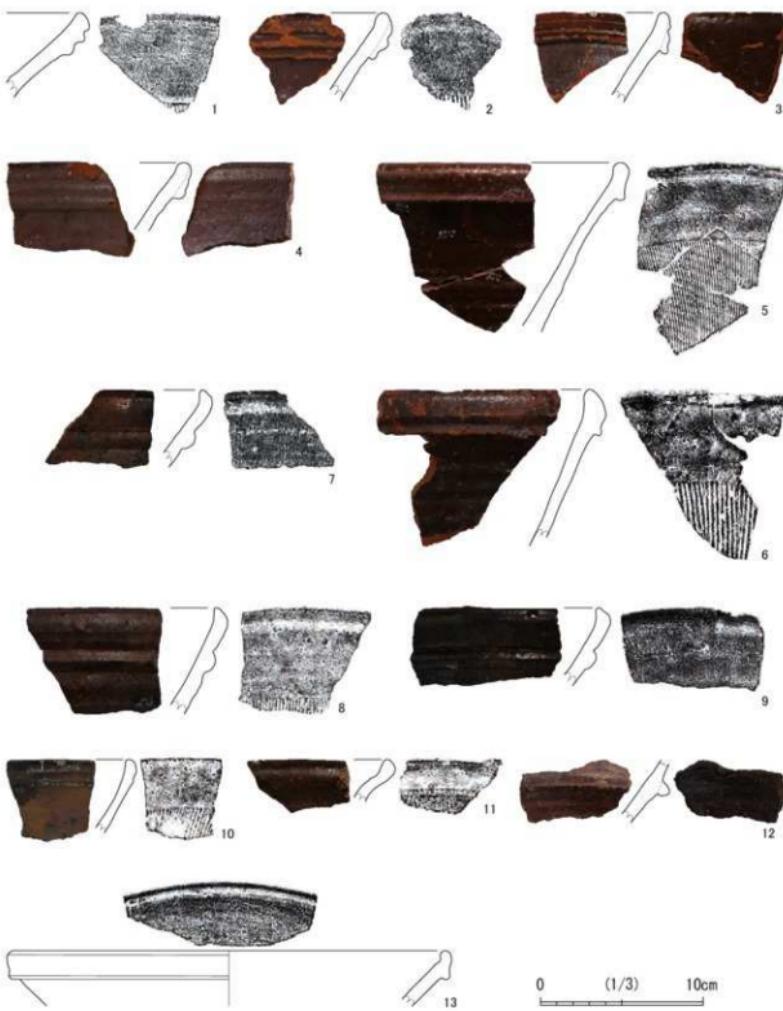
えられるが炭化物の付着と油煙痕がみられる。第18・19図は磁器碗である。第18図はすべて端反碗で、1は外面瑠璃釉の蓋である。文様は手描きのものと型紙描りのものがある。第19図1～15は丸碗、16～24は平碗である。1と20は銅板転写、それ以外は型紙描、21と22は酸化クロムを用いた青磁に白盛で文様を描く。25は色絵の子供茶碗である。第20図は磁器小碗、第21図は磁器小杯である。第21図2、4は兵隊盃、同じく3は宣伝盃。11・12は酸化クロム青磁に白盛で草花文を描く。第22～25図は、磁器皿である。第22図はいずれも肥前産で17世紀後半～18世紀前半である。第23図は瀬戸美濃産と切込かと思われる皿である。第24図は瀬戸美濃産の大皿で型紙描りである。第25図は小皿と手塙皿である。3は型押し成型の切込の輪花皿、11～15は切込の手塙皿である。第26図は瀬戸美濃産の磁器鉢である。第27図は磁器段重である。1と2は三段の組み合わせが確認できた。1は銅板転写、2は型紙描りである。3は胎土・釉とも精良で素描のみで文様を描く精製品である。段重最下段であろう。第28図は磁器急須・徳利・瓶類である。4は龍泉窯系青磁で瓶の肩部である。第29図は磁器戸車、第30図はその他の土製品等である。第30図1は胎土黄橙色、薄手の陶器底部で、外面に瘤状の粘土を張り付けている。6は内面に布目痕がみられ、型作りの人形である。7・8も同様な特徴がみられ、人形あるいは機材型の土製



第14図 SD01出土遺物3

第5表 SD01出土遺物観察表3

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						11径	底径	器高
1	SD01	陶器	埴輪	近畿	内外面に鉄錆。胎土は明褐色で砂粒を微量含む。18世紀末～19世紀。	(28.6)		(8.1)
2	SD01	陶器	埴輪	近畿	内外面、底面外面に鉄錆。鉢口32条。底部内面周縁部擦滅。底部外面部擦滅。胎土は明褐色で砂粒を微量含む。18世紀末～19世紀。	(28.6)		16.2
3	SD01	陶器	埴輪	近畿	内外面に鉄錆。胎土は灰黄褐色。18世紀末～19世紀。	(27.6)		(11.4)
4	SD01	陶器	埴輪	近畿	内外面に鉄錆。底面外面上部に鉄錆。底面下端に凹軸ヘラケズリ。底面外面上部に鉄錆。底部内面に鉄錆部擦滅。鉢口32条。底面内面に1条。胎土は明褐色で砂粒を少量含む。18世紀末～19世紀。	15.0		(14.2)
5	SD01	陶器	埴輪	近畿	内外面に鉄錆。胎土は明褐色で砂粒を微量含む。18世紀末～19世紀。	(43.6)		(11.9)

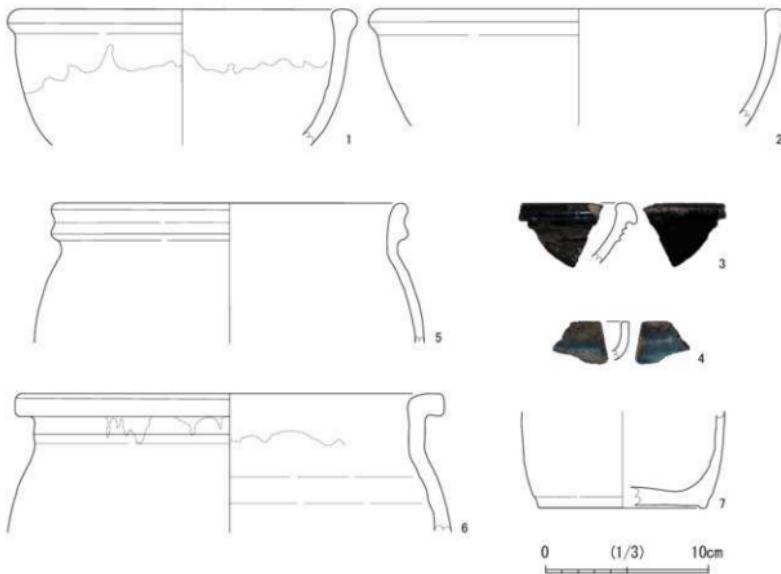


第15図 SD01出土遺物4

品の一部と考えられる。第31図は石製品である。堆積土3層中から石硯が2点と砥石が2点出土している。石硯はともに形態が長方硯で、硯側は一段高い縁が巡る。1は陸の中央が使用により摩耗し、凹んでいる。いずれも石材は粘板岩で、雄勝産の玄昌石とみられる。砥石は2点とも中砥とみられ、石材は凝灰岩である。3は自然礫を多面的に利用し、複数の砥磨面をもつ。4はやや扁平な角柱状に整形し、1面が主な砥磨面

第6表 SD01 出土遺物観察表 4

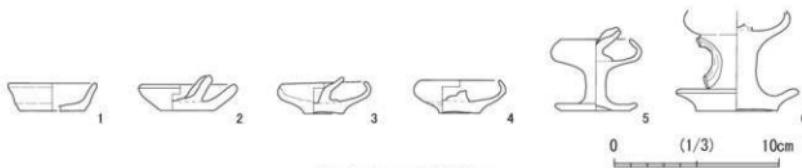
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	陶器	埴輪	埋焼	胎土は明褐色で砂粒を微量含む。内外面に鉄錆。18世紀末～19世紀。			(5.2)
2	SD01	陶器	埴輪	埋焼	胎土は明褐色で砂粒を微量含む。内外面に鉄錆。ムラがある。18世紀末～19世紀。			(6.5)
3	SD01	陶器	埴輪	埋焼	胎土は明褐色で砂粒を微量含む。内外面に鉄錆。18世紀末～19世紀。			(5.5)
4	SD01	陶器	埴輪	埋焼	胎土は明褐色～褐色。内外面に鉄錆。18世紀末～19世紀。			(5.3)
5	SD01	陶器	埴輪	埋焼	胎土は明褐色で砂粒を微量含む。内外面に鉄錆。ムラがある。18世紀末～19世紀。			(10.4)
6	SD01	陶器	埴輪	埋焼	胎土は明褐色で砂粒を微量含む。内外面に鉄錆。ムラがある。18世紀末～19世紀。			(9.6)
7	SD01	陶器	埴輪	埋焼	胎土は黄褐色で砂粒を少量含む。内外面に鉄錆。ムラがある。18世紀末～19世紀。			(4.7)
8	SD01	陶器	埴輪	埋焼	胎土は明褐色で砂粒を微量含む。内外面に鉄錆。18世紀末～19世紀。			(6.5)
9	SD01	陶器	埴輪	埋焼	胎土は黄褐色で砂粒を微量含む。内外面に鉄錆。18世紀末～19世紀。			(4.8)
10	SD01	陶器	埴輪	不明	胎土は黄褐色。内外面に鉄錆。			(4.5)
11	SD01	陶器	埴輪	不明	胎土は灰褐色で砂粒を含む。内外面に鉄錆。			
12	SD01	陶器	埴輪	不明	胎土は黄褐色で粗い。砂礫多く。内外面に鉄錆。口縁部外下面下部に貼り付け残渣。17世紀末～18世紀初。			(4.2)
13	SD01	陶器	埴輪	丹波	内外面に鉄錆。断面は灰色を呈し、還元焰焼成される。丹波D類。17世紀後葉。			(27.4)



第16図 SD01 出土遺物5

第7表 SD01 出土遺物観察表5

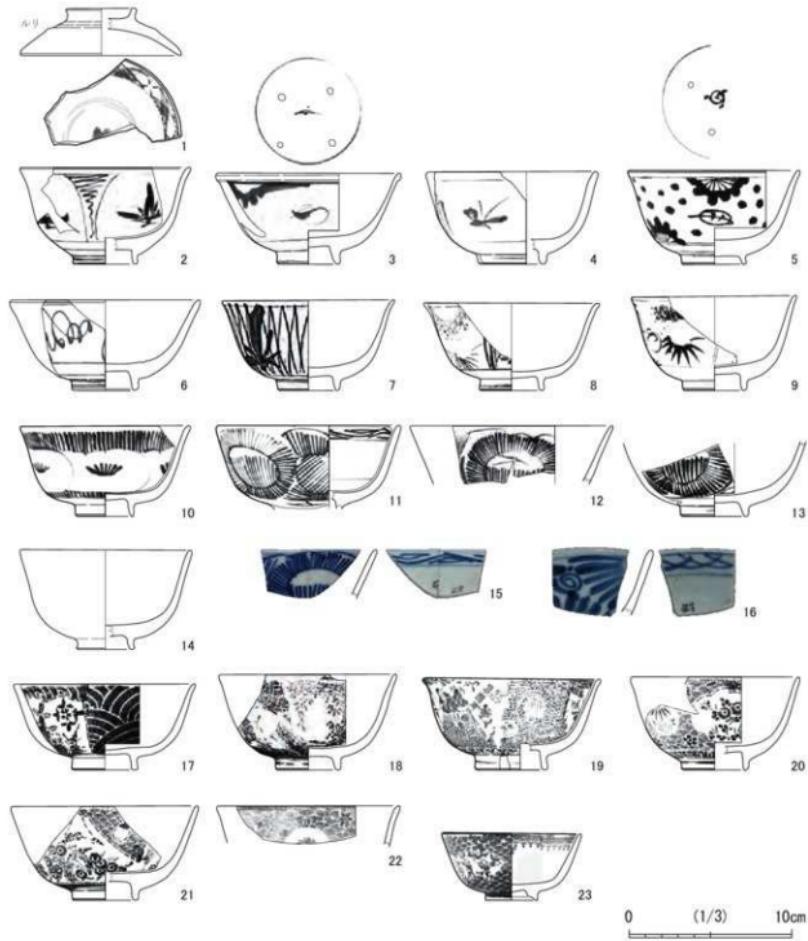
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)			写真番号
						口径	底径	器高	
1	SD01	陶器	埴輪	小野相馬	胎土は灰褐色で砂粒多い。口縁部に白色海鼠釉。19世紀～。	21.4	8.25		
2	SD01	陶器	埴輪	埋焼	胎土は赤褐色で砂粒多い。白唇部内面～外表面全体に白色海鼠釉。19世紀末～。	(25.8)	7.2		
3	SD01	陶器	埴輪	不明	胎土は灰褐色。内外面に鉄錆。			(4.8)	
4	SD01	陶器	片口鉢	不明	注口落残片。胎土は灰褐色で粗い。内外面に灰褐色。			(1.20)	
5	SD01	陶器	便	不明	胎土は灰褐色で砂粒を少量含む。内外面に灰褐色。	(22.0)	(9.6)		
6	SD01	陶器	便	埋焼	胎土は黄褐色で砂粒を微量含む。内外面に鉄錆。口縁部に白色海鼠釉。19世紀～。	(36.4)	(9.5)		
7	SD01	陶器	便	不明	胎土精良。焼き跡が無い。磁器質。			(9.4)	(9.95)



第17図 SD01出土遺物6

第8表 SD01出土遺物観察表6

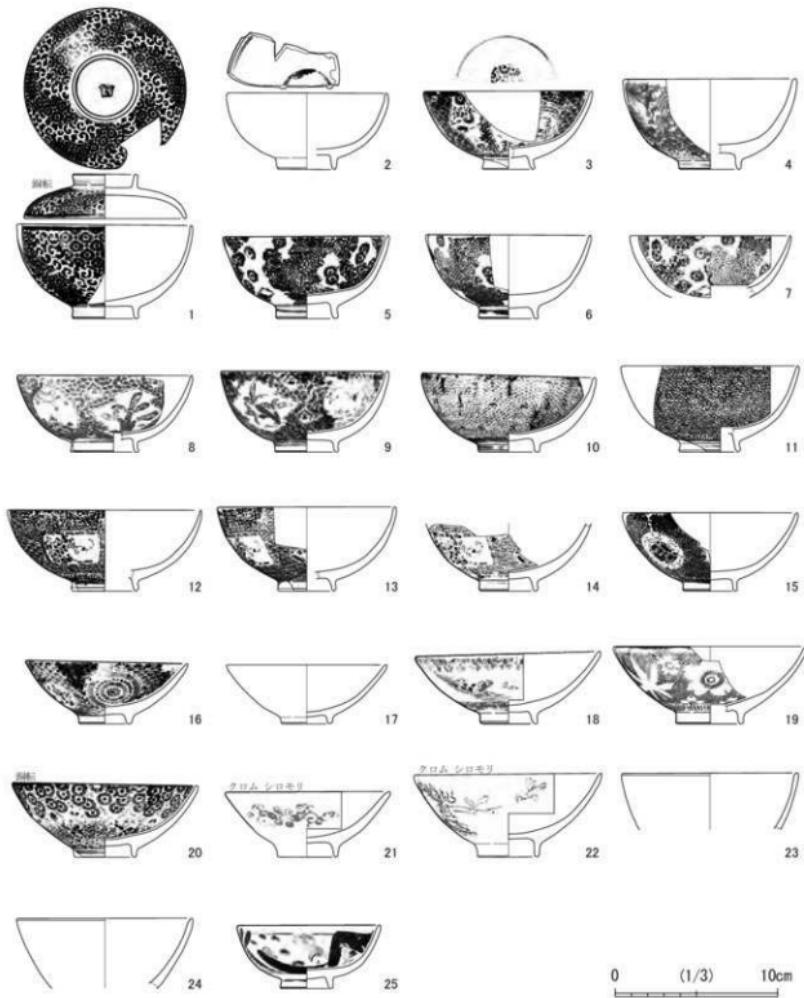
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD01	陶器	小皿	平窓か	灰土、釉は茶褐色。内外面に滑津痕。	(5.4)	(4.6)	2.7
2	SD01	陶器	行火具	不明	[内外面に鉢底]。	6.0	3.1	2.1
3	SD01	陶器	行火具	大窓高窓か	[内面下に鍍蓋外面に鉢底。時期不明]。	5.2	2.5	2.2
4	SD01	陶器	行火具	大窓高窓か	[内面下に鉢底]。	5.0	2.5	2.0
5	SD01	陶器	行火具	大窓高窓か	[内面下に鉢底]。	(4.2)	4.1	4.35
6	SD01	陶器	行火具	不明	灰土はオリーブ褐色で砂粒を含む。選底外表面を除く内外面に滑津。	5.0	(6.1)	



第18図 SD01出土遺物7

第9表 SD01 出土遺物観察表7

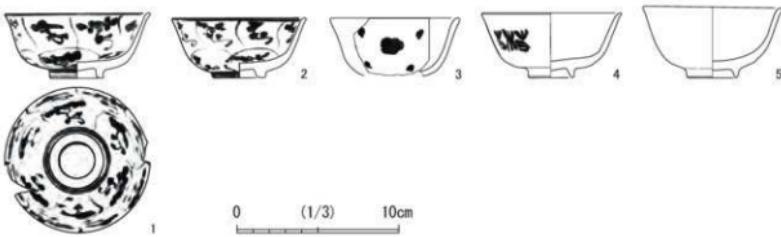
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	出量(tm)		
						日径	夜径	高さ
1	SD01	青磁染付	直付み輪 (蓋のみ)	肥前	外面青磁。内面に染付と花文。18世紀中期～末期。	(10.0)	(4.0)	2.9
2	SD01	染付磁器	碗 不明	不明	暗反釉。18世紀末～19世紀初。	(10.5)	4.0	6.0
3	SD01	染付磁器	碗 切込か	不明	暗反釉。外側に輪花文。全体に被釉してある。18世紀末～19世紀初。	(14.4)	3.65	3.9
4	SD01	染付磁器	碗 切込	不明	暗反釉。外側に模様。施氏杏文。内面に直付ハマ形脚。18世紀末～19世紀初。	(10.0)	(4.0)	5.7
5	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。内面に2枚に木の葉。18世紀末～19世紀初。	(10.6)	4.0	5.8
6	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。外側に波と唐草文。18世紀末～19世紀初。	(11.8)	(4.0)	5.6
7	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。外側に竹葉文。18世紀末～19世紀初。	(10.7)	3.8	5.7
8	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。外側に竹葉文。18世紀末～19世紀初。	(10.8)	4.0	5.4
9	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。外側に竹葉文。18世紀末～19世紀初。	(10.1)	4.0	5.8
10	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。内側にみた葉筋に輪切口。18世紀末～19世紀初。	(10.5)	3.5	5.6
11	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。外側に松葉文。内側に輪切口。18世紀末～19世紀初。	(11.4)	(5.1)	
12	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。外側に松葉文。内側に2号窓に輪切口。18世紀末～19世紀初。	(12.6)	(3.6)	
13	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。外側に牡丹文。内側に2号窓に輪切口。18世紀末～19世紀初。	(11.0)	4.2	(4.8)
14	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。内側に牡丹文。18世紀末～19世紀初。	(10.6)	3.6	6.15
15	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。内側に牡丹文。内側に2号窓に輪切口。18世紀末～19世紀初。	(11.0)	(3.6)	
16	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。内側に牡丹文。18世紀末～19世紀初。	(10.6)	(4.0)	
17	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。内側に牡丹文。内側に2号窓に輪切口。18世紀末～19世紀初。	(11.2)	4.0	5.8
18	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。内側に牡丹文。内側に2号窓に輪切口。18世紀末～19世紀初。	(11.0)	4.0	5.8
19	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。内側に牡丹文。内側に2号窓に輪切口。18世紀末～19世紀初。	(11.0)	4.5	5.7
20	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。内側に牡丹文。内側に2号窓に輪切口。18世紀末～19世紀初。	(10.4)	(4.2)	5.75
21	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。内側に牡丹文。内側に2号窓に輪切口。18世紀末～19世紀初。	(11.3)	(4.1)	5.8
22	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。内側に牡丹文。内側に2号窓に輪切口。18世紀末～19世紀初。	(11.3)	(2.5)	
23	SD01	染付磁器	碗 直付	肥前	直付碗。内側に牡丹文。内側に2号窓に輪切口。18世紀末～19世紀初。	(8.6)	3.2	4.2



第 19 図 SD01 出土遺物8

第10表 SD01出土遺物観察表8

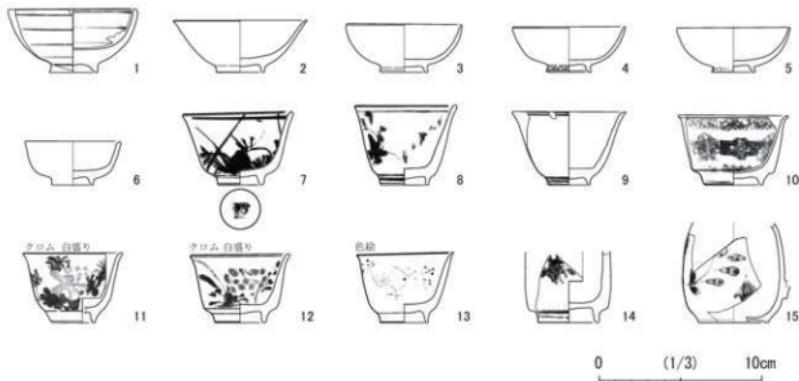
番号	道標・層位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm)
					口径	底径	高さ	
1	SD01	棗付縁部	碗	瀬戸美濃	側板軽厚。棗付縁の頃。丸綱。外面に繩状菊文と唐草文。内面に宝珠文と松竹梅円形文。コバルト。19世紀末～20世紀初。	10.9	4.1	5.85
1	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	側板軽厚。棗付縁の画。つまみ内に「青」文。コバルト。19世紀末～20世紀初。	10.1	4.0	2.75
2	SD01	棗付縁部	碗	瀬戸美濃	丸綱。外面は酸化クロム青磁。見込に松竹梅円形文。19世紀末～	10.0	3.6	4.7
3	SD01	棗付縁部	碗	瀬戸美濃	丸綱。型崩れ。外面に青海波と山水文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。19世紀末～20世紀初。	10.4	3.2	4.8
4	SD01	棗付縁部	碗	瀬戸美濃	丸綱。外面に草花文。コバルト。内面に斜格子文。19世紀末～20世紀初。	10.7	3.7	5.6
5	SD01	棗付縁部	碗	瀬戸美濃	丸綱。型崩れ。外面にみじん唐草と唐文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。19世紀末～20世紀初。	10.0	3.9	5.1
6	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	丸綱。型崩れ。外面にみじん唐草と唐文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。19世紀末～20世紀初。	10.2	3.6	5.2
7	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	丸綱。型崩れ。外面に松と唐文。内面に宝珠文。19世紀末～20世紀初。	10.0		13.80
8	SD01	棗付縁部	碗	瀬戸美濃	丸綱。型崩れ。外面に青海波と宝珠文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。19世紀末～20世紀初。	10.8	4.2	4.75
9	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	丸綱。型崩れ。外面に青海波と唐文。内面に宝珠文と松竹梅円形文。19世紀末～20世紀初。	10.4	3.9	5.0
10	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	丸綱。型崩れ。外面にみじん唐草。内面に宝珠文と松竹梅円形文。19世紀末～20世紀初。	10.8	3.9	4.85
11	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	丸綱。型崩れ。外面にみじん唐草。内面に宝珠文。19世紀末～20世紀初。	11.0	3.5	5.3
12	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	丸綱。型崩れ。外面に青海波唐草文。内面に宝珠文。19世紀末～20世紀初。	10.0	4.2	5.0
13	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	丸綱。型崩れ。外面に青海波とみじん唐草文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。	11.1	3.6	5.2
14	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	丸綱。型崩れ。外面上に青海波と唐文。見込に松竹梅円形文。19世紀末～20世紀初。	10.6		4.15
15	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	丸綱。型崩れ。外面上に青海波と唐文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。19世紀末～20世紀初。	10.0	3.4	4.85
16	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	平綱。型崩れ。外面上に青海波と唐文。内面に宝珠文。19世紀末～20世紀初。	10.0	1.65	3.95
17	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	平綱。外面上に菊花文。19世紀末～20世紀初。	10.0	3.1	3.6
18	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	平綱。型崩れ。外面上に宝珠文と風飄文。内面に宝珠文。19世紀末～20世紀初。	11.6	3.6	4.4
19	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	平綱。型崩れ。外面上に六瓣花文。19世紀末～20世紀初。	12.0	4.1	4.8
20	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	平綱。側板軽厚。外面上に花鳥人物文。口縁部内面に宝珠文。19世紀末～20世紀初。	11.5	3.8	4.6
21	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	平綱。外面上は酸化クロム青磁。イッサン枝法白磁。高台に落款「青」か。19世紀末～20世紀初。	10.2	3.7	4.0
22	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	平綱。外面上は酸化クロム青磁。イッサン枝法白磁。高台に落款「青」か。19世紀末～20世紀初。	11.7	3.8	5.1
23	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	把柄か。丸綱。外面上に宝珠文。	11.0		3.5
24	SD01	棗付縁部	画	瀬戸美濃	把柄か。丸綱。外面上に宝珠文。	11.0		4.3
25	SD01	棗付縁部	画	不明	丸綱。土供茶碗。色絵。	9.9	3.2	3.9



第20図 SD01出土遺物9

第11表 SD01出土遺物観察表9

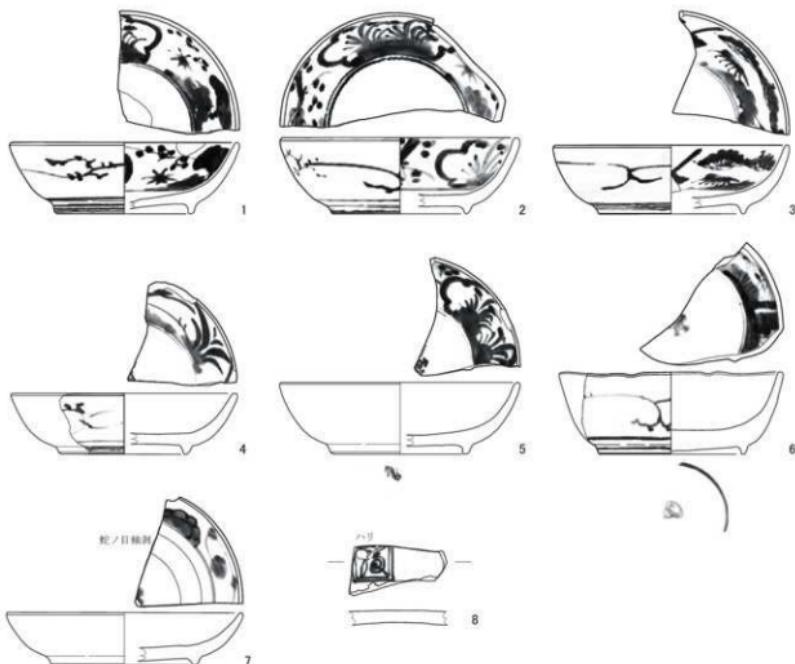
番号	道標・層位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm)
					口径	底径	高さ	
1	SD01	棗付縁部	小瓶	瀬戸美濃	外面上に宝珠文。	9.0	3.1	4.0
2	SD01	棗付縁部	小瓶	瀬戸美濃	外面上に宝珠文。	8.4	3.4	3.7
3	SD01	棗付縁部	小瓶	瀬戸美濃	外面上に宝珠文(手描き輪郭にダ)。19世紀末以前。	8.0		3.60
4	SD01	棗付縁部	小瓶	瀬戸美濃	口紅。19世紀末以前。	8.7	2.7	4.0
5	SD01	棗付縁部	小瓶	瀬戸美濃	外面上に源氏物文。口紅。19世紀末以前。	8.6	3.1	4.4



第21図 SD01出土遺物10

第12表 SD01出土遺物観察表10

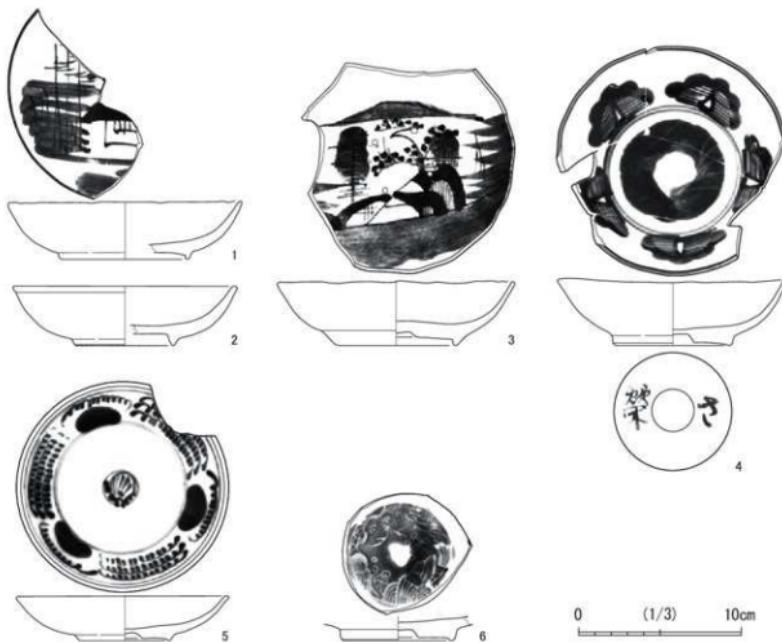
番号	遺物・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						横径	底径	厚さ
1	SD01	安付磁器	小坪	発戸美濃	内外面横縞文。ヨハリ小。19世紀末以降。	(7.9)	(3.0)	3.9
2	SD01	磁器	小坪	発戸美濃	片脚壺。「祝勝盃」(日本帝國万歳)。20世紀後半。	8.3	3.0	3.2
3	SD01	磁器	小坪	発戸美濃	印物。寅巳記。	(7.2)	3.0	3.0
4	SD01	安付磁器	小坪	発戸美濃	片脚壺。白刷絵。菊文を細く。「風華」。萬古に「〇」。	7.0	2.8	2.8
5	SD01	安付磁器	小坪	安波美濃	内面に大脚跡。金口紅。萬古に葉目。山形市若波窯。	7.0	2.7	2.75
6	SD01	安付磁器	小坪	発戸美濃	身込に富士山。	6.0	2.5	2.7
7	SD01	安付磁器	小坪	会津美濃	外面上に草花文。ヨハリ小。19世紀。『会津若松市史 文化編』陶磁器 合併のやうもの』。	6.9	2.9	4.5
8	SD01	安付磁器	小坪	安波美濃	外面上に草花文と不明文字列。底盤外面に葉目。山形市若波窯。肚土やや細い。袖は薄く。	6.3	2.9	4.9
9	SD01	安付磁器	小坪	発戸美濃	ヨハリ小。19世紀末以降。	(7.0)	(2.6)	4.5
10	SD01	安付磁器	小坪	発戸美濃	削れ感り、外面上に花輪文。19世紀末以降。	(7.8)	3.5	4.3
11	SD01	磁器	小坪	発戸美濃	外面上は解化ウロコ目青緑。草花文をイザン枝由による白磁で細く。色絵。19世紀末以降。	(6.2)	(2.7)	4.3
12	SD01	磁器	小坪	発戸美濃	外面上は解化ウロコ目青緑。草花文をイザン枝由による白磁で細く。色絵。19世紀末以降。	6.2	3.1	4.2
13	SD01	磁器	小坪	発戸美濃	内面に富士山文。色絵。	6.0	3.0	4.35
14	SD01	安付磁器	小坪	安波美濃	外面上に後文。萬古に葉目。岩波窯。19世紀後半。		3.8	(4.4)
15	SD01	安付磁器	ヨーヒー カップ	発戸美濃	外面上に草花文(手描き輪郭線)。19世紀末以降。		4.3	(6.1)



第22図 SD01出土遺物11

第13表 SD01出土遺物観察表11

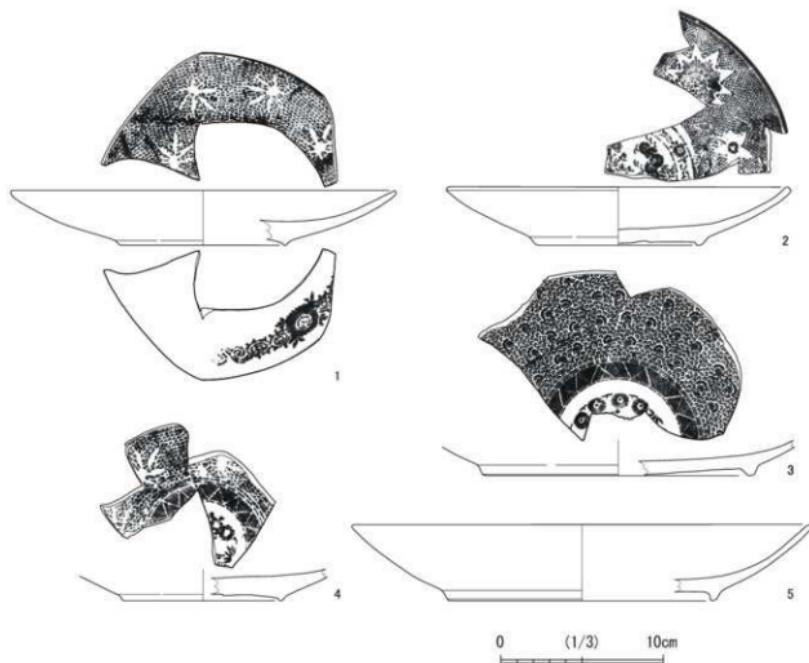
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	測量(cm)		
						直径	底径	高さ
1	SD01	染付磁器	瓶	肥前	外面に唐草文、内面に草花文、17世紀後半。	(14.2)	2.4	8.6
2	SD01	染付磁器	瓶	肥前	外面に唐草文、内面に草花文、17世紀後半。	(14.8)	9.4	4.7
3	SD01	染付磁器	瓶	肥前	外面に唐草文、内面に草花文、17世紀後半。	(14.6)	4.25	9.0
4	SD01	染付磁器	瓶	肥前	外面に唐草文、内面に草花文と五瓣花文、高台に「酒船」。17世紀末～18世紀前半。	(14.0)	(8.0)	3.8
5	SD01	染付磁器	瓶	肥前	外面に唐草文、内面に草花文と五瓣花文、高台に「酒船」。17世紀末～18世紀前半。	(14.8)	(8.4)	4.4
6	SD01	染付磁器	輪花瓶	肥前	外面に唐草文、内面に草花文と五瓣花文、高台に「酒船」。17世紀末～18世紀前半。	(13.8)	(9.0)	5.05
7	SD01	染付磁器	瓶	肥前	枕込みは蛇ノ目模様、18世紀中葉～末期。	(14.6)	9.0	3.25
8	SD01	染付磁器	瓶	肥前	底部礫石、「酒船」、ハツ依跡、17世紀末～18世紀前半。			(0.8)



第23図 SD01出土遺物12

第14表 SD01出土遺物観察表12

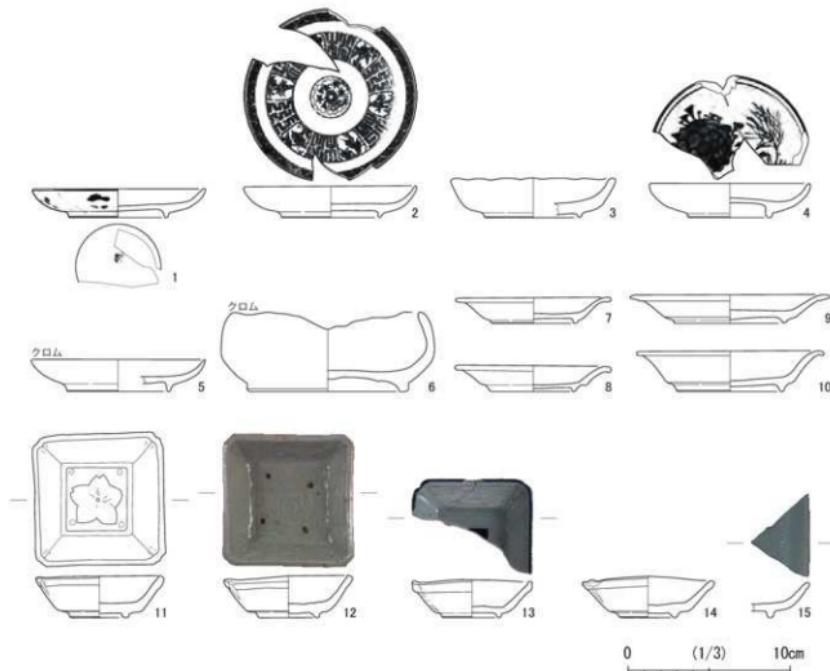
番号	道傍・層位	種別	器種	產地	特徴	法量(cm)		
						口徑	底径	高さ
1	SD01	安付磁器	盤	切込か	内面に山水文。口紅。足付ハマ瓶跡。19世紀末～20世紀初。	(14.4)	(8.0)	3.5
2	SD01	安付磁器	盤	小判	内面に草花文。	(13.8)	(6.2)	3.65
3	SD01	安付磁器	盤	切込か	八瓣輪花形。内面に山水文。足付ハマ瓶跡。船自回形高台。18世紀末～19世紀初。	(14.7)	7.3	3.9
4	SD01	安付磁器	盤	漸凹形	内面に楕円文で風景を描く。口紅。船自回形高台。底面外間に墨書き「S樂」。	14.2	7.4	4.15
5	SD01	安付磁器	盤	漸凹形	内外面に半切込で楓葉文。船自回形高台。19世紀中葉～末葉。	13.1	6.7	2.75
6	SD01	安付磁器	盤	漸凹形	内面に楕円文で風景を描く。船自回形高台。	7.0	(1.5)	



第24図 SD01出土遺物 13

第15表 SD01出土遺物観察表 13

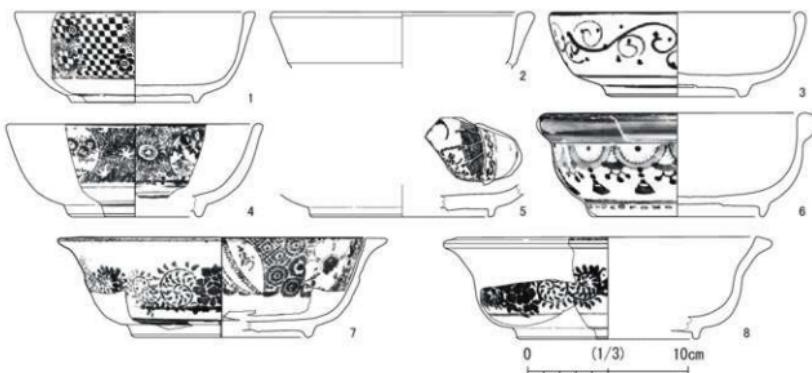
番号	遺構・部位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm)
					口径	底径	高さ	
1	染付磁器	瓶	漁戸美濃	型紙焼。外面上に牡丹唐草文。内面にみじん唐草文。乾白形高台。胎土は暗い灰白色。	(23.7)	(10.2)	(3.4)	
2	染付磁器	瓶	漁戸美濃	型紙焼。外面上に菊と唐草文。内面にもみに文。見辺に菊文。胎土は暗い灰白色。乾白形高台。19世紀末以降。	(20.9)	(10.0)	(3.6)	
3	染付磁器	瓶	漁戸美濃	型紙焼。内面上にみじん唐草に松文。見辺に松竹梅円形文。底部外面にハリ筋。胎土は2層構造。暗い灰白色。19世紀末以降。	(16.8)	(2.2)		
4	染付磁器	瓶	漁戸美濃	型紙焼。外面上に牡丹唐草文。内面にみじん唐草文。乾白形高台。胎土は暗い灰白色。				10.0 (1.95)
5	染付磁器	瓶	漁戸美濃	型紙焼。外面上に唐草と紫配件。内面はみじん唐草に松文。見辺に松竹梅円形文。胎土は暗い灰白色。19世紀末以降。	(28.2)	(16.2)	5.7	



第25図 SD01出土遺物図 14

第16表 SD01出土遺物観察表 14

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						(1)径	(2)底径	(3)高
1	SD01	塗付磁器	小瓶	岩波窯	内外縁にねじ花文。底盤外縁に施印。山形市岩波窯。新土轉製。白色で釉は薄く透明度が低い。以降土軽やか、19世紀後半。	10.7	6.0	1.8
2	SD01	塗付磁器	小瓶	漸戸美濃	施印模写。ヨーロッパ、19世紀末頃。	10.8	6.1	1.9
3	SD01	塗付磁器	小瓶	切込か	輪花小瓶。型押成形。内面に施刻の唐草とタテ。18世紀末～19世紀末。	10.2	6.0	2.4
4	SD01	塗付磁器	小瓶	不明	白瓶。19世紀以前。	10.0	5.2	2.1
5	SD01	青磁	小瓶	漸戸美濃	施化け口づき瓶。型組模写。内面に白墨でに上る筋付け。19世紀末～20世紀初。	10.8	6.4	2.0
6	SD01	青磁	小瓶	漸戸美濃	施化け口づき瓶。19世紀以降。	13.3	10.0	5.9
7	SD01	白磁	小瓶	不明	見込みに施印する唐文。	9.6	5.3	1.55
8	SD01	白磁	小瓶	不明	見込みに施印する唐文。	9.7	5.3	1.6
9	SD01	白磁	小瓶	不明	見込みに施印する唐文。	12.4	7.0	1.75
10	SD01	白磁	小瓶	不明	見込みに施印する唐文。	11.6	6.6	2.5
11	SD01	白磁	手塩瓶	切込	内面に五瓣板花文。18世紀末～19世紀初。	8.0	3.6	2.6
12	SD01	白磁	手塩瓶	切込	内面にふくさ文。18世紀末～19世紀初。	8.0	3.7	2.6
13	SD01	白磁	手塩瓶	切込	体面内面に鳳凰文と牡丹文。口縁周囲と見込みに細溝模。18世紀末～19世紀末。	7.5	3.6	2.35
14	SD01	白磁	手塩瓶	切込	内面にふくさ文。18世紀末～19世紀初。		3.6	(2.55)
15	SD01	白磁	手塩瓶	切込	18世紀末～19世紀末。			(2.2)

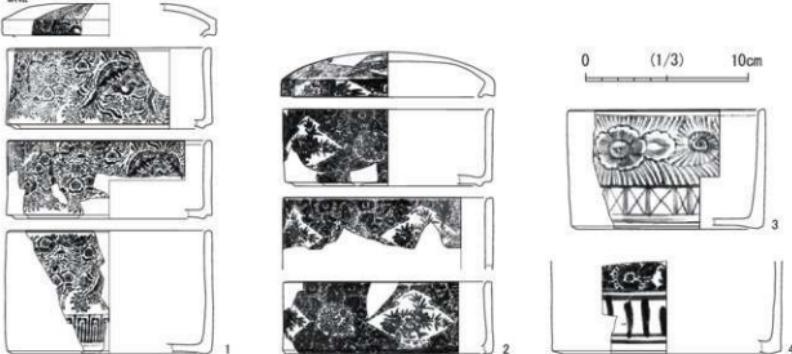


第26図 SD01出土遺物15

第17表 SD01出土遺物観察表15

番号	遺構・部位	種別	器種	产地	特徴	寸法(cm)		
						口径	底径	高さ
1	梁付縦窓	鉢	漁戸美濃	型紙焼り。外面は格子に桜花文。内面に草花文(手彫き)。19世紀末以降。		15.0	9.0	5.6
2	梁付縦窓	鉢	漁戸美濃	型紙焼り。外面部に青海波文。19世紀末以降。		16.0	10.0	3.2
3	梁付縦窓	鉢	漁戸美濃	型紙焼り。体部外側に唐草文(手彫き)。体部内面は斜格子に菊文(手彫き)。見込に印子文(型紙焼)。蛇目四形高台。19世紀末以降。		16.0	8.8	5.25
4	梁付縦窓	鉢	漁戸美濃	型紙焼り。体部外側にもみに上輪文。見込に青海波文。体部内面に本草と牡丹文。19世紀初頭。		16.0	8.0	5.8
5	梁付縦窓	鉢	漁戸美濃	型紙焼り。内面に草文。鉢土は暗い灰白色。19世紀末～20世紀初頭。		11.6	(2.0)	
6	梁付縦窓	鉢	漁戸美濃	体部外側に輪宝繁文(手彫き)。内面に斜格子と唐草文(手彫き)。施化クロム釉使用。蛇目四形高台。19世紀末以降。		17.6	10.8	6.5
7	梁付縦窓	鉢	漁戸美濃	型紙焼り。体部外側に牡丹唐草文。体部内面に輪宝と草文。見込に草文。蛇目四形高台。19世紀末以降。		20.6	11.4	6.25
8	梁付縦窓	鉢	漁戸美濃	型紙焼り。体部外側に牡丹唐草文。体部内面に輪宝と草文。見込に草文。蛇目四形高台。19世紀末以降。		20.6	11.0	6.30

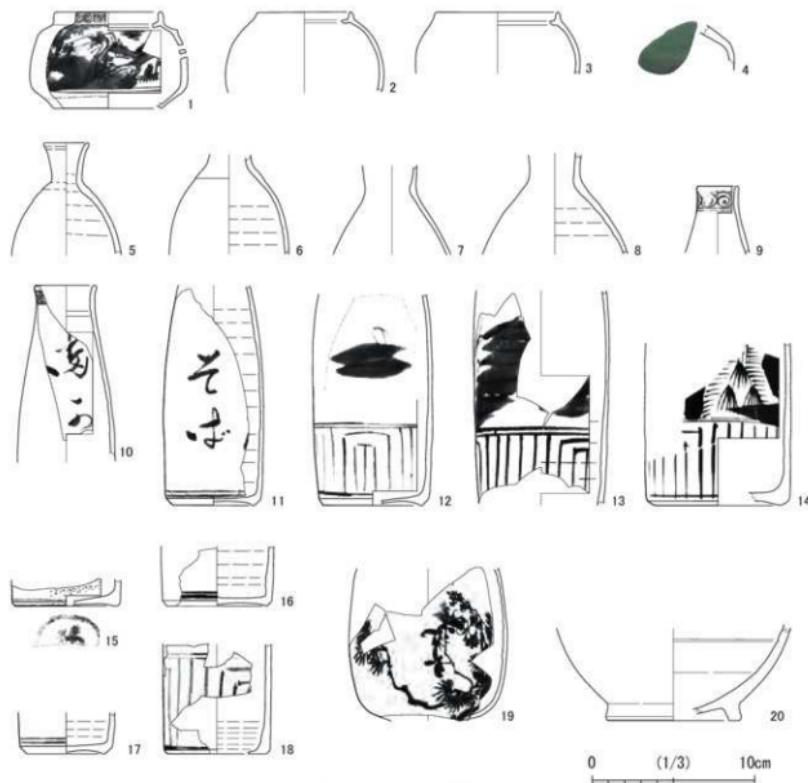
銅軸



第27図 SD01出土遺物16

第18表 SD01出土遺物観察表16

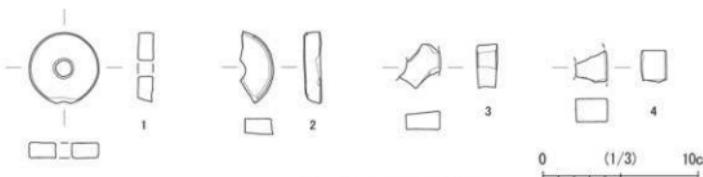
番号	遺構・部位	種別	器種	产地	特徴	寸法(cm)		
						口径	底径	高さ
1	梁付縦窓	段重	漁戸美濃	二重巻付。銅板軸写。外面に鳳凰文、コバルト。20世紀以降。		12.7	11.8	18.9
2	梁付縦窓	段重	漁戸美濃	二重巻付。型紙焼り。外面に松川墨と牡丹文。19世紀末以降。		12.8	12.0	(16.2)
3	梁付縦窓	段重	漁戸美濃	段重は下段。外面に牡丹唐草(素彫)。19世紀。		12.2	11.2	7.4
4	梁付縦窓	段重	漁戸美濃	段重は下段。型紙焼り。外面に牡丹と菊文。19世紀末以降。		12.2	(5.7)	



第28図 SD01出土遺物17

第19表 SD01出土遺物観察表17

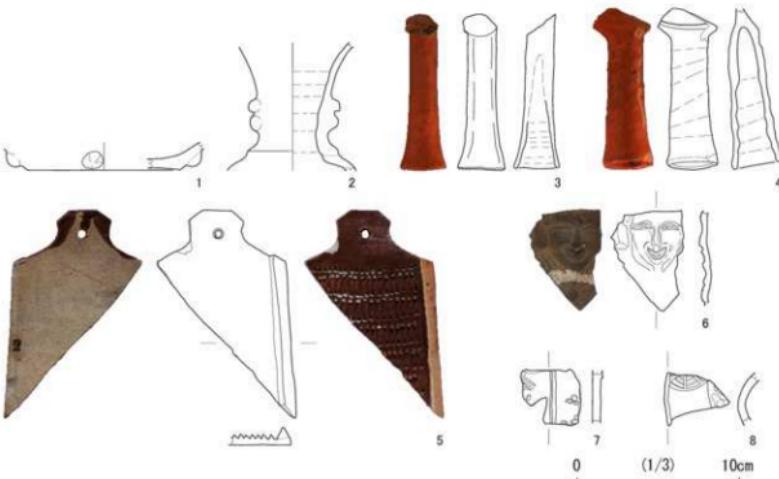
番号	遺物・部位	種別	器種	产地	特徴	法量(cm)		
						11件	底径	高さ
1.	SD01	安付磁器	急須	廻戸美濃	コバルト。19世紀末以降。	6.6(6.1)	(5.9)	
2.	SD01	安付磁器	急須	廻戸美濃	コバルト。19世紀末以降。	6.0	(4.9)	
3.	SD01	安付磁器	急須	廻戸美濃	コバルト。19世紀末以降。	7.8(7.6)	(5.8)	
4.	SD01	青磁	瓶	施釉窯			(2.8)	
5.	SD01	安付磁器	焼拂利	切込か	奥谷吉文。18世紀末～19世紀。	2.8	(6.9)	
6.	SD01	安付磁器	瓶	廻戸美濃	外面上に山水文。施青花文。		(6.2)	
7.	SD01	安付磁器	焼拂利	切込か	18世紀末～19世紀。		(5.5)	
8.	SD01	安付磁器	焼拂利	切込か	18世紀末～19世紀。		(6.25)	
9.	SD01	安付磁器	焼拂利	不明		2.6	(4.2)	
10.	SD01	安付磁器	焼拂利	廻戸美濃		3.8(3.8)	(11.0)	
11.	SD01	安付磁器	焼拂利	廻戸美濃		5.8	(13.65)	
12.	SD01	安付磁器	焼拂利	廻戸美濃	外面上に山水文。	6.2	(13.1)	
13.	SD01	安付磁器	焼拂利	廻戸美濃	外面上に山水文。		(13.2)	
14.	SD01	安付磁器	焼拂利	廻戸美濃	外面上に山水文。		(7.8)	(3.9)
15.	SD01	安付磁器	焼拂利	廻戸美濃	底面外面に墨書き及び刻摩字。	6.4(6.4)	(1.7)	
16.	SD01	安付磁器	焼拂利	廻戸美濃		4.8	(2.55)	
17.	SD01	安付磁器	焼拂利	廻戸美濃		6.2	(3.7)	
18.	SD01	安付磁器	焼拂利	廻戸美濃		6.0(6.0)	(6.8)	
19.	SD01	安付磁器	焼拂利	不明	陶土製。グレーがかった白色釉は薄く、透明度高い。		(9.1)	
20.	SD01	磁器	拂利	不明		0.4(0.4)	(5.95)	



第29図 SD01出土遺物18

第20表 SD01出土遺物観察表18

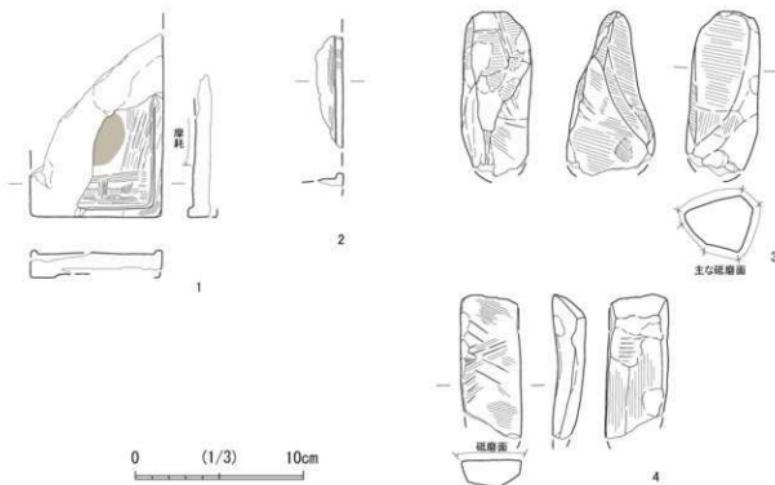
番号	遺構・部位	種別	器種	産地	特徴			寸法(cm)
					口径	底径	高さ	
1	SD01	磁器	戸車	廻転式窓口		最大幅	最大厚	9.5 (1.5)
2	SD01	磁器	戸車	廻転式窓口		最大幅	最大厚	4.65 (1.0)
3	SD01	磁器	戸車	廻転式窓口		最大幅	最大厚	2.8 (0.7)
4	SD01	磁器	戸車	廻転式窓口		最大幅	最大厚	2.05 (0.1)



第30図 SD01出土遺物19

第21表 SD01出土遺物観察表19

番号	遺構・部位	種別	器種	産地	特徴			寸法(cm)
					口径	底径	高さ	
1	SD01	陶器	不明	不明	粘土は黄褐色。内面鉄錆。体面下端に粘状の粘土を貼付。外面比熱。炭化物付着。			19.4 (9.4)
2	SD01	陶器	伝瓦器	不明	粘土は灰褐色。内外面に鉄錆。			17.9 (9.6)
3	SD01	陶器	鉢	堆積	把手部分	最大	最大厚	5.5 (10.0)
4	SD01	陶器	鉢	堆積	把手部分	最大	最大厚	6.0 (10.0)
5	SD01	陶器	おろし器	不明	裏面に布目模。	最大幅	最大厚	12.85 (8.0)
6	SD01	陶器	人形	不明	型作り。裏面に布目模。	最大幅	最大厚	6.25 (1.5)
7	SD01	陶器	人形か	不明	型作り。裏面に布目模。	最大幅	最大厚	3.3 (3.75)
8	SD01	陶器	人形か	不明	型作り。裏面に布目模。	最大幅	最大厚	3.25 (3.8)



第31図 SD01出土石製品

第22表 SD01出土石製品観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	法線				
					残存	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	SD01-3層	石製品	石礫	長方錐。錐の中央は摩耗により凹んでいる。錐縁には整形時のノミ痕が残る。石材は粘板岩(スレート)。	錐部 -	(19.9)	7.8		(127.5)
2	SD01-3層	石製品	石礫	長方錐。錐縁には整形時のノミ痕が残る。底面には墨痕が凹凸で残る。石材は粘板岩(スレート)。	錐部 -	(6.6)	(1.6)	(0.8)	(6.5)
3	SD01-3層	石製品	砥石	自然縁を多面的に利用。主な砥磨面は2面。中研とみられる。石材はデイサイト質凝灰岩。	一端欠損	(9.0)	(3.9)	(3.2)	(175.0)
4	SD01-3層	石製品	砥石	角柱状に整形した1面が主砥磨面。中研とみられる。石材はデイサイト質凝灰岩。	一端欠損	(8.5)	3.6	2.0	(70.5)

である。SD01の時期は肥前皿の17世紀後半～18世紀前半頃、磁器端反碗・大堀相馬の18世紀末～19世紀中葉頃、磁器丸碗と白碗、堤焼等の19世紀末～20世紀初頭頃の遺物がみられる。肥前皿については伝世の可能性も考えられ、量的には19世紀末以降のものが多い。19世紀末～20世紀初頭を中心とする、18世紀末～20世紀初頭がSD01の機能した期間と考えられる。

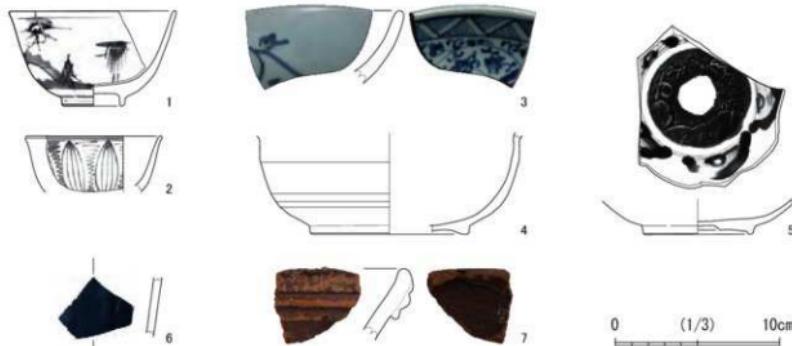
#### SD02溝跡（第8・10図）

調査区東側から西側にかけて直線的にのびる溝跡である。東西とも調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約1.3mにわたって検出している。SD01・SK01と重複し、両者より古い。主軸方位はN=70°～E。検出面での規模は上幅1.3m、下幅1.0m、確認面よりの深さは約20cmを測る。断面形状は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分層でき、すべて人為的埋土である。

### 3. 流路跡

#### SX01流路跡（第8・9図）

表土掘削後の遺構検査時において、調査区内では基盤層が北側と南側では大きく異なることを確認した。この基盤層の差異の成立原因、及び下位での遺構面存在の有無を把握することを目的としてサブトレーンチを



第32図 その他の出土遺物

第23表 その他の出土遺物観察表

番号	構造・層位	種別	22種	産地	特徴	数量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	積石	染付磁器	瓶	瀬戸美濃	開口碗。外面に山水文。見込に青文。18世紀末～19世紀前半。	(10.2)	3.8	5.8
2	理土	染付磁器	小瓶	切込か	18世紀末～19世紀。	(8.4)		(3.4)
3	積石	染付磁器	小皿	把柄	外山口唐草文。内面に牡丹唐草文。17世紀後半～18世紀前半。			(4.4)
4	理土	陶器	鉢	大堀町馬場町 内外面灰被		(9.0)	(6.2)	
5	積石	染付磁器	瓶	瀬戸美濃	内面に施利文ヒダで風景を描く。桜目切形高台。		6.6	(2.5)
6	積石	磁器	把柄	不明	多角形把柄。外面部焼結。			(3.6)
7	掘り土げ	陶器	桶鉢	堆積	胎土は明褐色で砂粒を少量含む。内外面に鉄錆。18世紀末～19世紀。			(5.6)

設定し、掘り下げを行った。その結果、サブトレンチ西側壁面の土層観察により調査区内における土層堆積様相の差異は、ある時期に河道が調査敷地内を東流していたことに起因していることが判明した。なお、これらの層序からは遺物は出土していないため、河道埋没の明確な時期は特定できなかった。

#### 4. その他の出土遺物（第32図、第23表）

遺構検査、表土掘削時ににおいて遺物が出土している。

第32図は遺構外から出土した遺物である。1は瀬戸美濃産磁器碗、2は切込かと思われる磁器小瓶、3は肥前かと思われる磁器皿、4は大堀口馬焼と考えられる薄手の陶器鉢、5は内面陽刻文の磁器皿である。6は外面に濃い藍色の瑠璃釉を施す型押し成型の把柄である。7は堤焼の擂鉢口縁部である。

#### 5. 平成25年度調査のまとめ

- SD01溝跡からは大量の近世から近代にかけて生産された陶磁器をはじめとした遺物が出土した。
- SD01溝跡の覆土中には炭化木材、焼けた壁土、焼土塊を含み、遺物にも被熱した痕跡が認められるところから、焼失家屋の後片付けの際に廃棄されたものと思われる。
- 出土した遺物には文様や形状が描ったものが多く、「組物」を購入していたと考えられる。
- 出土遺物のうち、染付は瀬戸美濃産が主体を占めている。また白磁小皿は山形県平清水焼に代表される在地産の可能性がある。
- 平面的に確認された土層の差異は、サブトレンチでの結果からC区内にはかつて河道が存在していたことが判明した。



調査区全景（東から）



調査区南側の落ち込みの土層断面（南東から）



SD01 溝跡の検出状況（南から）



SD01 溝跡の遺物出土状況①（東から）



SD01 溝跡の遺物出土状況②（南から）



SD01 溝跡の遺物出土状況③（東から）



SD01 溝跡完掘状況（南西から）





SD01 (第 13 図 1)



SD01 (第 13 図 3)



SD01 (第 13 図 4)



SD01 (第 13 図 5)



SD01 (第 13 図 6)



SD01 (第 13 国 7)



SD01 (第 13 国 8)



SD01 (第 15 国 10) 内面



SD01 (第 15 国 13)



SD01 (第 15 国 13)



SD01 (第 17 国 1)



SD01 (第 15 国 11) 内面



SD01 (第 16 国 1) 内面



SD01 (第 17 国 1)



SD01 (第 17 国 2)



SD01 (第 17 国 3)



SD01 (第 17 国 5)







SD01（第21図10）



SD01（第21図11）



SD01（第21図12）



SD01（第21図7）底部外面窯印



SD01（第21図13）



SD01（第21図14）



SD01（第21図15）



SD01（第22図1）



SD01（第22図2）



SD01（第22図3）



SD01（第22図4）



SD01（第22図5）



SD01（第22図6）



SD01（第22図7）



SD01（第22図8）



SD01（第23図1）



SD01（第23図4）



SD01（第23図2）



SD01（第23図3）



SD01（第23図5）



SD01（第23図4）底部外面墨書



SD01（第24図1）



SD01（第24図2）



SD01（第24図3）



SD01（第24図4）



SD01（第24図5）



SD01（第25図2）



SD01（第25図1）



SD01（第25図3）



SD01（第25図4）



SD01（第25図1）底部外面窓印



SD01（第25図5）



SD01（第25図6）



SD01（第25図7）



SD01（第25図8）



SD01（第25図9）



SD01（第25図10）



SD01（第25図11）



SD01（第25図12）



SD01（第25図13）



SD01（第25図14）



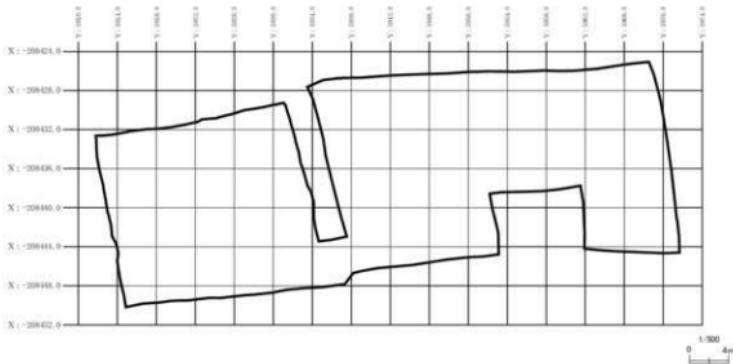
SD01（第26図1）



## 第V章 平成26年度の調査成果

平成26年度の調査区は、五間堀川に面した地区に設定した。調査面積は600 m<sup>2</sup>である。調査時には残土処理の関係からA・B区と分割していたが、ここでは一括して述べる。

調査では掘立柱建物跡11棟、柱列跡1列、井戸跡3基、竪穴遺構1基、土坑17基、溝跡20条をはじめとする遺構を検出し、中世陶器、近世陶磁器、金属製品、石製品などの遺物が発見されている。以下に主要な調査成果について記す。



第33図 平成26年度グリッド配置図

### 1. 掘立柱建物跡

SB01（第34・35図）

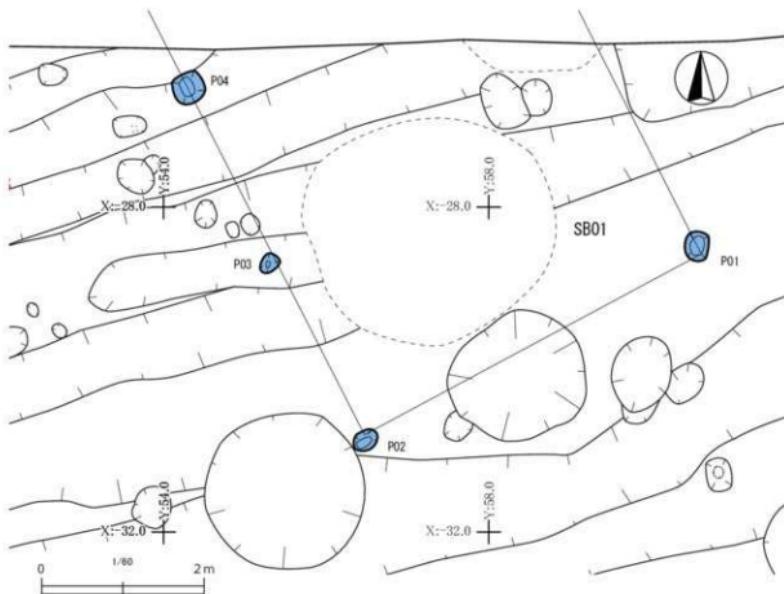
東西1間、南北2間以上の南北棟である。SB02、SD09と重複し、SB02より新しく、SD09より古い。柱穴は4口検出し、1口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長4.8m以上で、柱間は各2.4m、梁行は約4.7mである。建物の主軸は西列で計測するとN-27°-Wである。柱穴の掘方の形状は隅丸方形及び楕円形で、柱痕跡の直径は12cmの円形である。

SB02（第37・38図）

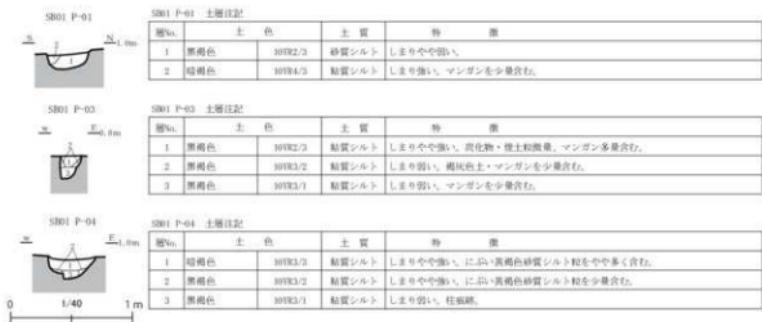
東西4間、南北2間以上の東西棟と考えられる。SD01・02・03と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は7口検出し、1口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長6.8mで、柱間は1.5～1.8m、梁行は総長3.8m以上で、確認できた範囲での柱間は1.8～2.0mである。建物の主軸は南列で計測するとN-64°Eである。柱穴の掘方の形状は楕円形及び円形で、柱痕跡の直径は10cmの円形である。

SB03（第37・39図）

東西2間、南北1間の東西棟である。SD02・04と重複し、两者より新しい。柱穴は4口検出し、1口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長4.8mで、柱間は各2.4m、梁行は2.6mである。建物の主軸は南列で計測するとN-49°-Eである。柱穴の掘方の形状は隅丸方形及び楕円形で、柱痕跡の直径は10cmの円形である。



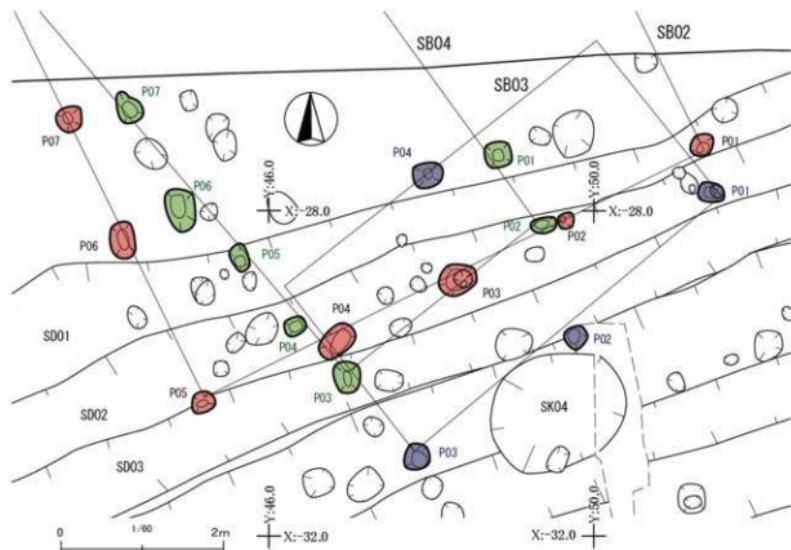
第34図 SB01



第35図 SB01 土層断面図

## SB04（第37・39図）

東西1間、南北4間の南北棟である。SD01・02・03と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は7口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長4.2 mで、柱間は0.9～1.2 m、梁行は約2.9 mである。建物の主軸は西列で計測するとN $40^{\circ}$  Wである。柱穴の掘方の形状は梢円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は10 cmの円形である。



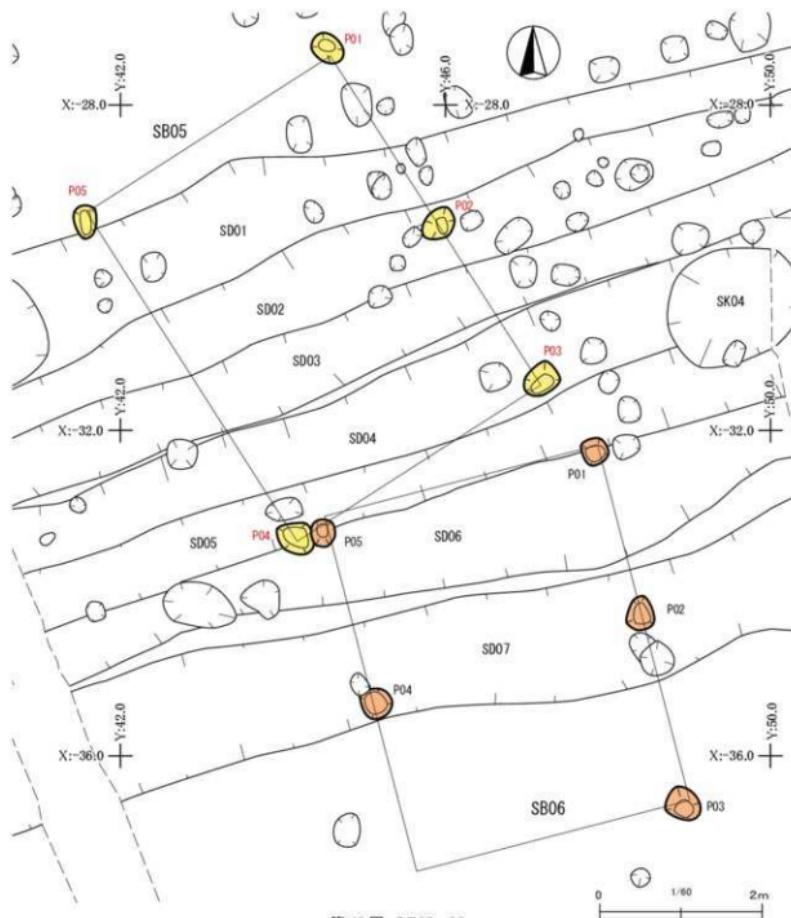
第37図 SB02～04



第38図 SB02 土層断面図



第39図 SB03・04 土層断面図



第40図 SB05・06

SB05 P-01



SB05 P-01 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	B0YR2/2	粘質シルト しまり面白い、灰黄褐色粘土粒を微量含む。
2	暗褐色	B0YR3/3	粘質シルト しまりやや弱い、灰黄褐色粘土ブロックをやや多く含む。

SB05 P-05



SB05 P-05 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	暗褐色	B0YR3/3	シルト に点・斑褐色粘土粒ロックをやや多く含む。
2	暗褐色	B0YR2/3	黒褐色粘土・黄褐色粘土粒を少量含む。
3	黒褐色	B0YR2/3	粘質シルト しまりやや弱い、に点・斑褐色粘土粒を少量含む。
4	褐褐色	B0YR4/1	粘質シルト しまりやや弱い、黒褐色粘土粒を微量含む。

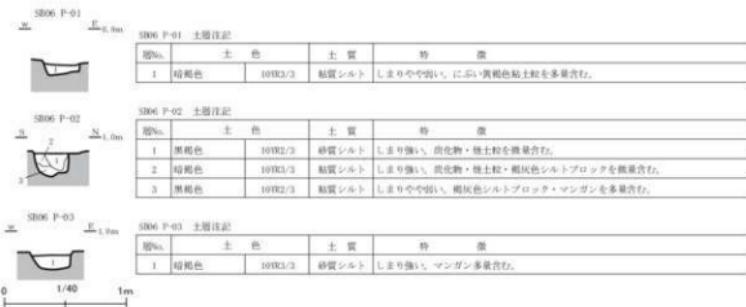
第41図 SB05 土層断面図

## SB05 (第 40・41 図)

東西1間、南北2間の南北棟である。SB06、SD01・02・04～06と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は5口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長4.8mで、柱間は各2.4m、梁行は約3.6mである。建物の主軸は東列で計測するとN-52° -Wである。柱穴の掘方の形状は梢円形で、柱痕跡の直径は10cmの円形である。

## SB06 (第 40・42 図)

東西1間、南北2間の南北棟である。SB05、SD05～07と重複し、SB05より古く、SD05～07より新しい。柱穴は5口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長4.5mで、柱間は2.2～2.3m、梁行は約3.4mである。建物の主軸は東列で計測するとN-15° -Wである。柱穴の掘方の形状は梢円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は10cmの円形である。



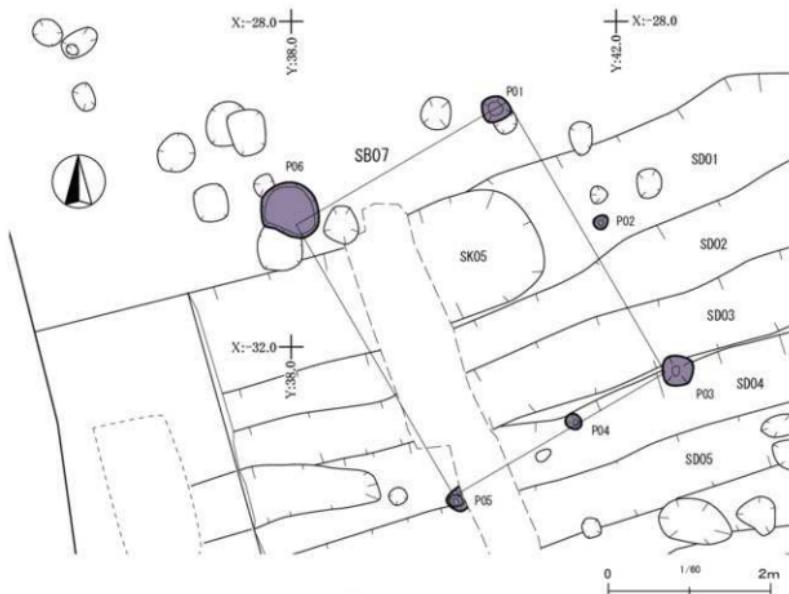
第 42 図 SB06 土層断面図

## SB07 (第 43・44 図)

東西2間、南北2間の南北棟である。SD01・03～05と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は6口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長3.8mで、柱間は1.8～2.0m、梁行は総長3.0mで、柱間は1.3～1.7mである。建物の主軸は東列で計測するとN-30° -Wである。柱穴の掘方の形状は梢円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は12cmの円形である。

## SB08 (第 45・46 図)

東西1間、南北2間以上の南北棟である。柱穴は4口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は確認できた範囲での桁行が総長2.2m以上で、梁行は約3.6mである。建物の主軸は東列で計測するとN-20° -Wである。柱穴の掘方の形状は円形及び梢円形で、柱痕跡の直径は10cmの円形である。



SB07 P-01 土層注記



層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト しまり弱い。灰黄褐色シルト粒を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト しまり強い。灰黄褐色シルトブロックを多量含む。
3	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト しまりやや強い。にぶい 黄褐色粘土粒を微量含む。



SB07 P-03 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト しまりやや強い。炭化物・暗褐色粘土ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト しまり強い。炭化物少量。暗褐色・褐色粘土ブロックを多量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト しまりやや強い。暗褐色粘土ブロックを少量含む。

SB07 P-06

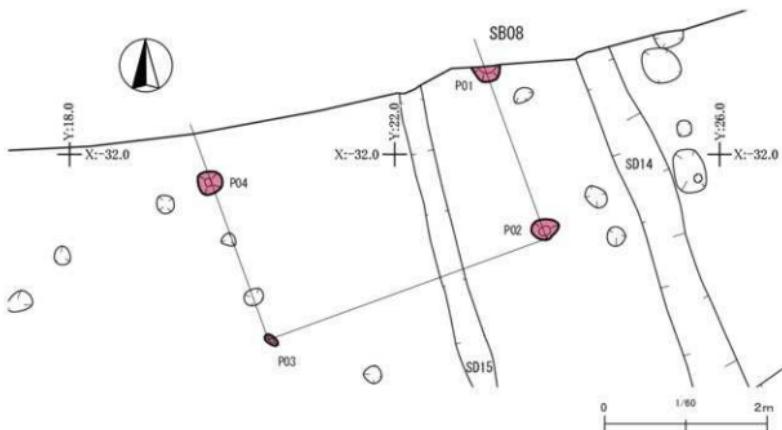


SB07 P-06 土層注記

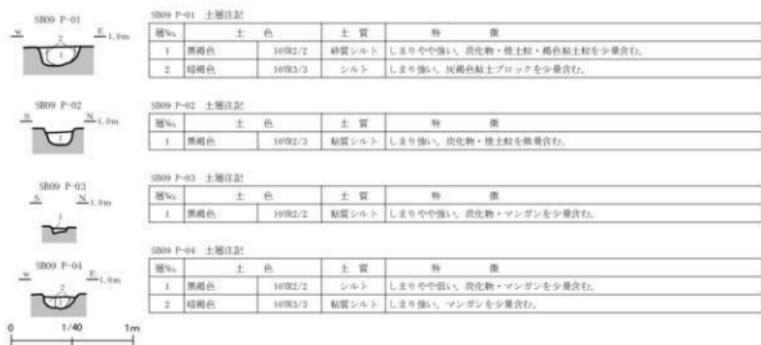
層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト しまりやや弱い。灰黄褐色シルト粒をやや多く含む。
2	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト しまり弱い。褐色粘土ブロックを少量含む。

第44図 SB07 土層断面図

0 1/40 1m



第45図 SB08



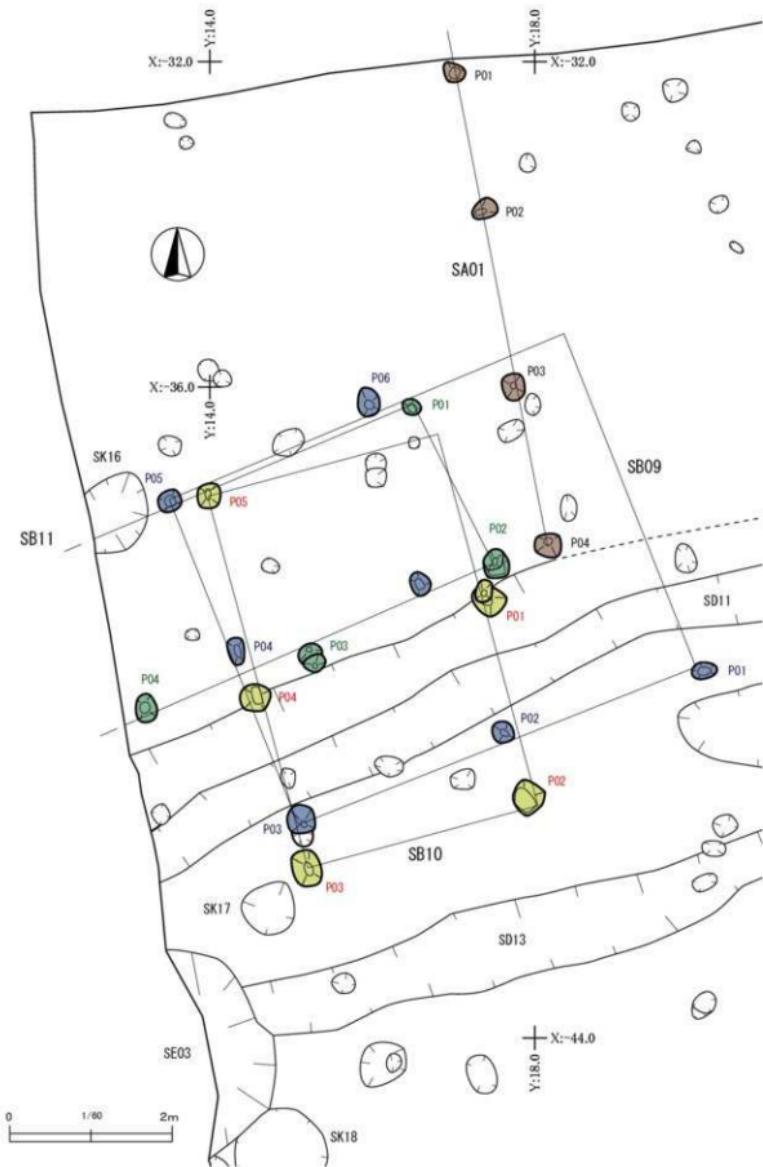
第46図 SB08 土層断面図

## SB09（第47・48図）

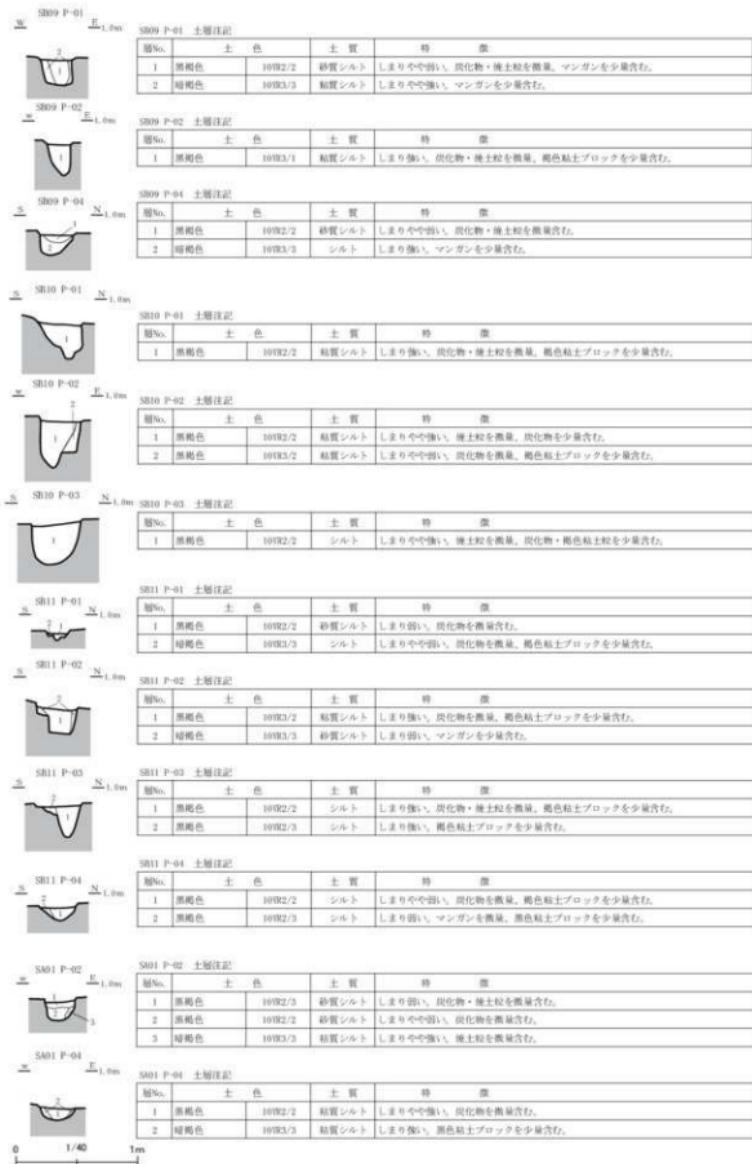
東西2間、南北2間の東西棟である。柱穴は6口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.3 mで、柱間は 2.6 ~ 2.7 m、梁行は総長 4.3 mで、柱間は 2.1 ~ 2.2 mである。建物の主軸は南列で計測すると N-68° E である。柱穴の掘方の形状は円形、楕円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 12 cm の円形である。

## SB10（第47・48図）

東西1間、南北2間の南北棟である。SD11と重複し、これより新しい。柱穴は5口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 4.7 mで、柱間は 2.2 ~ 2.5 m、梁行は約 2.9 mである。建物の主軸は西列で計測すると N-15° -W である。柱穴の掘方の形状は長方形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 12 cm の円形である。



第47図 SB09～11、SA01



SB11（第47・48図）

東西2間以上、南北1間の東西棟と考えられる。柱穴は4口検出し、すべてで柱痕跡を確認した。平面規模は確認できた範囲での桁行が総長4.6m以上で、柱間は2.1~2.5m、梁行は約2.2mである。建物の主軸は南列で計測するとN-64°-Eである。柱穴の掘方の形状は楕円形及び円形で、柱痕跡の直径は10cmの円形である。

第24表 平成26年度調査 挖立柱建物跡属性表

建物名	間数	横行 種方向 総長 (m)	柱間寸法 (m)	測定 柱列 総長 (m)	柱間寸法 (m)	測定 柱列	方向	柱痕 直径 (cm)	柱穴 規格 (cm)	平面形	備考
SB01	1×2 以上	南北 以上	4.8 2.4,2.4	西列	4.7 4.7	南列	N-27°-W	12	30~42	楕丸形、 楕円形 SD02より新、 SD09より古	
SB02	2×4	東西	6.8 1.8,1.7,1.5,1.8	南列	3.8 1.8,2.0	西列	N-64°-E	10	15~50	楕円形、 円形 SD01・02・03より新	
SB03	1×2	東西	4.8 2.4,2.4	南列	2.6 2.6		N-49°-E	10	32~40	楕丸形、 楕円形 SD02・04より新	
SB04	1×4	南北	4.2 1.2,1.1,1.0,0.9	西列	2.9 2.9	南列	N-40°-W	10	28~55	楕円形、 楕丸形 SD01・02・03より新	
SB05	1×2	南北	4.8 2.4,2.4	東列	3.6 3.6	南列	N-32°-W	10	40~50	楕円形 SD06,SD03・02・04・05・ 06より新	
SB06	1×2	南北	4.5 2.2,2.3	東列	3.4 3.4	北列	N-15°-W	10	35~45	楕円形、 楕丸形 SD05・06・07より新	
SB07	2×2	南北	3.8 1.8,2.0	東列	3.0 1.7,1.3	南列	N-30°-W	12	20~70	楕円形、 楕丸形 SD01・03・04・05より新	
SB08	1×2 以上	南北	2.2 2.2	東列	3.6 3.6	南列	N-20°-W	10	20~35	円形、 楕円形	
SB09	2×2	東西	5.3 2.7,2.6	南列	4.3 2.1,2.2	西列	N-68°-E	12	25~35	円形、 楕円形、 楕丸形	
SB10	1×2	南北	4.7 2.5,2.2	西列	2.9 2.9	南列	N-15°-W	12	32~45	長方形、 楕丸形 SD11より新	
SB11	1×2 以上	東西 以上	4.6 2.5,2.1	南列	2.2 2.2	東列	N-67°-E	10	25~40	楕円形	
SA01	3	南北	5.8 1.7,2.1,2.0				N-11°-W	10	25~30	楕円形	

## 2. 井戸跡

SEO1（第49図）

素掘りの井戸で平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.7m、短軸は1.4mを測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より1.9m下で底面を検出している。堆積土は12層に分層でき、1~8層は人為的埋土、9~12層は自然堆積土と考えられる。

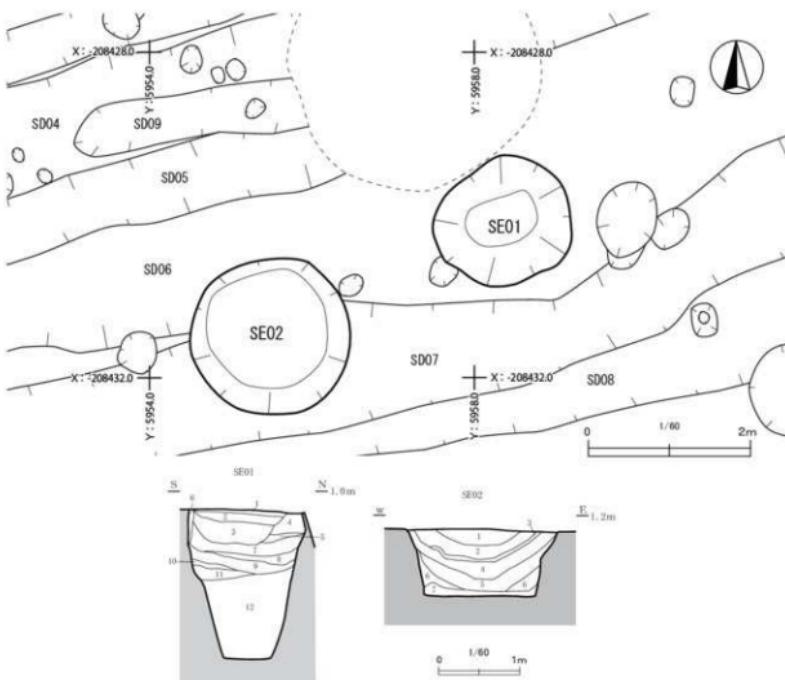
SEO2（第49・50図、第25表）

SD06・07と重複し、これより新しい。素掘りの井戸で平面形状は円形を呈し、規模は長軸2.0m、短軸は1.4mを測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より0.9m下で底面を検出している。堆積土は7層に分層でき、1層は人為的埋土、2~7層は自然堆積土と考えられる。

第50図はSE02から出土した白石産陶器である。壺胴部であるが、断面一辺と内面の2/3ほどを研磨に使用している。13世紀後半~14世紀前半。

SEO3（第36・51図）

SK07、SD13と重複し、これより新しい。西壁際での確認のため平面形状は不明であるが、素掘りの井戸と考えられる。規模は確認できた範囲で長軸2.6mを測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より1.1m下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。確認できた堆積土は11層に分層でき、すべて人為的埋土と考えられる。



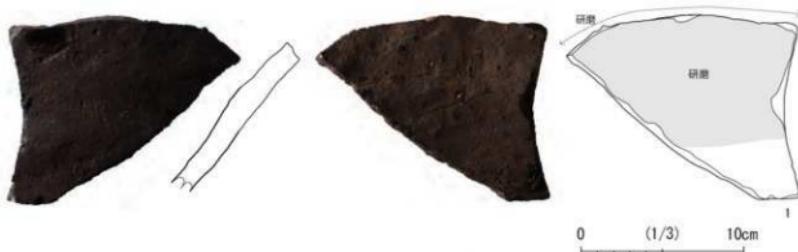
SE01 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	暗褐色	10R3/3	シルト しまりやや強い。成化層。にぶく黄褐色粘土鉢を微量含む。
2	黒褐色	10R3/2	シルト しまりやや強い。マンガン・廻炭色シルトブロックを多量含む。
3	黒褐色	10R3/2	粘質シルト しまりやや弱い。マンガン・廻炭色シルトブロックを多量含む。
4	黒褐色	10R3/2	粘質シルト しまりやや弱い。マンガン・廻炭色シルトブロックを多量含む。
5	黒褐色	10R3/2	粘質シルト しまりやや弱い。マンガン・廻炭色粘土鉢を少量含む。
6	暗褐色	10R3/3	シルト しまりやや強い。マンガン・廻炭色粘土鉢を少し含む。
7	黒褐色	10R2/2	粘質シルト しまりやや強い。マンガン・廻炭色粘土鉢を多量含む。
8	黒褐色	10R2/2	粘質土 しまりやや弱い。マンガン・廻炭色粘土鉢を少額含む。
9	黒褐色	10R2/2	粘質土 しまりやや弱い。マンガンを少額含む。
10	暗褐色	10R3/3	シルト しまりやや強い。マンガンを少量含む。
11	にぶく黃褐色	10R3/3	粘質シルト しまりやや弱い。マンガンを多量。黒褐色粘土鉢を少額含む。
12	黒褐色	10R2/2	粘質土 しまり弱く。粘性強い。植物遺体を少額含む。

SE02 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10R3/2	シルト しまりやや弱い。にぶく黄褐色粘土鉢を多量含む。
2	黒褐色	10R3/1	シルト しまりやや弱い。にぶく黄褐色粘土鉢を多量含む。
3	にぶく黃褐色	10R4/3	粘質シルト しまりやや弱い。黒褐色粘土鉢を少量含む。
4	黒褐色	10R2/2	粘質シルト しまりやや弱い。成化層。にぶく黄褐色粘土鉢を微量含む。
5	黒褐色	10R2/2	粘質シルト しまりやや弱い。黒褐色粘土鉢を微量含む。
6	褐色	10R4/4	粘質シルト しまり弱い。黒褐色粘土鉢をやや多く含む。
7	黒褐色	10R2/1	粘土 しまり弱い。黒褐色粘土鉢にぶく黄褐色粘土鉢を少額含む。

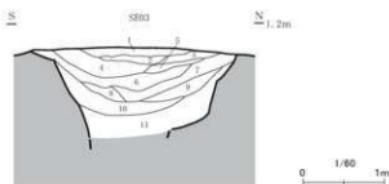
第49図 SE01・02、土層断面図



第50図 SE02出土遺物

第25表 SE02出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法長(cm)			写真番号
						口径	底径	器高	
1	SE02	角25	便	白石	新土は灰色で砂粒(特に白色粒)を多く含む。内面は灰黄褐色で外側は褐色。13世紀後半~14世紀後半。研磨土器に転用。			(0.2)	



SE03 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10R8/2	粘土 しまりやや弱い。炭化物を少量含む。
2	灰・灰褐色	10W4/3	シルト しまりやや強い。堆土粒を微量含む。
3	黒褐色	10W3/2	粘土 しまりやや強い。堆土粒・炭化物を少量含む。
4	灰・灰褐色	10W4/3	シルト しまりやや弱い。堆山ブロックを極めて多様含む。
5	褐色	10R4/1	粘土 しまりやや弱い。堆山ブロックを少量。炭化物を微量含む。
6	黒褐色	10R3/2	粘土 しまりやや中弱い。堆山粒・炭化物を少量。堆土粒を微量含む。
7	黒褐色	10R3/1	粘土 しまりやや中強い。炭化物をやや多く、堆土粒を微量含む。
8	褐色	10R4/1	粘土 しまり強い。灰白色粘土を少量。黒褐色粘土粒を微量含む。
9	黒褐色	10R2/2	粘土 しまりやや弱い。堆山ブロックを多量。堆土粒・炭化物を少量含む。
10	灰・灰褐色	10R4/2	シルト しまりやや強い。黒褐色粘土ブロックを少量含む。
11	黒褐色	10R2/2	粘土 しまりやや弱い。堆山ブロックを少量含む。

第51図 SE03 土層断面図

第26表 平成26年度調査 井戸跡属性表

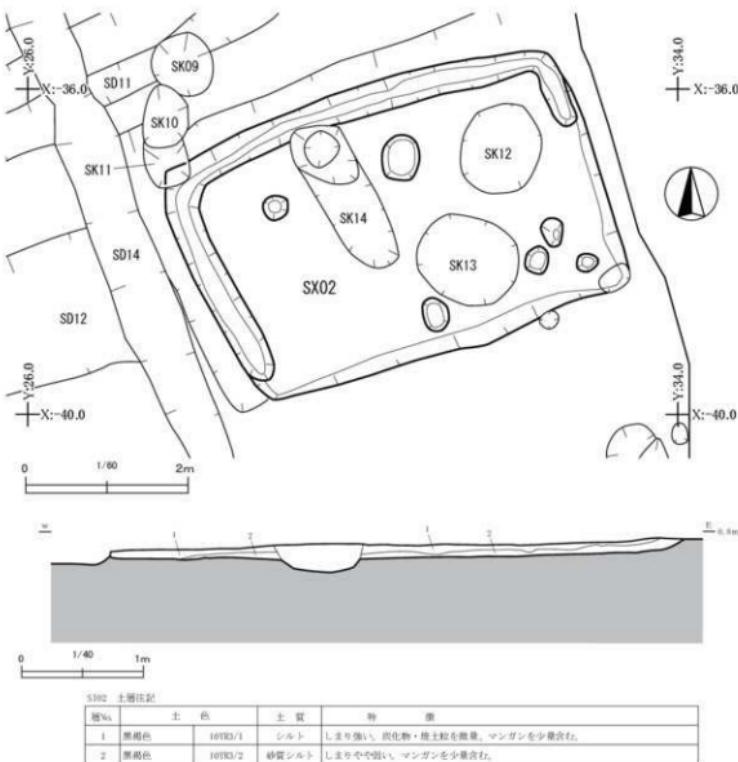
遺構名	構造	平面形	断面形	規模(m)	深さ(m)	埋積土	遺物	備考	平面図	断面図
SE01	直通	楕円形	円錐	1.7×1.4	1.9	自然→人為		49	49	
SE02	直通	円形	圓斗	2.0×1.9	0.9	自然→人為	白石	SD06・07より削	49	49
SE03	直通	—	圓斗	2.6×—	1.1以上	自然→人為		SD13・SK17より削	36	51

### 3. 積穴遺構

SX02 (第 52・53 図、第 27 表)

SK15、SD16と重複し、SK15より古く、SD16より新しい。平面形状は長方形であり、規模は長軸 5.7 m、短軸は 3.5 m を測る。確認面からの深さは約 20 cm である。主軸方位は南辺で N-18° -E を測る。北側・西側及び東側の北寄りでは周溝がめぐる。底面では貼床などの痕跡は見られないが、ピット6口がみとめられる。堆積土は2層に分層でき、すべて人為的埋土である。

第 53 図は SX02 から出土した白石産陶器である。小型の片口鉢の底部片と考えられる。13 世紀後半～14 世紀前半。



第 52 図 SX02、土層断面図



第53図 SX02出土遺物

第27表 SX02出土遺物観察表

番号	遺構・部位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm)
					口径	底径	深さ	
1	SX02	陶器	片口鉢	白石	内面は均黄褐色。外面は均い褐色。胎土は暗灰黄色で砂粒を含む。13世紀後半～			(12.0) (3.0)
					14世紀前半。			

#### 4. 土坑

調査では17基の土坑を確認し、このうちSK01・02・07については詳述する。その他の土坑については第29表にまとめている。

SK01(第36・54図)

平面形状は楕円形であり、規模は長軸1.3m、短軸1.1mを測る。確認面からの深さは約80cmであるが、壁面中位下部よりオーバーハングして底面へと至る袋状を呈する。堆積上は4層に分層でき、1～3層は人為的埋土、4層は自然堆積土と考えられる。

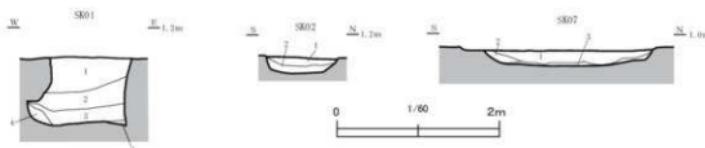
SK02(第36・54・55図、第28表)

平面形状は台形であり、規模は長軸0.7m、短軸0.6mを測る。確認面からの深さは約20cmであり、断面形状は逆台形を呈する。堆積上は2層に分層でき、すべて人為的埋土である。

第55図はSK02の出土遺物である。1は汽車土瓶である。型押し成型で、一対の耳と外面に「お茶」の型押し文字がみられる。2は瀬戸美濃産と考えられる陶器碗で、外面黒釉、内面灰釉を施す。

SK07(第36・54図)

平面形状は楕円形であり、規模は長軸2.6m、短軸2.5mを測る。確認面からの深さは約20cmであり、断面形状は皿形を呈する。堆積上は3層に分層でき、すべて人為的埋土である。



SK01 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	暗褐色	10YR3/3 シルト	しりりやや弱い。炭化物をやや多く。灰黄褐色シルトブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3 粘質シルト	しまり弱い。炭化物を微量。マンガンを少量含む。
3	黒褐色	10YR2/2 粘質シルト	しまり弱い。灰黄褐色粘土ブロックを微量含む。
4	褐灰色	10YR4/1 粘質シルト	しまりやや弱い。灰黄褐色粘土をやや多く含む。

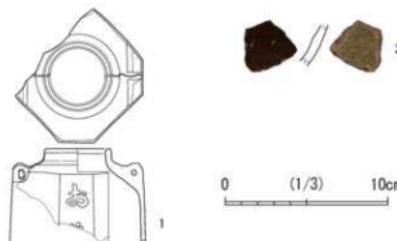
SK02 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/2 粘質シルト	しりり弱い。にぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3 粘質シルト	にぶい黄褐色粘質シルトを多量。炭化物を少量含む。

SK07 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/2 粘質シルト	炭化物微量。にぶい黄褐色粘土ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/1 粘質シルト	にぶい黄褐色粘質シルトを多量。炭化物を少量含む。

第54図 SK01・02・07 土層断面図



第 55 図 SK02 出土遺物

第 28 表 SK02 出土遺物観察表

番号	遺物・部位	種別	器種	产地	特徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SK02	陶器	汽車土器	不明	堅成形、胎土は淡黄色。	4.3		(5.9)
2	SK02	陶器	罐	鹿児島県	内面に火候、外面に鉄錆、胎土は粗く、にじみ・黄褐色。			(2.8)

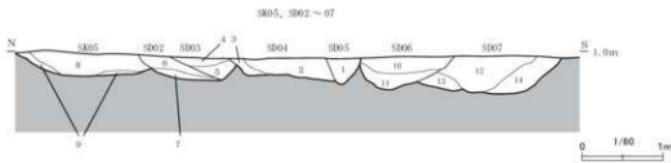
第 29 表 平成 26 年度調査 積穴造構・土坑属性表

遺構名	平面形	断面形	規模 (m)	深さ (m)	堆積土	出土遺物	備考	平面図	断面図
SK02	長方形	直形	5.7 × 3.5	0.2	人為	SK14・SD16 上り古		52	52
SK01	橢円形	窓状	1.3 × 1.1	0.8	自然・人為	白石	SD08 2.5新	36	54
SK02	有形	逆台形	0.7 × 0.6	0.2	人為	鹿戸美濃	SD04・05上り新	36	54
SK03	円形	直形	1.1 × 1.1	0.1	人為		SD01 2.5新	36	
SK04	橢円形	逆台形	1.8 × 1.4	0.4	人為			36	
SK05	方形?	直形	— × 1.5	0.3	人為			36	
SK06	長方形	逆台形	0.8 × 0.6	0.2	人為			36	
SK07	橢円形	直形	2.6 × 2.5	0.2	自然			36	54
SK08	橢円形	直形	1.1 × 0.8	0.2	人為	SD01・10・11より新		36	
SK09	橢円形	直形	0.7 × —	0.1	人為	SK10 上り古・SD10 より新		36	
SK10	橢円形	U字	0.7 × 0.5	0.2	人為	SK09・SD16 上り古・SK11 より新		36	
SK11	橢円形?	U字	— × 0.5	0.3	人為	SK10 より古・SD16・SD02 上り新		36	
SK12	橢円形	直形	1.1 × 1.0	0.1	人為			36	
SK13	橢円形	直形	1.3 × 1.0	0.2	人為			36	
SK14	長方形?	U字	— × 0.7	0.2	人為	SD16 2.5古・SK02 より新		36	
SK15	橢円形?	逆台形	— × —	0.3	人為			36	
SK16	台形	逆台形	0.6 × 0.6	0.4	人為			36	
SK17	円形	沿形	1.1 × 1.1	0.1	人為	SF03 1.6古		36	

## 5. 溝跡

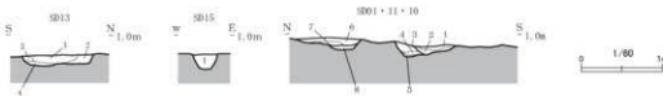
調査では 16 条の溝跡を確認している。このうち調査区中央から北側にかけての範囲では多数の東西溝が重複して確認されている。これらの東西溝の詳細は第 36 表にまとめてあるが、いずれも主軸方位は N-70° ~ 75° -E という極めて近い数値を示しており、すべてが人為的に埋め戻されていることを特徴とする。またこれらの溝跡の中には SD02・12・16 などの中世陶器のみが出土し、近世以降の遺物は一切みられないことから、いずれも中世の段階に機能していたと考えられる。さらにこれら東西溝跡の南側での遺構密度は極めて低いことを併せ考えると、これらの溝跡の性格としては中世集落の南限とする区画溝の可能性も考えられる。

なお、調査区西側で確認した 2 条の南北溝である SD14・15 はいずれも主軸方位が N-16° ~ 22° -W を示しており、東西溝とはほぼ直交関係にあることから、屋敷地内を細分する区画溝である可能性が考えられる。



SD05, SD02 ~ 07 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 樹	
1	黒褐色	粘質シルト	しまり強い。マンガンを少量。炭化物・褐色粘土ブロックを微量含む。	
2	黒褐色	シルト	しまりやや強い。炭化物を多量。堆土粒・褐色粘土ブロックを微量含む。	
3	黒褐色	10B2/3	砂質シルト	しまり弱い。炭化物・堆土粒を少量含む。
4	暗褐色	10B3/3	粘質シルト	しまりやや強い。褐色粘土ブロックを多量。炭化物を微量含む。
5	暗褐色	10B3/4	シルト	しまり強い。マンガン・褐灰色土ブロックを少量含む。
6	黒褐色	10B2/2	シルト	しまりやや強い。褐色粘土ブロックを少量含む。
7	黒褐色	10B2/3	シルト	しまりやや強い。マンガンを微量に含む。
8	暗褐色	10B3/3	砂質シルト	しまりやや強い。炭化物・堆土粒を少量含む。
9	黒褐色	10B2/2	砂質シルト	しまりやや強い。マンガンを少量。炭化物を微量含む。
10	黒褐色	10B3/2	粘質シルト	しまり強い。マンガンを少量。堆土粒を微量含む。
11	黒褐色	10B2/2	シルト	しまりやや強い。炭化物・堆土粒を微量。マンガンを少量含む。
12	黒褐色	10B2/2	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物を少量。褐色粘土ブロックを微量含む。
13	黒褐色	10B2/2	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物を微量。マンガンを少量含む。
14	黒褐色	10B2/3	粘質シルト	しまりやや強い。褐色粘土ブロックを少量含む。



SD13 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 樹	
1	黒褐色	10B2/3	シルト	褐色粘土ブロックを少量。炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10B3/2	シルト	褐色粘土粒・炭化物を少量含む。
3	暗褐色	10B3/3	粘質シルト	炭化物・堆土粒を少量含む。
4	黒褐色	10B2/3	粘質シルト	炭化物を微量含む。

SD15 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 樹	
1	黒褐色	10B2/3	シルト	しまりやや弱い。炭化物・褐色粘土ブロックを少量含む。

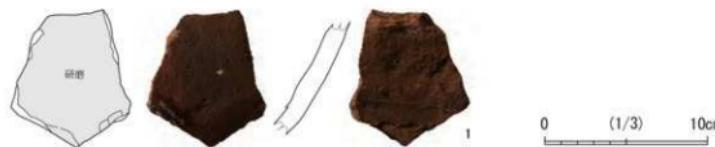
SD01 + 10 ~ 11 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 樹	
1	黒褐色	10B2/3	シルト	しまり強い。炭化物・褐色粘土ブロックを少量含む。SD11覆土。
2	黒褐色	10B3/2	シルト	しまりやや強い。褐色粘土粒を多量。マンガンを少量含む。SD11覆土。
3	黒褐色	10B2/2	粘質シルト	しまりやや強い。褐色粘土ブロック・炭化物を少量。堆土粒を微量含む。SD11覆土。
4	黒褐色	10B2/3	粘質シルト	しまり強い。炭化物を少量。堆土粒を微量含む。SD11覆土。
5	黒褐色	10B3/1	粘質シルト	しまり極めて強い。マンガン・褐灰色土ブロックを少量含む。SD11覆土。
6	黒褐色	10B2/3	シルト	しまり強い。炭化物・褐色粘土ブロックを少量含む。SD11覆土。
7	黒褐色	10B2/2	シルト	しまりやや強い。マンガンを多量。炭化物を微量含む。SD11覆土。
8	黒褐色	10B3/2	粘質シルト	しまり弱い。褐色粘土ブロックを少量。炭化物を微量含む。SD11覆土。

第 56 図 SD01 ~ 07 · 10 · 11 · 13 · 15 土層断面図

第57・58図はSD02の出土遺物である。第57図1は白石産陶器の甕で、外面全体を研磨に使用している。13世紀後半～14世紀前半。第58図1は2面に磨面をもつ甕である。砥石の可能性が考えられ、石材の石質が粗粒であることから、荒砥として使用されたものと推測される。

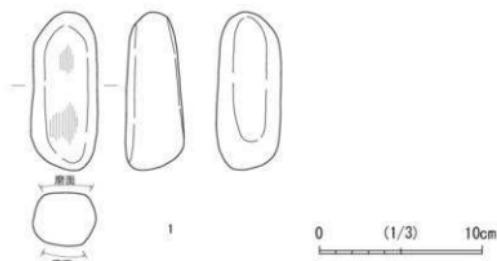
第60図はSD12から出土した白石産陶器である。13世紀後半～14世紀前半。



第57図 SD02出土遺物

第30表 SD02出土遺物観察表

番号	遺物・部位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD02	陶器	甕	白石	胎土表面は褐色で胎土内には灰色、砂粒を含む。良く焼き締まる。内外面ともににぶい褐色。 13世紀後半～14世紀前半。研磨工具に転用。			(7.0)



第58図 SD02出土石製品

第31表 SD02出土石製品観察表

番号	遺物・部位	種別	器種	特徴	残存	法量(cm)			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
1	SD02	石製品	表面をもつ甕(砥石?)	角削った縁の2面に磨面がある。石材はアイサイドや安山岩。	完存	9.8	4.1	3.2	233.0



第59図 SD12出土遺物

第32表 SD12出土遺物観察表

番号	遺物・部位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD12	陶器	甕	白石	内部は赤い、黄色。外面は黒褐色に自然釉付着。胎土は黄褐色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(6.2)

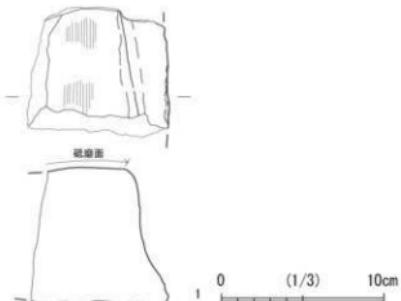
第60・61図はSD15から出土した輸入磁器、かわらけ、石製品である。第60図1は龍泉窯系の青磁皿で太宰府編年では12世紀中葉～後半である。2はかわらけ底部辺ロクロ成型、外面に回転糸切り痕がみられる。第61図1は砥石の一部で、大きな安山岩製の角縁の1面が砥磨面で、荒砥の置き砥石として使用されたものと考えられる。



第60図 SD15出土遺物

第33表 SD15出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	沿種	産地	出量(cm)		
					口径	底径	高さ
1	SD15	青磁	盤	新潟県	底部外周に輪郭、底部内面に無文。太宰府編年1-3a。12世紀中葉～後半。	(4.60)	(1.29)
2	SD15	かわらけ	小鉢	福岡県	ロクロ巻割。底部外面上に回転糸切り痕。底部内面一方向ナメ。胎土は褐色で赤色斑を多く含む。	(10.0)	(1.55)



第61図 SD15出土石製品

第34表 SD15出土石製品観察表

番号	遺構・層位	種別	沿種	特徴	法量		
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
2	SD15東側	石製品	砥石	大きな角縁の1面が砥磨面。荒砥の置き砥石とみられる。石材は安山岩。	1頭	(7.90)	(8.80)

第62図はSD16から出土した白石産陶器である。片口鉢の注ぎ口を含む口縁部破片で、粘土紐の接合痕が明瞭にみられる。13世紀後半～14世紀前半。



第62図 SD16出土遺物

第35表 SD16出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴		法量(cm)
					口径	底径	
1	SD16	陶器	片口鉢	白石	内面には赤褐色。外表面は灰褐色。胎土は褐色で砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。		(9.5)

第36表 平成26年度調査 溝跡属性表

遺構名	検出長(m)	断面形	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	方向	堆積土	出土遺物	備考	平面図	断面図
SD001	20.0	楕形	—	—	0.1	N-71°-E	人為	SK05・SD06より古	36	56	
SD102	22.3	楕形	—	—	0.3	N-70°-E	自然	白石、石製品	SD03より古・SD01より新	36	56
SD103	22.6	V字	0.9	0.4～0.5	0.3	N-71°-E	人為	SD04・16より古・SD02より新	36	56	
SD104	21.3	楕形	—	—	0.2	N-71°-E	人為	SK04・SD05より古	36	56	
SD105	21.4	V字	0.9	0.7	0.3	N-71°-E	人為	SD04・06より新	36	56	
SD106	22.0	U字	—	—	0.4	N-73°-E	人為	SD05・SK02より古	36	56	
SD107	30.8	楕形	1.6	1.0	0.5	N-75°-E	自然→人為	SD02より古・SD08より新	36	56	
SD108	18.6	楕形	1.1	0.7	0.2	N-72°-E	人為	SD07より古	36	56	
SD109	14.1	楕形	1.0	0.5	0.3	N-72°-E	人為	SD01より古・SD04・05より新	36	56	
SD110	9.3	U字	0.7	0.4	0.2	N-60°-E	人為	SK08・09・SD01・14より古	36	56	
								SD11より新			
SD111	19.3	楕形	0.8	0.2～0.4	0.2	屈曲	人為	SD10・14・15より古	36	56	
								SD01より新			
SD112	7.4	楕形	1.6	0.6～1.1	0.2	N-75°-E	人為	白石	SD14より古	36	56
SD113	5.3	楕形	1.1	0.2～0.5	0.2	N-72°-E	人為		SD03より古	36	56
SD114	12.4	U字	0.8	0.2～0.4	0.3	N-22°-W	人為		SD01・10・11・12より新	36	56
SD115	7.0	U字	0.4	0.1～0.2	0.2	N-16°-W	人為	かづかけ。石製品	SD01・10・11より新	36	56
SD116	15.4	楕形	1.4	0.8	0.2	L字	人為	白石	SD14より古・SD02・SD03・04より新	36	

## 6. ピット（第63図、第37表）

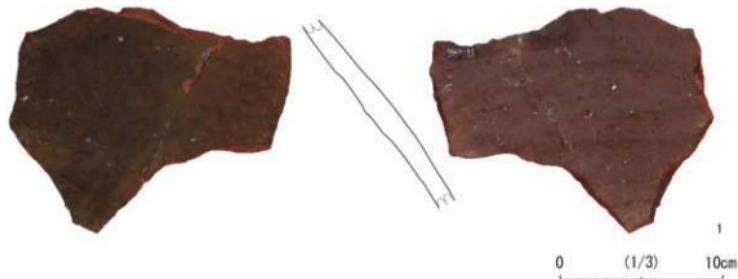
調査区の北半部では柱穴が多数確認されている。これらの中には柱痕跡をとどめているものも見受けられたが、限られた範囲での検出であるため建物などの復元には至っていない。大部分のピットは長軸0.2～0.6m、短軸は0.1～0.4mの範囲に收まるものであり、形状は梢円形が多く、ほかに円形、隅丸方形などがみられる。

第63図はP63から出土した白石産陶器の甕である。13世紀後半～14世紀前半。

## 7. サブトレンチ出土遺物（第64図、第38表）

SK05・SD02～07の重複関係の把握を目的として設定したサブトレンチ掘削中に出土した遺物である。

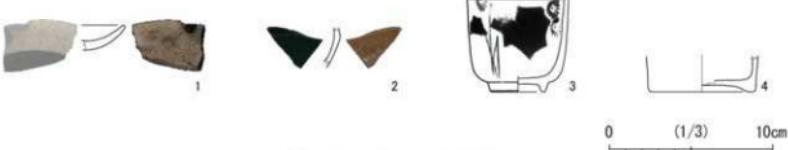
第64図はサブトレンチ出土遺物である。1は瀬戸美濃産輪廻皿で17世紀後半から18世紀前半。2は外側に濃緑色の瑠璃釉を施す徳利か。3は薄く軽量な陶器の小壺で色絵で草花文を描く。4は磁器爛徳利の底部である。



第63図 ピット出土遺物

第37表 ピット出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	P6.3	陶器	便	白石	胎土は褐色で砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。	(13.0)		



第64図 サブレンチ出土遺物

第38表 サブレンチ出土遺物観察表

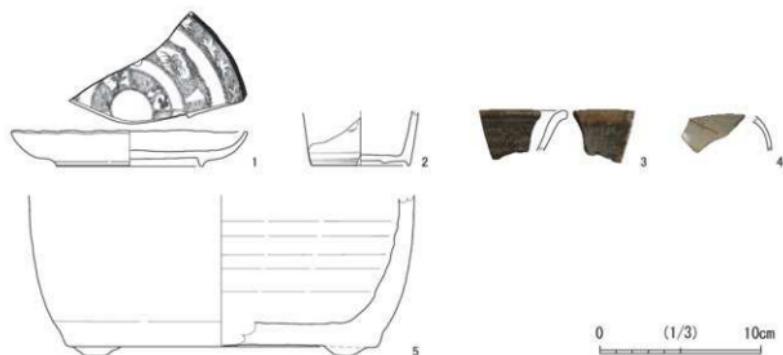
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	サブレンチ	陶器	便	廻内北島	輪木裏丸、17世紀後半～18世紀前半。	(1.40)		
2	サブレンチ	陶器	便	廻内北島	脛部研磨、外面に埋頭模。			(2.25)
3	サブレンチ	陶器	小鉢	不明	胎土は淡黄褐色で軟質、色絞。	6.2	3.4	5.8
4	サブレンチ	陶器	鐵鉢柄	不明		6.6		(2.25)

## 8. その他の出土遺物 (第65～71図、第39～45表)

遺構精査、表土掘削時において遺物が出土している。

第65～71図は遺構外の出土遺物である。第65図1は銅板転写の色絵皿。3・4は大堀相馬焼の鉢および土瓶である。5は瓦質土器火鉢である。第66図1は精査時に出土した銭種不明の錢貨。

第67図1は磁器碗で、体部が大きくハの字に開く、外面はゴム印によって装飾する。底部外面にスタンプによる記号がみられ、「岐 57」と読める。太平洋戦争中に用いられた生産者標示記号と考えられる。生産者標示記号は統制番号とも言い、1941～1945年の統制経済下で用いられたものである。器形的には1910～1950年の年代が与えらるが、生産者標示記号から1941～1945年の生産と限定できる。2は磁器碗で、体部が大きくハの字に開くのに加えて、高台が高く伸びることから1960～1980年頃と考えられる。6は型押し成型の輪花小鉢。13は型押し成型の皿。14・15は大堀相馬焼の土瓶。16は切込の徳利。18は鉢型の瓦質土器の口縁部である。第68図1・5・6・7は堤焼捕鉢。2は白石産陶器。3は常滑産陶器片口鉢。4は土製品で、左右に穴があけられており指人形である。外面の一部に赤色塗料が残存している。胎土は堤焼のものに近似する。第69図は掘り下げ時に出土した砥石である。角柱状の一面が扁平化し、主に2面が砥磨面となっている。頭部全面に敲打痕があり、ハンマーとしても使用されている。第70図3は白石産陶器。8・9は内外面鉄釉を施す鉢型の土器で、9は断面の3辺と外面を研磨に使用し、内面には



第 65 図 精査出土遺物

第 39 表 精査出土遺物観察表

番号	遺物・層位	種別	器種	产地	特徴	法量 (cm)		
						口径	底径	厚さ
1	西側精査	磁器	瓶	輪戸美濃	鋼鑄軋等。色緑。19世紀末以降。	114.7	99.0	2.2
2	西側精査	金石磁器	瓶口	切込か	18世紀末～19世紀初。	66.0	33.0	
3	精査	陶器	鉢	大垣和歌	口縁破片。胎土は淡黄色。内外面に灰釉。			2.5
4	精査	陶器	土瓶	大垣和歌	肩部破片。胎土は灰白色。19世紀中葉。			2.15
5	精査	瓦質土器	火鉢	不明	胎土表面は明黄褐色で胎土内に褐灰色。砂粒を多く含む。底面部にボタン状の脚。	119.4	110.0	



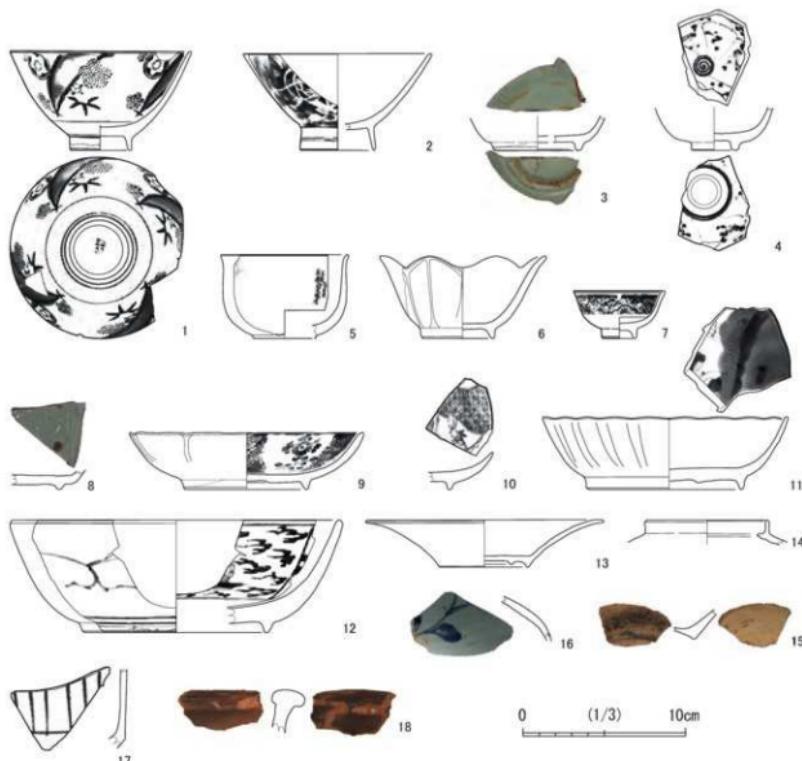
1 原寸

第 66 図 精査出土金属製品

第 40 表 精査出土金属製品観察表

番号	遺物・層位	種別	器種	产地	特徴	法量		
						径 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)
1	精査	金属製品	錢貨	目録不明		23.60	1.40	1.94

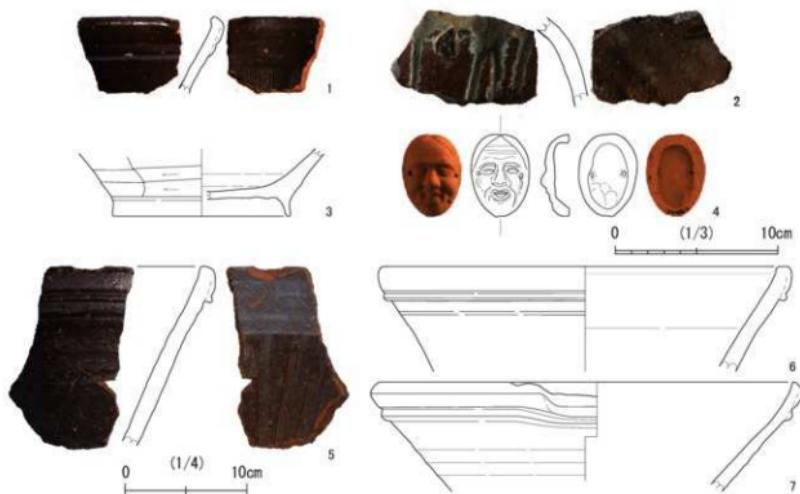
叩打痕を残す。10・11は堤焼の擂鉢。12は磁器小杯で岐阜県多治見市酒井ヶ峯1・2号窯で生産されたものと類似している。20世紀前半。13は切込の手塙皿。14は肥前產猪口で17世紀後半から18世紀初頭か。第71図は崩落した調査区壁から出土した錢貨で寛永通宝の四文銭である。



第 67 図 挖り下げ出土遺物1

第 41 表 挖り下げ出土遺物観察表1

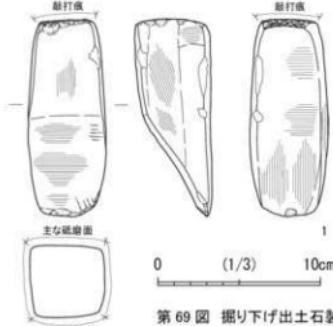
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						内径	底径	高さ
1	掘り下げる	磁器	碗	美濃	深型平底。胎土は灰白色でやや軟質。体底外面にゴム印技法。コバルト。底底外面に生者記号「越」37。器形約1910年～1950年。生産者記号から1941年～1945年。	11.1	3.8	6.1
2	掘り下げる	磁器	碗	美濃	深型平底。胎土は灰白色でやや軟質。体底外面にゴム印技法。コバルト。底底外面に生者記号「越」37。器形約1910年～1950年。生産者記号から1941年～1945年。	(11.0)	4.6	(5.85)
3	北側	磁器	碗	不明	黄色地を帯びた緑色釉。	(5.0)	(2.1)	
4	掘り下げる	染付磁器	小瓶	美濃	内外底面に紫文。		2.8	(2.6)
5	掘り下げる	磁器	小杯	不明	物印。『並木謙一 米穂軒』(鈴木商店)。	(6.4)		(5.15)
6	掘り下げる	陶器	小鉢	不明	六葉の小鉢。胎土は淡黄色で軟質。型成形。		3.9	5.65
7	掘り下げる	磁器	盃	不明	体底外面に朱色梅文。	5.5	2.0	2.9
8	掘り下げる	磁器	手振皿	切込	内面に桜花文。18世紀末～19世紀初。			(1.2)
9	掘り下げる	磁器	皿	美濃	輪花地。型成形。胎土は灰白色。19世紀末以前。	14.4	7.7	3.5
10	掘り下げる	磁器	小皿	美濃	側板有。コバルト。19世紀末以前。			2.3
11	掘り下げる	染付磁器	把柄	美濃	輪花地。内面に山水文。輕乳白影高麗。19世紀。	(14.6)	(9.2)	4.45
12	掘り下げる	染付磁器	把柄	美濃	17世紀後半。	(20.4)	(11.8)	6.9
13	掘り下げる	陶器	皿	不明	胎土は淡黄色で軟質。型成形。ゴム印技法。色繪。底部外面。高台に模様のツマリ。1910年～1950年。	14.7	5.5	2.9
14	掘り下げる	陶器	土瓶	人氣相馬	胎土は灰白色。19世紀中葉。	(7.3)		(1.8)
15	掘り下げる	陶器	土瓶	人氣相馬	底部有。胎土は淡黄色。19世紀中期～中葉。			(1.8)
16	掘り下げる	磁器	他利	切込か	18世紀末～19世紀初。			3.9
17	掘り下げる	磁器	他利	海戸美濃				(4.9)
18	掘り下げる北側	瓦質土器	鉢	不明	胎土表面は褐色で胎土内は黄灰色。土鉢質で施き繕ひ長い。筒素吸着の弱い瓦質土器。白練土上及び外端面は使痕により剥がれています。			2.6



第 68 図 挖り下げ出土遺物2

第 42 表 挖り下げ出土遺物観察表2

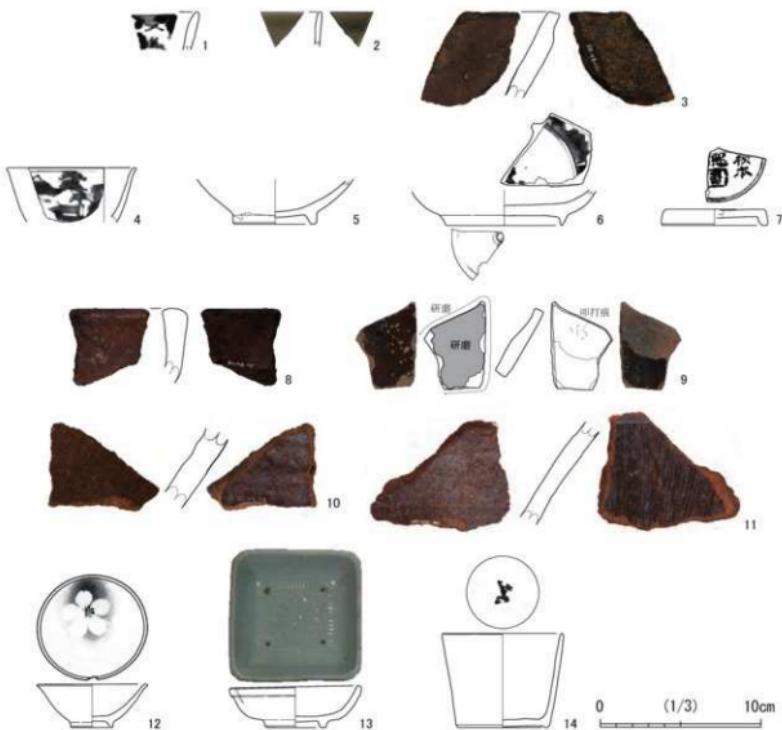
番 号	遺構・層位	種 別	器 形	特 徴	法量(cm)		
					11個	底径	22個
1	瓶口下げる	陶器	埴輪	内外面に鉄錆。胎土は明褐色で砂粒を多く含む。18世紀末～19世紀。			96.30
2	北壁2	陶器	甕	内外面に淡い褐色で外面は褐色。胎土はオリーブ色で69粒(特に透明粒)を多く含む。13世紀前半～12世紀後半。			55.50
3	瓶口下げる	陶器	片口鉢	片口鉢1類第2段頭6a、13世紀後半。	14.8		14.550
4	瓶口下げる	土製品	泥面子	表面の凹凸は指入形。胎土は褐色で表面に赤色塗装。近世。	最大幅 3.6	最大厚 0.8	5.0
5	瓶口下げる	陶器	埴輪	内外面に鉄錆。胎土は明褐色で砂粒を多く含む。18世紀末～19世紀。			114.90
6	瓶口下げる	陶器	埴輪	内外面に鉄錆。胎土は明褐色で砂粒を多く含む。18世紀末～19世紀。	C34.60		98.60
7	瓶口下げる	陶器	埴輪	内外面に鉄錆。胎土はオリーブ色で砂粒を多く含む。焼き締まり良好。18世紀末～19世紀。	C34.10		110.00



第 69 図 挖り下げ出土石製品

第 43 表 挖り下げ出土石製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 形	特 徴	法 量				
					残 存	長さ(cm)	幅(cm)		
1	掘り下げ	石製品	砥石	角柱状の形態で、主に2面に鏡磨面がある。頭部全面に敲打痕あり。ハンマーとしても使用されている。石村はダイサイト質錐灰岩。	完存	12.1	4.8	4.7	385.5



第70図 その他の出土遺物

第44表 その他の出土遺物観察表

番号	遺構・部位	種別	部種	所持	特徴	法量(cm)		
						柱径	底径	深さ
1	カクラン	磁器	筒口	無戸美濃				(2.4)
2	カクラン	陶器	画	人面相馬	外外面に灰褐色。胎土は灰白色。			(2.19)
3	カクラン	陶器	塗林	白石	胎土表面にはぶい褐色で、胎土内に黒褐色、砂粒を多く含む。内外面とも灰褐色。	13		(5.6)
4	埴土	磁器	小画	不明		(8.0)		(3.6)
5	埴土	陶器	画	人面相馬	灰褐色平刷。胎土は浅黄褐色～灰白色。18世紀。		3.2	(2.30)
6	埴土	陶器	底	把頭	17世紀鏡平。		(7.2)	(2.2)
7	埴土	磁器	画	無戸美濃	型底盤。コバルト。19世紀初以降。	6.6	天井径 (3.8)	1.0 (6.3)
8	埴土	陶器	塗林	不明	胎土表面は灰褐色で胎土内にはぶい褐色。粗く、砂粒を含む。外外面に鉄錆。			(4.2)
9	埴土	陶器	林	不明	外外面に鉄錆。胎土は灰褐色で仄く焼き締まる。研磨土器に転用。内面に印打瓶。	施大長 (5.4)	施大幅 (3.8)	最大厚 (9.2)
10	埴土	陶器	桶44	底地	外外面に鉄錆。胎土は明褐色。18世紀末～19世紀。			(5.6)
11	埴土	陶器	桶44	底地	外外面に鉄錆。胎土は明褐色で砂粒を含む。18世紀末～19世紀。			(6.2)
12	廻臼	磁器	画	美濃	多治衛市酒呑ノ里1-2号窯。18世紀末～19世紀。	6.9	2.0	2.7
13	廻臼	磁器	手塗里	切込	見込みに菊花文。18世紀末～19世紀。	8.2	3.8	2.6
14	廻臼	磁器	底口	切削	見込みに手植き五瓣花文。17世紀後半～18世紀初頭。	(7.6)	5.8	5.85



1 原寸

第 71 図 その他の出土金属製品

第 45 表 その他の出土金属製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 様	特 徴			法 量
				径 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	
1	復旧	金属製品	銭貨	寛永通宝 四文銭			28.30 1.15 2.52

## 9. 平成 26 年度調査のまとめ

- ・調査区全域にわたって確認された東西溝跡は、地域内で居住域の限界範囲を示すために掘られた可能性がある。
- ・出土した遺物は中世陶器を中心として出土していることから、周辺一帯で中世（鎌倉時代）に集落が営まれた可能性が考えられる。
- ・調査区北側で多数発見された溝跡と掘立柱建物跡の重複は、すべて掘立柱建物跡が新しいことから、溝跡が中世、建物跡が近世の所産と考えられる。
- ・調査区北半部と南半部では、地山の様相が大きく異なる。この状況は、平成 25 年度の調査で確認された流路跡に関係するとみられ、やや強度が弱い地盤を避けて中世・近世の集落が営まれた可能性がある。



A区全景（南側上空から）



B区全景（南側上空から）



調査開始前の状況（東から）



平成 25 年 10 月の台風 19 号被害状況（北東から）



SB02 ~ 04 堀立柱建物跡（西から）



SE01 井戸跡土層断面（東から）



SE02 井戸跡土層断面（南から）



SE01 井戸跡完掘状況（東から）



SE03 井戸跡土層断面（東から）



SX02 竪穴遺構（南から）



SD01～07 溝跡（西から）



SD07～09 溝跡（東から）



SD07 溝跡 馬の歯出土状況（南から）



SD01・11・16 溝跡 土層断面（西から）



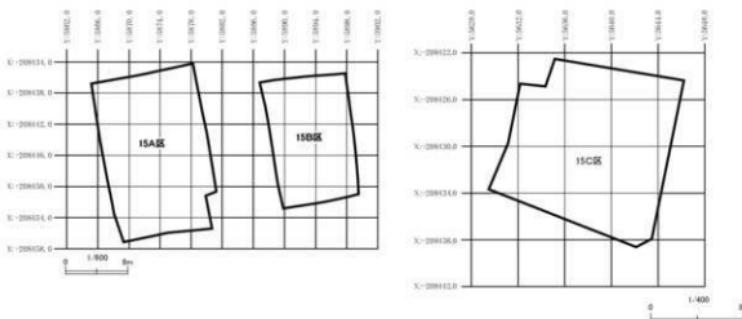
SD16 溝跡 遺物出土状況（西から）



## 第VI章 平成27年度の調査成果

平成27年度の調査区は、五間堀川に面した15A・15B区、志賀沢川に面した地区で実施したトレンチ調査の結果を受けて15C区を設定した。調査面積は833 m<sup>2</sup>である。15B区は平成26年度調査区に西隣し、15A区は平成14年度に県道亘理塩釜線改良事業に際して設定したD区に東隣する。

調査では掘立柱建物跡8棟、井戸跡3基、竪穴遺構1基、土坑8基、溝跡5条をはじめとする遺構を検出し、中世陶器、近世陶磁器、近現代陶磁器、金属製品、石製品、木製品などの遺物が発見されている。以下に主要な調査成果について記す。



第72図 平成27年度グリッド配置図

### 1. 掘立柱建物跡

#### SBO1（第75図）

15A区に存在する東西1間、南北2間の南北棟である。SD02と重複し、これより新しい。柱穴は5口検出し、3口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長3.1mで、柱間は1.5～1.6m、梁行は約1.9mである。建物の主軸は西列で計測するとN-27°～Wである。柱穴の掘方の形状は楕円形で、柱痕跡の直径は10cmの円形である。

#### SBO2（第76図）

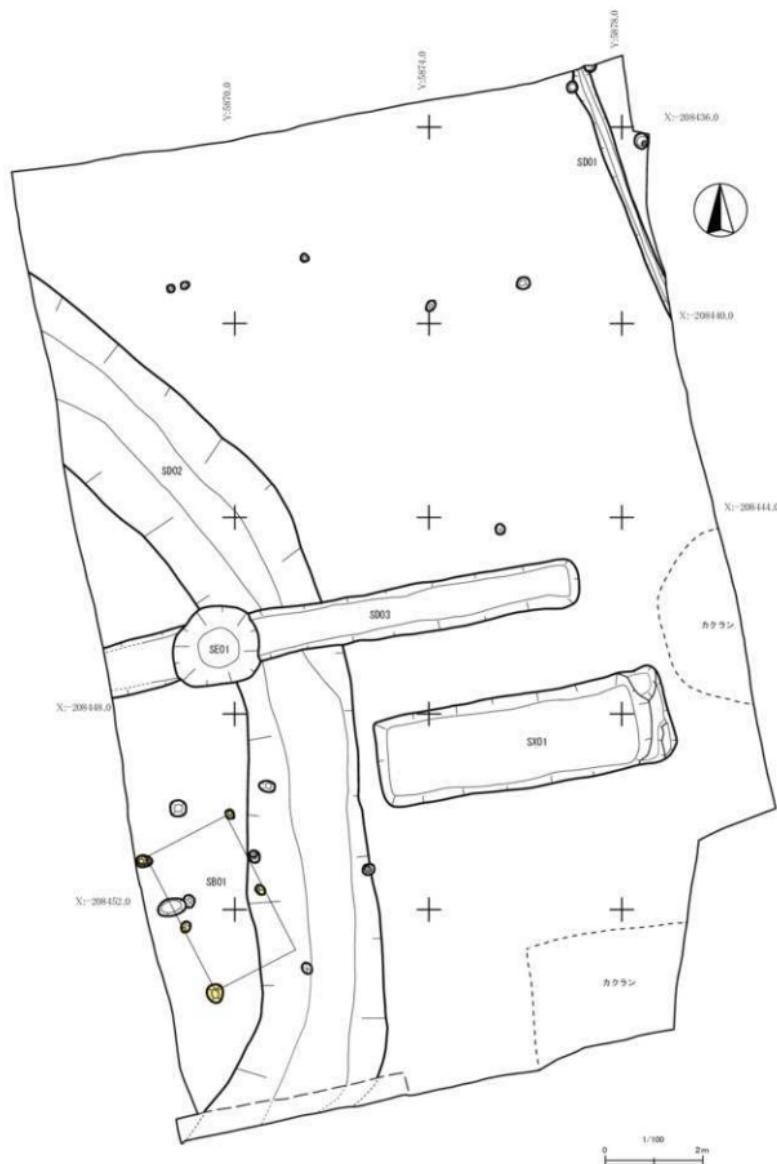
15B区に存在する東西4間、南北2間の東西棟である。柱穴は5口検出し、3口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長3.1mで、柱間は1.5～1.6m、梁行は約1.9mである。建物の主軸は西列で計測するとN-27°～Wである。柱穴の掘方の形状は楕円形及び方形で、柱痕跡の直径は10cmの円形である。

#### SBO3（第77図）

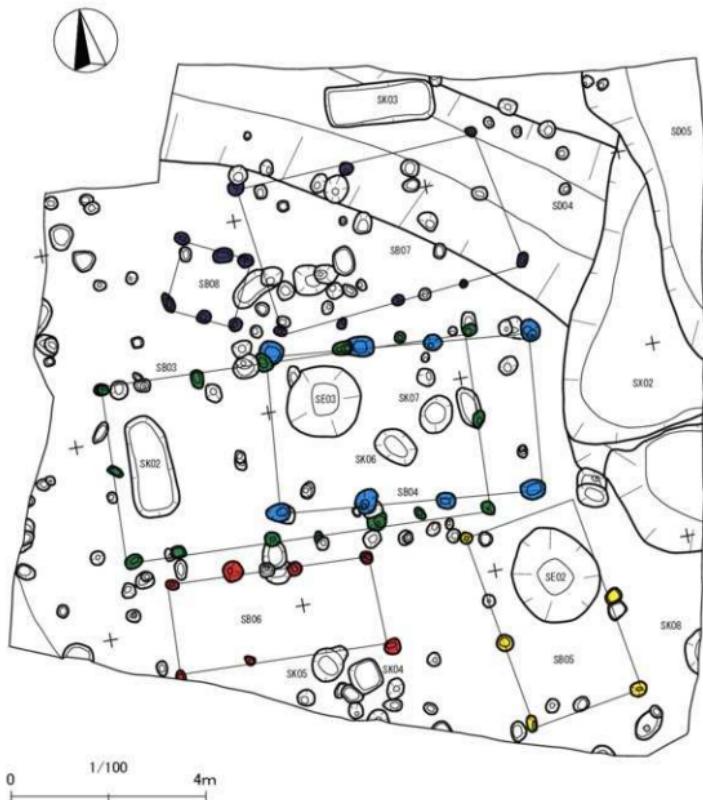
15C区に存在する東西6間、南北2間の東西棟である。SB04と重複し、これより新しい。柱穴は16口検出し、5口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長7.4mで、柱間は0.9～2.0m、梁行は総長3.7mで柱間は1.8～1.9mである。建物の主軸は南列で計測するとN-88°～Wである。柱穴の掘方の形状は楕円形及び円形で、柱痕跡の直径は12cmの円形である。

#### SBO4掘立柱建物跡（第77・78図）

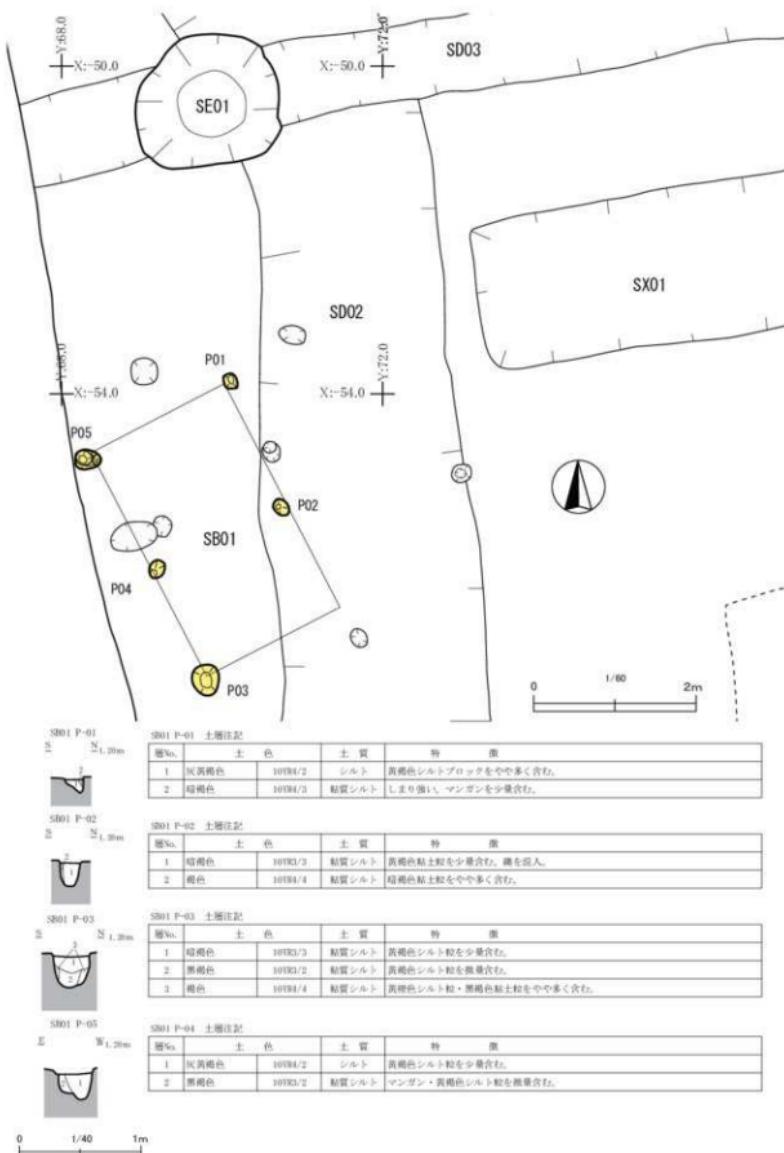
15C区に存在する東西3間、南北1間の東西棟である。SB03と重複し、これより古い。柱穴は8口検出し、



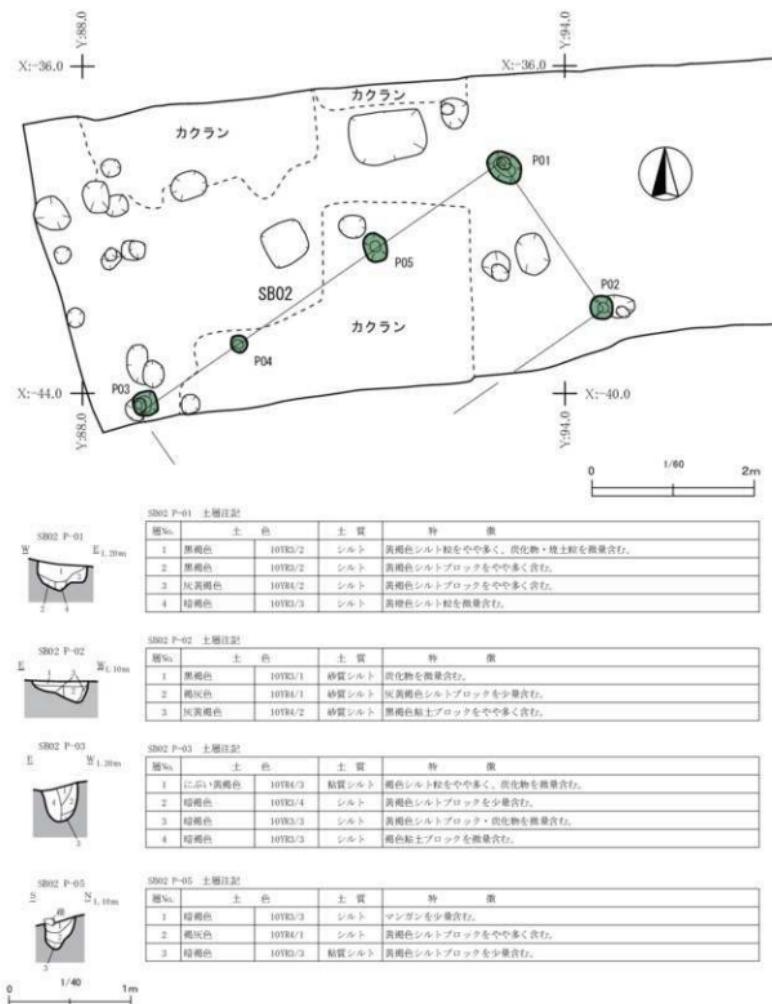
第 73 図 15 A区遺構全体図



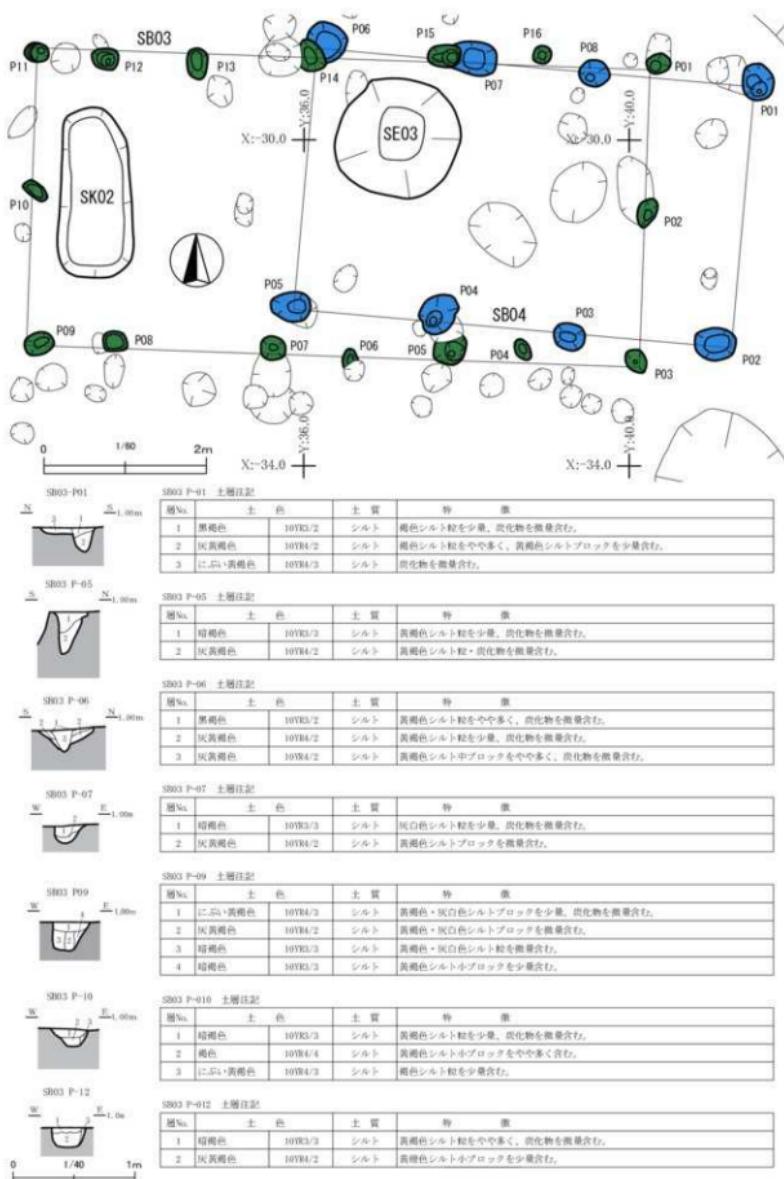
第74図 15C区遺構全体図



第75図 SB01、土層断面図



第76図 SB02、土層断面図



第 77 図 SB03・04、SB03 土層断面図



第 78 図 SB04 土層断面図

4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.4 m で、柱間は 1.7 ~ 2.0 m、梁行は約 3.2 m である。建物の主軸は南列で計測すると N-85° ~ W である。柱穴の掘方の形状は梢円形で、柱痕跡の直径は 10 cm の円形である。

#### SB05 (第 79 図)

15 C 区に存在する東西 1 間、南北 2 間の南北棟である。柱穴は 5 口検出し、2 口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 4.1 m で、柱間は 1.9 ~ 2.2 m、梁行は約 2.3 m である。建物の主軸は南列で計測すると N-10° ~ W である。柱穴の掘方の形状は梢円形及び円形で、柱痕跡の直径は 10 cm の円形である。

#### SB06 (第 79 図)

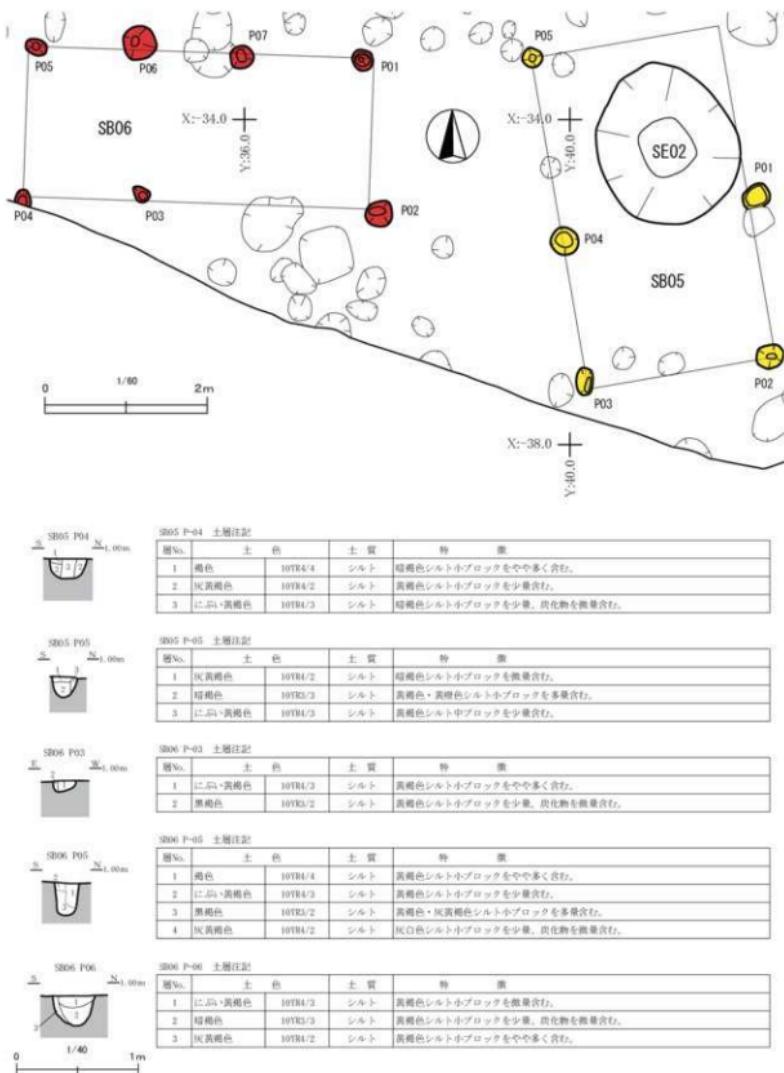
15 C 区に存在する東西 3 間、南北 1 間の東西棟である。柱穴は 7 口検出し、2 口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 4.2 m で、柱間は 1.3 ~ 1.6 m、梁行は約 1.8 m である。建物の主軸は南列で計測すると N-10° ~ W である。柱穴の掘方の形状は梢円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 12 cm の円形である。

#### SB07 (第 80 図)

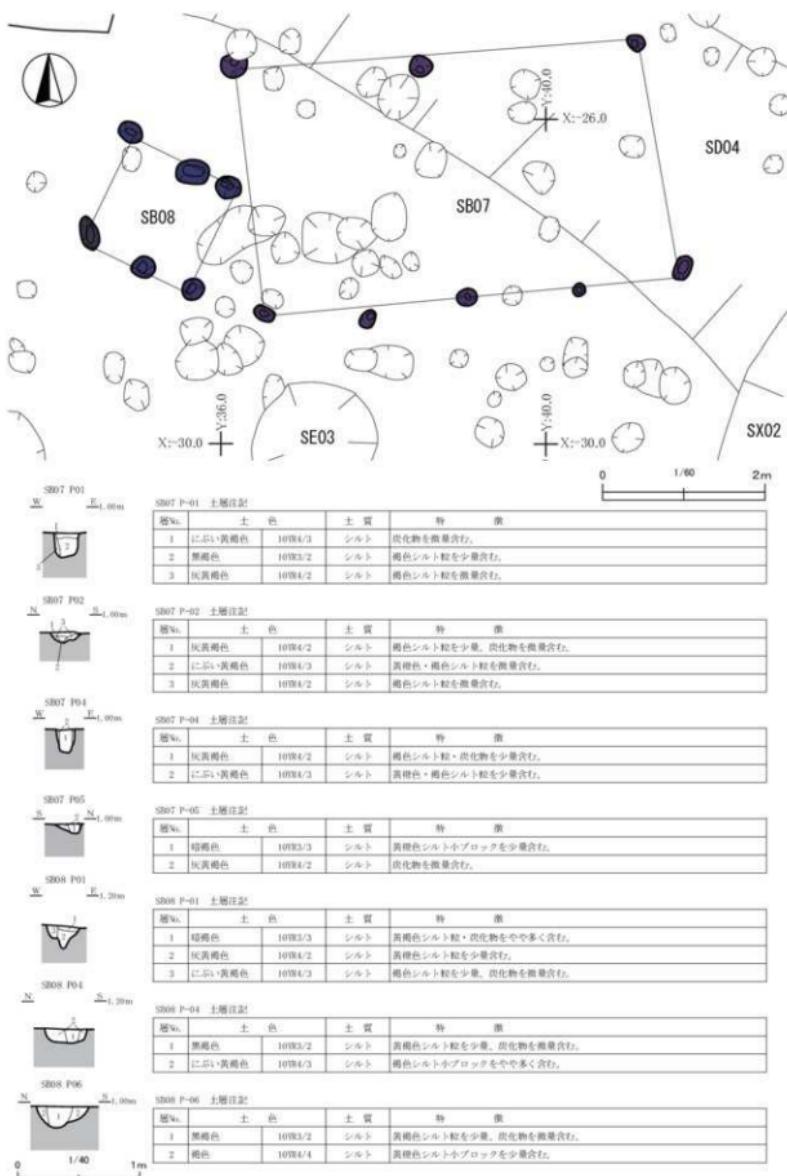
15 C 区に存在する東西 4 間、南北 1 間の東西棟である。柱穴は 8 口検出し、4 口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.0 m で、柱間は 1.2 ~ 1.3 m、梁行は約 3.1 m である。建物の主軸は南列で計測すると N-84° ~ E である。柱穴の掘方の形状は梢円形及び円形で、柱痕跡の直径は 10 cm の円形である。

#### SB08 (第 80 図)

15 C 区に存在する東西 2 間、南北 1 間の東西棟である。柱穴は 6 口検出し、4 口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 1.4 m で、柱間は 0.6 ~ 0.8 m、梁行は約 1.4 m である。建物の主軸は南列で計測すると N-65° ~ W である。柱穴の掘方の形状は梢円形で、柱痕跡の直径は 10 cm の円形である。



第79図 SB05・06、土層断面図



第80図 SB07・08、土層断面図

第46表 平成27年度調査 据立柱跡属性表

建物名	間数	棟方向	航行 距長(m)	柱間寸法(m)	測定柱列	梁行 距長(m)	柱間寸法(m)	測定柱列	方向	柱底 距離(cm)	柱穴 窓櫻(cm)	平面形	備考
SB01	1×2	南北	3.1	1.6,1.5	西列	1.9	1.9	北列	N-27°-W	10	20~40	楕円形	SB02より新
SB02	2×4	東西	6.8	1.8,1.7,1.5,1.8	南列	3.8	1.8,2.0	西列	N-64°-E	10	15~50	楕円形、円形	
SB03	2×6	東西	7.4	1.0,2.0,0.9,1.0,1.4	南列	3.7	1.8,1.9	東列	N-88°-W	12	30~40	楕円形、円形	SB04より新
SB04	1×3	東西	5.4	1.7,1.7,2.0	南列	3.2	2.2	東列	N-85°-W	10	40~60	楕円形	SB03より古
SB05	1×2	南北	4.1	2.2,1.9	西列	2.3	2.3	南列	N-10°-W	10	20~40	楕円形、円形	
SB06	1×3	東西	4.2	1.3,1.3,1.6	北列	1.8	1.8	西列	N-88°-W	12	30~40	楕円形、圓角方形	
SB07	1×4	東西	5.0	1.2,1.2,1.3,1.3	南列	3.1	3.1	西列	N-84°-E	10	18~32	楕円形、円形	SB04より新
SB08	1×2	東西	1.4	0.8,0.6	南列	1.4	1.4	東列	N-65°-E	10	25~42	楕円形	
SB09	1×1 以上	南北	—	2.1	東列	2.0	2.0	南列	N-34°-W	12	22~38	円形、楕円形	

## 2. 井戸跡

SE01(第73・81・82図、第47表)

15 A区に存在する素掘りの井戸で、平面形状は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.7m、短軸は1.6mを測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より2.1m下で底面を検出している。堆積土は8層に分層でき、1~7層は人為的埋土、8層は自然堆積土と考えられる。

第81図はSE01から出土した白石産陶器の片口鉢である。13世紀後半~14世紀前半。



第81図 SE01出土遺物

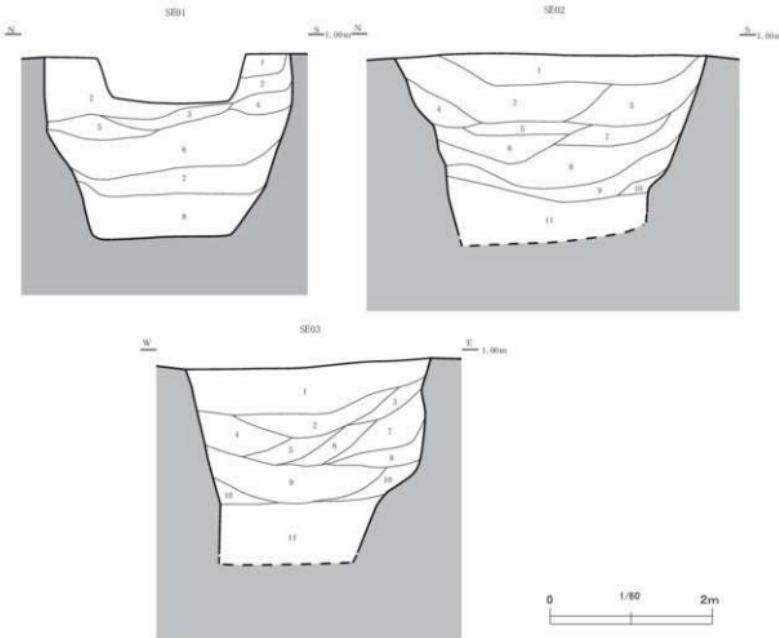
第47表 SE01出土遺物観察表

番号	道標・層位	種別	部種	底地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SF01	陶器	片口鉢	白石	内外面(2面)に55%褐色。胎土は褐色で砂粒含む。内面下半黒化。	17.0	17.0	17.0

SE02(第74・82・83図、第48表)

15 C区に存在する素掘りの井戸で、平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.9m、短軸は1.7mを測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より2.2m下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。堆積土は11層に分層でき、1~9層は人為的埋土、10~11層は自然堆積土と考えられる。

第83図はSE02から出土した木製品である。差歛下駄が1点、柄杓が1点、蓋が1点、木鍤が1点出土している。差歛下駄は露卵下駄で、台部と2枚の靴部からなり、木取りはいずれも板目材である。柄杓は杓の部分のみで、側板は曲物を樹皮で縫っている。上部には柄を差し込む孔も確認される。蓋は栓の穴があり、櫛の上蓋と考えられる。木取りは柾目材である。木鍤は丸太材を切断してくびれ部を作り出したこけし状のものである。



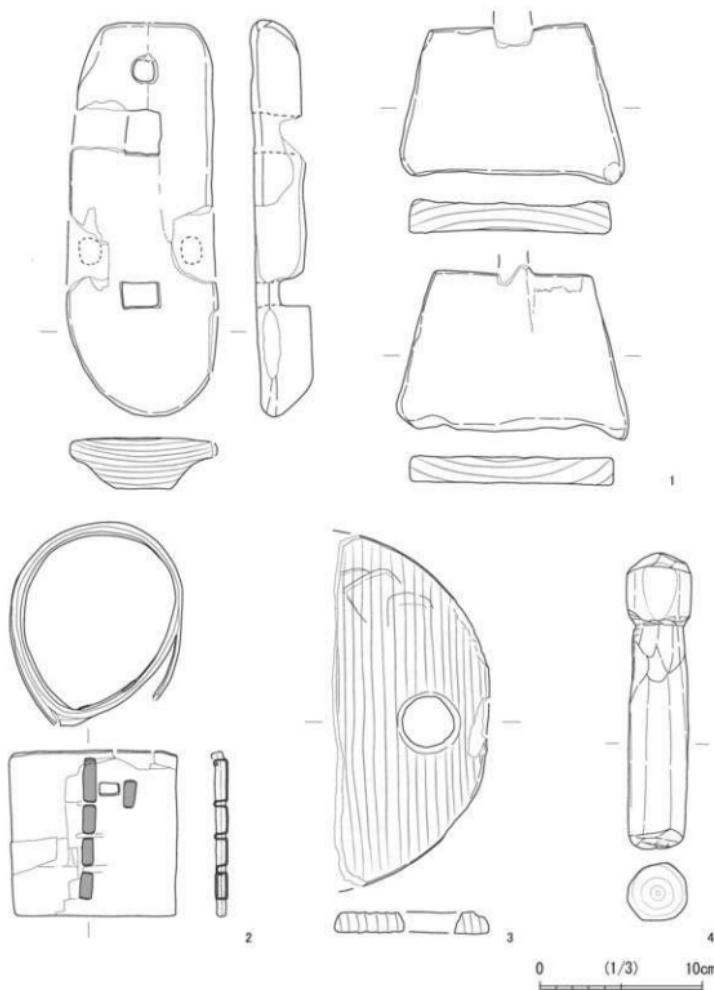
SE01 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 様
1	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト 炭化物を微量含む。褐色粘土粒を下部に集積する。
2	暗褐色	10YR3/3	黄褐色砂質シルト粒を少量。炭化物を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	黄褐色シルトブロックをやや多く含む。
4	褐色	10YR4/4	黄褐色シルト粒をやや多く。炭化物を微量含む。
5	にじみ黄褐色	10YR3/4	砂質シルト マンガンを多量含む。
6	褐色	10YR4/1	黄褐色シルト粒を多量。炭化物を微量含む。
7	にじみ黄褐色	10YR4/3	粘質シルト 黒褐色粘土ブロックをやや多く。マンガンを少量含む。中世陶器出土層。
8	黒褐色	10YR3/1	中层にマンガンを斑状に集積。 下层に白褐色粘土ブロックを少量含む。

SE02 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 様
1	暗褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックをやや多く。黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックを多量。炭化物・堆土粒を微量含む。
3	暗褐色	10YR3/4	シルト 黄褐色シルト中ブロックを多量含む。
4	にじみ黄褐色	10YR3/3	シルト 黄褐色シルト粒を少量。炭化物を微量含む。
5	灰黒褐色	10YR4/2	粘質シルト 黄褐色シルト小ブロックを少量。堆土粒を微量含む。
6	灰黄褐色	10YR4/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを多量含む。
7	暗オーブン褐色	2.5YR3/3	シルト 黄褐色シルト中ブロックを多量含む。
8	灰黃褐色	10YR4/2	シルト 黄褐色・黒褐色粘土中ブロックを多量含む。マンガンを斑状に集積する。
9	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト 黒褐色粘土小ブロックを少量含む。
10	黒褐色	2.5YR3/2	砂質シルト 炭化物を微量含む。
11	黒褐色	2.5YR3/1	粘質シルト オリーブ黒色粘土大ブロックを少量含む。

第 82 図 SE01 ~ 03 土層断面図



第 83 図 SE02 出土木製品

第 48 表 SE02 出土木製品観察表

番 号	遺構・層位	種 别	器 種	特 樹	残 存	法 量 (cm)			辨 標
						長さ	幅	厚さ	
I SE02	木製品	漆面下駄	漆面下駄。台部、革面とも板目材。		台部	24.2	9.3	3.1	ヤナギ属
					革面	13.7	9.8	2.0	タカノヅク
						14.2	10.2	1.6	
II SE02	木製品	柄円	柄は曲物を横度で縛っている。柄を密に打ち孔あり。		手形部分	(11.0)	10.1	0.8	ブガバ属
					上蓋の	(21.5)		1.2	ブガバ属
III SE02	木製品	蓋	輪の上蓋。栓の穴が複数。板目材。		1/2頭				
					完存	18.2	4.0	3.5	ケヤキ
IV SE02	木製品	木綿	芯持材。表面加工により、細皮、網状とも残っていない。						

## SE03（第74・82図）

15C区に存在する素掘りの井戸で、平面形状は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.5m、短軸は1.4mを測る。断面形状は円筒形状を呈するが、東側壁面の一部には小規模の平坦面がみとめられる。確認面より2.4m下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。堆積土は11層に分層でき、1~7層は人為的埋土、8~11層は自然堆積土と考えられる。

第49表 平成27年度調査 井戸跡属性表

構造名	構造	平面形	断面形	規模(m)	深さ(m)	堆積土	遺物	備考	平面図	断面図
SE01	素掘	隅丸形	円筒	1.7×1.6	2.1	自然→人為	白石	SD03より古 SD02より新	82	82
SE02	素掘	楕円形	扁平	1.9×1.7	2.2以上	自然→人為	木製品		74	82
SP03	素掘	隅丸形	円筒	1.5×1.4	2.2以上	自然→人為			74	82

## 3. 壺穴遺構

SX01（第73・84・85図、第51表）

15A区に存在する。平面形状は長方形であり、規模は長軸6.0m、短軸は1.9mを測る。確認面からの深さは約1.1cmである。主軸方位は南辺でN-81°-Eを測る。東壁際では南側から下る階段状の施設が掘り残されている。底面は平坦であるが、貼床や根太木などの痕跡は見られない。堆積土は10層に分層でき、すべて人為的埋土である。

第85図はSX01から出土した磁器碗である。1は切込みと思われる端反碗、2は内外面茶褐色釉の丸碗。3は瀬戸美濃産丸碗型紙摺り。

## 4. 性格不明遺構

SX02（第74・84・86図、第52表）

15C区に存在する。SD04・05と重複し、SD05より古く、SD04より新しい。調査区東側へさらに展開するため平面形状は不明であるが、確認できた範囲での断面形状は皿形を呈する。確認面からの深さは約1.0cmである。底面には凹凸がみられるが、土層観察では遺構の重複とはみとめられない。堆積土は5層に分層でき、すべて人為的埋土である。

第86図はSX02出土遺物である。1・2は白石産陶器で13世紀後半～14世紀前半。3は外面に斜格子文のある瓦質土器火鉢である。

## 5. 土坑

調査では8基の土坑を確認し、このうちSK02・03については詳述する。その他の土坑については第50表にまとめている。

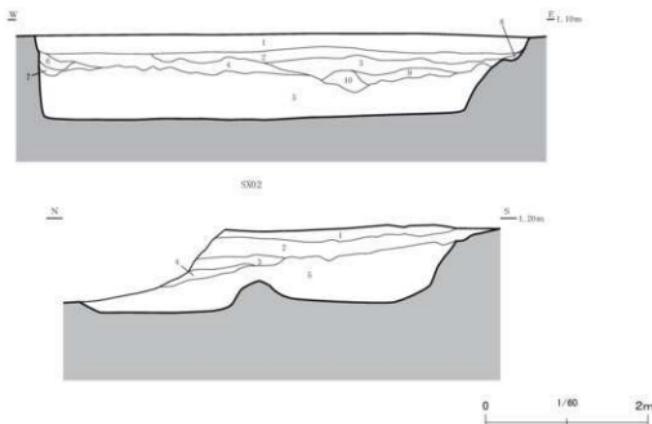
SK02（第74・87図）

15C区に存在する。平面形状は長方形であり、規模は長軸2.1m、短軸0.8mを測る。確認面からの深さは約20cmであり、断面形状は皿形を呈する。堆積上は2層に分層でき、すべて人為的埋土である。

SK03（第74・87図）

15C区に存在する。平面形状は長方形であり、規模は長軸2.3m、短軸0.8mを測る。確認面からの深さは約20cmであり、断面形状は箱形を呈する。堆積上は4層に分層でき、すべて人為的埋土である。

SX01



SX01 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 湖
1	灰黃褐色	10TA4/2	粘質シルト。マングンを多量、炭化物を微量含む。
2	褐色	10TA4/1	砂質シルト。灰白色粘土ブロックをやや多く含む。
3	にじみ黄褐色	10TA4/3	粘質シルト。マングンをやや多く、褐色粘土ブロックを少量含む。
4	灰黃褐色	10TA4/2	粘質シルト。灰白色シルトブロック・マングンを少量含む。
5	オーラープ黒色	3TA3/2	粘質シルト。灰白色シルトブロックを少量含む。
6	暗オーラープ褐色	2.3TA3/3	砂 褐褐色の粘土ブロックをやや多く含む。
7	黒褐色	10TA3/2	粘質シルト。マングンをやや多く含む。
8	褐色	10TA4/4	粘質シルト。黄褐色シルト粒を少量含む。
9	灰黃褐色	10TA4/2	粘質シルト。マングンを多量、オーラープ褐色シルトブロックを少量含む。
10	黃褐色	2.3TA4/1	粘質シルト。灰白色粘土・オーラープ褐色シルトブロックをやや多く含む。

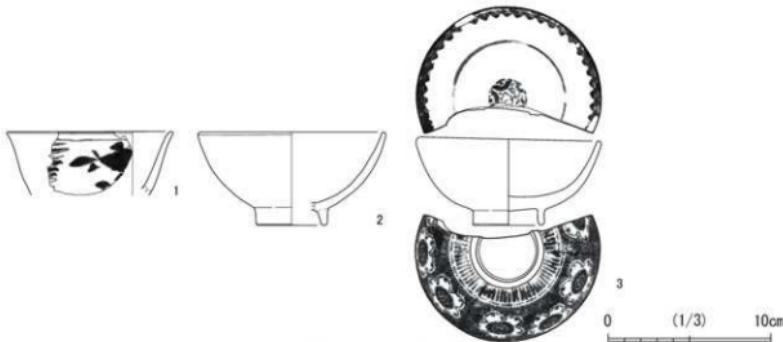
SX02 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 湖
1	黒褐色	10TA3/2	シルト。黄褐色シルト粒を少量、炭化物をごく微量含む。
2	暗褐色	10TA3/3	シルト。黄褐色シルトブロックを少量含む。
3	褐色	10TA4/4	シルト。黄褐色シルト粒を少量、炭化物をごく微量含む。
4	にじみ黄褐色	10TA4/3	シルト。黄褐色シルトブロックをやや多く、褐色シルトブロックを微量含む。
5	灰黃褐色	10TA4/2	粘質シルト。褐色粘土・黄褐色粘土・黒褐色中粒砂ブロックを多量含む。

第84図 SX01・02 土層断面図

第50表 平成27年度調査 穴竪遺構・性格不明遺構・土坑属性表

遺構名	平面形	断面形	規模 (m)	深度 (m)	埋棊土	出土遺物	備 考	平面図	断面図
SX01	長方形	箱形	6.0 × 1.9	1.1	人為	近現代陶磁器、石	東側に隔壁状の施設	73	81
SX02	圓形	圓形		1.0	人為	白石、瓦質土器	SD01より古、SD04より新	74	86
SK01	長方形	箱形	0.9 × 0.6	0.1	人為				
SK02	長方形	圓形	2.1 × 0.8	0.2	人為	古代陶磁器		74	87
SK03	長方形	箱形	2.3 × 0.8	0.2	人為			74	87
SK04	方形	箱形	0.7 × 0.7	0.2	人為			74	
SK05	橢円形	遊台形	0.7 × 0.7	0.2	人為			74	
SK06	長円形	圓形	0.9 × 0.6	0.2	人為			74	
SK07	橢円形	圓形	0.8 × 0.6	0.2	人為			74	
SK08	--	U字	--	0.9	自然→人為			74	



第85図 SX01出土遺物

第51表 SX01出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm) 口径 底径 深度
					内面	外縁	底面	
1	SX01	染付罐	瓶	Q10.5か	18世紀末～19世紀。			(10.2) (3.9)
2	SX02	鉢	不明		内外面に茶褐色釉、底土は灰黄色。19世紀末以降。			11.6 4.4 5.7
3	SX01	染付罐	瓶	瀬戸美濃	丸瓶、型瓶。19世紀末以降。			11.3 4.3 5.4



第86図 SX02出土遺物

第52表 SX02出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm) 口径 底径 深度
					内面	外縁	底面	
1	SX02	陶器	便	白石	内面はに京・磯色で外縁は灰赤色。外縁に斜輪。底土はに京・磯色で斜輪(特に白色粒)を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(7.2)
2	SX02	陶器	便	白石	内外面共に灰黄色。底土は黄灰色で粗粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(6.0)
3	SX02	瓦質土器	火鉢	不明	内外面は灰白色。外縁に斜輪。底土は灰黄色で白色粗粒を多く含む。			(3.8)



SK02 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	褐色	10R4/4	シルト 黒褐色シルト粒をやや多く、炭化物を微量含む。
2	にぶい黄褐色	10W4/3	黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

SK03 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	灰黒褐色	10R4/2	黄褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
2	暗褐色	10W3/3	黄褐色シルト小ブロックをやや多く、褐色シルト粒を少量含む。
3	黒褐色	10W3/2	黄褐色シルト粒、褐色シルト粒を少量含む。
4	にぶい黄褐色	10W4/3	褐色シルト小ブロックを微量含む。

第87図 SK02・03 土層断面図

## 6. 溝跡

### SD01 (第 73・88 図)

15 A区に存在する。調査区北壁から東壁にかけて直線的にのびる溝跡である。北・南とも調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 5.2m にわたって検出している。主軸方位は N-26° -W。検出面での規模は上幅 0.3m、下幅 0.1 ~ 0.2m、確認面よりの深さは 30cm を測る。断面形状は大部分でV字状を呈し、南側から北側へ緩やかに傾斜している。堆積土は3層に分層でき、すべて人為的埋上である。

### SD02 (第 73・88 図)

15 A区に存在する。調査区西壁北寄りから南壁にかけて弧状にのびる溝跡である。北・南とも調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 17.5m にわたって検出している。検出面での規模は上幅 2.2 ~ 2.7m、下幅 0.7 ~ 1.1m、確認面よりの深さは 30cm を測る。断面形状は皿形を呈し、北側から南側へ緩やかに傾斜している。堆積土は5層に分層でき、すべて自然堆積土である。

### SD03 (第 73・89・90 図、第 53・54 表)

15 A区に存在する。調査区西壁から東側へ直線的にのびる溝跡である。西側は調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 9.9m にわたって検出している。主軸方位は N-78° -E。検出面での規模は上幅 1.1m、下幅 0.8m、確認面よりの深さは 30cm を測る。断面形状は箱形を呈し、東側から西側へ緩やかに傾斜している。堆積土は1層であり、近現代陶磁器・金属製品などを大量に含む人為的埋上である。

第 89・90 図は SD03 の出土遺物である。第 89 図1は磁器のこども茶碗。2・3は兵隊盃。第 90 図は木製品である。連衛下駄が2点と容器の蓋が1点出土している。連衛下駄は2点とも板目材で、台部が小判型をなし、2は大きさから子供用とみられる。1の台部には山や川、道を描いたとみられる文様が線刻されている。蓋は板目材で、曲物の底部の可能性もある。

### SD04 (第 74・88・91 ~ 93 図、第 56 ~ 58 表)

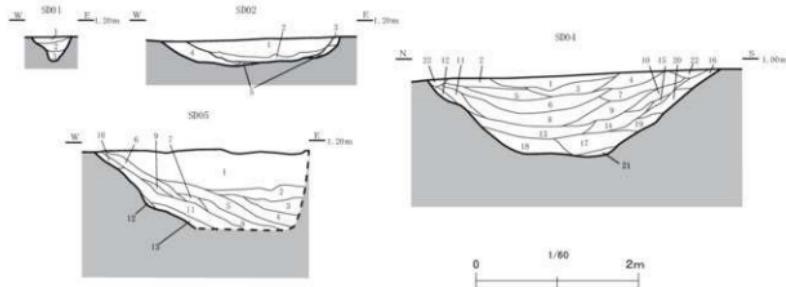
15 C区に存在する。調査区西壁北寄りから東にかけて緩やかな弧状にのびる溝跡である。西側は調査区外へ展開し、東側は SX02 と重複し、これに切られるため全長は不明であるが、総長約 9.3m にわたって検出している。主軸方位は N-57° -W。検出面での規模は上幅 3.1m、下幅 1.0m、確認面よりの深さは 100cm を測る。断面形状は逆台形を呈し、西側から東側へ緩やかに傾斜している。堆積土は22層に分層でき、自然堆積層分ある 17 ~ 19・21 層以外はすべて自然堆積土である。なお、8層中からはウマの上顎骨が出土している。

第 91 ~ 93 図は SD04 出土遺物である。第 91 図1~3は白石産陶器で、1は断面3辺と内外面を研磨に使用する。特に内面はよく使い込まれている。4は土師質の鉢型土器の底部である。产地不明で在地産と考えられる。第 92 図は不明石製品である。円盤状に整形された1面に線刻状の凹みが認められるが、人為によるものか不明である。第 93 図は銭貨である。1は天祐通宝、2は大觀通宝、3は銭種不明、4は元豐通宝である。

### SD05 (第 74・88・94 図、第 59 表)

15 C区に存在する。調査区北東部のみの検出であることから、全長、規模などについては不明な点が多いが、北壁及び西壁での土層観察の結果から SX02 より新しい。主軸方位は N-8° -E と推定され、確認面よりの深さは 100cm を測る。堆積土は 13 層に分層でき、1~9 層は人為的埋土、10 ~ 13 層は自然堆積土と考えられる。

第 94 図は SD05 出土の白石産陶器である。



SD01 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 樹
1	暗褐色	10YR5/3	シルト 黄褐色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルトブロックをやや多く含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト 黄褐色細めとブロックを多量含む。

SD02 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 樹
1	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂 細粒砂主体。上位に暗褐色粘土を稍多く、下位に黄褐色粘土ブロックを少量含む。
2	灰オリーブ色	5Y4/2	粘質シルト 灰白色火山灰を厚さ2~3cmの帶状に含む。
3	オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂 黑褐色粘土・灰黃褐色シルトブロックをやや多く含む。
4	褐色	10YR4/4	粘質シルト 黃褐色粘土小ブロックを多量、黒褐色粘土粒を少量含む。
5	黄褐色	10YR5/6	粘質シルト 黃褐色粘土小ブロックをやや多く。黒褐色粘土粒を微量含む。

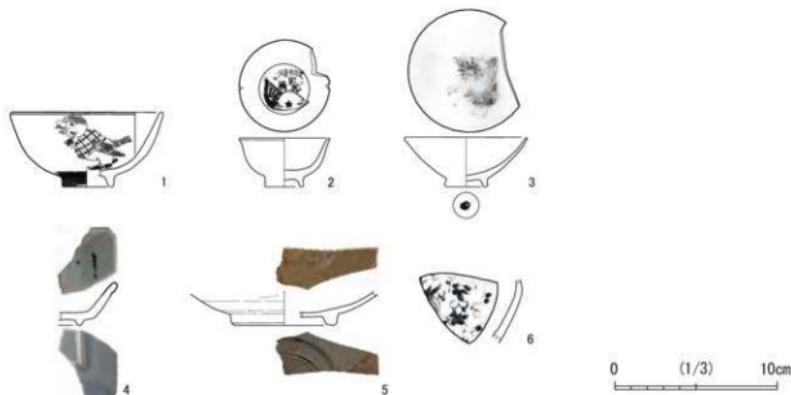
SD04 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 樹
1	にじみ黄褐色	10YR5/3	砂質シルト 墓中に厚さ3cmほどの炭化物層を含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト マンガンを少量。炭化物を微量含む。
3	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト マンガンを少量。炭化物を微量含む。
4	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト マンガンをやや多く。黄褐色シルト小ブロック・炭化物を微量含む。
5	にじみ黄褐色	10YR5/3	砂質シルト マンガンをやや多く。細粒砂を比較的多く含む。
6	黄褐色	2.5Y5/2	砂 黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。細粒砂主体。
7	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト 黃褐色粘土中でブロックをやや多く。マンガンを少量含む。
8	オリーブ褐色	2.5Y4/4	砂 細粒砂主体。下位には厚さ1~3cmの炭化物層を含む。動物骨を混入。
9	にじみ黄褐色	10YR4/4	砂質シルト マンガンを多量。黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
10	にじみ黄褐色	10YR4/3	砂質シルト 黄褐色シルトブロックを多量含む。
11	オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂質シルト 黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
12	黄褐色	2.5Y5/3	砂質シルト 下位に灰白色粘土ブロックを少量含む。
13	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト 粘土中に厚さ2mm程度の灰黄褐色粘土薄層が互層状となる。
14	暗灰黄色	2.5Y5/2	砂質シルト 灰黄褐色粘土ブロックをやや多く。マンガンを少量含む。
15	にじみ黄褐色	10YR4/3	砂質シルト 黄褐色シルト粒を少量含む。
16	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト 黄褐色シルト粒を少量。炭化物を微量含む。
17	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト 粘土・灰黄褐色粘土中でブロックを少量含む。
18	黒褐色	10YR3/2	砂 厚さ3~15mmの灰黄褐色粘土との互層。植物遺体を少量含む。
19	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト 黄褐色シルト中ブロックを少量含む。
20	にじみ黄褐色	10YR4/3	砂質シルト 灰黄褐色シルト粒を少量含む。
21	灰褐色	5YR4/1	粘質シルト 天然分解の植物遺体を少量含む。
22	褐色	10YR4/4	砂質シルト 黄褐色シルト粒を少量含む。

第 88 図 SD01・02・04・05 土層断面図

SD05 土層目記

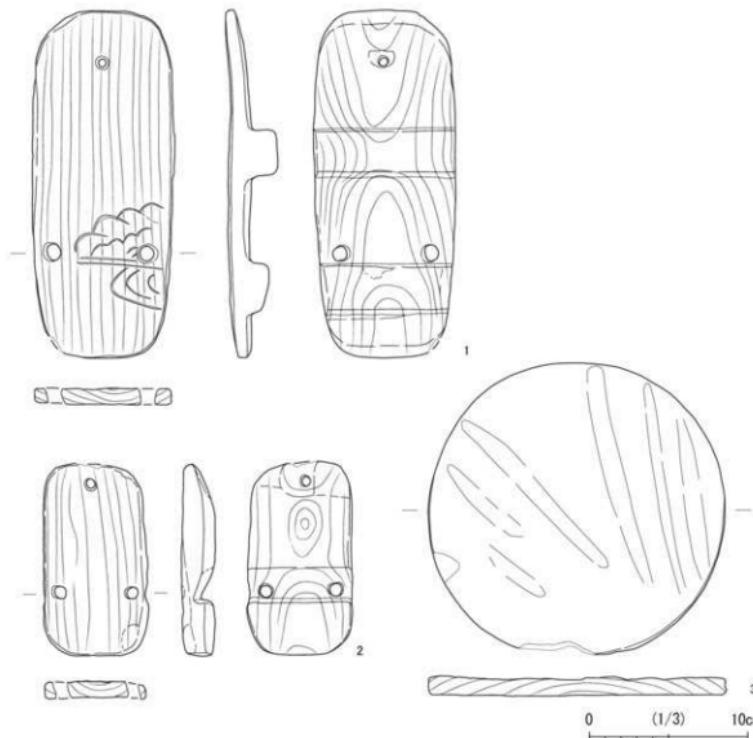
層号	土色	土質	特徴
1	にぶい黄褐色	10PA4/3	黄褐色シルトブロックを微量。炭化物を極めて微量含む。
2	灰黄褐色	10PA4/2	黄褐色シルト粒・褐色シルト粒を少量。炭化物を微量含む。
3	にじみ黄褐色	10PA4/3	黒褐色シルトブロックを少量。黄褐色シルト粒を微量含む。
4	褐色	10PA4/4	黄褐色シルト粒・黒褐色シルトブロックをやや多く含む。
5	褐色	10PA4/2	黒褐色シルト・中プロックを少額含む。
6	灰黄褐色	10PA4/2	黄褐色シルト・中プロック・黒褐色シルト小プロックをやや多く含む。
7	暗褐色	10PA3/3	炭化物を微量含む。
8	黒褐色	10PA3/2	炭化物・褐色シルト粒を少額含む。
9	褐色	10PA4/4	炭化物を微量含む。
10	灰黄褐色	10PA4/2	粘質シルト 灰色シルト粒を少量、炭化物・黄褐色シルト小プロックを微量含む。
11	にじみ黄褐色	10PA4/3	粘質シルト 黄褐色シルト小プロックを少額含む。
12	褐色	10PA4/4	黄褐色シルト粒を微量含む。
13	にじみ黄褐色	10PA4/2	褐色シルト・黄褐色シルト粒をやや多く含む。



第 89 図 SD03 出土遺物

第 53 表 SD03 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	底地	特徴	法量(cm)		
						11径	沈径	22高
1	SD03	印22	碗	直底	丸窓。子口が深窓。ゴム上級。20世紀前半。	9.4	(3.3)	4.6
2	SD03	印22	盆	不明	直縁盆。胎土は中緑灰色。透明釉。見込みに「支那事変記念」(忠勇)窓。19世紀前半。	5.6	2.3	3.0
3	SD03	印22	盆	直縁	直縁盆。石縫灰。20世紀前半。	2.7		(3.0)
4	SD03	印22	手塩盆	切込	見込みに菊花文。19世紀末~19世紀初。			2.6
5	SD03	印22	盆	大輪相馬	内外面に波織。胎土は灰色で焼き直り良好。19世紀。	(6.6)	(2.1)	
6	SD03	印22	盆	切込	19世紀末~19世紀初。			(3.9)



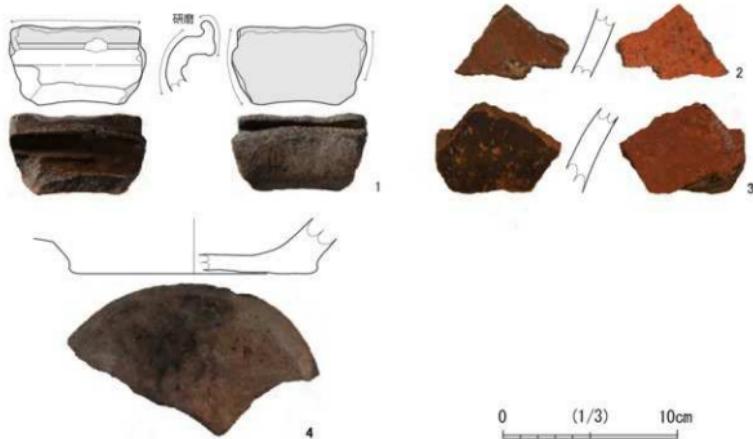
第90図 SD03出土木製品

第54表 SD03出土木製品観察表

番号	遺構・部位	種別	認種	特徴		残存	法量(cm)			縦横
				長さ	幅		長さ	幅	厚さ	
1 SD03	木製品	漆画下駄	表面に文様(山と道と川か)が印刷されている。板目材。	完存	21.9	8.9	3.1			針葉樹
2 SD03	木製品	漆画下駄	子供用とみられる。板目材。	完存	12.1	6.6	2.1			大ギアヒ
3 SD03	木製品	瓶	容器の形。曲物の底部の可能性もある。板目材。	寸法不明	18.8		1.0			ヒノキ

第55表 平成27年度調査 溝跡属性表

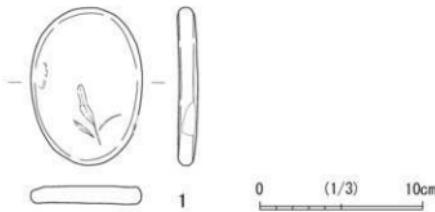
遺構名	横出長 (m)	断面形	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	方向	堆積土	出土遺物	備考	平面図	断面図
SD01	5.2	V字	0.3	0.1~0.2	0.3	N~26°~W	人為			73	88
SD02	17.5	瓶形	2.2~2.7	0.7~1.1	0.3	弧状	自然	SD01・SD02・SD03より古		73	88
SD03	9.9	箱形	1.1	0.8	0.3	N~76°~E	人為	SD01・SD02・SD03より新		73	
SD04	9.3	逆台形	3.1	1.0	1.0	N~57°~W	自然	白石、瓦質、石質土器、瓦、金属製品、石製品、木製品、ガラス製品、種子	SD07・SN02・SK03より古	74	88
SD05	4.5	—	—	—	1.0 以上	(N~8°~E)	自然→人為	白石、自然遺物	SN02より新	74	88



第 91 図 SD04 出土遺物

第 56 表 SD04 出土遺物観察表

番号	遺物・層位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm)
					口径	底径	高さ	
1	SD04	陶器	甕	白石	外表面は灰褐色。胎土は黄褐色。13世紀後半～14世紀前半。耕層土器に転用。			(4.0)
2	SD04	陶器	甕	白石	内面は褐色で外表面は灰褐色。胎土表面は褐色で胎土内は灰褐色。砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(3.9)
3	SD04	陶器	片口鉢	白石	内面は褐色で外表面は褐色。胎土表面は褐色で胎土内は灰褐色。砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(4.9)
4	SD04	陶器	片口鉢	在地産か	内面は褐色で外表面は褐色。胎土は黄褐色で砂粒を含む。内外面ともにコッナデ。			14.2 (3.15)



第 92 図 SD04 出土石製品

第 57 表 SD04 出土石製品観察表

番号	遺物・層位	種別	器種	特徴	法量		
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
1	SD04	石製品	不明石製品	円盤状に整形されている。上面に縦割状の凹みがみられるが、人為的なものか不明。 石材は斜灰質岩。	9.7 存	6.9	1.05 63.5



第93図 SD04出土金属製品

第58表 SD04出土金属製品観察表

番号	遺構・層位	種別	目録	特徴			法量 径(cm) 厚(cm) 重(g)
				形	色	質	
1	SD04下層	金属製品	鉄貨	大錢通宝	青銅色	鋳物	24.50 1.25 2.77
2	SD04下層	金属製品	鉄貨	大錢通宝	青銅色	鋳物	24.84 1.28 2.21
3	SD04下層	金属製品	鉄貨	大錢通宝	青銅色	鋳物	24.37 1.56 3.34
4	SD04下層	金属製品	鉄貨	元豐通宝	青銅色	鋳物	23.24 1.32 2.26



第94図 SD05出土遺物

第59表 SD05出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	目録	形	特徴			法量(cm) 径横 径縦 面高
					内	外	質	
1	SD05	陶器	甕	白石	内外面ともに灰青褐色。胎土は粗粒で砂粒(特に白色ガラス質粒)を含む。	13世紀後半～14世紀前半。		(5.0)
2	SD05	陶器	甕	白石	内面は褐色で外面は褐色灰。胎土表面は褐色で胎土内は灰白色。砂粒を含む。	13世紀後半～14世紀前半。		(12.2)
3	SD05	陶器	甕	白石	内面は灰褐色で外面は褐色灰。胎土表面には褐色で胎土内は褐色灰。砂粒(特に黑色ガラス質粒)を多く含む。	13世紀後半～14世紀前半。		(12.5)

## 7. ピット（第95図、第60表）

調査では15C区を中心に柱穴が多数確認されている。これらの中には柱痕跡をとどめているものも見受けられたが、限られた範囲での検出であるため建物などの復元には至っていない。15A区・15B区で発見された大部分のピットは長軸0.3～0.5m、短軸は0.1～0.3mの範囲に収まるものであり、形状は楕円形が多く、ほかに円形、隅丸方形などがみられる。15C区で発見されたピットも長軸0.3～0.5m、短軸は0.2～0.4mの範囲に収まるものが大勢を占め、形状は楕円形が多く、ほかに円形、隅丸方形などがみられる。

第95図は15C区のP120から出土した白石産陶器の片口鉢である。13世紀後半～14世紀前半。



第60表 ピット出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	跡種	產地	特徴			(法量(cm))
					口径	底径	深さ	
1	P120	陶器	片口鉢	白石	内面は灰白色で外面は灰黄褐色。断土表面は灰褐色で断土内は褐灰色。砂粒を少量含む。内面磨滅。13世紀後半～14世紀前半。			(4.3)

## 8. トレンチ調査（第96図）

県道亘理・塩釜線の西側で、志賀沢川に面する範囲は今回の五間堀川河川改修事業にあわせて河川幅の拡幅、さらには二間堀橋の付け替えが予定されていることから、本発掘調査対象範囲を絞り込むためにトレンチ調査を実施した。トレンチは当初16箇所設定したが、12トレンチについては14トレンチと最終的に繋げたことから、14トレンチに含めている。

トレンチ調査の結果、3・13・14・16トレンチでは遺構・遺物が濃密に確認できた。このうち3トレンチについては15C区として平成26年度に調査を実施し、13・14・16トレンチについては一的に遺構・遺物が分布することが予想されたことから、平成28年度に調査を実施することとした。14トレンチで発見された構



第96図 平成27年度調査区・トレンチ配置図

跡は、後述する平成28年度調査のSD01である。

なお、2トレンチ北側、5トレンチ、6トレンチ北側、7トレンチ、8トレンチ東側、9トレンチ、10トレンチ南側、15トレンチでは自然堤防、あるいは浜堤を形成する土壤は検出されず、湿地状の土層堆積が確認されている。以前に対象地の北側で実施した鉄塔建設に係る確認調査では、広範囲にわたって浜堤砂の分布が確認されており、トレンチ調査で確認された湿地状の土層については志賀沢川の旧河道と考えられる。

### 9. その他の出土遺物（第97・98図、第61・62表）

遺構精査、表土掘削時、及び攪乱内において、少量の遺物が出土している。

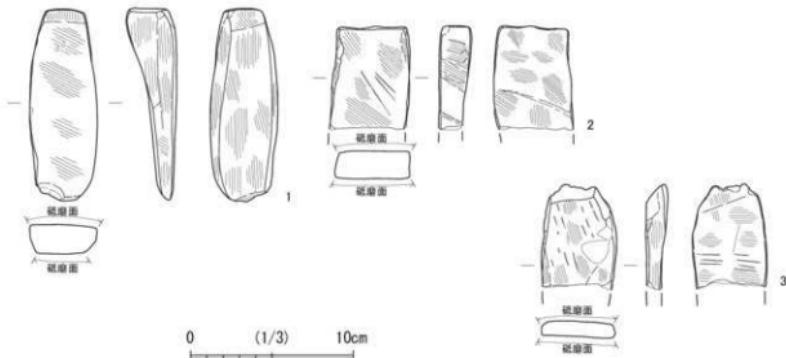
第97・98図はカクラン出土遺物である。第97図は堤焼捕鉢、第98図は石製品の砥石である。砥石は角柱状か板状に整形された2面が主な砥磨面である。いずれも石質が細粒の凝灰岩であり、仕上げ砥として使用されたものと考えられる。



第97図 カクラン出土遺物

第61表 カクラン出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm) 口径 底径 高さ
					内外面鉄錆、砂土は明褐色で砂粒を含む。18世紀末～19世紀。			
2	カクラン	陶器	埴輪	埋蔵				(0.3)



第98図 カクラン出土石製品

第62表 カクラン出土石製品観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	カクラン	石製品	砥石	角柱状の形態で、使用により扁平化している。砥磨面は2面、仕上げ研とみられる。石材はダイサウ質凝灰岩。	完存	11.9	4.1	3	160.0
2	カクラン	石製品	砥石	板状に整形された2面が砥磨面。側面には刃部が認められる。(仕上げ研とみられる。石材はダイサウ質凝灰岩。	半欠	(6.3)	(4.7)	2.0	(103.0)
3	カクラン	石製品	砥石	形態は板状で、2面が砥磨面。全面にスス状の付着物あり、被熱を受けている可能性あり。(仕上げ研とみられる。石材はダイサウ質凝灰岩。	半欠	(6.4)	(4.6)	(0.9)	(53.5)

## 10. 平成 27 年度調査のまとめ

- ・平成 27 年度の調査では、15 A、15 B区、およびトレーニング 16 箇所を設定した。3・13・14・16 トレーニングから多数の遺構が検出され、このうち 3 トレーニングは新たに 15 C 区として拡張設定し、13・14・16 トレーニングに関しては平成 28 年度に継続し、本格調査を実施することとした。
- ・15 A 区で検出した溝跡の覆土最下層から 10 世紀前半の降灰と考えられる灰白色火山灰が確認されたことから、同溝跡は古代まで遡ると考えられる。一方、同火山灰は同溝跡以外では確認されていないこと、同溝跡は自然流路の可能性があること、今年度調査区全域を通して古代に遡る遺構・遺物が確認されていないことから、古代における土地利用は極めて限定的であったと考えられる。
- ・調査では 15 C 区を中心に 8 棟の掘立柱建物跡を確認しているが、ほかにも柱痕跡が確認できる柱穴跡が多くみられることからさらに調査区外にかけて複数の建物跡が存在しているものと思われる。
- ・15 C 区で確認された主要な遺構のうち、最も重複関係が多いのは SD04 → SX02 → SD05 である。また掘立柱建物跡についても重複関係や位置から 3 時期の変遷が考えられる。各時期の遺構は、I 期は SD04 と SB04 で構成される。II 期は SB03 と SX02 のほか、SB03 と同様の主軸方位を有する SB06・SK03、そしてこの時期の建物と重複しない SE02 によって構成されると考えられる。III 期は SD05 と、これにほぼ直交する SB07、さらに SB07 に直交する SB05、そしてこの時期の建物と重複しない SE03 によって構成されると考えられる。これらの遺構はすべて中世段階のものであり、各期の年代観については平成 28 年度の調査成果を参照すると I 期が 12 世紀後半～13 世紀前半、II 期が 13 世紀後半～14 世紀前半、III 期が 14 世紀後半～後半と考えられる。
- ・下野郷館跡の遺跡範囲の中で、湿地が広がると想定されていた県道亘理塩釜線以西において、密に遺構が拡がっていることが確認された。特に 15 C 区で検出された遺構・遺物は中世が主体となり、古代・近世の遺構・遺物が検出されていないことから、これまで五間堀川左岸で実施し、古代・中世・近世の遺構・遺物が検出された調査区の状況とは異なることが明らかとなった。



15 A・15 B区（西側上空から）



15 C区全景（南側上空から）



SB01 堀立柱建物跡（南から）



SB02 堀立柱建物跡（西から）



SE01 井戸跡土層断面（西から）



SE01 井戸跡（西から）



SE02 井戸跡（東から）



SE02 井戸跡 梱構出土状況（西から）



SE02 井戸跡 下駄出土状況（西から）



SE03 井戸跡（南から）



SX01 積穴遺構土層断面（南東から）



SX01 積穴遺構（南東から）



SK02 性格不明遺（南東から）



SK02 土坑（南から）



SK03 土坑（東から）



SD01 溝跡（南から）



SD02 溝跡（北から）



SD02 溝跡土層断面（南から）



SD03 溝跡 遺物出土状況（南から）



SD03 溝跡（北東から）



SD04 溝跡土層断面（西から）



SD04 溝跡（東から）



遺跡地西侧のトレンチ調査全景①（西側上空から）



遺跡地西側のトレーンチ調査全景②（東側上空から）



13 トレーンチ全景（南西から）



16 トレーンチ全景（南から）



14 トレーンチ全景（南西から）



14 トレーンチ 溝跡土層断面（南西から）



SDE02 (第 83 図 1)



SE02 (第 83 図 2)



SE02 (第 83 図 3)



SX01 (第 85 図 1)



SX01 (第 85 図 2)



SX01 (第 85 図 3)



SD03 (第 89 図 1)



SD03 (第 89 図 2)



SD03 (第 89 図 3)



SD03 (第 89 図 4)



SD03 (第 89 図 5)



SD03 (第 89 図 6)



SD03 (第 89 図 7)



SD03 (第 90 図 2)



SD03 (第 90 図 1)



SD04 (第 91 図 1) 内面



SD03 (第 90 図 3)



SD04 (第 91 図 1) 外面



SD04 (第 92 図 1)



カクラン (第 98 図 3)



カクラン (第 98 図 1)



カクラン (第 98 図 1)



カクラン (第 98 図 2)



カクラン 鉄瓶



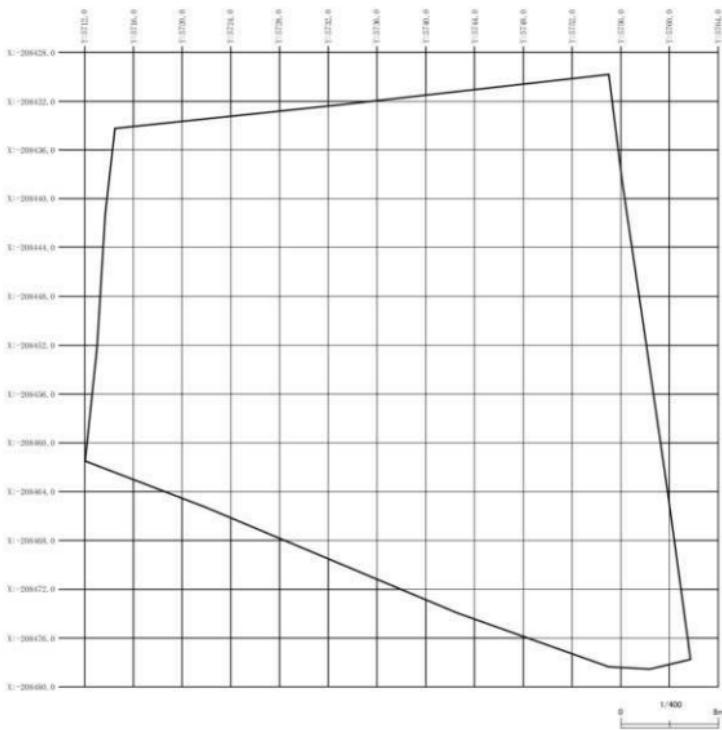
カクラン 鉄瓶 前耳

カクラン 鉄瓶 後耳

## 第VII章 平成 28 年度の調査成果

平成 28 年度の調査区は、平成 27 年度に実施したトレンチ調査の結果を受けて、志賀沢川と五間堀川が合流する地点に設定した。調査面積は 1,757 m<sup>2</sup>である。調査区は平成 12・15 年度に県道亘理塩釜線改良事業に際して設定した A 区・E 区の西側に位置する。

調査では掘立柱建物跡 13 棟、井戸跡 12 基、護岸施設 1 基、性格不明遺構 1 基、土坑 20 基、溝跡 20 条をはじめとする遺構を検出し、中世陶器、近世陶磁器、金属製品、石製品、木製品などの遺物が発見されている。以下に主要な調査成果について記す。

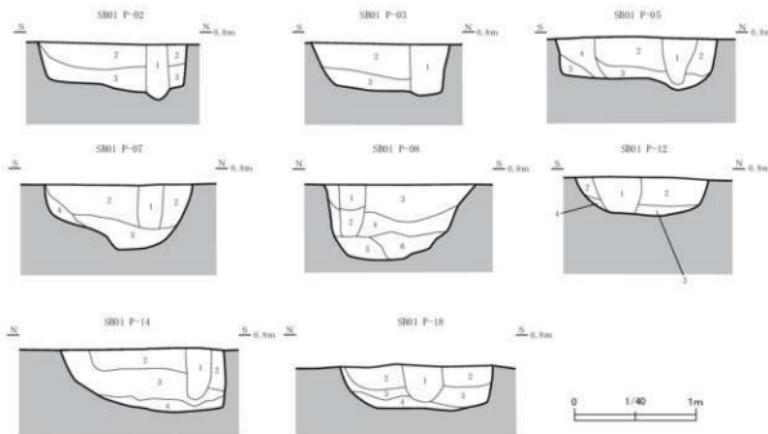


第 99 図 平成 28 年度グリッド配置図

### 1. 掘立柱建物跡

#### SB01 (第 100 ~ 102 図)

東西 8 間以上、南北 3 間の東西棟である。SD04・09 と重複し、いざれよりも新しい。柱穴は 20 口検出し、ほぼ全てで柱痕跡を確認した。平面規模は調査区東側へさらに展開すると考えられるが、確認できた範囲



SB01 P-02 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 備
1	暗褐色	10YR3/3	シルト 黄褐色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
3	灰黃褐色	10YR4/2	粘質シルト 黄褐色シルト大ブロックを多量含む。

SB01 P-03 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 備
1	灰黃褐色	10YR4/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルト・暗褐色シルト中ブロックを多量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト 黄褐色シルト大ブロックをやや多く含む。

SB01 P-05 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 備
1	黒褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルト粒を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト 黄褐色シルト中ブロックを微量含む。
3	灰黃褐色	10YR4/2	粘質シルト 黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
4	暗褐色	10YR3/3	シルト 黄褐色シルト粒を極めて多量含む。
5	黄褐色	10YR5/6	砂質シルト 黑褐色シルト粒を少量含む。

SB01 P-07 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 備
1	黒褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	にふく黄褐色	10YR4/3	シルト 黄褐色シルト中ブロック・黒褐色粘質シルト大ブロックをやや多く含む。
3	灰黃褐色	10YR4/2	粘質シルト 黄褐色シルト中ブロックを少量含む。
4	灰黃褐色	10YR4/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックを多量含む。

SB01 P-09 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 備
1	灰黃褐色	10YR4/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	暗灰色	10YR4/1	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少量、黄褐色粘質シルト大ブロックを微量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックを多量含む。
5	オリーブ褐色	10YR3/2	粘質シルト 黄褐色シルト大ブロックを微量含む。
6	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト 黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。

第102 図 SB01 土層断面図

SB01 P-12 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 樹
1	黒褐色	10R4/2	黒灰色シルト小ブロックを少量含む。
2	灰黄褐色	10R4/2	黒灰色シルト小ブロックを少量含む。
3	にごり-黒褐色	10R4/2	黒灰色シルト小ブロックを微量含む。
4	灰黄褐色	10R4/2	黒灰色シルト小ブロック・マンガンをやや多く含む。

SB01 P-14 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 樹
1	暗褐色	10R3/2	黒灰色シルト粒を微量含む。
2	灰黄褐色	10R4/2	黒灰色シルト小ブロックを少量含む。
3	暗褐色	10R3/2	黒灰色シルト中ブロックを多量含む。
4	オリーブ黒色	2H3/2	粘質シルト 黒灰色シルト小ブロックをやや多く含む。

SB01 P-18 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 樹
1	褐色	10R4/1	黒灰色シルト小ブロックを少量含む。
2	灰黄褐色	10R4/2	黒灰色シルト小ブロックをやや多く。マンガンを少量含む。
3	黒褐色	10R3/2	マンガンを少量含む。
4	暗褐色	10R3/2	黒灰色シルト粒を少量含む。

では桁行が総長 17.5 m以上で、柱間は 2.0 ~ 2.4 m、梁行は総長 6.4 mで、柱間は 1.9 ~ 2.6 mである。建物の主軸は南列で計測すると N-76° -E である。柱穴の掘方の形状は長方形が大勢を占めるほか、少量の方形、楕円形がみられる。柱痕跡の直径は 18 cm前後の円形である。なお、間仕切りや床束などの造構はみとめられない。

#### SB02 (第 100・103 図)

東西1間、南北2間の南北棟である。SD18・19と重複し、いざれよりも新しい。柱穴は6口検出し、3口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.8 mで、柱間は 2.7 ~ 3.1 m、梁行は約 5.8 mである。建物の主軸は西列で計測すると N-10° -W である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 18 cm前後の円形である。

#### SB03 (第 100・104・105 図)

東西1間、南北3間の南北棟である。柱穴は8口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.6 mで、柱間は 1.6 ~ 2.1 m、梁行は約 4.5 mである。建物の主軸は西列で計測すると N-14° -W である。柱穴の掘方の形状は長方形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 12 cm前後の円形である。

#### SB04 (第 100・104・105 図)

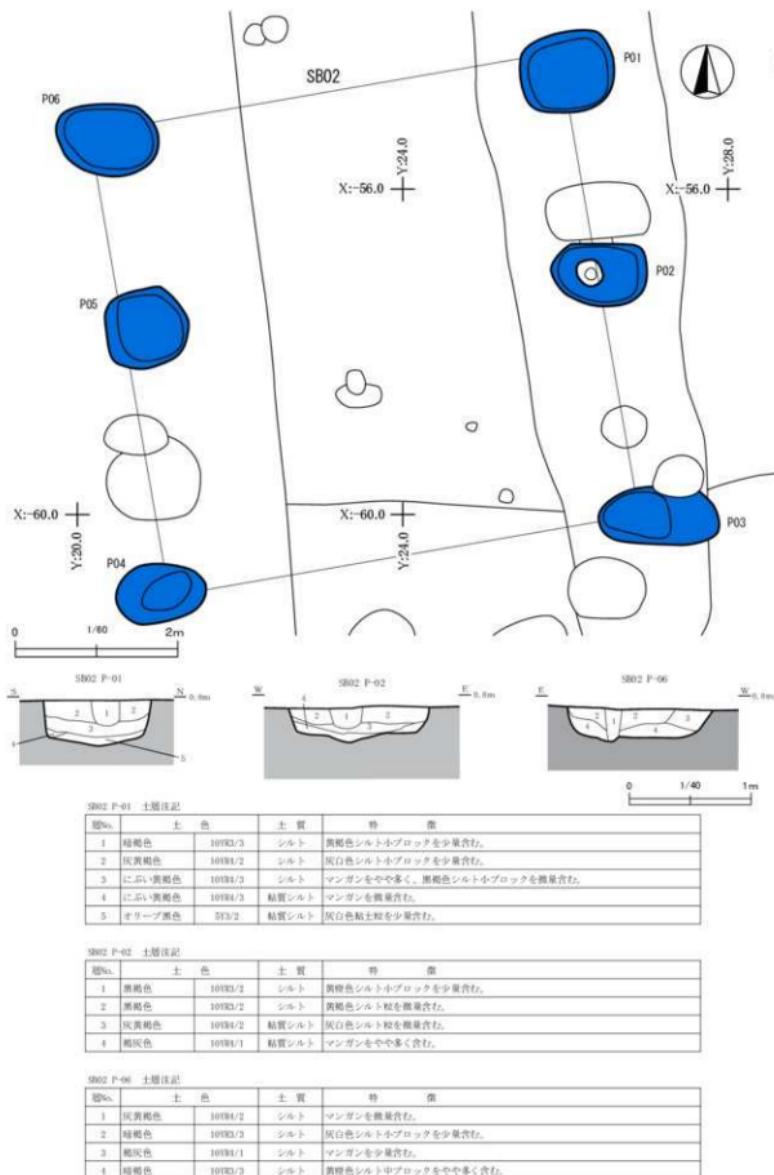
東西3間、南北1間以上の東西棟である。SB05、SD01・04と重複し、いざれよりも古い。柱穴は5口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 12.0 mで、柱間は 3.9 ~ 4.1 m、梁行は約 2.7 m以上である。建物の主軸は北列で計測すると N-87° -E である。柱穴の掘方の形状は方形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 12 cm前後の円形である。

#### SB05 (第 100・104・106 図)

北東及び南西部の柱穴を欠くが、東西3間、南北1間の東西棟と考えられる。SB04、SK08、SD01と重複し、いざれよりも新しい。柱穴は6口検出し、3口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 8.1 mと推定され、柱間は各 2.7 m、梁行は約 3.1 mである。建物の主軸は南列で計測すると N-76° -E である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 12 cm前後の円形である。

#### SB06 (第 100・107 図)

東西2間以上、南北2間の東西棟である。SB07、SD04・06と重複し、SB07・SD06より古く、SD04より新しい。柱穴は6口検出し、3口で柱痕跡を確認した。平面規模は調査区東側へさらに展開すると考え



第 103 図 SB02、土層断面図

られるが、確認できた範囲では桁行が総長 3.6 m 以上で、柱間は各 1.8 m、梁行は総長 3.0 m で、柱間は 1.4 ~ 1.6 m である。建物の主軸は北列で計測すると N-71° -E である。柱穴の掘方の形状は円形及び梢円形で、柱痕跡の直径は 10 cm 前後の円形である。

#### SB07 (第 100・107 図)

東西3間以上、南北2間の東西棟である。SB06、SD06と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は9口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は調査区東側へさらに展開すると考えられるが、確認できた範囲では桁行が総長 7.5 m 以上で、柱間は各 2.5 m、梁行は総長 3.8 m で、柱間は各 1.9 m である。建物の主軸は北列で計測すると N-85° -E である。柱穴の掘方の形状は円形及び梢円形で、柱痕跡の直径は 10 cm 前後の円形である。

#### SB08 (第 100・108・109 図)

東西2間、南北2間の南北棟である。SB07・12と重複し、SB07より古く、SB12より新しい。柱穴は8口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.0 m 以上で、柱間は各 2.5 m、梁行は総長 4.8 m で、柱間は各 2.4 m である。建物の主軸は西列で計測すると N-13° -W である。柱穴の掘方の形状は梢円形で、柱痕跡の直径は 10 cm 前後の円形である。

#### SB09 (第 100・108・109 図)

南西部の柱穴を欠くが、東西5間、南北3間の東西棟と考えられる。SB10、SE05、SD02・07と重複し、SB10・SE05より古く、SD02・07より新しい。柱穴は13 口検出し、7口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 11.8 m で、柱間は 2.2 ~ 2.6 m、梁行は総長 7.8 m で、柱間は 2.4 ~ 2.6 m である。建物の主軸は北列で計測すると N-73° -E である。柱穴の掘方の形状は円形及び梢円形で、柱痕跡の直径は 12 cm 前後の円形である。

#### SB10 (第 100・109・110 図)

東西3間、南北1間の東西棟と考えられる。SB09と重複し、これより古い。柱穴は6口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 9.0 m で、柱間は 2.8 ~ 3.2 m、梁行は 3.0 m である。建物の主軸は南列で計測すると N-70° -E である。柱穴の掘方の形状は梢円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 12 cm 前後の円形である。

#### SB11 (第 100・109・110 図)

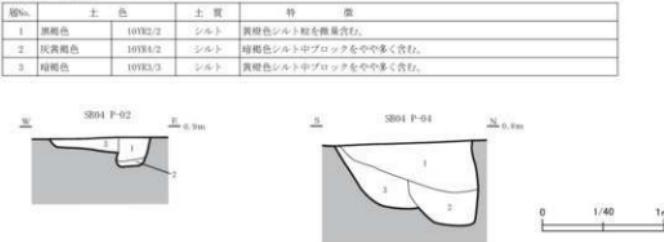
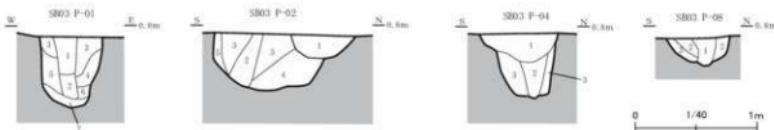
北東部の柱穴を欠くが、東西5間、南北2間の東西棟と考えられる。柱穴は12 口検出し、5口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 10.2 m で、柱間は 2.0 ~ 2.2 m、梁行は総長 6.2 m で、柱間は 3.0 ~ 3.2 m である。建物の主軸は南列で計測すると N-75° -E である。柱穴の掘方の形状は円形及び梢円形で、柱痕跡の直径は 10 cm 前後の円形である。

#### SB12 (第 100・111・112 図)

調査区外へ展開するため南西部の柱穴を欠くが、東西5間、南北3間の東西棟と考えられる。柱穴は10 口検出し、6口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 13.0 m で、柱間は 2.4 ~ 3.0 m、梁行は総長 8.6 m で、柱間は 3.0 ~ 3.2 m である。建物の主軸は北列で計測すると N-79° -E である。柱穴の掘方の形状は円形及び梢円形で、柱痕跡の直径は 10 cm 前後の円形である。

#### SB13 (第 100・111・112 図)

調査区外へ展開するため南西部の柱穴を欠くが、東西3間、南北1間の東西棟と考えられる。柱穴は6口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 6.4 m で、柱間は 2.0 ~ 2.2 m、梁行は 3.7 m



SB04 P-02 土層注記

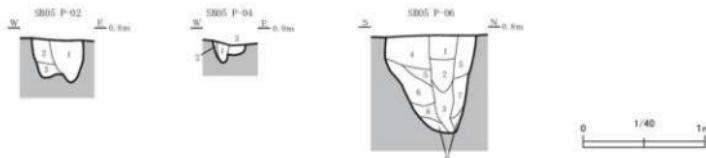
層No.	土 色	土 質	特 殊
1	黒褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルト粒を少量。炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト 黄褐色シルト大ブロックを多量含む。
3	にじい黄褐色	10YR5/3	シルト 黒褐色シルト大ブロックを少量含む。

SB04 P-04 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 殊
1	黒褐色	10YR2/2	シルト 黄褐色シルト大ブロックを少量含む。
2	にじい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト 黒褐色シルト大ブロックを少量含む。
3	褐色	10YR4/4	砂質シルト 灰白色粘質シルト中大ブロック・暗褐色シルト中大ブロックをやや多く含む。

第105図 SB03・04 土層断面図

## 第VII章 平成28年度の調査成果



SB05 P-02 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 雜
1	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト 黒色粘土小ブロックをやや多く含む。
2	暗褐色	10YR3/3	細緻砂質シルト中にブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR5/3	下段に微量の緑色粘土を夾積する。

SB05 P-04 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 雜
1	黒褐色	10YR3/1	シルト 黃褐色シルト小ブロックを少暈含む。
2	暗褐色	10YR3/3	黒褐色シルト粒を微量含む。
3	1C.5E-黄褐色	10YR5/3	黒褐色シルト小ブロックを多暈含む。

SB05 P-06 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 雜
1	黒褐色	10YR3/2	黄褐色シルト小ブロックを少暈含む。
2	黒褐色	10YR3/1	黒色粘土小ブロックを少暈、黄褐色シルト粒をごく微量含む。
3	黒褐色	10YR2/2	黄褐色シルト粒を微量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
5	黒褐色	10YR3/1	黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
6	黒褐色	10YR3/1	黄褐色シルト中ブロックを多暈、黒色粘土小ブロックを微量含む。
7	黒褐色	10YR3/1	黄褐色シルト丸ブロックをやや多く含む。
8	オリーブ褐色	3Y3/1	灰色粘土知友ブロックをやや多く、黄褐色シルト中ブロックを微量含む。
9	オリーブ褐色	3Y3/1	粘質シルト 黄褐色シルト小ブロックを少暈含む。



SA01 P-01 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 雜
1	黒褐色	10YR2/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少暈含む。
2	黒褐色	10YR2/2	黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
3	黒褐色	10YR2/2	黄褐色シルト粒を微量含む。

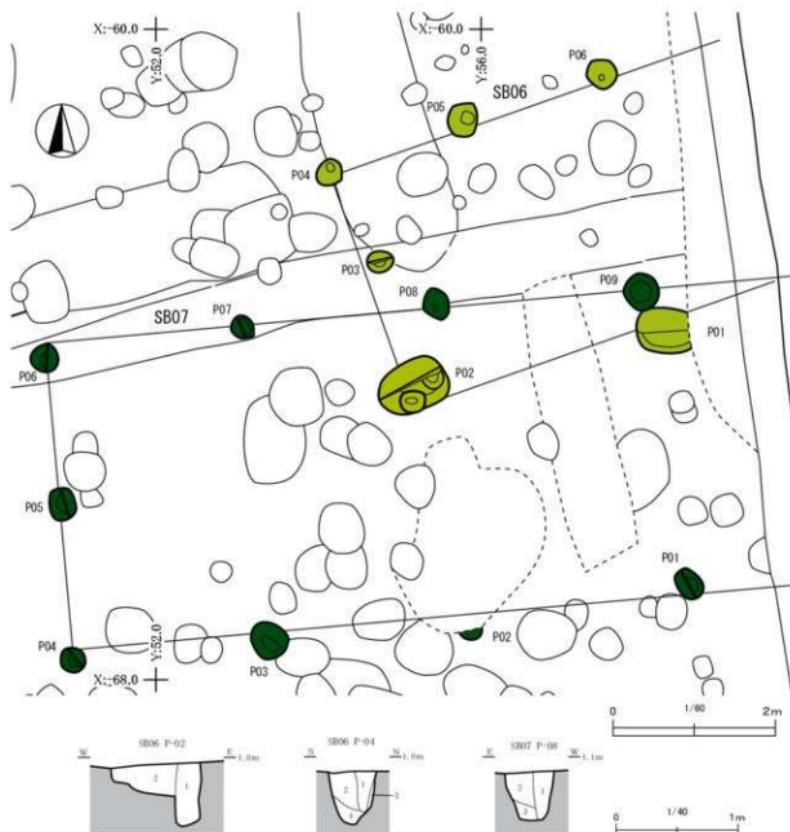
SA01 P-03 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 雜
1	黒褐色	10YR3/1	マンガン粒を微量含む。
2	1C.5E-黃褐色	10YR4/3	黄褐色シルト粒をやや多く含む。
3	黒褐色	10YR2/2	黄褐色シルト小ブロックを少暈含む。
4	1C.5E-黃褐色	10YR5/3	黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。

SA01 P-05 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 雜
1	暗褐色	10YR3/3	黄褐色シルト粒を少暈含む。
2	1C.5E-黃褐色	10YR4/3	黄褐色シルト粒をやや多く含む。
3	黒褐色	10YR2/2	黄褐色シルト小ブロックを少暈含む。
4	1C.5E-黃褐色	10YR5/3	黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。

第106図 SB05・SA01 土層断面図



SB06 P-02 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト 黄褐色シルト粘土やや多く含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルト粘・暗褐色シルト小ブロックを少量含む。

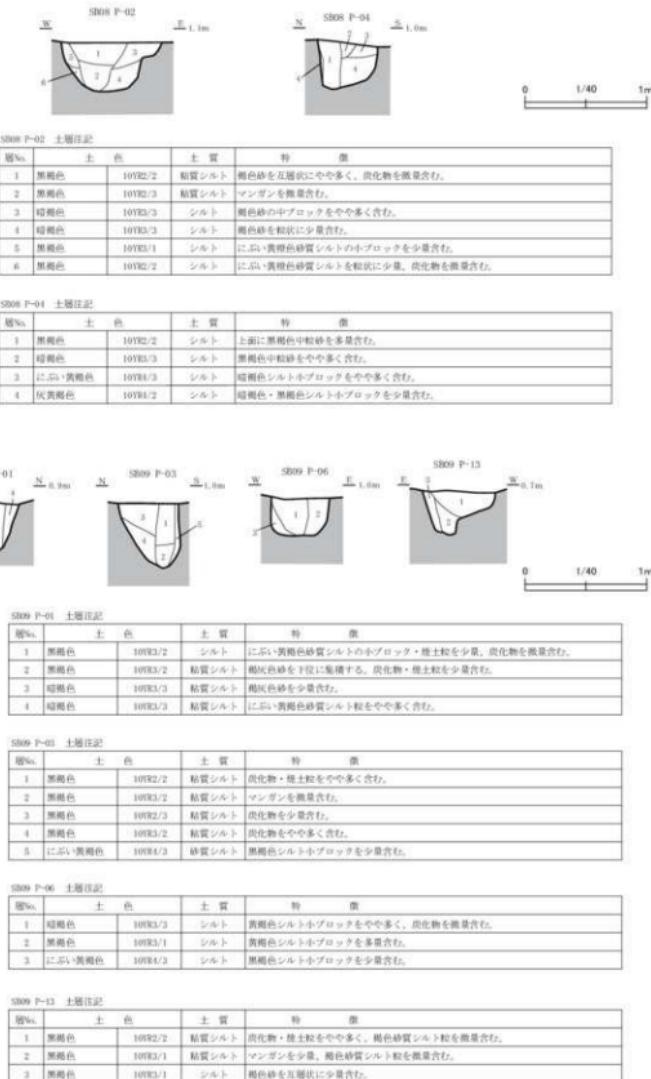
SB06 P-04 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト 黒色粘土粉を微量含む。
3	にごい黒褐色	10YR4/3	シルト 黒褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
4	黒褐色	10YR2/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少量含む。

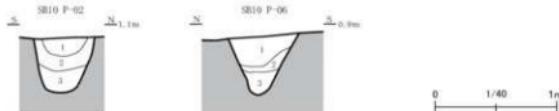
SB07 P-08 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	暗褐色	10YR4/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックを多量含む。
3	黒褐色	10YR2/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少量含む。

第 107 図 SB06・07、土層断面図



第108図 SB08・09 土層断面図

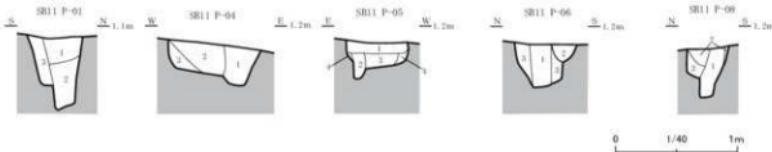


SB10 P-02 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 性
1	黒褐色	10YR2/2	シルト 塗化物を少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	シルト 塗化物を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト 黒色砂質シルト中プロックを少量含む。

SB10 P-06 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 性
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト 黑色シルト小プロック・塗化物を少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト 黑色シルト粒を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト 黑色砂質シルト中プロックを少量含む。



SB11 P-01 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 性
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト 黄褐色シルト小プロックを少量、塗化物を微量含む。
2	稍灰色	10YR4/1	シルト 黄褐色シルト小プロックをやや多く、塗化物を少量含む。
3	にごい黄褐色	10YR4/3	シルト 黄褐色シルト中プロックを多量、塗化物を微量含む。

SB11 P-04 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 性
1	黒褐色	10YR2/2	シルト 黄褐色シルト小プロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト 黄褐色シルト小プロックを下位に集積する。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 黄褐色シルト中プロックを少量含む。

SB11 P-05 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 性
1	黒褐色	10YR2/2	シルト 黄褐色シルト粒を少量含む。
2	黒色	10YR2/1	シルト 黄褐色シルト小プロックを少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 黄褐色シルト中プロックをやや多く含む。
4	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 黄褐色シルト粒を少量含む。

SB11 P-06 土層注記

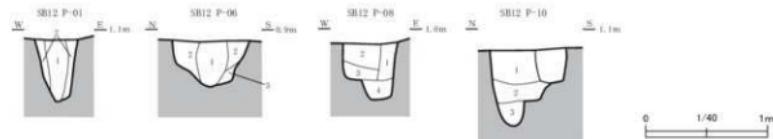
層No.	土 色	土 質	特 性
1	黒褐色	10YR3/1	シルト 黄褐色シルト小プロックを少量、塗化物を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト 黄褐色シルト粒を微量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト 黄褐色シルト小プロックを少量含む。

SB11 P-08 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 性
1	暗褐色	10YR3/3	シルト 黄褐色シルト中プロックを少量、塗化物を微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト 黄褐色シルト小プロックを少量、塗化物を微量含む。
3	にごい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト 黄褐色シルト小プロックを少量含む。

第110図 SB10・11土層断面図

である。建物の主軸は北列で計測するとN-79°-Eである。柱穴の掘方の形状は円形及び楕円形で、柱痕跡の直径は10cm前後の円形である。



SB12 P-01 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10103/1	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10103/2	シルト 黒色シルト中ブロックを少額含む。

SB12 P-06 土層注記

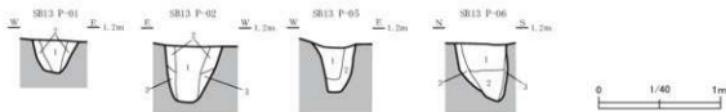
層No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10102/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックを少額含む。
2	暗褐色	10102/3	シルト 硫化物を微量含む。
3	黒褐色	10102/3	粘質シルト 黄褐色シルト細をごく微量含む。

SB12 P-08 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10102/3	シルト 黄褐色シルト中ブロックを少額含む。
2	黒褐色	10102/1	シルト 黄褐色シルト中ブロックを少額含む。中間に黒褐色中粒砂の薄層を微細に含む。
3	黒褐色	10102/3	シルト 黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
4	黒褐色	10102/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックをやや多く、黄褐色シルト小ブロックを少額含む。

SB12 P-10 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10102/2	シルト 黄褐色シルト細・硫化物・堆積物を微量含む。
2	黒褐色	10102/2	粘質シルト 黄褐色シルト小ブロックを少額、硫化物を微量含む。
3	黒褐色	10102/1	粘質シルト 黄褐色シルト細を微量含む。



SB13 P-01 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10103/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少額含む。
2	灰黒褐色	10101/2	シルト 黄褐色シルト細をやや多く含む。

SB13 P-02 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10102/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少額含む。
2	黒褐色	10102/3	シルト 黄褐色シルト細を少額含む。
3	黒褐色	10102/2	粘質シルト 黄褐色シルト細を少額含む。

SB13 P-05 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10102/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少額含む。
2	黒褐色	10102/3	シルト 黄褐色シルト細を少額含む。
3	黒褐色	10102/2	粘質シルト 黄褐色シルト細を少額含む。

SB13 P-06 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10102/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少額含む。
2	黒褐色	10102/2	シルト 黄褐色シルト細を少額含む。
3	黒褐色	10102/3	粘質シルト 黄褐色シルト細を少額含む。

第 111 図 SB12・13 土層断面図

第63表 平成28年度調査 据立柱建物跡属性表

建物名	間数	棟方向	柏行 総長 (m)	柱間寸法 (m)	測定 柱列	梁行 総長 (m)	柱間寸法 (m)	測定 柱列	方向	柱頭 縦径 (cm)	柱穴 規格 (cm)	平面形	備考
SB01	3×8 以上	東西	17.5 以上	2.0,2.0,2.3,2.3, 2.2,2.3,2.2,2.1	南列	6.4	2.6,1.9,1.9	西列	N~76°~E	18	90~140	長方形。 方彌。楕 円形	SD04・09より新 しい
SB02	1×2	南北	5.8	2.7,3.1	東列	5.8	5.8	南列	N~10°~W	18	110~140	椭円形。 楕丸形	SD18・19より新 しい
SB03	1×3	南北	3.6	1.9,2.1,1.6	西列	4.5	4.5	南列	N~14°~W	12	60~90	長方形。 椭円形	
SB04	1以上×3	東西	12.0	4.0,3.9,4.1	北列 以上	2.7	2.7	西列	N~97°~E	12	100~150	方形。 椭円形	SD05・SD01・ 04より古
SB05	(1×3)	東西	(8.1) (2.7)	2.7,2.7	南列	3.1 (3.1)	3.1	東列	N~26°~E	12	40~70	椭円形。 楕丸形	SD04・SD01・ SK08より新 しい
SB06	2×2 以上	東西	3.6 以上	1.8,1.8	北列	3.0	1.4,1.6	西列	N~71°~E	10	30~90	円形。 椭円形	SD07・SD06より古。 SD04より新
SB07	2×3 以上	東西	7.5 以上	2.5,2.5,2.5	北列	3.8	1.9,1.9	西列	N~85°~E	10	30~90	円形。 椭円形	SD06・SD06より新 しい
SB08	2×2	南北	5.0	2.5,2.5	西列	4.8	2.4,2.4	南列	N~13°~W	10	60~100	椭円形	SD07より古。
SB09	3×5	東西	11.8	2.2,2.4,2.6,2.3,2.3	北列	7.8	(5.5),2.3	東列	N~73°~E	12	40~70	円形。 椭円形	SD10・SD05より古。 SD02・07より新
SB10	1×3	東西	9.0	2.8,3.0,3.2	南列	3.0	3.0	西列	N~70°~E	12	50~70	椭円形。 楕丸形	SD09より新 しい
SB11	2×5	東西	10.2	2.0,2.2,2.0,2.0,2.0	南列	6.2	3.0,3.2	西列	N~75°~E	10	30~90	円形。 椭円形	
SB12	3×5	東西	13.0	2.4,2.6,2.4,2.6,3.0	北列	8.6	2.8,-	西列	N~79°~E	10	40~80	円形。 楕圓形。台	SD08より古 い
SB13	1×3	東西	6.4	2.2,2.0,2.2	北列	3.7	3.7	東列	N~79°~E	10	40~50	円形。 椭円形	SD14より古 い

## 2. 井戸跡

SEO1 (第113・114・115~120図、第64~69表)

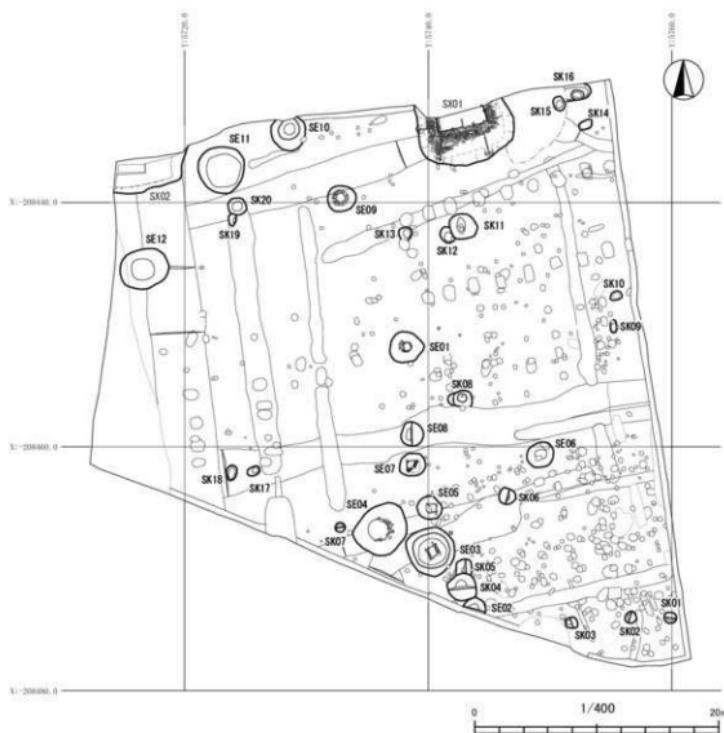
丸太を大きく3つに分割した後に内側を削り貫いたものを再度組み合わせ、井戸枠として使用した井戸である。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸2.7m、短軸は2.5mを測る。断面形状は下部が狭く、上部に向かって大きく開いている。確認面より1.5m下で底面を検出している。井戸枠は底面に据え置いており、高さは120cmが遺存している。井戸枠より上位の堆積土は1層であり、人為的に埋め戻している。2~5層は井戸枠の裏込めである。

第115図~第119図はSE01出土の白石産陶器で、第116図5のみ常滑産か。断面及び外面を研磨に使用するものが多数ある。特に片口鉢は研磨への転用率が高い。第120図はSE01から出土した木製品である。曲物の底板が1点出土している。一部が欠損した後に2個の孔を加え、全部で5個の貫通孔が施されている。欠損後に再利用のために作り直されたものと考えられる。

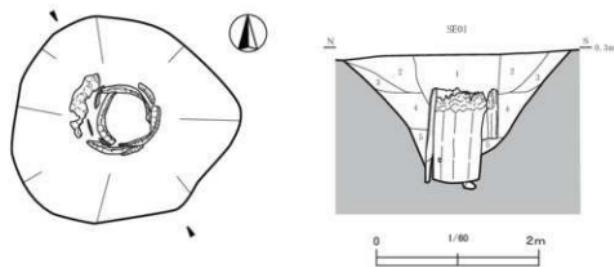
SEO2 (第113・121・133図、第70表)

素掘りの井戸で、調査区南側へさらに展開するが平面形状は円形を呈するものと考えられる。SD04・05と重複し、SD04より古く、SD05より新しい。規模は確認できた範囲では長軸1.9mを測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より1.2m下で底面を検出している。堆積土は10層に分層でき、すべて人為的埋土である。

第121図はSE02出土の陶器皿である。軟質の黄橙色の胎土に貫入の入る灰白色の釉を厚く施し、内面に呉須絵を描く。また高台に砂が付着する。中国漳州窯産と考えられ、16世紀後半~17世紀中頃。



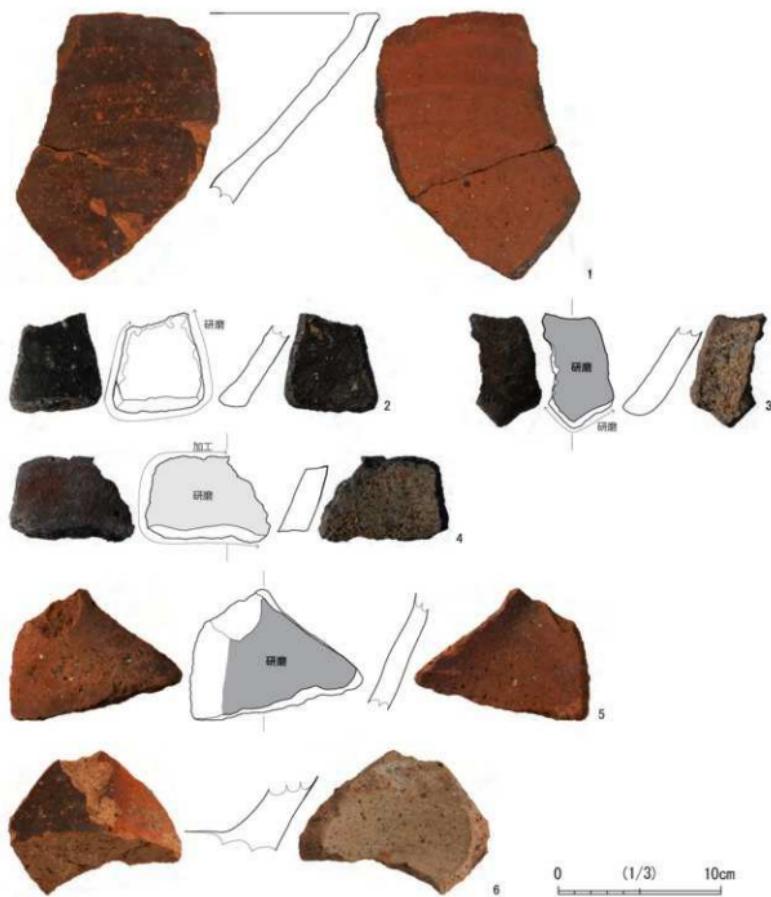
第 113 図 SE・SX・SK 配置図



SE01 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色 10YR3/2	シルト	黄褐色シルト粘土ごく微量含む。
2	灰黃褐色 10YR4/2	シルト	黄褐色シルト中ブロックを多量含む。
3	暗褐色 10YR3/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックを微量含む。
4	オリーブ黒色 3YR1/1	細質シルト	黒褐色シルト小ブロックを少量、黒色粘土中ブロックを微量含む。
5	褐灰色 10YR4/1	砂	微粒砂主体、黒褐色・黄褐色粘土粒を少量含む。

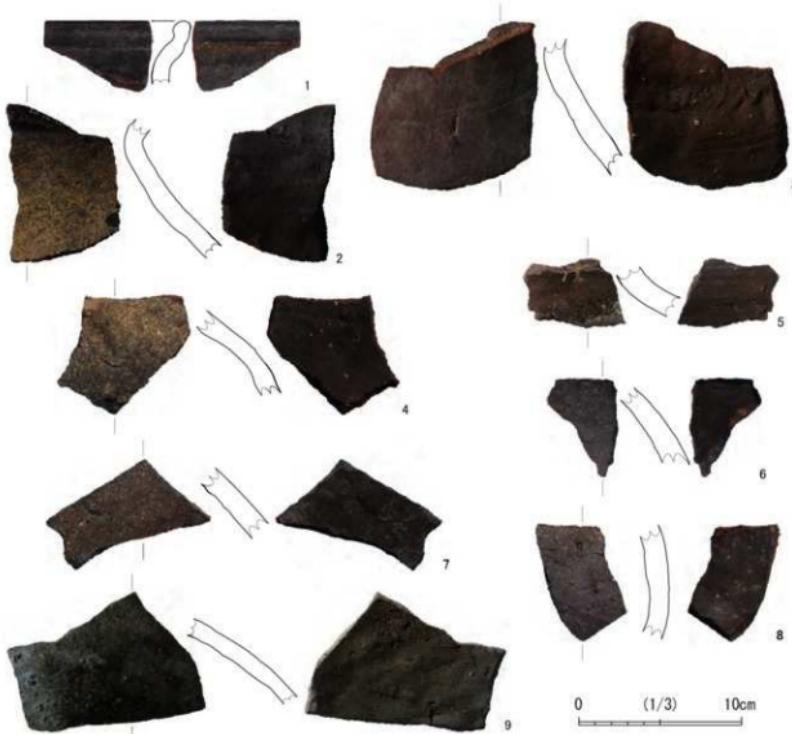
第 114 図 SE01、土層断面図



第115図 SE01出土遺物1

第64表 SE01出土遺物観察表1

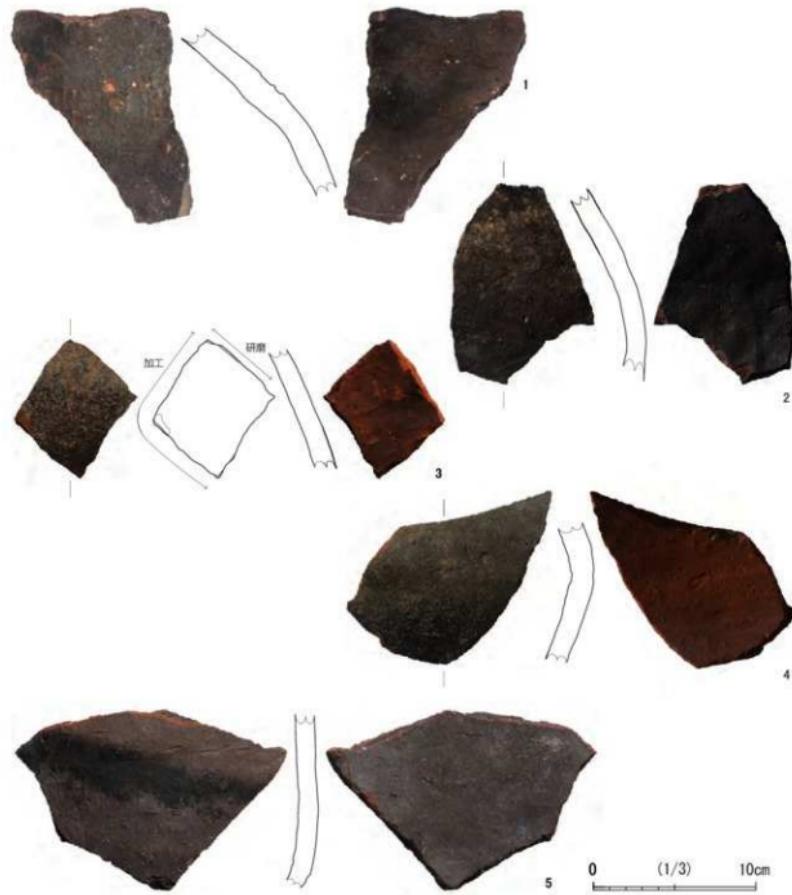
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴			出量(cm)
					口径	底径	高さ	
1	SE01	陶器	片口鉢	白石	内面は明褐色。外面は褐色。胎土表面は明褐色で胎土内に灰色、砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			11.7
2	SE01	陶器	片口鉢	常滑市	内外面ともに灰色。胎土は灰色で白色入糸を含む。12世紀～13世紀。研磨土器に転用。底大長 (3.75) 底大幅 (5.20) 底大厚 (1.40)			
3	SE01	陶器	片口鉢	常滑市	外側は灰色。内面に自然糊付着。胎土は灰色で白色入糸を含む。外面全面研磨。研磨 底大長 (3.90) 底大幅 (1.30)			
4	SE01	陶器	片口鉢	白石	外側は明褐色。内面に自然糊付着。胎土は灰褐色で粗く、砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。			14.2
5	SE01	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は灰褐色で砂粒を多く含む。内面磨減。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。			10.7
6	SE01	陶器	片口鉢	白石	内面は灰褐色。胎土は灰褐色で白色糸。赤色糸を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			4.7



第116図 SE01出土遺物2

第65表 SE01出土遺物観察表2

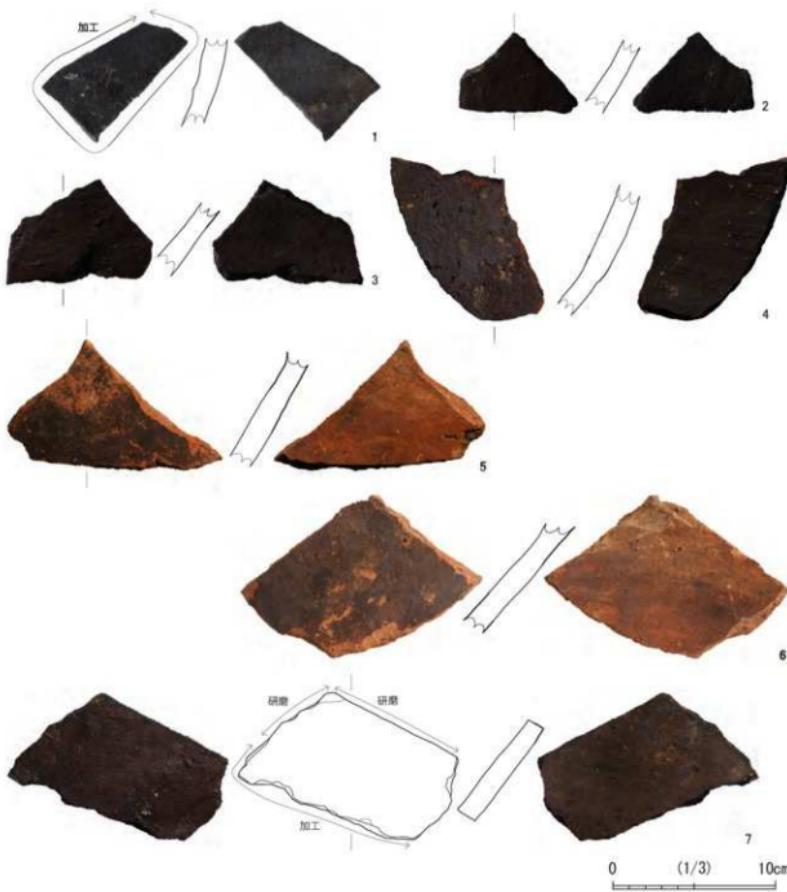
番号	遺構・層位	種別	器種	產地	特徴		法量(cm) 直径 底径 深さ
					内面	外面	
1	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに黒色。胎土は暗赤褐色で砂粒を少く含む。	13世紀後半～14世紀前半。	(3.9)
2	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに赤灰色。外面上に自然縫合着。胎土表面は赤褐色で胎土内には灰白色。	砂粒を含む。	(8.6)
3	SE01	陶器	甕	白石	内面は灰褐色、外面は黒褐色。胎土表面は赤褐色で胎土内は黒灰褐色。白色粉を多く含む。	13世紀後半～14世紀前半。	(8.7)
4	SE01	陶器	甕	白石	内面は暗赤褐色。外面上に自然縫合着。胎土は赤褐色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。	13世紀後半～14世紀前半。	(5.2)
5	SE01	陶器	甕	青磚	内面は黄褐色。外面上は灰褐色。胎土は黄褐色で白色大粒を含む。	13世紀後半～14世紀前半。	(3.9)
6	SE01	陶器	甕	白石	内面は暗赤褐色。外面上は灰褐色。胎土表面は灰褐色。胎土内には暗赤褐色。砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。	13世紀後半～14世紀前半。	(6.7)
7	SE01	陶器	甕	白石	内外面は赤褐色。外面上に自然縫合着。胎土は暗赤褐色で砂粒を含む。内外面に斜方向ナデ。	13世紀後半～14世紀前半。	(4.4)
8	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに赤褐色。胎土表面は灰褐色。胎土内には暗赤褐色。砂粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面上に斜方向ナデ。	13世紀後半～14世紀前半。	(6.0)
9	SE01	陶器	甕	白石	内面は黄褐色。外面上に灰褐色。胎土は黄褐色。13世紀後半～14世紀前半。		(6.1)



第 117 図 SE01 出土遺物3

第 66 表 SE01 出土遺物観察表3

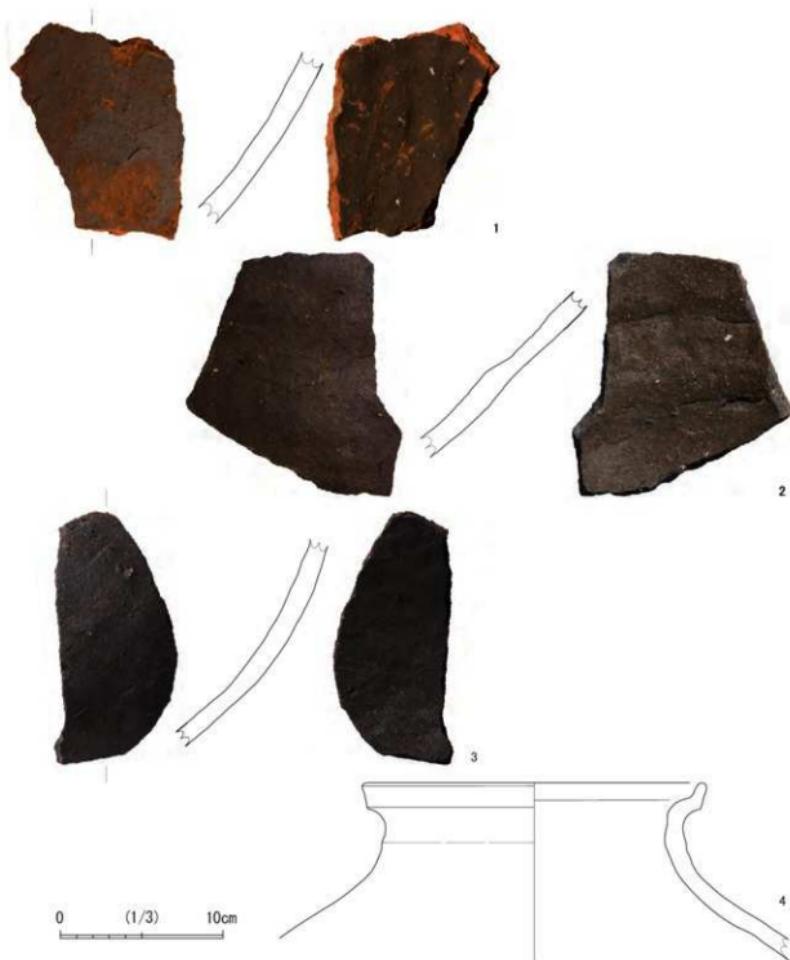
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	出量(cm)		
						口径	底径	高さ
1 SE01-碎2	陶器	甕	白石		内外面共に漆黒色。胎土は暗赤灰で砂礫化含む。13世紀後半～14世紀前半。			(11.2)
2 SE01	陶器	甕	白石		内外面共に漆黒色。外面上半に自然釉付着。胎土表面共に漆黒色。胎土内は細灰白色。砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面上に斜方向ナデ。			(11.6)
3 SE01	陶器	甕	白石		内面共に漆黒色。外面上半に漆黒色。自然釉付着。胎土は明赤褐色で白色大粒を含む。			(6.8)
4 SE01	陶器	甕	白石		内面共に漆黒色。外面上半に漆黒色。自然釉付着。胎土は漆黒で白色粒を多く含む。			(6.6)
5 SE01	陶器	甕	白石		内外面共に漆黒色。胎土表面には漆黒色。胎土内は灰白色。内面上に斜方向ナデ。外面上にタテ方向ナデ。			(8.5)



第 118 図 SE01 出土遺物観察表4

第 67 表 SE01 出土遺物観察表4

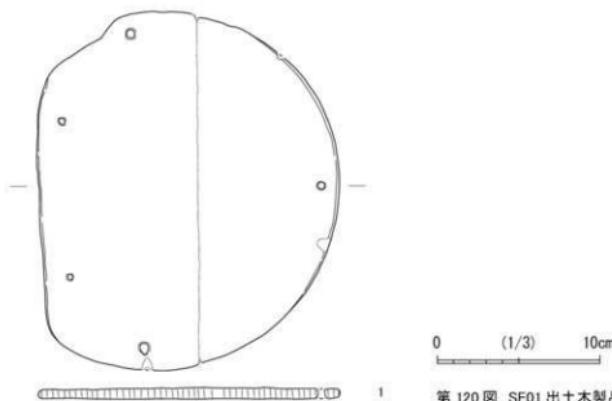
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						横径	底径	高さ
1	SE01	陶器	便	白石	内外面ともに灰色。胎土は黄灰色。内面にロココナザ。外面にタテ方向ナザ。周縁を加工している。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。			(5.4)
2	SE01	陶器	便	白石	内外面ともに褐色。胎土は黒褐色で砂粒を多く含む。内面に斜方向ナザ。外面にタテ方向ナザ。13世紀後半～14世紀前半。			(4.5)
3	SE01	陶器	便	白石	内外面ともに褐色。胎土は褐灰色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナザ。外面にタテ方向ナザ。13世紀後半～14世紀前半。			(4.5)
4	SE01	陶器	便	白石	内外面ともに褐褐色。胎土表面にはヨコ・タテ褐色。胎土内には暗灰色。砂粒を含む。内面にヨコ方向ナザ。外面にタテ方向ナザ。13世紀前半。			(8.0)
5	SE01	陶器	便	白石	内面(1)にヨコ・垂直。外面部(2)に褐色。胎土内にヨコ・褐色で砂粒を含む。内面に斜方向ナザ。外面にヨコ方向ナザ。13世紀後半～14世紀前半。			(7.0)
6	SE01	陶器	便	白石	内面は灰褐色。外面は褐灰色。胎土はに白・黄褐色で砂粒を含む。内面にヨコ方向ナザ。外面にタテ方向ナザ。13世紀後半～14世紀前半。			(6.7)
7	SE01	陶器	便	白石	内面は灰褐色。外面は赤灰色。胎土は暗褐色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナザ。外面に斜方向ナザ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (7.4)	最大幅 (12.0)	最大厚 (1.0)



第119図 SE01出土遺物5

第68表 SE01出土遺物観察表5

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	重量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SE01	陶器	便	白石	内外面ともに灰褐色。胎土表面は均一・褐色。胎土内には少い黄褐色。13世紀後半～14世紀前半。			(10.5)
2	SE01	陶器	便	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は褐灰色で砂粒(特に白色粒)を多く含む。内面に斜方向ナデ。外面上斜方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(10.4)
3	SE01	陶器	便	白石	内外面ともに黒褐色。内面下半に自然釉付着。胎土表面(11)に赤褐色。胎土内は細灰褐色。砂粒を多く含む。内面に斜方向ナデ。外面上斜方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(12.5)
4	SE01	陶器	便	白石	内外面ともに褐灰色。胎土表面は薄灰褐色。胎土内は赤褐色。砂粒を少量含む。13世紀後半～14世紀前半。	21.2		(11.0)



第120図 SE01出土木製品

第69表 SE01出土木製品観察表

番号	遺物・層位	種別	器種	特徴	保存			樹種
					長さ	幅	厚さ	
1	SE01	木製品	曲物底板	両側用品合、周囲に5個の貫孔があり、柱材。	底板2/3	22.1	18.7	0.7 杉



第121図 SE02出土遺物

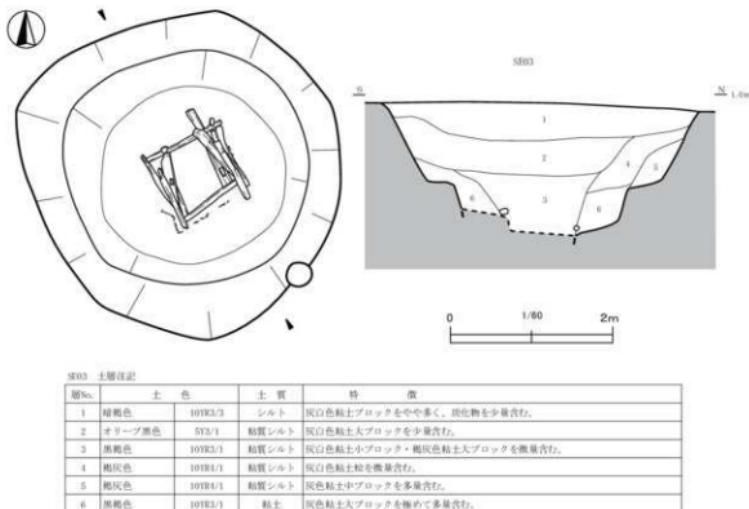
第70表 SE02出土遺物観察表

番号	遺物・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SE02	陶器	盤	滋賀県	内外面ともに灰白色。胎土はにぶい黄褐色で軟質。内面に具象紋。高台に砂目。16世紀後半～17世紀中期。	13.8	(2.3)	

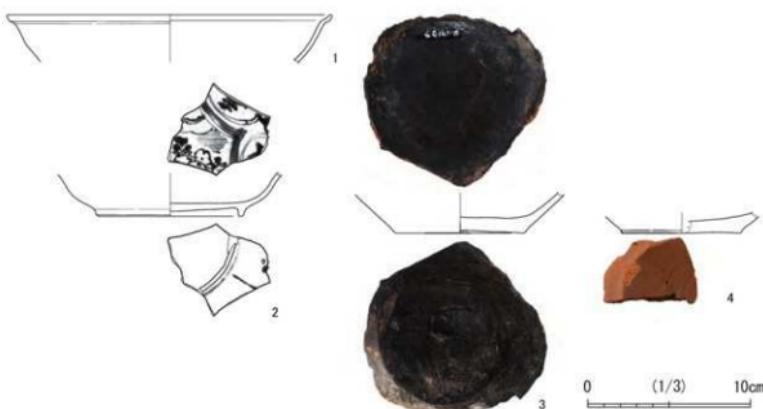
SE03（第113・122・123図、第71表）

素掘りの井戸で、下部に廃材を転用したと考えられる水溜が存在する。SD02・07と重複し、いずれよりも新しい。平面形状は円形を呈し、規模は長軸3.9m、短軸は3.8mを測る。断面形状は漏斗状を呈する。確認面より1.6m下で確認した水溜施設の上部までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。水溜施設はホゾ穴が穿たれた長さ0.9～1.1mに切りそろえた廃材を横位に積み上げ、その外側には湧水を濾過するためか革を密に立て並べている。堆積土は6層に分層できるが、3～6層の堆積の状況から本来はより上位まで井戸枠が存在していた可能性も考えられる。井戸廃棄後に堆積した1・2層を含め、すべて人為的埋土である。

第123図はSE03出土遺物である。1・2は青花磁器である。8分割した文様区画をもつ芙蓉手のなかでも、桃果形の文様区画をもつ明山手である。17世紀前半。3・4はロクロ成型のかわらけである。3は特に口徑の大きな皿で、内外面に厚く油煙痕と炭化物が付着している。



第122図 SE03、土層断面図



第123図 SE03出土遺物

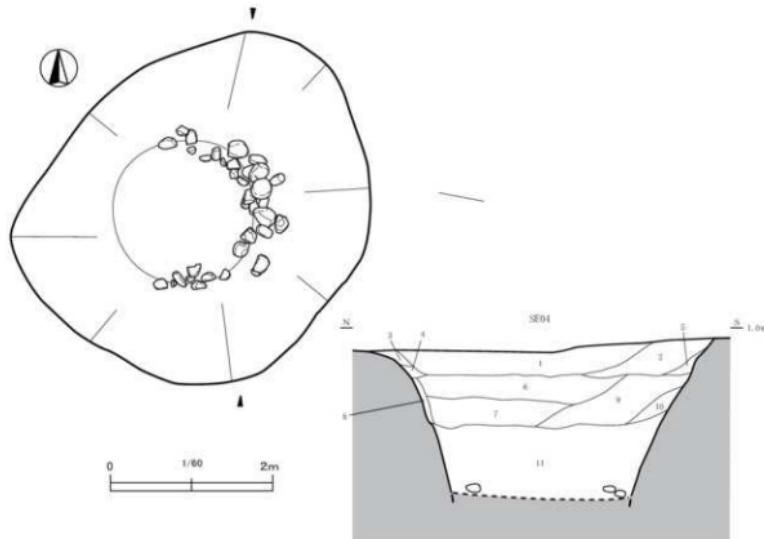
第71表 SE03出土遺物観察表

番号	遺物・層位	種別	器種	産地	特徴	寸法(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SE03	青花磁器	瓶	中国	素督手(明山水), 内面に草花文。17世紀前半。	(20.0)	(8.9)	(2.8)
2	SE03	青花磁器	瓶	中国	素督手(明山水), 内面に草花文。17世紀前半。		(8.6)	(2.7)
3	SE03	小口瓶	不明	不明	ロクロ使用。底部外側切欠き。内外面全体に強く鉄錆斑と鉄化物が付着。		8.0	2.5
4	SE03	小口瓶	不明	不明	ロクロ使用。底部外側は2回転削切。底部内面はクロナザ。内外面ともに明黄釉色。胎土は灰褐色。	7.2		(1.25)

## SE04 (第 113・124 ~ 126 図、第 72・73 表)

SD02・07と重複し、いずれよりも新しい。素掘りの井戸で、平面形状は梢円形を呈し、規模は長軸 4.5 m、短軸は 3.7 m を測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より 1.9 m 下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。掘り下げ中に東側を中心に入頭大の礫の集中が認められているが、明確な石の積み上げはみられない。堆積土は 11 層に分層でき、すべて人為的埋土である。

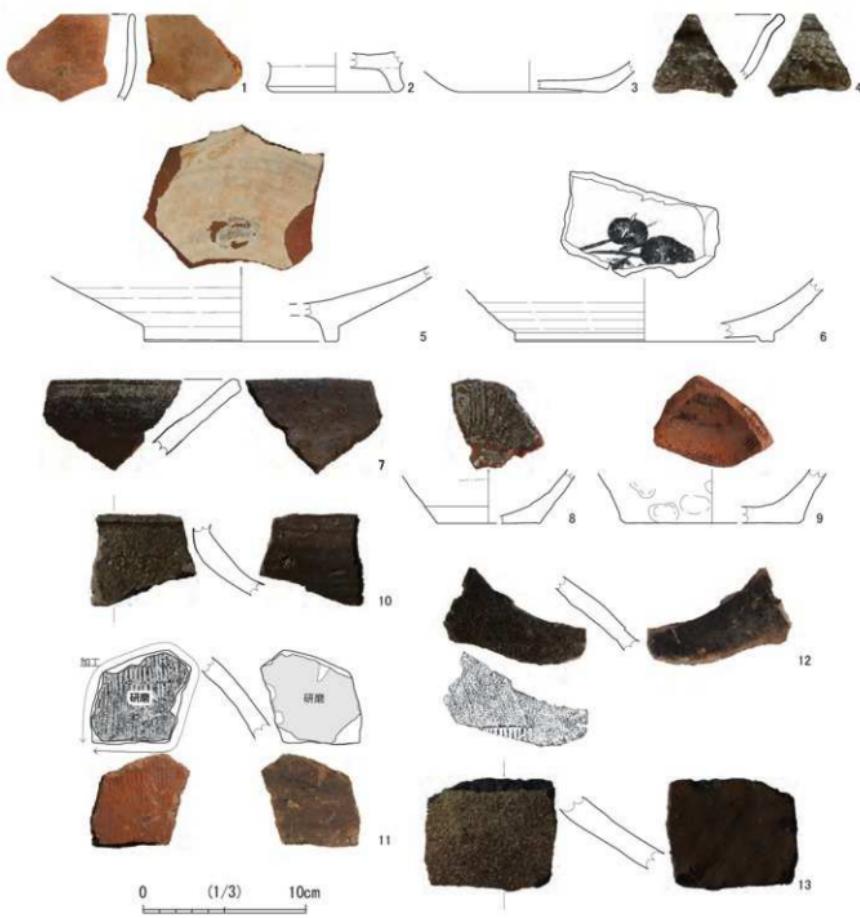
第 125・126 図は SE04 出土遺物である。第 125 図 1 は肥前陶器の呉器手碗で 17 世紀後半。2 は山茶碗で 12 世紀前半。3 はロクロ成型のかわらけ。4 は瀬戸美濃産折縁皿で 16 世紀後半。5 は肥前産の陶器鉄絵皿。6 は瀬戸美濃産鉄絵皿で 17 世紀末～18 世紀初頭。7・8・9・13 は白石産陶器で 13 世紀後半～14 世紀前半、10～12 は常滑産陶器で 12 世紀中頃から 14 世紀。第 126 図は 1～7 が白石産陶器で 13 世紀前半～14 世紀前半。8 は常滑産陶器で 12 世紀後半～13 世紀前半。



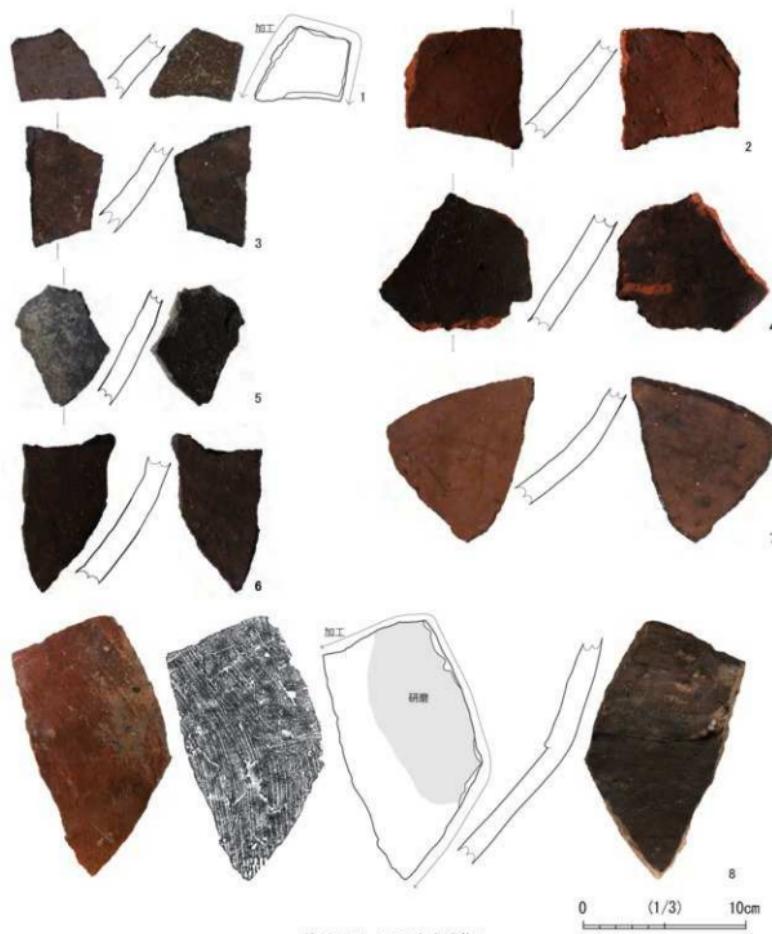
SE04 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	褐褐色	10YR2/3	シルト 黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。マンガンを下位に集積。
2	褐褐色	10YR2/3	シルト 黄褐色シルト小ブロックを多量。植土鉢を少量含む。
3	灰褐色	10YR4/2	砂質シルト 黄褐色シルト粒を少量含む。
4	褐褐色	10YR2/2	シルト 黄褐色シルト粒をやや多く含む。
5	にじむ黄褐色	10YR5/3	シルト 黄褐色シルト小ブロックをやや多く。黄褐色シルト粒を少量含む。
6	黒褐色	10YR2/1	シルト 黑褐色粘土中ブロックをやや多く含む。
7	オリーブ黒色	2T3/2	粘質シルト 黑褐色粘土大ブロックを多量含む。
8	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト 黑褐色粘土を多量含む。
9	湖灰色	2.3T1/1	粘質シルト 黑褐色粘土大ブロックを多量含む。暗褐色シルト粒をごく微量含む。
10	オリーブ黒色	2T3/1	シルト 暗褐色中粗砂をやや多く含む。暗褐色シルト粒をごく微量含む。
11	黒色	10YR2/1	粘土 入頭大の礫をやや多く含む。黑色砂を中ブロック状に少量含む。

第 124 図 SE04、土層断面図



第125図 SE04出土遺物1



第126図 SE04出土遺物2

第72表 SE04出土遺物観察表1

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	寸法(cm)			写真番号
						口径	底径	高さ	
1	SE04	陶器	罐	把柄	器底部黒土、内外面浅黄色。胎土は淡黄色。精良。17世紀後半。			(5.2)	
2	SE04	陶器	罐	山茶罐	山茶罐1a型式。12世紀前半。	8.4	(7.7)	2.45	
3	SE04	白木	桶	不明	ロクロ使用。底盤外側縁付系切込みやや滑潤。内面と底盤外側に凹痕有。		(9.0)	(1.9)	
4	SE04	陶器	瓶	瓶	瓶口縁無。内外面に灰褐色。胎土は灰白色。粗良。天保第3段階。16世紀後半。			(4.9)	
5	SE04	陶器	瓶	肥前	外側は灰褐色。内面は灰石緑(軟鉄)。胎土は灰白色。粗良。12世紀後半。		12.0	(4.8)	
6	SE04	陶器	瓶	瓶	瓶口縁無。内面に長石緑(淡黄色)。粗鉄。外側に灰褐色(淡黄色)。胎土は淡黄色。精良。軟鉄。豐樂第1段階第6小類。17世紀末～18世紀初。		16.0	(3.9)	
7	SE04	陶器	瓦片	瓦片	白石か。内外面に灰褐色。新土は灰色。			(4.6)	
8	SE04	陶器	埴輪	白石か	外側はに灰褐色。胎土は灰色で砂粒を多く含む。内面に灰緑(まだら)。		6.4	(3.0)	
9	SE04	陶器	埴輪	白石	内外面ともにに灰褐色。胎土は明赤褐色で白色大粒を含む。内面は使用による黒斑滅滅。13世紀後半～14世紀前半。		(12.0)	(3.9)	
10	SE04	陶器	便	常滑	内面は灰褐色。外側に灰褐色。胎土は褐色で白色粒を含む。6b～8型式。12世紀後半～14世紀。			(5.9)	
11	SE04	陶器	便	常滑	内側は褐色で外側は褐色。胎土には54%黒褐色で白色大粒を含む。第1段階 1b～4型式。12世紀後半～13世紀初頭。研磨土器と利用。			(5.2)	
12	SE04	陶器	便	常滑	内外面ともに灰褐色。外側に自然釉付管。胎土は灰褐色で白色大粒を含む。第1段階 1b～4型式。12世紀中頃～13世紀初頭。			(4.5)	
13	SE04	陶器	便	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は灰色で砂粒(特に白色粒)を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(4.4)	

第73表 SE04出土遺物観察表2

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	寸法(cm)			写真番号
						口径	底径	高さ	
1	SE04	陶器	便	白石	内面は灰褐色。外側はに灰褐色。胎土は灰褐色で砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。			(4.0)	
2	SE04	陶器	便	白石	内面はに灰褐色。胎土はに灰褐色で白色大粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(6.0)	
3	SE04	陶器	便	白石	内面はに灰褐色。胎土は暗褐色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外側にヨコ方向ナゲ。			(5.5)	
4	SE04	陶器	便	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は明赤褐色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(7.1)	
5	SE04	陶器	便	白石	内面は灰褐色。外側は灰褐色。胎土は灰褐色で白色大粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(7.0)	
6	SE04	陶器	便	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は灰褐色で砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(7.0)	
7	SE04	陶器	便	白石	内面は灰褐色。外側はに灰褐色。胎土は灰褐色で白色大粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(9.3)	
8	SE04	陶器	便	常滑か	内面は灰褐色。外側は常滑。胎土は灰褐色で砂粒を含む。第1段階 1b～4c。12世紀後半～13世紀前半。研磨土器に転用。			(15.9)	

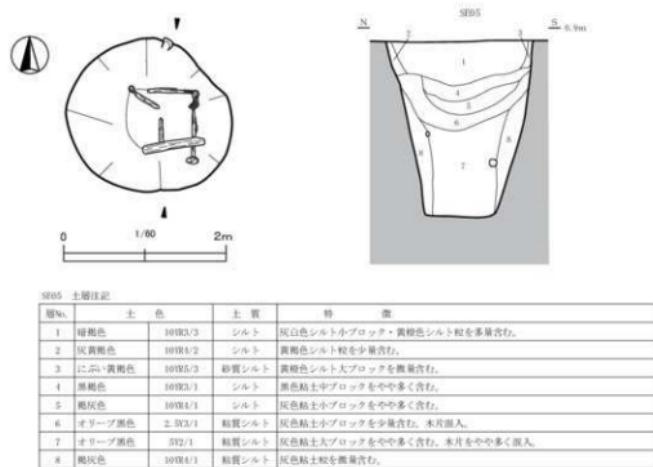
## SEO5 (第113・127図)

SB09・SD02と重複し、いずれよりも新しい。井戸枠を伴う井戸跡である。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸 2.1 m、短軸は 1.8m を測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より 2.1 m 下で底面を検出した。井戸枠の構造は隅柱の上位にホゾ穴を穿ち、横桟を取付けるものであり、側板のかわりに葦を立て並べている。堆積土は8層に分層でき、1～6層は人為的埋土、7層は自然堆積である。また8層は井戸枠の裏込めである。

## SEO6 (第113・128・133図、第74表)

素掘りの井戸で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長軸 2.2 m、短軸は 2.1m を測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より 1.8 m 下で底面を検出している。堆積土は4層に分層でき、1～3層は人為的埋土、4層は自然堆積である。

第128図はSE06から出土した木製品である。連歛下駄が1点出土している。台部は隅丸長方形で、鼻緒穴は円形であり、大きさから子供用と考えられる。木取りは板目材である。



第127図 SE05、土層断面図

## SE07（第113・129・130図、第75表）

井戸枠を伴う井戸跡である。平面形状は梢円形を呈し、規模は長軸2.1m、短軸は1.8mを測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より1.5m下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。井戸枠は南東部が調査時にはすでに崩落していたが、確認面から1.2m下に存在するごく小規模な段に設けられている。その構造は長さ45cmほどの楕柱の下部にホゾ穴を穿ち、長さ80cmほどの横桟を取付ける。その後、長さ30cmほどに切りそろえた竹を横桟の背後に側板のかわり立て並べ、竹の上部に長さ100cmほどで径10cm前後の木材を「井」の字状に載せる。なお、この井戸枠の内部は径100cmほどの円形に掘り抜かれている。堆積土は8層に分層でき、1~4層は人為的埋土、6・7層は井戸枠の裏込め、5・8層は自然堆積である。

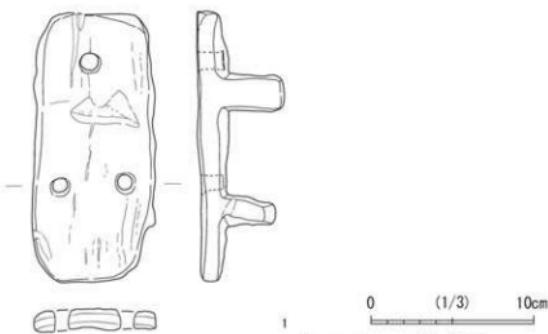
第130図はSE07から出土した木製品である。漆器椀が1点、柄杓が1点出土している。漆器椀は全面が黒漆仕上げで、内外面と高台内面に赤漆文様が描かれている。柄杓は杓の部分のみで、側板の曲物は2枚のへぎ板を樹皮で縫い合わせている。底板の木取りは柾目材である。

## SE08（第113・133図）

SD01と重複し、これより新しい。素掘りの井戸で、平面形状は梢円形を呈する。規模は長軸2.0m、短軸は1.8mを測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より1.6m下で底面を検出している。堆積土は8層に分層でき、すべて人為的埋土である。

## SE09（第113・131・132図、第76表）

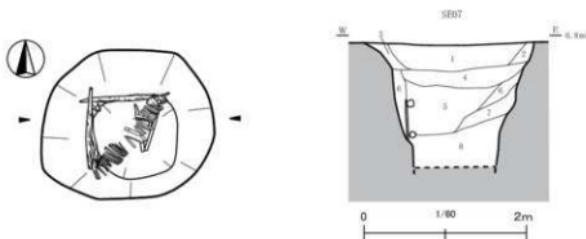
SD03と重複し、これより新しい。井戸枠を伴う井戸跡である。平面形状は梢円形を呈し、規模は長軸2.3m、短軸は2.1mを測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より2.4m下で底面を検出している。井戸枠の構造は、最下部に直径80cm、高さ70cmほどで底板を外した桶を設置し、その上部から高さ約70cmで、5~6段ほどの河原石を円形に積み上げている。堆積土は8層に分層でき、1~6層は人為的埋土、7・8層は井戸枠の裏込めである。



第128図 SE06出土木製品

第74表 SE06出土木製品観察表

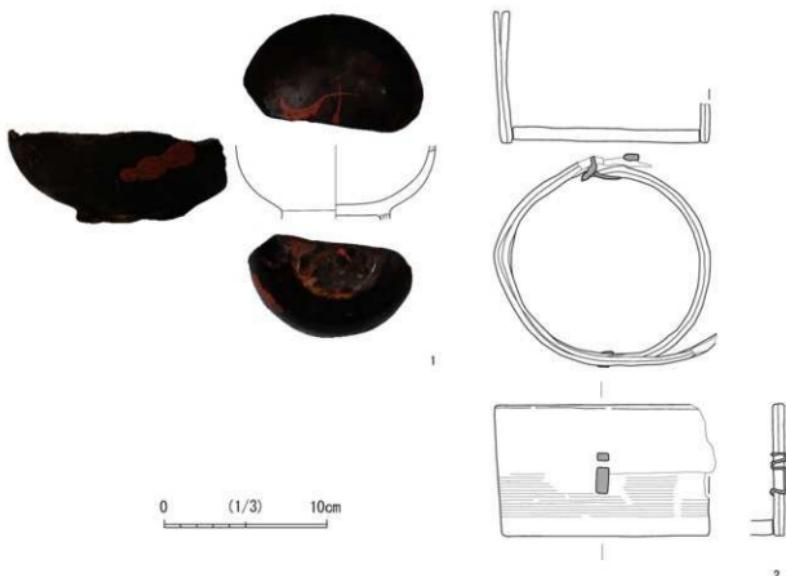
番号	遺構・部位	種別	器種	特徴	法量(cm)			種類	
					残存	長さ	幅		
1 SE06	丸製品	漆塗下駄	子供用か、板目材。		残存	16.6	7.5	5.3	少



SE07 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト 褐色シルト小ブロックを微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト 褐色シルト小ブロック・黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを微量含む。
4	褐色	10YR4/1	シルト 灰白色シルト小ブロックを少量含む。
5	黒褐色	10YR4/1	シルト 灰白色シルト細を多く微量含む。
6	褐色	10YR4/1	シルト レンガを中位に集積する。
7	褐色	10YR4/1	シルト 灰白色シルト中ブロックをやや多く含む。
8	黒褐色	10YR3/1	シルト 灰白色シルト細を多く微量含む。

第129図 SE07、土層断面図



第130図 SE07出土木製品

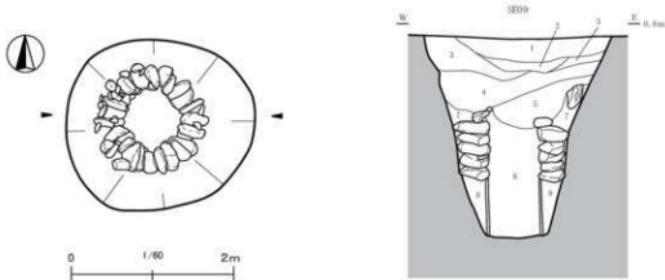
第75表 SE07出土木製品観察表

番号	遺構・層位	種別	部種	特徴	現存	寸法(cm)			樹種
						口径	底径	高さ	
1	SH07	木製品	漆器	全体、黒漆(黒色)仕上げ。高台内面に赤漆文様。	体部 1/2			(4.5)	ブナ属
2	SH07	木製品	納戸	側板は曲物。2枚を横皮で縫い合わせている。底板は直材。	門の 1/2	13.0	8.1	0.7	計葉樹

第132図はSE09出土遺物である。1は岸窯系陶器の擂鉢で17世紀末～18世紀。2は産地不明の瓦質土器の鉢である。

#### SE10 (第113・133図)

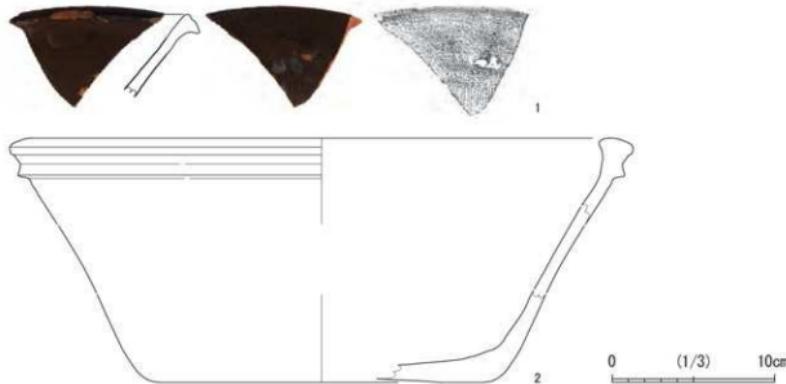
SD17と重複し、これより新しい。また北側の一部は調査区外へ展開する。素掘りの井戸で、平面形状は梢円形を呈する。規模は長軸2.8m、短軸は2.7mを測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より1.9m下で底面を検出している。堆積土は14層に分層でき、1～12層は人為的埋土、13・14層は自然堆積である。



SE09 土層注記

層No.	土色	土質	特　　徴
1	灰黄褐色	10TB1/2	灰白色シルト中プロックを多量。黄褐色シルト粒をやや多く含む。
2	褐色	10TB1/4	黒褐色粘土粒をやや多く。褐色シルト中プロックを微量含む。
3	暗褐色	10TB2/3	灰白色シルト中プロックを少量含む。マンガンを下層に発現。
4	黒褐色	10TB2/1	灰色粘土小プロックを少量。黒色粘土中プロックを微量含む。
5	セリーブ黒色	213/1	褐色粘土中プロックを少量含む。
6	黒色	10TB2/1	礫を少量。植物遺体を微量含む。
7	に古い黒褐色	10TB5/3	砂質シルト 黒褐色シルト小プロックをやや多く含む。
8	黒褐色	10TB2/2	粘質シルト 製込みの人類灰へ夢火の礫を多量含む。

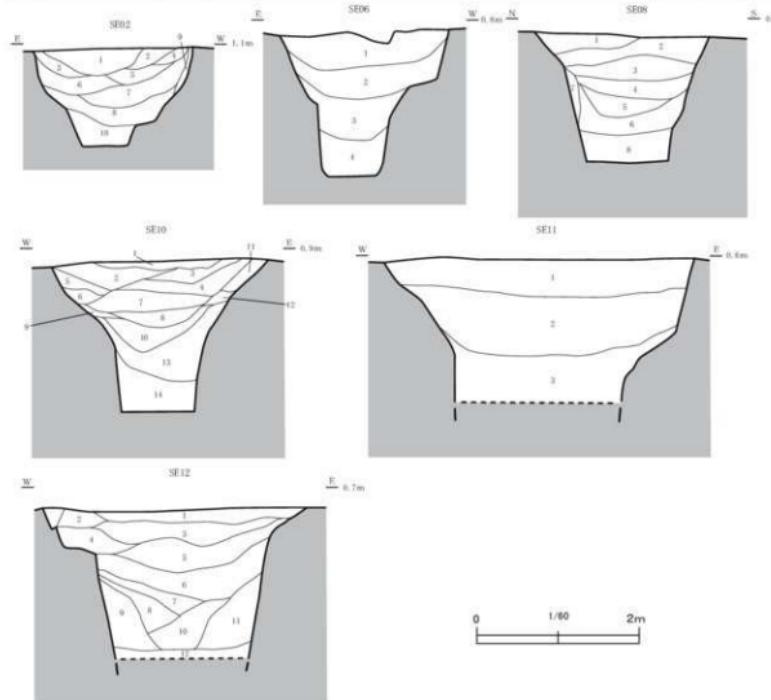
第131図 SE09. 土層断面図



第132図 SE09 出土遺物

第76表 SE09出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm)
					口径	底径	器高	
1	SE09 中層	陶器	埴輪	浮遊系	内外面に鉄錆、暗褐色。胎土は明褐色。精良。17世紀末～18世紀。			(5.05)
2	SE09 中層	瓦質土器	鉢	不明	内外面ともにオーブル褐色。胎土は黄灰色で粗く、砂粒（特に白色粒）を多く含む。焼成不良。底部内面や下壁部。	38.4	21.2	(15.0)



SE02 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10HR2/2	シルト 黄褐色シルト小ブロック・炭化物を少量含む。
2	暗褐色	10HR3/3	黄褐色シルト・粒を多量、炭化物をやや多く含む。
3	黒褐色	10HR3/2	黄褐色シルト・小ブロックを軽めて多量含む。
4	黒褐色	10HR2/2	炭化物を少量含む。
5	暗褐色	10HR3/2	黄褐色シルト粒を軽めて多量含む。
6	黒褐色	10HR3/2	黄褐色シルト・小ブロックを多量、炭化物を微量含む。
7	黒褐色	10HR2/2	粘質シルト 黄褐色シルト・小ブロックを少量含む。
8	黒褐色	10HR2/3	粘質シルト 黄褐色シルト・大ブロックを少量含む。炭化物を微量含む。
9	暗褐色	10HR3/3	シルト 黄褐色シルト・粒を少量含む。
10	黒色	10HR2/1	粘土 黄褐色シルト・大ブロックを少量含む。

SE06 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10HR3/2	シルト 黄褐色砂質シルト・暗褐色粘質シルトを互層状にやや多く含む。
2	黒色	10HR2/1	粘質シルト 暗褐色砂質シルトの大ブロックを多量含む。
3	黒色	10HR2/1	粘質シルト 黄褐色砂質シルトの大ブロックを少量含む。
4	褐褐色	10HR1/1	砂質シルト 黄褐色砂質シルトを互層状に含む。

第133図 SE02・06・08・10・11・12 土層断面図

S208 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 備
1	緑褐色	10RE3/3	シルト 黄褐色シルト小ブロックをやや多く、炭化物・焼土粒をごく微量含む。
2	灰黄褐色	10RE4/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックを微量含む。マングンを下位に集積。
3	黒褐色	10RE3/1	シルト 灰白色シルト中ブロックをやや多く含む。
4	オリーブ黒色	233/1	シルト 灰白色粘土小ブロックを少量含む。
5	オリーブ黒色	7. 5E3/2	粘質シルト 植物遺体をやや多く、灰白色粘土粒を微量含む。
6	黒褐色	2. 5E3/2	粘質シルト 灰白色粘土粒を微量含む。
7	オリーブ黒色	7. 5E3/1	粘土 灰白色粘土中ブロックをやや多く含む。
8	緑オリーブ褐色	2. 5E3/3	粘質シルト 黒褐色シルト中ブロックをやや多く含む。植物遺体の薄層を含む。

S209 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 備
1	にぶい 黄褐色	10TB3/3	シルト 灰白色粘土小ブロック・マングンをやや多く含む。
2	緑褐色	10RE3/3	シルト 黄褐色シルト中ブロックを微量含む。
3	褐色	10TB1/4	シルト 灰褐色粘土小ブロック・黄褐色シルト中ブロックを少量含む。
4	黒褐色	10RE3/2	粘質シルト 褐色粘土中ブロック・灰白色粘土粒を少額含む。
5	黒褐色	10RE3/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
6	にぶい 黄褐色	10TB6/4	シルト 黒褐色シルト小ブロックを少量含む。
7	オリーブ黒色	7. 5E3/1	粘土 灰白色粘土小ブロックを微量含む。
8	オリーブ黒色	7. 5E3/1	粘土 下位に植物遺体の薄層を含む。
9	黒褐色	10RE3/2	粘土 褐色中粒砂を少量含む。
10	灰色	2T4/1	粘土 黒褐色粘土大ブロックを少量含む。
11	暗オリーブ褐色	2. 5E3/3	シルト 暗褐色シルト粒を少量含む。
12	にぶい 黃褐色	10TB6/4	砂質シルト 黒褐色シルト中ブロックを微量含む。
13	灰色	7. 5E4/3	砂 灰オリーブ色粘土中ブロックをやや多く含む。
14	灰色	5E4/1	粘土 植物遺体を微量含む。

S211 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 備
1	緑褐色	10RE3/3	砂質シルト 灰褐色シルト大ブロックをや多く、炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10RE3/2	粘質シルト 植物遺体・褐灰色シルト中ブロックを多量含む。
3	黒褐色	10RE3/1	粘質シルト 褐灰色シルト大ブロックを多量、植物遺体を少量含む。

S212 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 備
1	褐色	10TB4/4	シルト 黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	黄褐色	10RE3/6	シルト 黄褐色シルト小ブロックをやや多く、褐褐色シルト中ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10RE3/2	シルト 灰褐色粘土小ブロックを多量、褐色粘土小ブロックを少量含む。
4	褐灰色	10TB4/1	シルト 褐褐色シルト中ブロックを少額含む。
5	灰褐色	10RE4/2	シルト 褐褐色粘土小ブロックをやや多く、灰褐色粘土大ブロックを少量含む。
6	褐灰色	10TB4/1	粘質シルト 灰褐色粘土粒を多量、褐褐色粘土大ブロックを微量含む。
7	褐灰色	10TB4/1	粘質シルト 灰褐色粘土小ブロックを少額、褐褐色粘土大ブロックを微量含む。
8	灰黄褐色	10TB4/2	粘質シルト 灰褐色粘土大ブロックを少額含む。
9	褐灰色	2. 5E4/1	砂 砂粒砂主体、灰黄褐色粘土中ブロックをやや多く含む。
10	灰褐色	10TB4/2	砂質シルト 灰褐色粘土大ブロックを少量含む。
11	黒褐色	10RE3/2	粘質シルト 植物遺体・褐灰色シルト中ブロックを多量含む。
12	灰色	2. 5E4/1	砂 灰オリーブ色粘土中ブロックをやや多く含む。

## SE11 (第113・133・134図、第77表)

素掘りの井戸で、平面形状は梢円形を呈する。規模は長軸3.8m、短軸は3.8mを測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より1.8m下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。堆積土は3層に分層でき、すべて人為的埋土である。

第134図はSE11出土遺物である。1は青花磁器の皿で素描による草花文を描く。17世紀後半か。2は白石産陶器で13世紀後半～14世紀前半。3はロクロ成型のかわらけで口縁部に油煙痕と炭化物が付着している。

## SE12 (第 113・133・135 図、第 79 表)

SD18と重複し、これより新しい。素掘りの井戸で、平面形状は梢円形を呈する。規模は長軸 4.0 m、短軸は 3.1m を測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より 1.9 m 下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。堆積土は 12 層に分層でき、1~11 層は人為的埋土、12 層は自然堆積である。

第 135 図は SE12 出土遺物である。1 はクロコ成型のかわらけで、内外面に厚く油煙痕が付着している。2 は白石産陶器で 13 世紀後半～14 世紀前半。



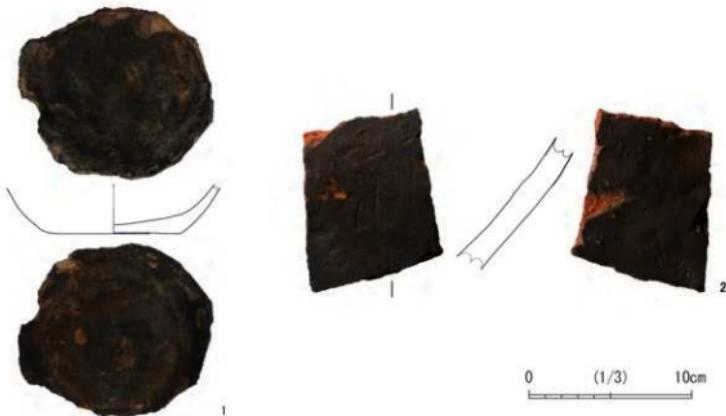
第 134 図 SE11 出土遺物

第 77 表 SE11 出土遺物観察表

番号	遺物・層位	種別	容積	产地	特徴		法量 (cm)
					口径	底径	
1	SE11 青花磁器 瓶	横円形	漏斗	中国	模込に青花文。13世紀後半か。	17.23	10.95
2	SE11 陶器 片口鉢	片口鉢	白石	内外面ともに灰白色。底土は灰色で白色粒。黑色ガラス質粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			12.80
3	SE11 かわらけ?	不明	不明	ロクロ使用。内外面、底土いずれも暗色。全体的に擦痕。口縁部に鉛錆痕と炭化物付着。	(14.0)	8.4	2.9

第 78 表 平成 28 年度調査 井戸跡属性表

遺跡名	構造	平面形	断面形	規模 (m)	深さ (m)	堆積土	遺物	備考	平面図	断面図
SE001 丸太脚+抜き 基	横円形	漏斗	2.7 × 2.5	1.5	自然	青滑、白石、木製品	SD04より古。 SD05より新	114	114	
SE002 素面	円形	漏斗	1.9 × --	1.2	自然→人為	青花。	SD02より新	100	133	
SE003 木製	円形	漏斗	3.9 × 3.8	1.6 以上	人為	青花。肥前磁器。かわらけ	SD02・07より新	122	122	
SE004 石礫?	横円形	円筒	4.5 × 3.7	1.9 以上	人為	青花。肥前磁器。肥前系磁器。瓦質土。山茶碗。上位: 磁器系。下位: 瓦質土。124	SD02・07より新	124	124	
SE005 鋼柱・横柱 基	横円形	円筒	2.1 × 1.8	2.1	自然→人為	SD09 + SD02より新		127	127	
SE006 素面	横円形	円筒	2.2 × 2.1	1.8	自然→人為	木製品		100	133	
SE007 下位: 素面 上位: 鋼柱+ 横柱・竹		漏斗	2.1 × 1.8	1.5 以上	人為	漆器、木製品		129	129	
SE008 素面	横円形	円筒	2.0 × 1.8	1.6 以上	自然→人為		SD01より新	100	133	
SE009 下位: 楊 上位: 石組	横円形	漏斗	2.3 × 2.1	2.4	自然→人為	厚窓系陶器。瓦質土	SD03より新	131	131	
SE010 素面	横円形	漏斗	2.8 以上 × 2.7	1.9	自然→人為		SD17より新	100	133	
SE011 素面	横円形	円筒	3.8 × 3.8	1.8 以上	自然→人為	青花。施戸美濃。かわらけ		100	133	
SE012 素面	横円形	円筒	4.0 × 3.1	1.9 以上	自然→人為	白石、肥前系陶器。かわらけ	SD18より新	100	133	



第135図 SE12出土遺物

第79表 SE12出土遺物観察表

番号	構造・層位	種別	器種	埋地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	深さ
1	SE12	柱	木柱		ロクロ使用。底部外側は四脚で切り、底部内面はロクロナナのち一方向に一糸ナナ。内外面全体に油漆痕が厚く付着する。13世紀中葉～14世紀後半。	8.4	(8.0)	
2	SE12	陶器	便	白石	内外面ともに陶灰色。胎土表面は褐色。胎土内は褐色火色。4辺を加工して四角に成形している。13世紀後半～14世紀前半。研磨工具に転用。	最大長 (10.0)	最大幅 (9.5)	最大厚 (1.5)

### 3. 護岸施設

SX01(第113・136～144図、第80～87表)

調査区北側に位置する。SD03と重複し、これより新しい。遺構は調査区北側へさらに展開するため部分的な検出に留まるが、確認できた範囲での最大幅は7.7m、最大長は4.4mである。確認面からの深さは2.3mを測る。この内部には疊・杭・桟木・竹・横板を用いて作られた東西4.0m、南北1.2m以上の区画がみられる。この施設の基本的な構築過程は以下の通りと考えられる。

- ①大きく掘削した内部に施設の前面を構成するための杭を打つ。
- ②打ち込んだ杭のうち、特定の杭の背後(70cm前後)に控えのための杭を打つ。
- ③前列の杭のラインに平行して長さ30～50cmほどの川原石を直立するように積み上げる。また石積みと並行して背後に拳大の礎による裏込めを行う。
- ④打ち込んだ前面の杭にホゾ穴を穿ち、幅10cmほどの横板を上・中・下の3段に設置する。この横板の固定にはクリを主な材料とするクサビを使用する。
- ⑤杭と石積みの間に長さ100cmほどに切りそろえた竹を密に立て縦位で並べる。
- ⑥前面の杭と控えの杭を連結するための部材を固定する。
- ⑦石積み・裏込めの部分に砂利混じりの土を敷き、搾き固める。
- ⑧使用時に前面の杭が内部に傾いた際、区画内部で補強のための杭を斜めに打ち込む。

なお、⑥の部分では前面の杭の上部との固定には釘を用いるが、後方の控え杭には釘がみられないことから繩などを用いて固定したと考えられる。また⑦の作業前にさらに前面の杭が倒壊することを防ぐためと考



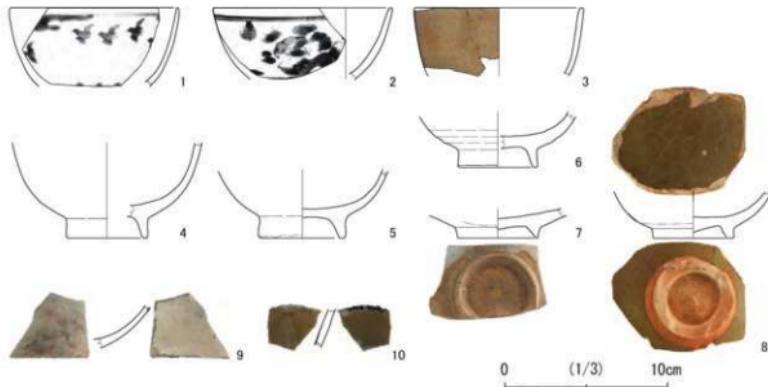
第 136 図 SX01

えられる控え材が3箇所で確認できたが、いずれも前面の杭までは達していなかった。

第137～139図はSX01出土遺物である。第137図1・2は肥前産磁器碗で17世紀後半、3～8は肥前産陶器碗で17世紀後半か。9は陶器の碗で、灰白色の軟質の胎土に白色の釉を施す。京焼か。10は龍窯系青磁碗で、太宰府編年では13世紀前後～13世紀前半。138図1は肥前産磁器皿で17世紀か。2～5は瀬戸美濃産陶器皿で16世紀末～17世紀前半。6は京焼向付。7・8は瀬戸美濃産鉄絵皿で17世紀。9～11はロクロ成型のかわらけ。12は肥前産の徳利で17世紀後半。第139図1は陶器の香炉口縁部、2は岸窯系陶器擂鉢で17世紀末～18世紀。断面の3辺を研磨に使用している。3は産地不明の小型の擂鉢。4は白石産陶器と考えられるが、外面に三つ巴文をヘラ書きする。5は白石産陶器で断面の3辺と外面を研磨に使用する。13世紀後半～14世紀前半。6・7は瓦質土器の甕。9は岸窯系陶器の切立で17世紀後半～18世紀。

第140～144図はSX01から出土した木製品である。堆積土の上層、下層含めて、漆器5点、刀鞘1点、捏鉢1点、折敷1点、曲物底板2点、クサビ11点、部材や建築材6点、不明木製品3点が出土している。

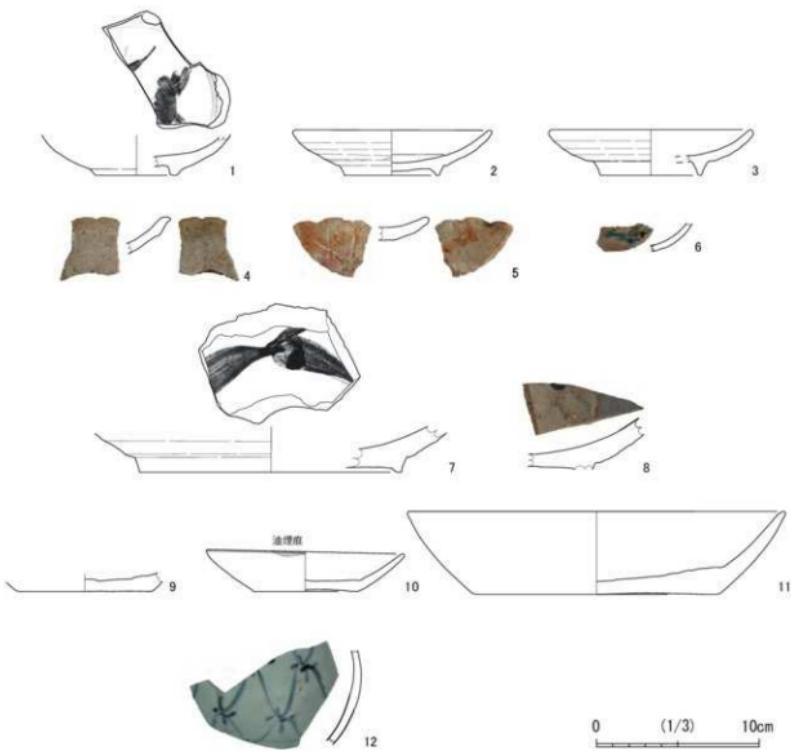
椀蓋で全体がわかる第140図1は全面が赤漆仕上げの極めて器厚が薄いものである。漆器椀の身では、全体が復元できる3は腰丸で口縁端部に軽い段をもつもので、底部は薄い。外面は黒漆、内面は褐色漆で文様ではなく、高台底面に漆が塗られた後の「一」の線刻が認められる。4は内外面赤漆仕上げで、高台内面は黒漆に赤漆文様が描かれている。5は黒漆の高台底面に赤漆の壺の文様が描かれている。6の折敷は縁部の一部で、全面暗赤褐色漆が塗られ、台部への接合部には接着用とみられる漆が付着している。



第137図 SX01出土遺物1

第80表 SX01出土遺物観察表1

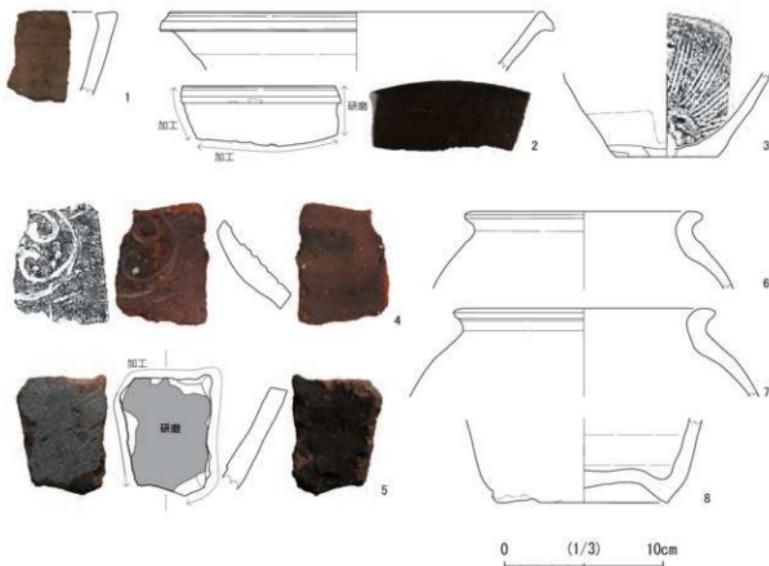
番号	遺物・部位	種別	目録	産地	特徴	測量(cm)		
						口径	底径	厚さ
1	SX01	染付磁器	碗	肥前	丸碗、17世紀後半。	10.4	4.85	
2	SX01	染付磁器	碗	肥前	丸碗、17世紀後半。	11.0	4.4	
3	SX01	陶器	碗	肥前	口凹手縁、内外面に灰釉(淡黄色)、胎土は灰黄色、精良、軟質、17世紀後半。	9.4	4.29	
4	SX01	陶器	碗	肥前	口凹手縁? 内外面に灰釉(淡黄色)、胎土は灰黄色、精良、17世紀後半。	5.0	3.85	
5	SX01 上層	陶器	碗	肥前	灰釉手縁、内外面に灰釉。胎土は灰白色。17世紀後半。	9.2	4.25	
6	SX01	陶器	碗	肥前	灰釉手縁、内外面に灰釉。胎土は灰黄色。17世紀後半。	4.8	3.4	
7	SX01	陶器	碗	肥前	見込みは蛇形模様、内外面に白釉(灰白色)、胎土は二三回燒色、精良。	5.0	4.4	
8	SX01	陶器	碗	肥前	丸碗、内外面に灰釉(灰オーバル)、胎土は二三回燒色、精良。17世紀。	15.0	12.3	
9	SX01 上層	陶器	碗	京焼か	内外面に白色釉(灰白色)、胎土は灰白色、軟質、精良。	12.5	10.5	
10	SX01	青磁	碗	龍窯系	片割兼華文、太宰府編年能泉窯系青磁碗B類。13世紀前後～13世紀前半。	12.5	10.5	



第 138 図 SX01 出土遺物 2

第 81 表 SX01 出土遺物観察表 2

番号	遺物・層位	種別	器種	產地	特徴	法量(cm)		
						11種	底径	器高
1	SX01	漆付磁器	瓶	肥前	17世紀。		(5.0)	(2.5)
2	SX01	陶器	瓶	鹿戸美濃	吉野丸窯。内外面に長石釉(浅黄色)。胎土は精良。灰白色。堅密第1段階第2小窯。	12.3	5.9	2.8
					17世紀前半。			
3	SX01	陶器	瓶	鹿戸美濃	火鉢丸窯。外外面に灰釉(オリーブ黄色)。胎土は灰色。精良。堅密第1段階第2小窯。	(12.6)		2.8
					17世紀前半。			
4	SX01	陶器	瓶	鹿戸美濃	吉野菊窯。外外面に長石釉。胎土は灰白色。精良。軟質。大槻第4段階。16世紀末～17世紀初。			(1.7)
5	SX01	陶器	瓶	鹿戸美濃	吉野菊窯。外外面に長石釉。胎土は灰白色。精良。軟質。大槻第4段階。16世紀末～17世紀初。			(1.4)
6	SX01	陶器	向付	京焼	外外面は化粧土に透明釉(灰白色)。胎土は灰黄色。軟質。精良。			(1.7)
7	SX01上層	陶器	鉢	鹿戸美濃	鶴鉢形。内面に擦跡。削り出る基台。堅密第1段階第3～4小窯。17世紀後半。	(16.2)		(2.3)
8	SX01	陶器	瓶	鹿戸美濃	鶴鉢形。外外面に長石釉(灰白色)。胎土は灰黄色。精良。堅密第1～2小窯。17世紀前半。			(3.2)
9	SX01下層	漆付磁器	碗	吉野丸窯	ロウ使用。底面外周に2回転糸切り。底部内面にロウナガ。油棒根あり。	(8.2)		(1.1)
10	SX01下層	漆付磁器	碗	吉野丸窯	ロウ使用。底面外周に2回転糸切り。底部内面にロウナガ。油棒根あり。	12.1	6.4	2.6
11	SX01下層	漆付磁器	碗	吉野丸窯	ロウ使用。底面外周に2回転糸切り。底部内面にロウナガ。底部内面に油棒根。	(23.0)	15.0	5.1
12	SX01	漆付磁器	漆付小瓶	肥前	17世紀後半。			(5.8)



第139図 SX01出土遺物3

第82表 SX01出土遺物観察表3

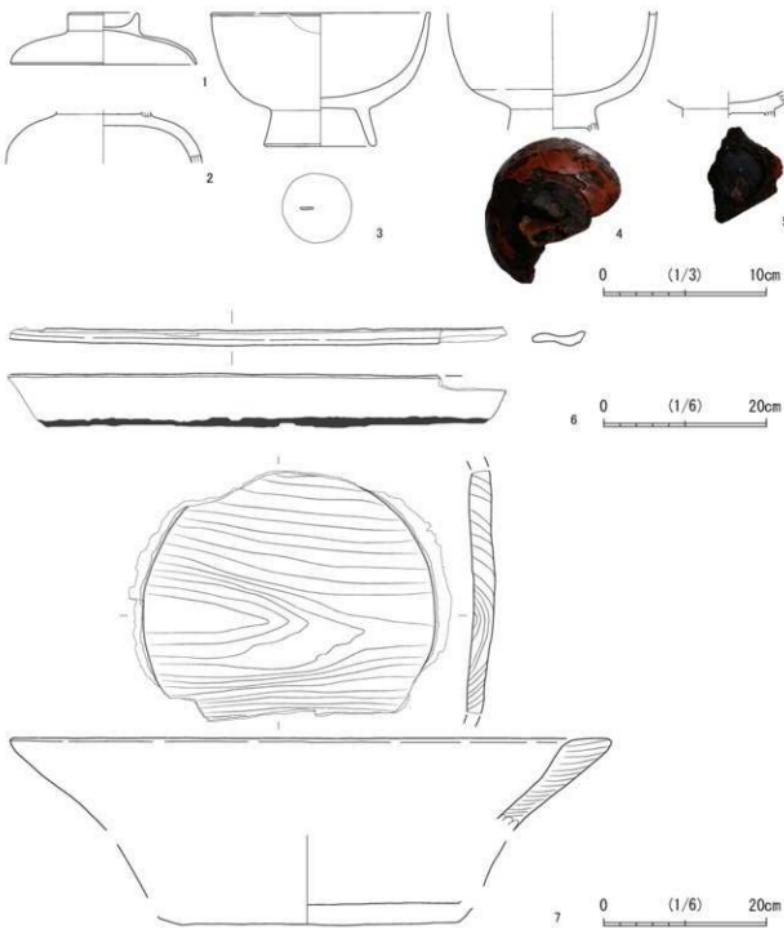
番号	遺物・部位	種別	器種	产地	特徴	寸法(cm)		
						口径	底径	厚さ
1	SX01下端	陶器	香炉	不明	外表面に灰褐色。胎土は黄褐色。砂粒含む。	15.0	13.0	5.0
2	SX01	陶器	鉢	岸葉系	外表面に鉄錆。胎土は黄褐色、精良、粘性強い。17世紀末～18世紀。研磨土器に転用。	23.0	13.0	5.0
3	SX01上端	陶器	鉢	不明	外表面ともに灰褐色。内面全体と口縁部外表面にムラのある灰褐色。胎土は褐灰色。砂粒を含む。	16.0	15.0	5.0
4	SX01下端	陶器	便	白石か	外表面に灰褐色。胎土表面は灰褐色。胎土内は赤褐色。内外面無釉。外面に三つ巴文のつぶ書き。13世紀後半～14世紀前半。	7.6		
5	SX01	陶器	便	白石か	内面は黄褐色。外表面は灰褐色。胎土は灰黄褐色で白色粒を多く含む。外面にハケ調製の痕跡。研磨土器に転用。	16.0		
6	SX01	瓦質土器	便	不明	胎土表面は灰褐色。胎土内は黄褐色。白色微粒少量含む。	15.0	14.0	5.0
7	SX01下端	瓦質土器	便	不明	外表面に灰褐色。胎土は灰黄色。砂粒（特に白色粒）を多く含む。	16.4	15.0	5.0
8	SX01下端	陶器	切立	岸葉系か	内外表面に灰褐色を帯びる黒色。胎土は灰白色。胎土強い。直底外面は凹凸が多く切り。17世紀後半～18世紀。	10.8	10.0	5.0

7の鉢部は口縁部破片と底部から復元したもので、口径が60cm強、底径が36cmにも及ぶ大型のものである。口縁端部は肥厚し、上面は平らに面取りされている。

第141図1の刀鞘は白釉で、片方の板のみが残っている。2の曲物底板の周囲には数箇所に側板を接合するための木釘が残る。また欠損部には樹脂（漆か？）で補修した痕跡が認められる。木取りは柾目材である。3の曲物底板は半分欠損している。周囲には数箇所に側板を接合するための木釘が残る。木取りは柾目材である。4は桶の側板で、片面に焦痕が認められ、木取りは柾目材である。

第141図5・6、第142図1・2は部材とした角状の細木の両端などに、他の部材と結合するために鉄釘や木釘が使用されているものである。第141図5は2本の部材を直角に鉄釘で結合しており、その仕口は合欠である。

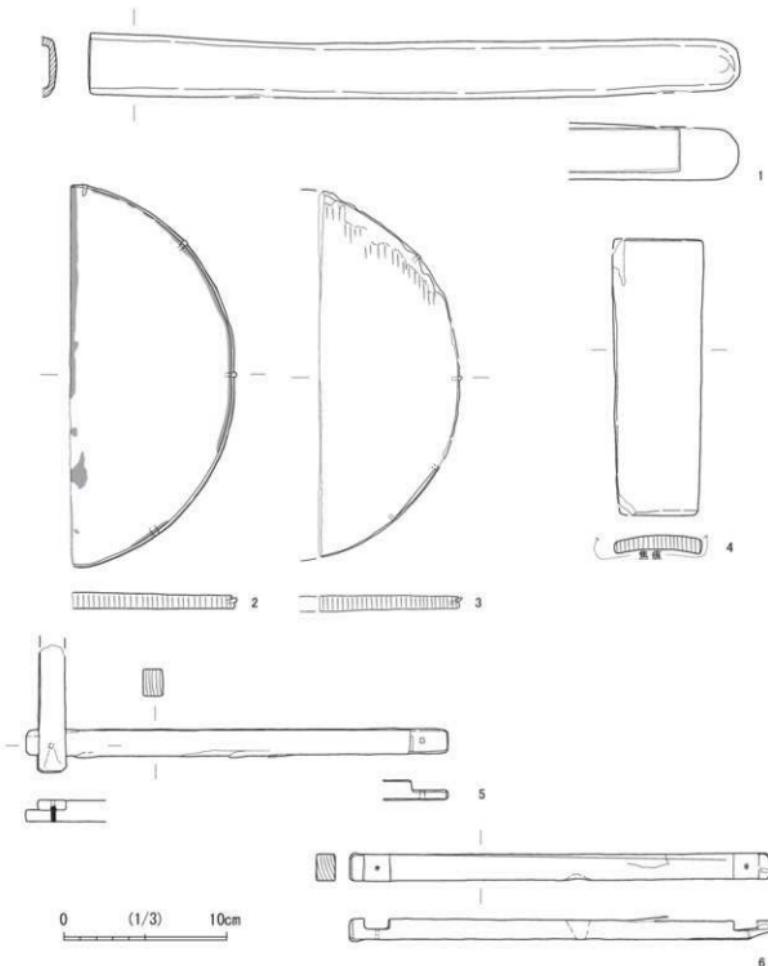
第142図3・4は建築材としたホゾ穴を持つもので、建築材の一部が製作途中の破損品と考えられる。



第140図 SX01出土木製品1

第83表 SX01出土木製品観察表1

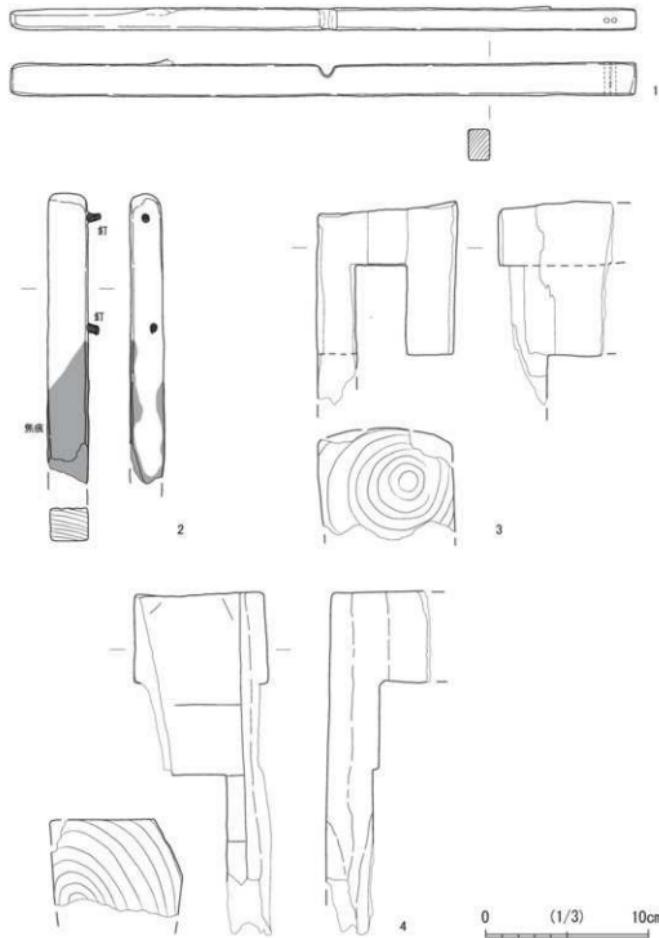
番号	造営・層位	種別	器種	特徴	法量(cm)			細種
					底存	外径	底径	
1	SX01下層	木製品	漆器 棺	全面、赤漆(赤褐色)仕上げ。 (基)	全体の 1/2	11.4	4.4	3.2
2	SX01下層	木製品	漆器 棺	外面-暗赤褐色。内面-黒色。赤漆の文様。 (基)	体-底盤 1/1			(3.2) ブナ属
3	SX01下層	木製品	漆器 棺	外面-黒色。内面-黒褐色。高台底面に「」の彫刻あり。 有	14.3/2 残 有	13.4	6.9	8.2 ケヤキ
4	SX01	木製品	漆器 棺	外面-赤褐色。高台内面、黒色に赤漆文様。	底盤 1/2			(7.2) ブナ属
5	SX01下層	木製品	漆器 棺	外面-暗赤褐色。黒色の高台内に赤漆の波の文様あり。	底盤破片			(1.6) ブナ属
6	SX01下層	木製品	折敷	全面、施脂赤褐色。部分的に赤漆文様。熱丸部に漆付有。	縁一部 (0.0,7)	(3.2)	(0.8)	ヒノキ
7	SX01上層	木製品	挽絲	口縁部肥厚、端部平頭。底面にはぼ平ら。板目材。	一張 (00.6)	(7.1)	(2.5)	メモギリ



第141図 SX01出土木製品2

第84表 SX01出土木製品観察表2

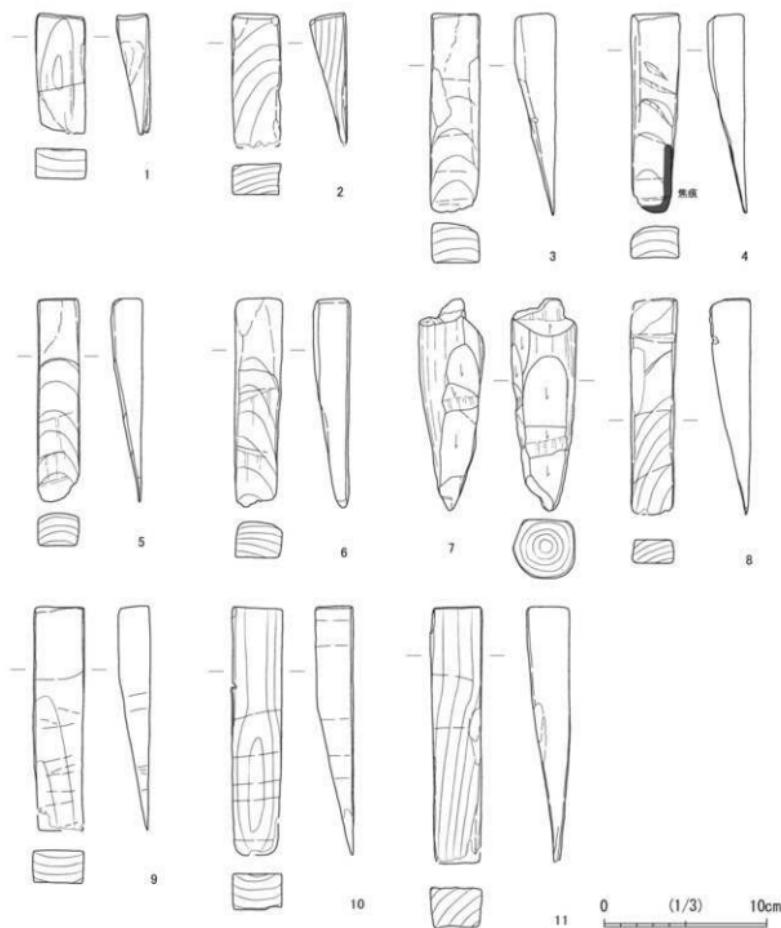
番号	遺構・部位	種別	羽根	特徴	残存	法量(cm)			網種
						口径	底径	高さ	
1	SX01上層	木製品	刀柄	鋸は歯の先端まで及んでいない。	片側 1/2	40.1	3.7	(0.8)	ヒノキ
2	SX01	木製品	舟物	周囲には木釘が残る。細胞(縫合)で補修した痕跡がある。板目材。	底板の 1/2	123.5	10.0	1.0	サツラ
3	SX01	木製品	舟物	周囲には木釘が残る。板目材。	底板の 1/2	122.5	8.7	1.0	スギ
4	SX01	木製品	側板	縫の側板とみられる。板目材。	一部	17.0	5.6	0.9	スギまた ヒノキ材
5	SX01	木製品	部材	舟状の部材を鉛錠で結合。社口は合欠。	一部	26.0	17.8	1.2	アカマツ風
6	SX01	木製品	部材	舟状の部材を鉛錠で結合。	一部	25.8	1.6	1.2	アカマツ風



第 142 図 SX01 出土木製品3

第 85 表 SX01 出土木製品観察表3

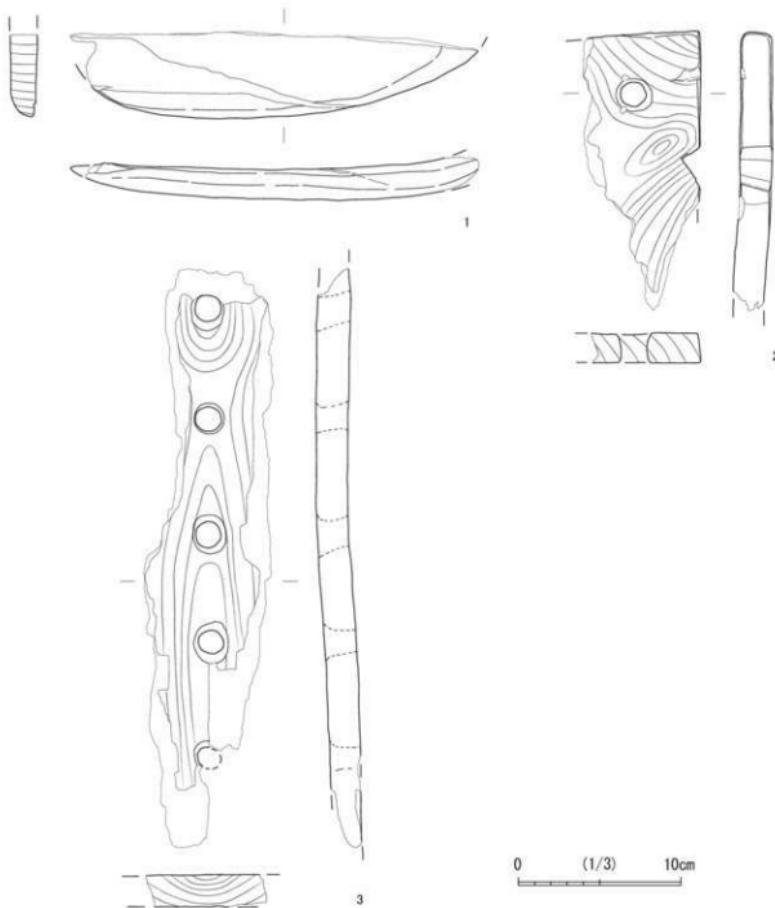
番号	遺構・部位	種別	部種	特徴	保存状況			材種	
					現存	口径	底径		
1	SX01	木製品	部材	角状の部材の一端に木釘が2本あり。中央に抉りがみられる。	完存	38.5	1.0	1.3	杉葉材
2	SX01	木製品	部材	角状の部材の側面2箇所に鉛釘あり。表面も残る。	一部	(17.9)	2.5	2.0	ナラ?
3	SX01	木製品	建築材	枘穴あり。芯持ち材。一面に糊跡残る。	一部	(11.6)	0.65	0.90	スギ?
4	SX01	木製品	建築材	枘穴あり。一面に見込み縫数本あり。紐目材。糊迹残る。	一部	(21.0)	0.82	0.60	スギ?



第143図 SX01出土木製品4

第86表 SX01出土木製品観察表4

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	直長(cm)			断面
						口径	底径	高さ	
1	SX01	木製品	クサビ	板目材。	山田寺井	7.4	3.1	2.0	△判
2	SX01	木製品	クサビ	板目材。	山田寺井	8.2	3.0	2.2	△判
3	SX01	木製品	クサビ	板目材。	山田寺井	12.2	3.0	2.5	△判
4	SX01	木製品	クサビ	板目材。側面が複数、斜面あり。	山田寺井	12.2	3.0	2.3	△判
5	SX01	木製品	クサビ	板目材。側面が複数。	山田寺井	12.4	2.5	2.0	△判
6	SX01	木製品	クサビ	板目材。	山田寺井	12.8	2.9	2.0	△判
7	SX01	木製品	クサビ	芯付木村。板の軸用に用いられる。	山田寺井	13.0	3.0	4.0	△判
8	SX01下層	木製品	クサビ	板目材。	一畠大藏	13.3	2.8	2.5	△判
9	SX01	木製品	クサビ	板目材。	山田寺井	13.7	3.1	2.0	△判
10	SX01	木製品	クサビ	板目材。	山田寺井	15.3	3.1	2.3	△判
11	SX01	木製品	クサビ	板目材。	山田寺井	15.7	3.0	2.5	△判



第 144 図 SX01 出土木製品5

第 87 表 SX01 出土木製品観察表5

番号	遺物・層位	種別	寸法	特徴	残存	法量(cm)			附種
						口径	底径	深さ	
1	SX01	木製品	不明	木製品 容器の一部か、板目材。	一部	(25.0)	(5.0)	(1.6)	コナラ属
2	SX01	木製品	不明	木製品 板の表面に1孔。側面に切り込みがみられる。板目材。	一部	(17.1)	(7.2)	1.8	マツ属
3	SX01 下層	木製品	不明	木製品 板の表面に5孔あり。板目材。	一部	(25.6)	(7.3)	2.0	マツ属

第143図は護岸施設の杭と横板を固定するために用いられたのがクサビである。打ち込まれた状態か抜けた状態で数十点のクサビが確認されているが、ここではその中の11点のクサビを取り上げ、図化した。

1本の杭の再利用を除き、他はすべてクサビとして製作されたもので、樹種が同じクリ材であることや年輪、加工の特徴などから同一の木材を元に作出された可能性が高い。これらのクサビは形状や長さがそれぞれわずかに異なるものの、幅や厚さはほぼ共通している。

第144図は用途不明としたものである。1は側縁が曲線的に作出された板状のもので、容器の一部の可能性も考えられる。2は厚めの板に約1.5cmの孔が穿たれている。3は厚めの板に直径が1.5cm前後の孔を5個以上穿たれている。

#### 4. 性格不明遺構

SX02(第113・145・146図、第88表)

調査区北西隅部に位置する。SD18と重複し、これより新しい。調査区北側、及び西側へさらに展開するため、全体の形状・規模については不明な点が多いが、確認面からの深さは1.1mを測る。遺構の南側では、40cmほど掘り下げた箇所で下場の形状に沿って、長さ150cm前後で径5~10cmほどの杭が、30~100cmの間隔で8本打ち込まれていることが確認されている。これらの杭では上部から下方30cmあたりまで蔓性の植物を用いた「しがらみ」によって複雑に編み込まれていることから、護岸あるいは土留めを目的として設置された可能性が考えられる。

第146図はSX02出土遺物で、1は瀬戸美濃産の鉄絵皿で17世紀前半。2は白磁の端反の皿で16世紀後半か。3は白石産陶器で13世紀後半~14世紀前半である。

#### 5. 土坑

調査では20基の土坑を確認しているが、ここでは形狀的な特徴ごとに述べる。なお、各土坑の詳細については第92表にまとめてある。

##### 平面形の規模が大きいもの

SK04・06・11・12・20が該当する。いずれも長軸・短軸が1m以上、確認面からの深さも後述するものより深い。断面形状は逆台形、あるいはU字状を呈するものが多い。堆積土はほぼ人為的埋土である。

##### 断面形状が皿形を呈するもの

SK01・07・09・10・14・15が該当する。平面形状は様々であるが、規模は長軸100cm程度、短軸80cm程度である。確認面からの深さ10~20cmほどと浅い。堆積土はすべて人為的埋土である。

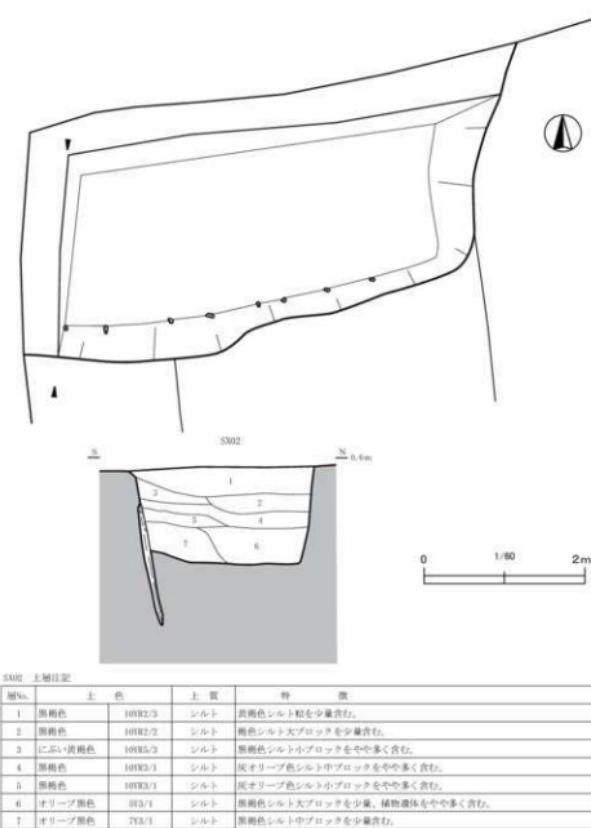
##### 断面形状が箱形を呈するもの

SK13・16~19が該当する。平面形状は様々であるが、規模は長軸90cm程度、短軸80cm程度である。確認面からの深さ20~30cm。堆積土はすべて人為的埋土である。

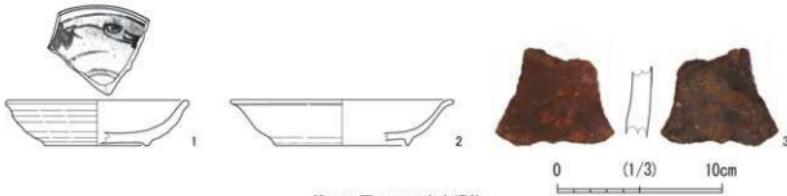
第150図1はSK11から出土した白石産陶器で3辺を加工して成型、1辺を研磨に使用する。13世紀後半~14世紀前半。

第151図1はSK12から出土した白石産かと思われる陶器である。

第152図1はSK19から出土した白石産陶器で1辺を加工して成型、1辺を研磨に使用する。13世紀後半~14世紀前半。



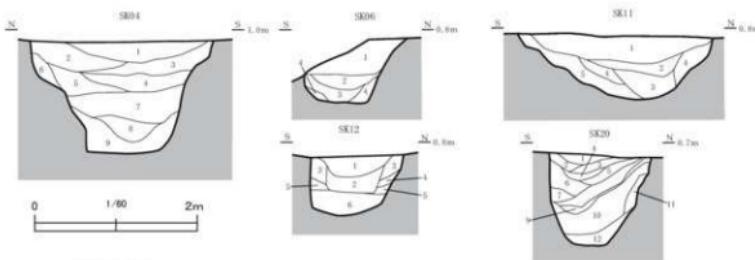
第145図 SX02、土層断面図



第146図 SX02出土遺物

第88表 SX02出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	深さ
1	SX02	陶器	瓶	施丹集落	外側に長石練(灰白色)。内部に鉄筋草花文。胎土は灰褐色で精良。吹窓。壁厚11.2 突堤1段階第1～2小塊。17世紀前半。	11.2	6.4	2.8
2	SX02	陶器	瓶	輸入器器	外側に灰白色。胎土は灰白色で黑色粒を含む。16世紀後半から	12.80	10.2	2.8
3	SX02	陶器	便	白石	内面は褐灰色。外面は灰褐色。胎土は褐灰色で砂粒を含む。内面に粗面状板と指紋。 13世紀後半～14世紀前半。			(4.65)



SK04 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト 黄褐色シルト小ブロックをやや多く、半分の灰白色粘土を微量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少額含む。
3	黒褐色	10YR2/2	シルト 半分の灰白色粘土を少量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	シルト 暗褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
5	暗褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
6	にじみ、黄褐色	10YR3/3	砂質シルト 黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
7	オーブン無色	5Y3/1	粘土 灰色粘土大ブロックをやや多く含む。
8	灰色	10YR4/1	砂 黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
9	黄褐色	10YR5/6	砂 黒褐色シルト小ブロックを少量含む。

SK06 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト 炭化物をやや多く。黄褐色シルト中ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト 炭化物を多量含む。下位に黒褐色細粒粘土層が形成。
3	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト 灰色粘土中ブロックを少量含む。
4	オーブン無色	5Y3/1	粘質シルト 灰色粘土大ブロックを少量含む。

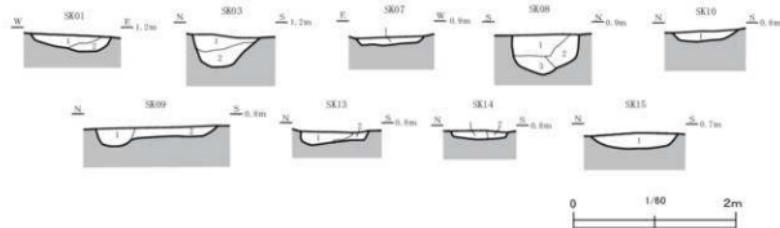
SK11 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト 黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
2	黒褐色	10YR3/1	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR2/2	シルト 灰色粘土中ブロックを微量含む。
4	にじみ、黄褐色	10YR3/3	シルト 黄褐色シルト中ブロックを微量含む。
5	灰黃褐色	10YR4/2	シルト 灰色砂質シルト中ブロックを多量含む。

SK12 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10YR4/1	シルト 炭化物・堆積物を多量含む。
2	灰黃褐色	10YR5/2	シルト 炭化物をやや多く含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
4	にじみ、黄褐色	10YR4/3	シルト 灰黄褐色シルト中ブロックを少量含む。
5	黒褐色	10YR3/1	シルト 下位に灰黄褐色シルト粘土を少量含む。
6	暗褐色	10YR3/3	シルト 黄褐色シルト中ブロックをやや多く、炭化物を微量含む。
7	オーブン無色	5Y3/2	粘質シルト 黒褐色粘土中ブロックを少量含む。
8	オーブン無色	5Y3/1	粘質シルト 灰白色粘土粒を少量含む。
9	灰色	5Y5/2	粘質シルト 黄褐色粘土中ブロックをやや多く含む。
10	黒色	10YR2/1	粘質シルト 植物遺体を層全体にやや多く含む。
11	灰黃褐色	10YR4/2	砂質シルト 黄褐色砂をブロック状を多量含む。
12	にじみ、黄褐色	10YR6/4	粘土 植物遺体をやや多く含む。

第147図 SK04・06・11・12・20 土層断面図



SK01 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒色	10TR2/1	粘質シルト 褐色シルト粒をやや多く含む。
2	黒褐色	10TR2/2	粘質シルト 黄褐色シルト粒を少量含む。

SK03 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10TR2/2	シルト 炭化物の薄層を含む。褐色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	10TR2/2	シルト 黄褐色シルト粒を少量含む。
3	黒褐色	10TR3/2	シルト 黄褐色シルト粒を少量。黄褐色シルト粒を微量含む。

SK07 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10TR2/2	シルト 黄褐色シルト中プロックをやや多く。炭化物を少暈含む。

SK08 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10TR2/2	シルト 黄褐色シルト大プロックをやや多く含む。
2	暗褐色	10TR3/2	シルト 炭化物をやや多く。黄褐色シルト粒を微量含む。
3	黒褐色	10TR2/3	シルト 黄褐色シルト中プロック・褐色半粒具砂を少暈含む。

SK09 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10TR2/2	シルト 黄褐色シルト粒を多量。マンガンを少量含む。
2	黒褐色	10TR3/1	シルト 黄褐色シルト中プロックを極めて多量。マンガンをやや多く含む。

SK10 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10TR2/2	シルト 黄褐色シルト中プロックをやや多く含む。

SK13 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	暗褐色	10TR3/3	シルト マンガンを多量。植物遺体を少暈含む。
2	黒褐色	10TR3/2	シルト マンガンを少量。植物遺体を微量含む。

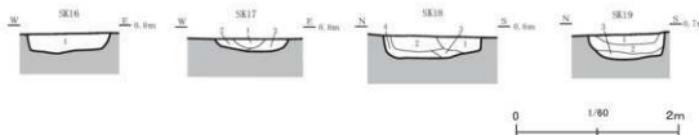
SK14 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10TR3/2	シルト 黄褐色シルト小プロックを少量。炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10TR2/3	シルト 黄褐色シルト粒をやや多く含む。

SK15 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10TR2/2	シルト 炭化物を多量。粗粒砂を少暈含む。

第148図 SK01・03・07～10・13～15 土層断面図



SK16 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 殖
1	黒褐色	109R2/2	粘質シルト 塗色黏土小ブロックを多量。マンガンを少量含む。

SK17 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 殖
1	灰黄褐色	107R4/2	緑灰色シルト小ブロックをやや多く。マンガンを少量含む。
2	暗褐色	109R3/3	黄褐色シルト粘土をやや多く。鐵をごく微量含む。
3	黒褐色	109R3/2	黄褐色シルト中ブロックをごく微量含む。

SK18 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 殖
1	黒褐色	109R3/2	シルト 黄褐色シルト中ブロックをやや多く。灰白色粘土小ブロックを少量含む。
2	灰黃褐色	109R4/2	黄褐色シルト大ブロックを少量含む。
3	暗褐色	109R3/3	黄褐色シルト小ブロックを微量含む。
4	黒褐色	109R3/2	マンガンを少量含む。

SK19 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 殖
1	灰黄褐色	109R4/2	シルト 黄褐色シルト粘土を多量。炭化物・塩土粒を微量含む。
2	暗褐色	109R3/3	黄褐色シルト小ブロックを微量含む。
3	黒褐色	109R3/2	黄褐色シルト粘土を少額。炭化物をごく微量含む。

第149図 SK16～19 土層断面図



第150図 SK11出土遺物

第89表 SK11出土遺物観察表

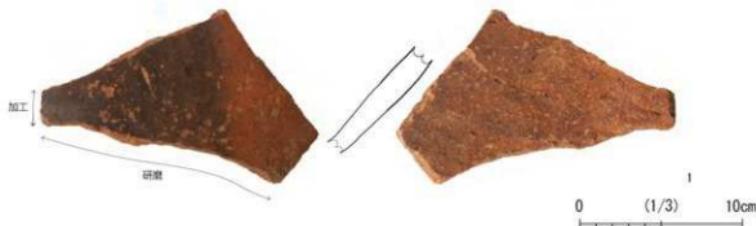
番 号	遺構・層位	種 別	器 形	産 地	特 殖	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SK11	陶器	便	白石か	内外面ともにオーリープ黒色。胎土は灰褐色で砂粒を含む。内面に斜方向ナデ。外面にタテナデ。研磨土器に転用。			(4.6)



第151図 SK12出土遺物

第90表 SK12出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 形	産 地	特 殖	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SK12	陶器	便	白石か	内外面ともに黄褐色。胎土は灰色。			(6.3)



第 152 図 SK19 出土遺物

第 91 表 SK19 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	岩種	産地	特徴		法長(cm)		
							10径	底径	高さ
1	SK19	陶器	便	自古	内面はにぶい褐色。外面は灰褐色。胎土にはにぶい黄褐色で白色粒。赤色粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研究土器に転用。				(6.0)

第 92 表 平成 28 年度調査 護岸施設・性格不明遺構・土坑属性表

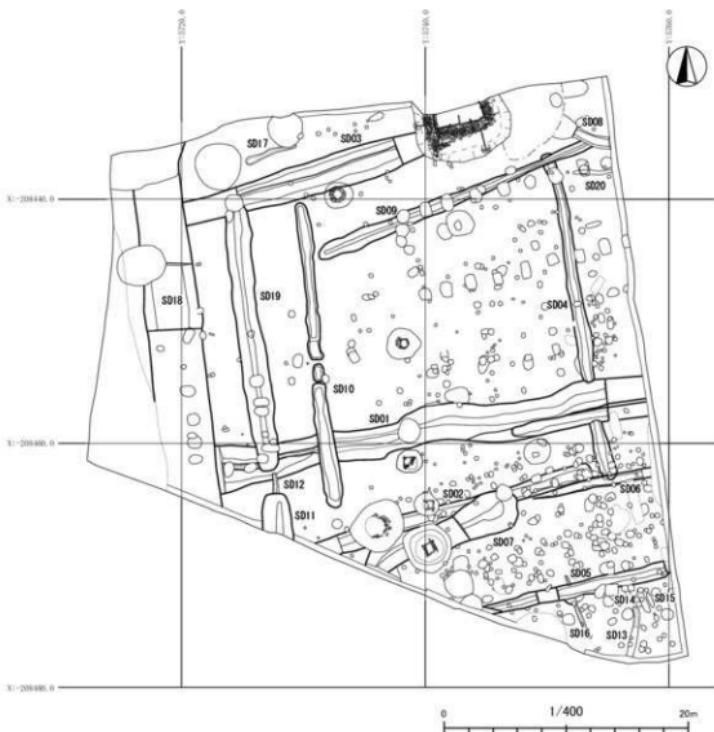
遺構名	平面形	断面形	規模 (m)	深さ (m)	堆積土	出土遺物	備考	平面図	断面図
SK001	—	箱形	— × 7.7	2.3	人為	青磁、白石、肥前系磁器、肥前系陶器、瓦塊、廻戸美濃、屋根系陶器、瓦質土器、小さく窓、漆器、木製品	SD03より新	136	136
SK002	—	箱形	—	1.1	人為	白磁、白石、廻戸美濃	SD18より新	145	145
SK003	横円形	圓形	1.0 × 0.9	0.2	人為			100	148
SK004	横円形	圓形	1.0 × 0.9	0.2	人為			100	148
SK005	横円形	圓形	0.9 × 0.9	0.4	人為			100	148
SK006	円形	箱形	2.4 × 2.3	1.4	人為			100	147
SK007	長円形	箱形	— × 1.3	—	人為			100	147
SK008	円形	箱形	1.3 × 1.3	0.8	人為			100	147
SK009	横円形	圓形	0.8 × 0.8	0.1	人為			100	148
SK010	長円形	U字	1.5 × 1.3	0.8	自然→人為	中世陶器	9A05より古、SD01より新	100	148
SK011	長円形	圓形	1.0 × 0.5	0.1	人為			100	148
SK012	—	箱形	0.9 × 0.7	0.1	人為			100	148
SK013	—	圓形	— × 1.1	0.2	人為			100	148
SK014	長方形	圓形	1.0 × 0.7	0.1	人為			100	148
SK015	横円形	圓形	1.2 × 0.9	0.2	人為			100	148
SK016	—	箱形	— × —	0.3	人為			100	149
SK017	横円形	圓形	1.0 × 0.8	0.2	人為			100	149
SK018	横円形	圓形	1.3 × 0.8	—	人為			100	149
SK019	横円形	箱形	1.0 × 0.6	0.3	人為	白石	SD19より新	100	149
SK020	横丸形	U字	1.5 × 1.5	1.1	自然→人為		SD03+19より新	100	147

## 6. 溝跡

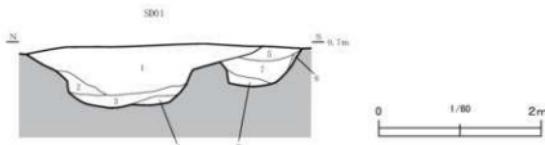
調査では 20 条の溝跡を確認している。溝跡の詳細は第 119 表にまとめているが、ここでは区画性が高いもの、及び遺物が出土した溝跡を中心に詳述する。

SD01（第 153～167 図、第 93～105 表）

調査区南部に位置し、調査区東壁から西側へほぼ直線的にのびる溝跡である。SB08・10・12・18・19 の掘立柱建物跡、SD04・18 と重複し、掘立柱建物群・SD18より古く、SD04より新しい。東側は調査区外へ展開し、西側も SD18 及び擾乱によって失うたため全長は不明であるが、総長約 35.8m にわたって検出している。主軸方位は N-80° -E。検出面での規模は上幅 2.2 ～ 3.5m、下幅 0.5 ～ 1.8m、確認面上りの深さは 70cm を測る。本遺構は新旧 2 時期が存在しており、東側では古い溝が南側を走るが、西側では新段階の溝跡の掘削によって失われ、わずかに底面のごく一部のみがみとめられる。新旧いずれの溝跡も断面形状は箱形を呈するが、古段階は底面から上場へとほぼ直線的に立ち上がりっているのに対し、新段階



第153図 SD配置図



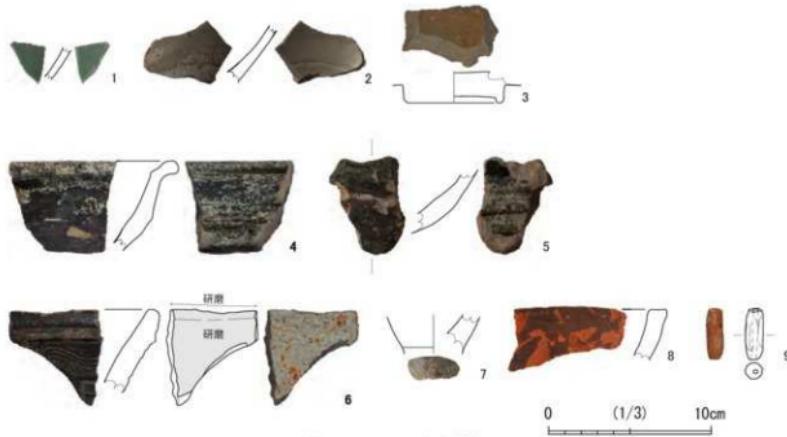
SD01 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	暗褐色	10YR3/3	黒褐色シルト小ブロックを少量。砂礫部・堆土粒をごく微量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	黄褐色シルト大ブロックを微量含む。
3	黒色	10W2/1	下位に灰白色粘土薄層を含む。下位には灰褐色細粒砂の薄層を含む。
4	褐色	10YR4/1	中位に黄褐色シルトの薄層を含む。
5	黒褐色	10YR3/2	暗褐色シルト中ブロックを少量含む。
6	灰白・黄褐色	10Y5/3	黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
7	黒褐色	10YR3/1	暗褐色シルト中ブロックをやや多く。灰白色粘土小ブロックをごく微量含む。
8	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト 黄褐色シルト中ブロックを少量含む。下位に褐色細粒砂の薄層が堆積。

第154図 SD01 土層断面図

は中位から上場へかけて大きく開く形状となっている。底面では新旧それぞれ東側から西側へ緩やかに傾斜している。堆積土は新旧とも4層であり、新段階の1・2層、古段階の5～7層は人為的埋上であるが、3・4・8層は自然堆積である。

第155～167図はすべてSD01の出土遺物である。第155図1は龍泉窯系青磁碗で、太宰府編年で13世紀前後～13世紀前半。2は白磁碗で、太宰府編年で11世紀後半～12世紀後半。3は龍泉窯系青磁碗で、太宰府編年で12世紀中頃～13世紀前半。4・5は古瀬戸折線深皿で13世紀末～14世紀中頃。6は波状文のみられる須恵器甕の口縁部で7世紀後半のものか。口縁部と内面を研磨に使用しており、中世に採集した須恵器を研磨に転用したものと考えられる。7は常滑の壺か。8は土師質土器の鏡。9は土製品で土錐である。第156図は白石産陶器で、片口鉢の口縁部である。5は小型で卸目を有する。第157図は常滑産陶器および白石産陶器の片口鉢の体部から底部である。6は常滑で12世紀前半～中頃か。そのほかは13世紀後半～14世紀前半。第158図は陶器甕もしくは壺の口縁部である。1・2は常滑産で13世紀前半。4は常滑産で12世紀末～13世紀初頃。8は渥美産で12世紀末～13世紀初頃。断面を4辺と内外面をすべて研磨に使用している。3・6・7は白石産で13世紀後半～14世紀前半。第159図は陶器



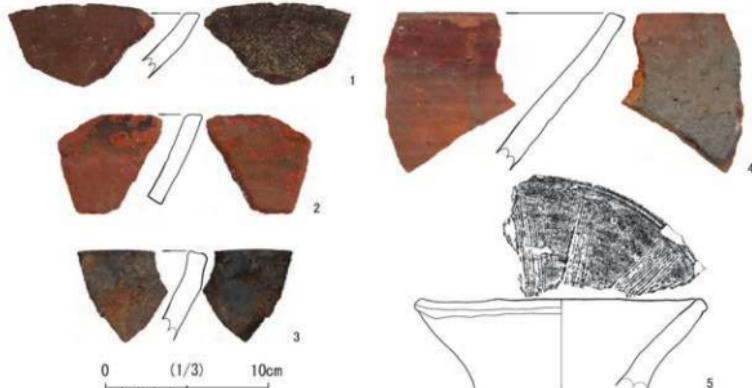
第155図 SD01出土遺物1

第93表 SD01出土遺物観察表1

番号	道構・埋位	種別	器種	產地	特徴	法量(cm)		
						11個	底径	高さ
1	SD01	青磁	碗	龍泉窯系 施薙井文	太宰府編年能取茶葉青磁碗直口。13世紀前後～13世紀前半。		(1.9)	
2	SD01-2	白磁	碗	太宰府編年碗IV種	11世紀後半～12世紀後半。		(3.5)	
3	SD01-1	青磁	碗	龍泉窯系 太宰府編年龍泉系茶葉青磁碗	I、II、12世紀中頃～13世紀前半。		(6.0)	(1.9)
4	SD01	陶器	甕	古瀬戸	折線深皿。内外面ともに褐色。内面に自然釉付着。胎土は灰白色で精良。軟質。古瀬戸中期様式I～II期。13世紀末～14世紀初頃。		(5.5)	
5	SD01	陶器	甕	古瀬戸	折線深皿。外側は褐色。外側に灰褐色。胎土は灰白色。軟質。古瀬戸中期様式。13世紀末～14世紀初頃。		(4.3)	
6	SD01-2	須恵器	甕	須恵器	須恵器甕の口縁部破片。研磨土器に転用。7世紀後半か。		(5.7)	
7	SD01	陶器	甕	常滑	三底蓋。内面は黄灰色。自然釉。外側は灰白色。灰褐色。胎土は灰白色。精良。12世紀～13世紀。		(2.25)	
8	SD01-2	土器			内面には灰白色。外側は褐灰色。胎土は明褐色で砂粒を含む。内外面にコロコロ目。ナメ。口縁内面に灰化釉付着。		(2.8)	
9	SD01	土製品	土錐		胎土は黄褐色で透明感を含む。	最大長 (3.1)	最大幅 (1.1)	最大厚 (1.0)

甕もしくは壺の頭部から肩部である。1・2・3・8は常滑産、4～7・9・10は白石産である。7・9で断面を研磨に使用する。第160図は陶器甕の肩部である。1・4は常滑産。4は3辺と内外面を研磨に使用する。2は渥美産かと思われ、2辺を加工して成型している。12世紀。3・6～8は白石産。6で2辺を加工2辺を研磨使用、7で2辺と加工1辺を研磨使用している。第161図は陶器甕もしくは壺の肩部である。4・6は常滑産か。1～3・5・7は白石産で13世紀後半～14世紀前半である。第162図は白石産陶器の胴部で、6で3辺と内外面を研磨に使用している。13世紀後半～14世紀前半。第163図は白石産陶器の胴部で、研磨に使用しているものである。13世紀後半～14世紀前半。第164図は陶器甕もしくは壺の胴部である。1は常滑産か。2～10は白石産で13世紀後半～14世紀前半である。第165図は陶器甕もしくは壺の胴部である。9は常滑産か。2辺を研磨使用している。1～8・10～12は白石産で、4・10を研磨使用している。第166図は陶器甕もしくは壺の胴部から底部である。3・5は常滑産か1・2・4・6・7は白石産で、1・4を研磨使用している。13世紀後半～14世紀前半。

第167図はSD01から出土した石製品である。新旧2時期の溝跡から砥石が2点と石臼が1点出土している。砥石の1点は不定形状をし、1面の主な砥磨面の他にも多数の砥磨面を持つ。石材は細粒の凝灰岩であり、仕上げ砥として使用されたものと考えられる。もう1点の砥石は角柱状をなし、4面とも砥磨面であり、線条痕が認められる面もある。石臼は茶臼の下臼の半欠で、台部と受皿縁辺が意図的に打ち欠かれている。台部の目の溝が使用によりほとんど消失しており、別な目的に作り直された可能性が考えられる。



第156図 SD01出土遺物2

第94表 SD01出土遺物観察表2

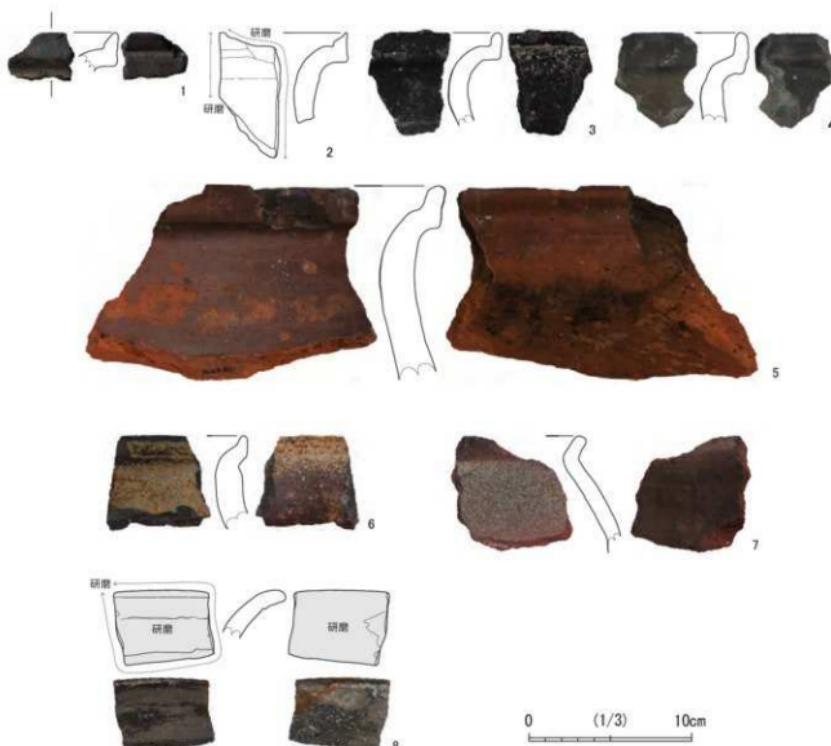
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	古量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD01	陶器	片口鉢	白石	内外面は均一な赤褐色。内面に自然釉付着。胎土は均一な赤褐色。砂粒を多量に含む。			(4.0)
2	SD01	陶器	片口鉢	白石	内面は灰褐色。外表面は黄褐色。胎土は均一な赤褐色で白色粘土多く含む。内外面にコトコトテクスチャ。外表面は被焼により赤化。13世紀後半～14世紀前半。			(5.0)
3	SD01	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに灰色。胎土は灰色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(5.0)
4	SD01	陶器	片口鉢	白石	内面は黄褐色。外表面は均一な褐色。胎土は均一な褐色。砂粒(特に白色大粒)を含む。13世紀後半～14世紀前半。			11.25
5	SD01	陶器	片口鉢	白石か	内外面ともに灰色。胎土は灰色。砂粒少量含む。13世紀後半～14世紀前半。	(17.4)		(5.0)



第157図 SD01出土遺物3

第95表 SD01出土遺物観察表3

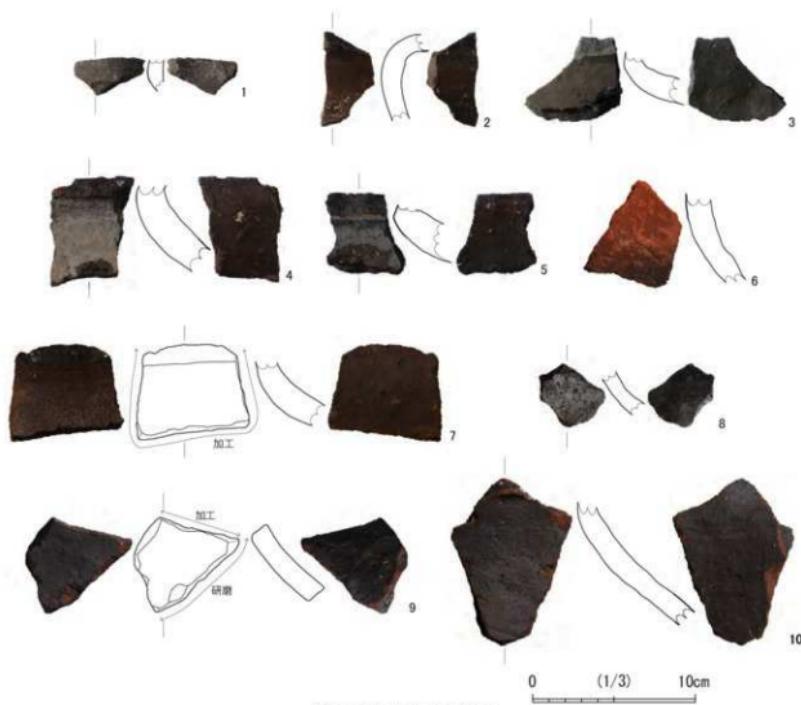
番号	遺構・層位	種別	器種	产地	特徴	法量(cm)		
						横幅	底径	高さ
1	SD01	陶器	片口鉢	白石	内面は褐色。外面は褐色。胎土は黄灰色で白色大粒含む。13世紀後半～14世紀前半。	11.5	8.5	3.6
2	SD01	陶器	片口鉢	白石	内面は褐色。外面は褐色。胎土は黄褐色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。	14.9	10.5	4.9
3	SD01	陶器	片口鉢	鹿嶋か	外表面に上質灰釉。胎土は灰褐色で白色粒を多く含む。	14.2	10.5	4.2
4	SD01	陶器	片口鉢	白石	内面は灰褐色。外面は灰褐色。胎土は灰褐色で白色粒を多量に含む。13世紀後半～14世紀前半。	14.0	10.5	4.0
5	SD01-2	陶器	片口鉢	白石	内表面に灰褐色。胎土は灰褐色で砂粒(特に黑色ガラス質粒)を多く含む。外表面ロクロナザ。内面使用により黒斑。13世紀後半～14世紀前半。	16.2	12.5	5.2
6	SD01	陶器	片口鉢	常滑	内面は黄灰色。外面は灰褐色。胎土は灰褐色で白色粒、黑色ガラス質粒を含む。内面使用による黒斑。第1段階1a～2、12世紀後半～中期。	14.2	10.5	4.2
7	SD01	陶器	片口鉢	常滑	外表面に灰褐色。胎土は灰褐色で白色粒。黑色ガラス質粒を含む。13世紀。	13.0	9.0	4.1
8	SD01	陶器	片口鉢	白石か	内外面ともに灰褐色。胎土は灰褐色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。	20.0	16.5	6.5



第158図 SD01出土遺物4

第96表 SD01出土遺物観察表4

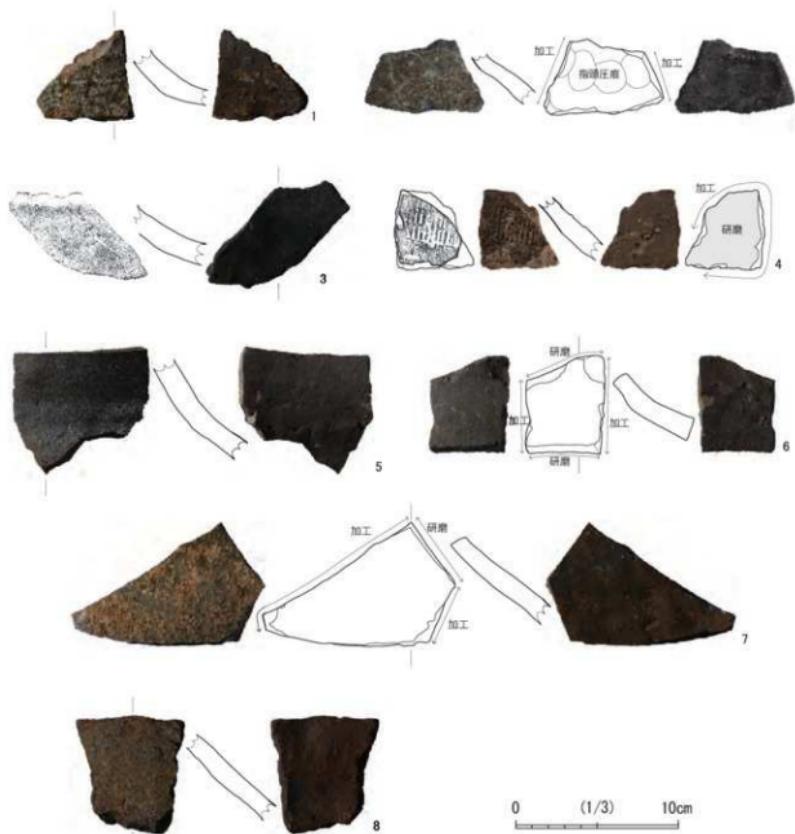
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	出量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD01	陶器	瓶	常滑	内面は褐灰色。外面は灰色。内各面に自然釉付着。胎土は灰白色で白色粒を多く含む。 常滑3型式。13世紀前半。			(2.0)
2	SD01-2	陶器	瓶	常滑	内面は灰褐色。外面は土明褐色。胎土は灰黄色で白色粒を含む。常滑5型式。13世紀前半。			(4.0)
3	SD01	陶器	罐	白石か 常滑	内外面ともに黄褐色。胎土は黄灰色で粗く、砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(5.7)
4	SD01	陶器	瓶	常滑	内外面ともに灰褐色。胎土は灰白色で白色粒を多く含む。第1段階4型式。12世紀末～13世紀初頭。			(5.0)
5	SD01	陶器	瓶	白石	内面は褐色。外面は灰褐色。胎土は褐色で砂粒（特に白色粒、赤色粒）を多く含む。 13世紀後半～14世紀前半。	(50.0)		(11.0)
6	SD01-2	陶器	短須瓶	白石	内面は灰褐色。外面上に自然釉付着。胎土は褐灰色。砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(3.0)
7	SD01	陶器	短須瓶	白石か 常滑	内外面ともに灰褐色。外面上に自然釉付着。胎土は灰褐色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(6.0)
8	SD01	陶器	瓶	周南	24型式。12世紀末～13世紀初。研磨上部に転用。			(3.0)



第159図 SD01出土遺物5

第97表 SD01出土遺物観察表5

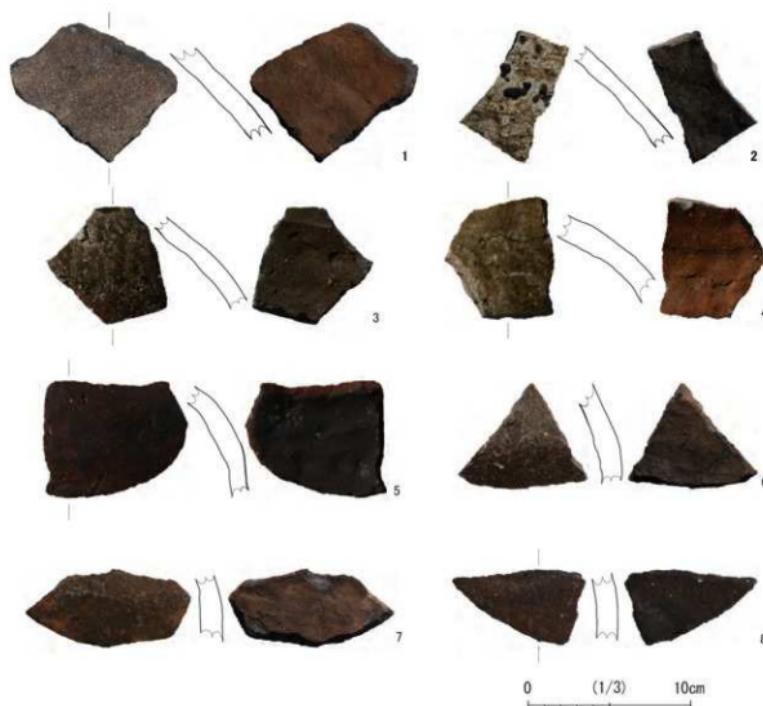
番号	遺物・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)	
						11径	底径
1	SD01-1	陶器	壺	常滑か	内外面ともに黄灰色。内面に自然釉付着。胎土は黄灰色。	(1.9)	
2	SD01-1	陶器	壺	常滑か	内外面ともに暗赤褐色。胎土は灰白色で白色粒を多く含む。常滑4~5型式。12世紀末~13世紀前半。	(5.5)	
3	SD01	陶器	壺	常滑か	内外面ともに灰褐色。胎土は灰色で白色粒を含む。	(3.2)	
4	SD01-2	陶器	壺	白石	内外面ともに灰褐色。外面上に自然釉付着。胎土は黒褐色で白色大粒を含む。13世紀後半~14世紀前半。	(6.4)	
5	SD01	陶器	壺	白石	内外面ともに灰褐色。外面上に自然釉付着。胎土は褐灰色で白色粒を多く含む。13世紀後半~14世紀前半。	(4.6)	
6	SD01	陶器	壺	白石	内外面には白~赤褐色。外面上は褐色。胎土は明赤褐色で砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13世紀後半~14世紀前半。	(6.5)	
7	SD01	陶器	壺	白石	内外面ともに灰褐色。外面上に自然釉付着。胎土は黄灰色で白色粒を多く含む。13世紀後半~14世紀前半。	(4.0)	
8	SD01	陶器	壺	常滑か	内面は黄灰色。外面上に自然釉付着。胎土は灰色で白色粒を多く含む。	(2.7)	
9	SD01	陶器	壺	白石	研磨土器。内外面ともに褐灰色。胎土表面は褐色。胎土内に灰白色。白色粒を含む。13世紀後半~14世紀前半。	最大長 (5.0) (6.5)	最大幅 (1.3) (1.3)
10	SD01	陶器	壺	白石	内外面ともに赤褐色。胎土表面には白~赤褐色。胎土内に灰褐色。砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13世紀後半~14世紀前半。		(7.6)



第 160 図 SD01 出土遺物観察表6

第 98 表 SD01 出土遺物観察表6

番号	遺構・部位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD01	陶器	甕	常滑か	内面は黄灰色。外面に灰釉。胎土は灰色で白色粒を多く含む。			(3.6)
2	SD01	陶器	甕	瀬美か	内面は黄灰色。外面に灰釉。胎土は灰色で黑色ガラス質物を含む。12世紀。研磨土器に転用。			(4.3)
3	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに暗灰色。胎土表面は暗灰色で胎土内に暗赤褐色。砂粒を含む。内外面に9コ方向ナリ。			(3.7)
4	SD01-2	陶器	甕	常滑か	内面は黄灰色。外面は褐色で自然釉付器。胎土は灰白色で白色入和含む。研磨土器に転用。			(3.6)
5	SD01-2	陶器	甕	白石か	内外面ともに灰釉。外面に自然釉付器。胎土は黄灰色で白色粒を多く含む。			(6.2)
6	SD01-1	陶器	甕	白石か	内面は黄灰色。外面は灰白色。胎土は黄灰色で白色粒を多く含む。12世紀～14世紀。研磨土器に転用。	最大長 (6.1)	最大幅 (4.8)	最大厚 (1.6)
7	SD01-2	陶器	甕	白石	内面は少し黄褐色。外面に自然釉。胎土表面は灰色で、胎土内は黄灰色。砂粒(特別に白色粒)を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (7.6)	最大幅 (10.0)	最大厚 (1.9)
8	SD01	陶器	甕	白石	内面は灰褐色。外面に自然釉付器。胎土は黄灰色で細く、砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(5.3)



第 161 図 SD01 出土遺物7

第 99 表 SD01 出土遺物観察表7

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	陶器	便	白石	内外面共ににい黄褐色。外面に自然釉付着。胎土は黄灰色で砂粒を多く含む。内面に斜方向ナデ。外面上ヨコ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(5.6)
2	SD01	陶器	便	白石	内面は灰褐色。外面に自然釉付着。胎土は灰白色。内面上斜方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(6.1)
3	SD01	陶器	便	白石	内面は暗灰褐色。外面はにい黄褐色。自然釉付着。胎土は黄灰色。13世紀後半～14世紀前半。			(5.5)
4	SD01	陶器	便	常滑市	内面は明褐色。外面上灰褐色。胎土は灰白色。			(5.3)
5	SD01-2	陶器	便	白石	内面は褐色。外面上にい赤褐色。胎土表面は赤褐色で胎土内には黒褐色。白色粉を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(6.8)
6	SD01-2	陶器	便	常滑市	内面は褐色。外面上灰褐色。自然釉付着。胎土は褐灰色で白色大粒を含む。			(6.2)
7	SD01	陶器	便	白石	内外面上に灰褐色。外面上自然釉付着。胎土は灰褐色で白色粉、黑色ガラス質粉を多く含む。内面上にヨコ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(4.0)
8	SD01	陶器	便	白石	内面は褐灰色。外面上灰褐色。胎土表面は褐灰色で胎土内には褐色。砂粒を多く含む。内面上ヨコ方向ナデ。外面上に斜方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(4.1)



第162図 SD01出土遺物8

第100表 SD01出土遺物観察表8

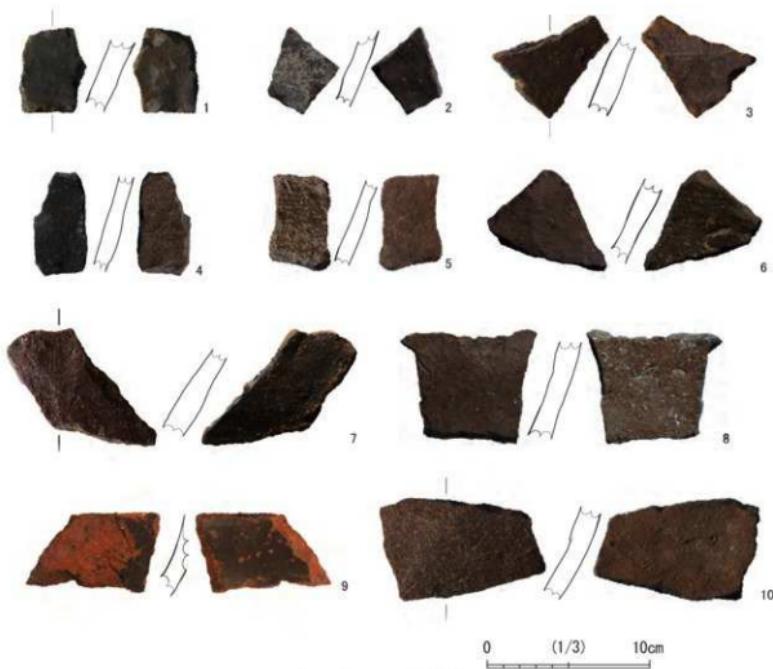
番号	遺物・層位	種別	目録	産地	特徴	法量(cm)		
						四径	底径	高さ
1	SD01	陶器	便	白石	内面は黄灰色。外面は灰黃褐色。胎土表面は灰土。胎土内に白い塊状。砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(3.8)
2	SD01-2	陶器	便	白石	内外面ともに褐色。外面に自然釉付着。胎土は褐灰色で白色粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(9.8)
3	SD01-1	陶器	便	白石	内面は明赤褐色。外面はぶつぶつ赤褐色。胎土は明赤褐色で白色粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(6.5)
4	SD01	陶器	便	白石	内外面ともに褐灰色。胎土表面はにじみ赤褐色。胎土内は暗灰色。砂粒を多く含む。内面に四方向ナギ。外面にタテ方向ナギ。13世紀後半～14世紀前半。			(7.4)
5	SD01	陶器	便	白石	内外面ともに褐灰色。外面上半に自然釉付着。胎土は黄灰色で砂粒を非常に多く含む。内面にタテ方向ナギ。13世紀後半～14世紀前半。			(10.0)
6	SD01	陶器	便	白石	内面はぶつぶつ褐褐色。外面は黄灰色。胎土は二段構成で白色粒と赤色粒を多く含む。周縁部内外面を研磨。13世紀後半～14世紀前半。研磨上部に軋用。			(5.4)
7	SD01	陶器	便	白石	内面は黄褐色。外面は褐灰色。自然釉付着。胎土は黄灰色で白色粒を多量に含む。13世紀後半～14世紀前半。			(3.9)
8	SD01	陶器	便	白石	内外面ともに褐赤褐色。外面に自然釉付着。胎土は褐灰色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(4.0)



第163図 SD01出土遺物9

第101表 SD01出土遺物観察表9

番号	遺物・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						横幅	縦幅	高さ
1	SD01	陶器	便	白石	内面はにぶい赤褐色。外面は灰褐色。胎土は明赤褐色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。			(3.4)
2	SD01	陶器	便	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は暗灰黄色で白色粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。			(4.5)
3	SD01-2	陶器	便	白石	内面は明赤褐色。外面はにぶい赤褐色。胎土は明赤褐色で白色粒を多量に含む。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。			(3.9)
4	SD01-2	陶器	便	白石か	内外面ともに灰褐色。胎土は暗灰褐色で砂粒を多く含む。内外面に斜方向ナデ。研磨土器に転用。			(3.25)
5	SD01-1	陶器	便	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は暗褐色で砂粒を多く含む。内面には斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。			(6.0)
6	SD01	陶器	便	白石か	内面は暗灰褐色。外表面は黄褐色。胎土は灰色で白色粒、黒色粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 9.35	最大幅 (5.45)	最大厚 (1.3)



第164図 SD01出土遺物10

第102表 SD01出土遺物観察表10

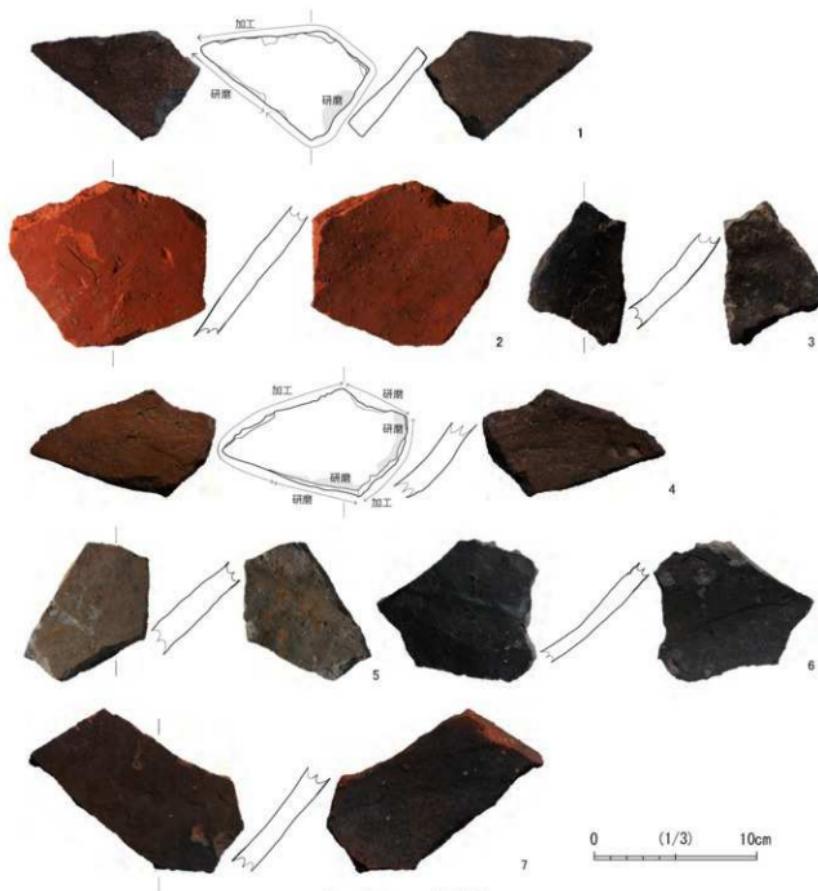
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	重量(cm)		
						11枚	底径	高さ
1	SD01	陶器	甕	常滑	内外面ともに灰褐色。胎土は灰色で白色粒子を含む。			(4.4)
2	SD01	陶器	甕	白石か	内面は黄灰色。外面上は灰色。自然縫合部。胎土は灰色で白色粒子を含む。内面に斜方向ナデ。外面上に2方向ナデ。			(4.6)
3	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は黄灰色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(4.9)
4	SD01	陶器	甕	白石か	内面は暗灰褐色。外面上胎土は灰色。内面に3方向ナデ。外面上にタテ方向ナデ。			(3.8)
5	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。外面上自然縫合部。胎土は黄灰色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(3.2)
6	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。内面上自然縫合部。胎土は褐色。内面に斜方向ナデ。外面上にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(5.3)
7	SD01-2	陶器	甕	白石	内面は黄褐色。外面上に2方向ナデ。胎土は褐色。13世紀後半～14世紀前半。			(7.3)
8	SD01-1	陶器	甕	白石	内面は褐色。自然縫合部。外面上灰褐色。胎土は褐色で砂粒を多く含む。内面に3方向ナデ。外面上にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(5.9)
9	SD01-2	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は白色。胎土は白色で砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(5.8)
10	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は黄灰色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(5.7)



第165図 SD01出土遺物観察表 11

第103表 SD01出土遺物観察表 11

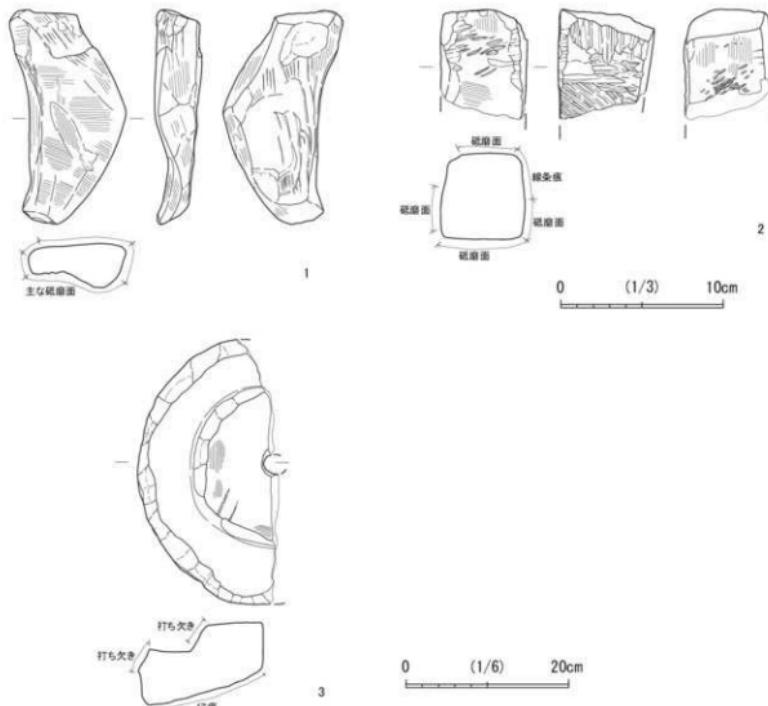
番号	遺構・層位	種別	器種	產地	特徴			(法量/cm)
					口径	底径	高さ	
1	SD01	陶器	便	白石	外表面は灰褐色。胎土は相模色で砂粒を含む。			(3.6)
2	SD01-2	陶器	便	白石	外表面は灰褐色。胎土は相模色で白色粒を含む。			(3.5)
3	SD01	陶器	便	白石か	外表面は灰褐色。胎土は灰褐色で砂粒を含む。			(6.0)
4	SD01-1	陶器	便	白石か	外表面は灰褐色。胎土は灰褐色で白色粒を含む。			(4.5)
5	SD01	陶器	便	白石	内面は褐色。外面は褐灰色。新土は薄褐色で砂粒を含む。内面にタテ方向ナデ。外面にヨコ方向ナデ。			(5.2)
6	SD01	陶器	便	白石か	外表面は褐色。胎土は褐色で砂粒を多く含む。			(5.2)
7	SD01	陶器	便	白石	内面は灰褐色。外面は灰褐色。胎土表面は褐色。胎土内は黄褐色。砂粒を多く含む。			(5.4)
8	SD01	陶器	便	白石	内面は褐色。外面は褐灰色。胎土表面は褐色。新土内は黒褐色。白色粒を多く含む。			(5.8)
9	SD01	陶器	米摺	白石	内面は黄褐色。外表面は灰褐色。胎土は褐色で白色粒を多く含む。			(4.3)
10	SD01	陶器	便	白石	外表面は褐灰色。胎土表面は褐褐色。胎土内は灰褐色。砂粒を含む。			(4.7)
11	SD01	陶器	便	白石	内面は灰褐色。胎土は相模色で砂粒を含む。			(6.95)
12	SD01	陶器	便	白石	内外表面は褐褐色。胎土は褐褐色で砂粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。	最大直径 (7.4)	最大幅 (7.0)	最大高 (1.4)



第166図 SD01出土遺物12

第104表 SD01出土遺物観察表12

番号	遺物・層位	種別	器種	产地	特徴	寸法(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD01	陶器	罐	白石	内外面ともに褐色。胎土は褐色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	86.7	69.6	(1.3)
2	SD01	陶器	罐	白石	内外面ともに褐色。胎土は褐色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(9.4)
3	SD01-2	陶器	罐	常滑	内面は褐色。外面は黒褐色。胎土は褐色で白色粒を多く含む。			(5.3)
4	SD01-1	陶器	便	白石	内面は褐色。外面は灰褐色。胎土は褐色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	86.63	61.4	(1.3)
5	SD01	陶器	罐	常滑	内外面ともに灰褐色。胎土は灰色で白色粒を含む。			(5.3)
6	SD01-2	陶器	罐	白石	内外面ともに灰色。胎土は灰色。			(6.1)
7	SD01	陶器	罐	白石	内面は褐色。外表面は灰褐色。胎土は灰色で白色粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外表面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(6.0)



第167図 SD01出土石製品

第105表 SD01出土石製品観察表

番号	遺跡・層位	種別	器種	特徴	現存	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
1	SD01 新	石製品	砥石	不定形をなし、主な砥磨面は1面であるが、他の面にも砥磨面あり。仕上げ砥とみられる。石材はダイサザ質凝灰岩。	完存	13.2	6.0	2.7	241.0
2	SD01 古	石製品	砥石	角柱状の形態で、4面とも砥磨面である。その1面には縦条痕も顕著に認められる。 （上）「鏡か中鏡」とみられる。石材はダイサザ質凝灰岩。	一部	66.0	15.3	(5.3)	305.5
3	SD01 古	石製品	石臼	素白の下部、右部と受皿縁辺が意図的に打ち欠かれている。台部の目の歯はねじなど消耗しており、部分的に擦痕のみが確認される。下面には全面バ盤が残る。石材は安山岩。	半欠	(32.5)	(17.4)	(10.1)	(5.3kg)

## SD02（第153図）

調査区南部に位置し、調査区南壁から東側にかけて直線的にのびる溝跡である。SB04・05、SK06、SD07と重複し、いざれよりも古い。西側は調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約22.8mにわたって検出している。主軸方位はN-74°-E。検出面での規模は上幅1.6m、下幅0.7m、確認面よりの深さは50cmを測る。断面形状は箱形を呈し、西側から東側へ緩やかに傾斜している。堆積土は7層に分層でき、自然堆積である7層以外はすべて人為的埋土である。

## SD03 (第 153・168・169 図、第 106 表)

調査区北部に位置し、東西方向へ直線的にのびる溝跡である。SE09、SX01、SK19・20、SD18・19と重複し、いずれよりも古い。東側はSX01によって失い、西側ではSD18及び攪乱によって失うため全長は不明であるが、総長約 20.0m にわたって検出している。主軸方位は N-73° -E。検出面での規模は上幅 1.9m、下幅 1.0m、確認面よりの深さは 60cm を測る。本遺構は掘方の形状、及び堆積土層の確認によって3回の掘削がされており、南側から北側へ移動している。いずれの時期の溝跡も断面形状は逆台形を呈する。底面では新旧それぞれ東側から西側へ緩やかに傾斜している。堆積土は最古段階の 14・15 層が自然堆積であるか、その他はすべて人為的埋土である。

第 169 図は SD03 出土遺物である。1 は常滑産陶器で 2 辺を加工 1 辺を研磨使用している。2～4 は白石產でいずれ研磨使用している。

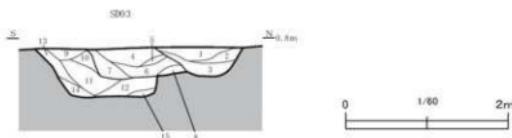
## SD04 (第 153・170 図、第 107 表)

調査区東部に位置し、南北方向へ直線的にのびる溝跡である。SB01・04、SD01・09と重複し、SB01・SD01・09よりも古く、SBO4よりも新しい。総長約 27.2m にわたって検出している。主軸方位は N-11° -W。検出面での規模は上幅 1.3m、下幅 0.6 m、確認面よりの深さは 50cm を測る。断面形状はU字状を呈し、南側から北側へ緩やかに傾斜している。堆積土は3層に分層でき、すべて自然堆積である。

第 170 図は SD04 出土の錢貨で、元祐通宝である。

## SD05 (第 153 図)

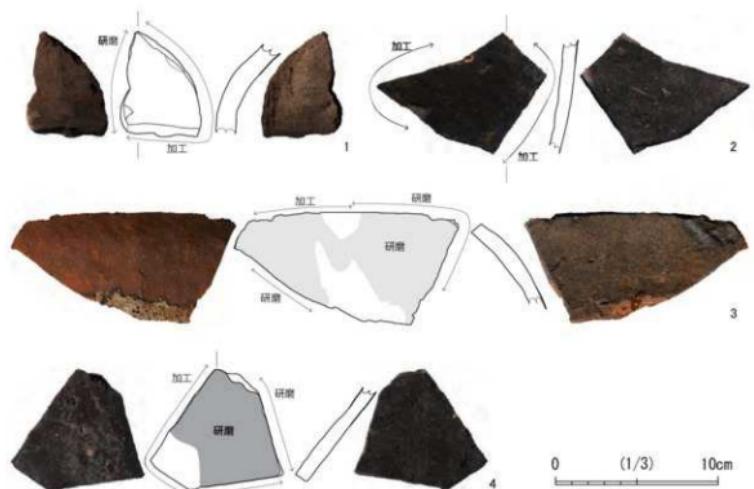
調査区南部に位置し、東西方向へ直線的にのびる溝跡である。SE02・SD16と重複し、SE02よりも古く、SD16よりも新しい。東・西とも調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 15.6m に渡って検出している。主軸方位は N-77° -E。検出面での規模は上幅 1.2m、下幅 0.6 m、確認面よりの深さは 40cm を測る。断面形状はU字状を呈し、東側から西側へ緩やかに傾斜している。堆積土は4層に分層でき、すべて人為的埋土である。



SD03 土層目次

層No.	土 色	土 質	特 徴
1	暗褐色	シルト	黄褐色シルト粒を極めて多量、炭化物を少量含む。
2	黒褐色	シルト	黒褐色シルト粒・黄褐色シルト粒をやや多く含む。
3	黒色	シルト	黄褐色シルト粒を多量、黄褐色シルト中ブロックを少量、炭化物を微量含む。
4	黒褐色	シルト	黄褐色シルト中ブロックをやや多く、炭化物を少量含む。
5	灰黄褐色	シルト	黒褐色シルト粒を少量含む。
6	黒褐色	シルト	黄褐色シルト粒を多量、炭化物をやや多く含む。
7	黒褐色	シルト	黄褐色シルト粒・炭化物を微量含む。
8	褐灰色	シルト	黄褐色シルト・小ブロックを少量含む。
9	にじみ・黄褐色	シルト	暗褐色シルト中ブロックを少量含む。
10	灰黄褐色	シルト	マンゴンを少量含む。
11	灰黄褐色	粘質シルト	マンゴン・暗褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
12	黒褐色	粘質シルト	灰白色粘質シルト中ブロックを少量含む。
13	黒色	粘質シルト	暗褐色シルト・小ブロックを少量含む。
14	にじみ・黄褐色	粘質シルト	黒褐色細砂・小薄層を五層状に含む。
15	黒褐色	粘質シルト	黒褐色細砂を五層状に含む。

第 168 図 SD03 土層断面図



第169図 SD03出土遺物

第106表 SD03出土遺物観察表

番号	道徳・層位	種別	器種	產地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD03-7	陶器	壺	常滑	内面は暗灰黄色。外面はにじみ褐色。胎土は褐灰色。研磨土器に転用。内外面と側縁に透け目(側縁加工後に付着)。12世紀～13世紀。	(6.3)	(4.9)	(1.2)
2	SD03-ウ	陶器	壺	白石	内外面ともに黄褐色。内面に凹凸方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。			(6.95)
3	SD03	陶器	壺	白石	内面は褐灰色。外表面にない褐色。自然釉付着。胎土は灰白色。内面に凹凸方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。			(5.3)
4	SD03	陶器	壺	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は灰色で白色大粒を含む。時期不明。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (7.1)	最大幅 (7.0)	最大厚 (0.9)



第170図 SD04出土金属製品

第107表 SD04出土金属製品観察表

番号	道徳・層位	種別	器種	特徴	法量		
					径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
1	SD04	金属製品	銭貨	元祐通宝	24.06	1.05	2.16

SD06(第153・171図、第108表)

調査区南部に位置し、東西方向へ直線的にのびる溝跡である。SB06・07、SD02と重複し、SB07よりも古く、SB06、SD02より新しい。東側は調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約10.4mにわたって検出している。主軸方位はN-81°-E。検出面での規模は上幅0.8m、下幅0.6m、確認面上りの深さは20cmを測る。断面形状は皿形を呈し、西側から東側へ緩やかに傾斜している。堆積土は3層に分層でき、すべて人為的埋土である。

第171図はSD06出土の白石産陶器である。13世紀後半～14世紀前半。

## SD07 (第 153・172 ~ 174 図、第 109 ~ 110 表)

調査区南部に位置し、東西方向へやや弧状にのびる溝跡である。SE03・04、SK06、SD02と重複し、SE03・04よりも古く、SK06、SD02より新しい。西側は調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 13.3m にわたって検出している。主軸方位は N-67° -E。検出面での規模は上幅 2.4 ~ 3.5m、下幅 0.2 ~ 0.8m、確認面よりの深さは 100cm を測る。断面形状は東側では U 字状、西側では V 字状を呈し、西側から東側へ緩やかに傾斜している。堆積土は 9 層に分層でき、すべて自然堆積である。

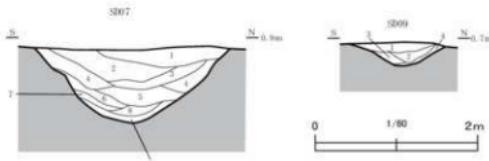
第 173・174 図は SD07 出土陶器と土製品である。陶器は第 173 図 3・8・9・10・12 は常滑産、そのほかは白石産である。第 173 図 3・12・第 174 図 1・7 で研磨に使用している。



第 171 図 SD06 出土遺物

第 108 表 SD06 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	出土量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD06	陶器	片口鉢	白石か 常滑。	内外面ともに黄灰色。胎土は黄灰色で砂粒を含む。内外面クロナゲ。内面は使用により 窪み。			16.00



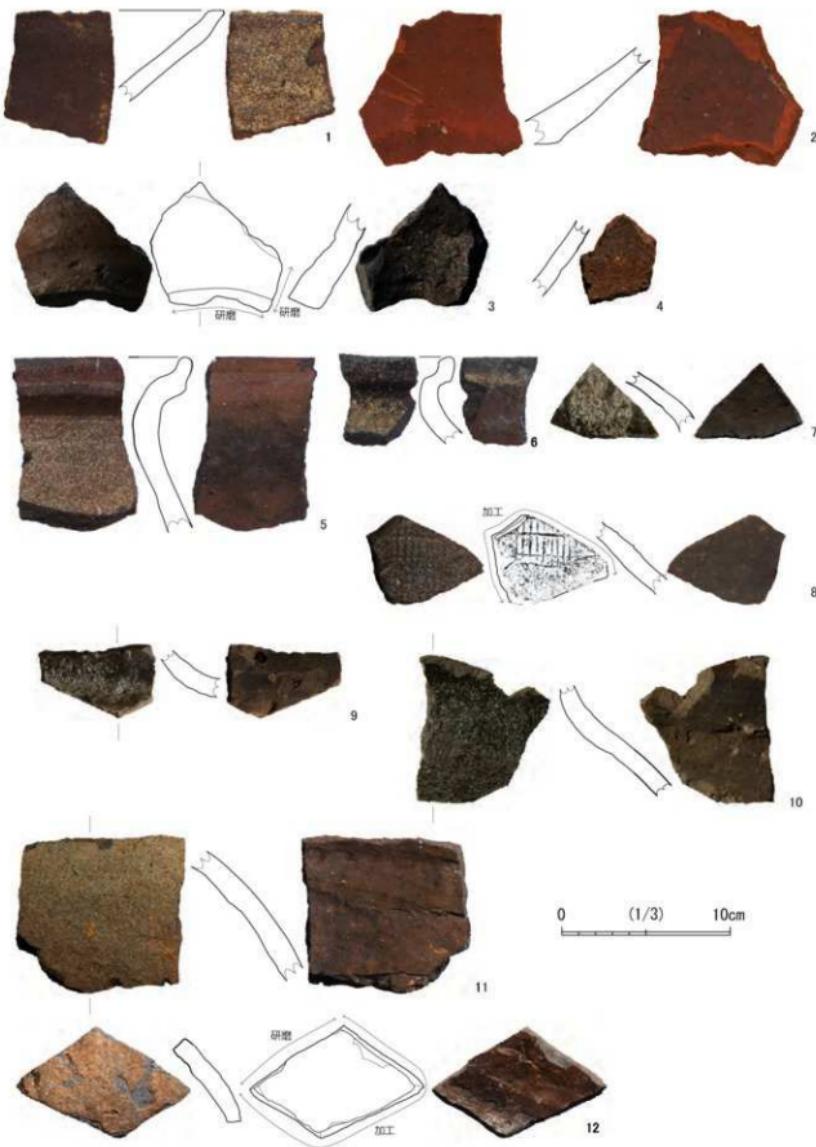
SD07 土層記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10RE3/2	シルト 黄褐色砂を微量含む。
2	黒褐色	10RE3/1	シルト 黄褐色砂を微量含む。
3	黒褐色	10RE3/1	シルト 黄褐色砂を下位に集積する。
4	黒褐色	10RE3/1	砂質シルト マンガンを多量含む。黄褐色砂を微量含む。
5	黒色	10RE2/1	粘土 灰色砂とオリーブ色粘土を互層状に含む。
6	灰色	10Y4/1	砂質シルト マンガンをやや多く、黄褐色砂を少量含む。
7	黒色	10RE2/1	粘土 灰化物を少量含む。灰色砂を互層状に含む。
8	灰色	10Y4/1	砂質シルト 黑色粘土を互層状に含む。
9	灰色	10Y4/1	砂質シルト 灰色粘土を下位に集積する。

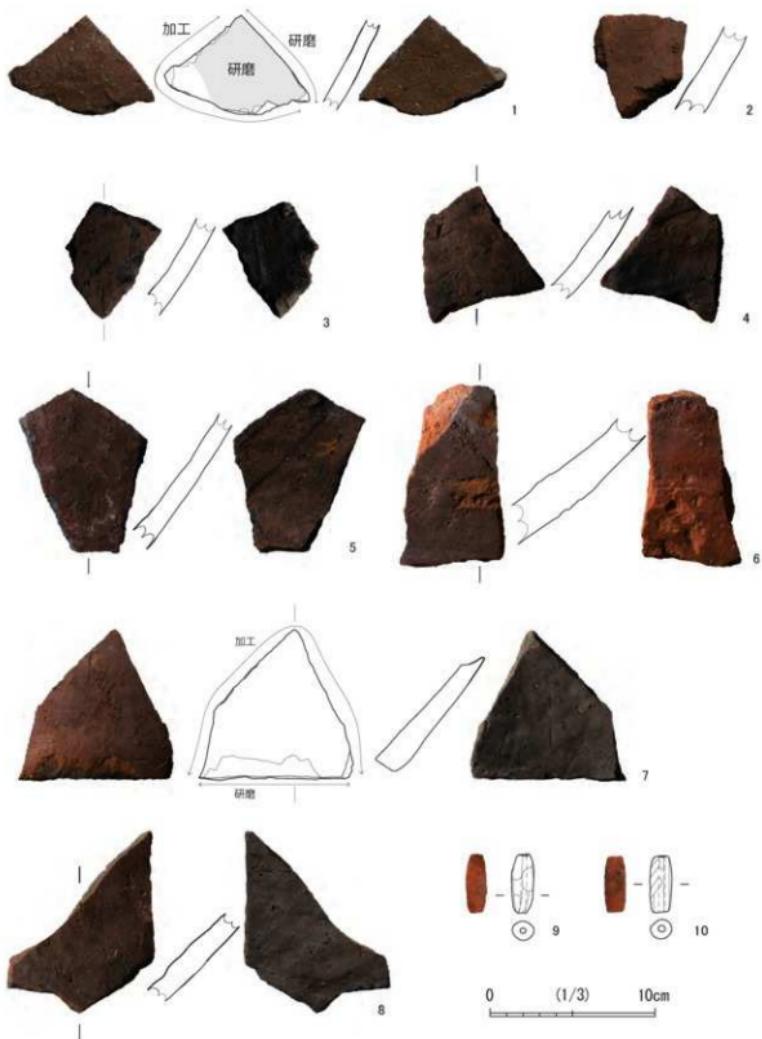
SD09 土層記

層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10RE2/3	シルト 黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	にごい黒褐色	10RE3/3	砂質シルト 黑褐色シルト小ブロックを微量含む。
3	黒灰色	10YR1/1	シルト 灰色シルト中ブロックをやや多く含む。
4	灰黒褐色	10YR1/2	シルト 黑褐色シルト中ブロックを多量含む。

第 172 図 SD07・09 土層断面図



第173図 SD07出土遺物 1



第 174 図 SD07 出土遺物 2

第109表 SD07出土遺物観察表1

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD07上層	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに灰褐色。内面に自然釉付着。胎土には <sup>13</sup> 褐色で砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(7.8)
2	SD07下層	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに褐色。胎土表面は褐色。胎土内には灰黃褐色、砂粒を多く含む。内面磨滅。13世紀後半～14世紀前半。	(19.0)	(5.9)	
3	SD07	陶器	片口鉢	黒漆	内外面ともに灰褐色。胎土は褐灰色で白色粒、黑色ガラス質粒を多く含む。研磨土跡に転用。器大長 器大幅 器大高 (7.5) (7.6) (2.0)			
4	SD07	陶器	片口鉢	白石	内面には <sup>13</sup> 褐色、黄褐色、自然釉付着。外面には <sup>13</sup> 褐色。胎土には <sup>13</sup> 褐色で砂粒を含む。内外面に <sup>13</sup> 方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(4.6)
5	SD07	陶器	便	白石	内外面ともに灰褐色。胎土表面は褐色。胎土内には <sup>13</sup> 褐色、砂粒(特に白色粒)を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(16.0)
6	SD07	陶器	便	白石	内外面ともに灰褐色。外面に自然釉付着。胎土は灰褐色。砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(5.3)
7	SD07	陶器	便	不明	内面は <sup>13</sup> 褐色。外面は褐色。自然釉付着。胎土は褐色。内面に <sup>3</sup> 方向ナデ。			(4.6)
8	SD07上層	陶器	黒漆		内外面ともに灰褐色。外面に自然釉付着。胎土は灰褐色、砂粒を含む。第1段階1b～4、12世紀後半～13世紀初期。			(4.5)
9	SD07	陶器	便	黒漆	内面は <sup>13</sup> 褐色。外面は黒褐色。自然釉付着。胎土には <sup>13</sup> 褐色で白色粒を含む。			(4.2)
10	SD07	陶器	便	黒漆	内面は <sup>13</sup> 褐色。外面は <sup>13</sup> 褐色。自然釉付着。胎土は <sup>13</sup> 褐色で白色大粒を含む。3～6a型式。12世紀後半～13世紀後半。			(6.7)
11	SD07	陶器	便	白石	内外面ともに灰褐色。外面に自然釉付着。胎土は <sup>13</sup> 褐色で砂粒を多く含む。内外面に <sup>3</sup> 方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(7.9)
12	SD07	陶器	道	常滑か	内面には <sup>13</sup> 褐色。外側に自然釉付着。胎土は灰褐色。内面に <sup>3</sup> 方向ナデ。研磨土跡に転用。			

第110表 SD07出土遺物観察表2

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD07	陶器	便	白石	内外面ともに <sup>13</sup> 褐色。胎土は褐灰色で白色粒を多く含む。内面に <sup>3</sup> 方向ナデ。外面上に <sup>3</sup> 方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土跡に転用。			(5.5)
2	SD07	陶器	便	白石	内面は <sup>13</sup> 褐色。外面は <sup>13</sup> 褐色。胎土は <sup>13</sup> 褐色で白色粒を含む。内面に <sup>3</sup> 方向ナデ。外面上に <sup>3</sup> 方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(5.2)
3	SD07	陶器	便	白石	内面は <sup>13</sup> 褐色。外面は <sup>13</sup> 褐色。胎土は <sup>13</sup> 褐色で白色粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(6.2)
4	SD07	陶器	便	白石	内外面ともに <sup>13</sup> 褐色。胎土表面は <sup>13</sup> 褐色。胎土内は <sup>13</sup> 褐色。内面に <sup>3</sup> 方向ナデ。外面上に <sup>3</sup> 方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(6.8)
5	SD07	陶器	便	白石	内外面ともに <sup>13</sup> 褐色。胎土表面は <sup>13</sup> 褐色。胎土内は <sup>13</sup> 褐色。砂粒を含む。内面上に <sup>3</sup> 方向ナデ。外面上に <sup>3</sup> 方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(8.2)
6	SD07	陶器	便	白石	内面は <sup>13</sup> 褐色。外面上に <sup>13</sup> 褐色。胎土は <sup>13</sup> 褐色。13世紀後半～14世紀前半。			(11.05)
7	SD07	陶器	便	白石	内面は <sup>13</sup> 褐色。外面は <sup>13</sup> 褐色。胎土は <sup>13</sup> 褐色で白色粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。研磨土跡に転用。	(9.0)	(9.1)	(1.6)
8	SD07	陶器	便	白石	内外面は <sup>13</sup> 褐色。胎土の <sup>13</sup> 褐色。13世紀後半～14世紀前半。			(5.4)
9	SD07下層	土製品	土鉢		胎土には <sup>13</sup> 褐色。	器大長 器大幅 器大高 (3.6) (1.2) (0.35)		
10	SD07上層	土製品	土鉢		胎土には <sup>13</sup> 褐色。	器大長 器大幅 器大高 (3.4) (1.3) (1.3)		

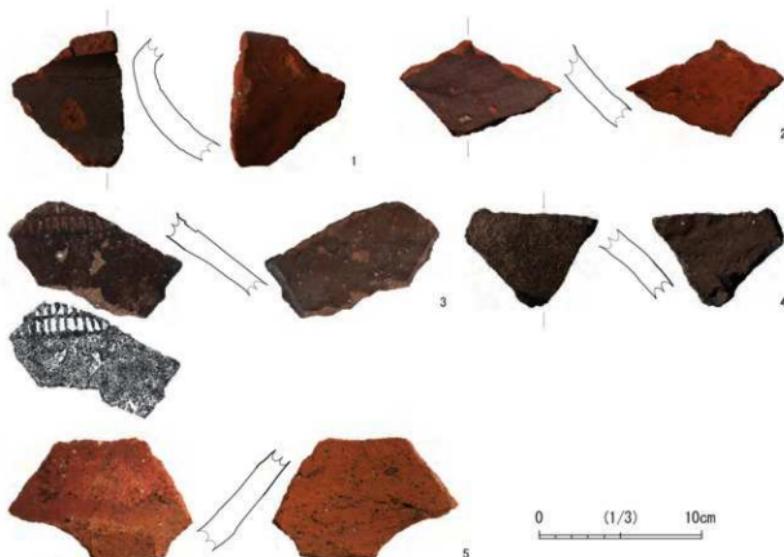
SD09（第153・172・175図、第111表）

調査区北部に位置し、東西方向へ直線的にのびる溝跡である。SB01、SD04・08と重複し、SB01、SD08よりも古く、SD04より新しい。東側でSD08と重複することから全長は不明であるが、総長約24.0mにわたって検出している。主軸方位はN-67°～E。検出面での規模は上幅0.5～1.4m、下幅0.2～0.4m、確認面よりの深さは30cmを測る。断面形状は東側ではU字状を呈し、西側から東側へ緩やかに傾斜している。堆積土は4層に分層でき、1層が人為的埋土、2～4層が自然堆積である。

第175図はSD09出土の白石産陶器である。3は外面に長方形スタンプを押印する。13世紀後半～14世紀前半

SD10（第153・176図、第112表）

調査区中央西寄りに位置し、南北方向へ直線的にのびる溝跡である。SD01と重複し、これより新しい。全長は25.0mで主軸方位はN-7°～W。検出面での規模は上幅0.9～1.5m、下幅0.4～0.8m、確認面



第175図 SD09出土遺物

第111表 SD09出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	产地	特徴	法量(cm)		
						日径	夜径	面積
1	SD09	陶器	甕	白石	内面はこいの赤褐色。外面は赤灰色。自然断材者。胎土は明赤褐色で白色粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(7.9)
2	SD09	陶器	甕	白石	内面は明赤褐色。外面は火薙色。胎土は明赤褐色で白色粒を含む。内外面に斜方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(5.0)
3	SD09	陶器	甕	白石	内面は灰褐色。外面は灰赤色。胎土は灰褐色。砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(5.9)
4	SD09	陶器	甕	白石	内面は長方形スタンプ。外面に自然断材者。胎土表面は灰褐色。胎土内に砂粒を多く含む。内面に四方向ナデ。外面上にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(4.5)
5	SD09	陶器	片口鉢	白石	内面は焼色。外面は灰褐色。胎土は褐色で砂粒を多く含む。外表面は強烈による変化。黒斑あり。内面に四方向ナデ。外表面はクロナデ。下端にヘラケズリ。13世紀後半～14世紀前半。			(6.3)

よりの深さは20～50cmを測る。断面形状は浅いU字状を呈するが、底面は凹凸が著しい。堆積土は8層に分層でき、すべて人為的埋土である。

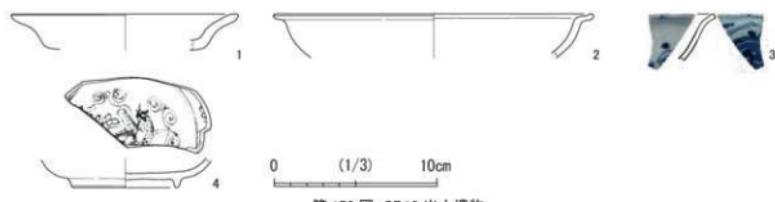
第176図はSD10出土遺物である。1は瀬戸美濃産反り皿で17世紀後半。2は龍泉窯系青磁碗で太宰府編年で13世紀中頃～14世紀初頭である。3・4は青花磁器皿である。3は芙蓉手の中でも桃果形の文様区画をもつ明山手で17世紀前半、4は素描による草花文を描き17世紀後半か。

#### SD11（第153・177図、第113表）

調査区南部西寄りに位置し、南北方向へ直線的にのびる溝跡である。SD12と重複し、これより新しい。南側は調査区外へ展開することから全長は不明であるが、総長約3.3mにわたって検出している。主軸方位はN-7°-W。検出面での規模は上幅2.4m、下幅0.6m、確認面よりの深さは100cmを測る。断面形状はV字状を呈するが、西側の立ち上がりは中位から上位にかけては大きく開いている。堆積土は12層に分

層でき、1層が人為的埋土、そのほかはすべて自然堆積である。

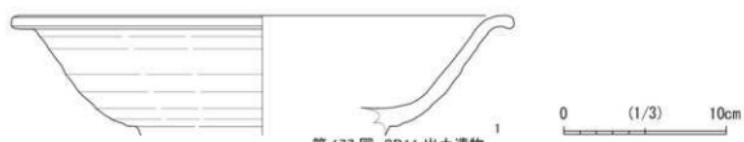
第177図はSD11出土の瀬戸美濃産陶器大皿で、16世紀末～17世紀初頭である。



第176図 SD10出土遺物

第112表 SD10出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm)
					(1)径	(2)径	(3)高	
1	SD10-1	陶器	盤	瀬戸美濃	灰り盤。内外面に灰釉(オリーブ黄色)。胎土は灰白色で精良。軟質。堅面第1段階後	(14.6)	(2.2)	
2	SD10-2	青磁	片	龍泉窯系	内外面灰オーブ色。胎土は精良。にがい黄褐色。太宗府編年図-3-a. 13世紀中頃～14世紀初頭。	(19.7)		(2.7)
3	SD10-1	青花磁器	盤	輸入磁器	見附手(廬山手)。17世紀前半。			3.0
4	SD10-1	青花磁器	盤	輸入磁器	見込に赤絵による草花文。17世紀後半。			6.5 (1.8)



第177図 SD11出土遺物

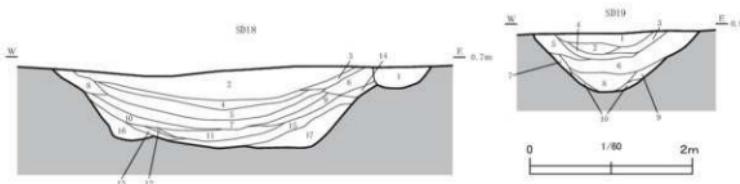
第113表 SD11出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm)
					(1)径	(2)径	(3)高	
1	SD11	陶器	盤	瀬戸美濃	大盤。内外面に灰釉(オリーブ黄色)。胎土は灰白色。精良。軟質。大盤第4段階後半～末。16世紀末～17世紀初。	(31.0)		(7.4)

## SD18 (第153・178～181図、第114～116表)

調査区西部に位置し、南北方向へ直線的にのびる溝跡である。SB02、SE12、SX02、SD01・03と重複し、SB02、SE12、SX02より古く、SD01・03より新しい。また南西部付近は擾乱によって失われる。北側、及び南側は調査区外へ展開することから全長は不明であるが、総長約25.6mにわたって検出している。主軸方位はN-8°W。本遺構は調査時に発生する土の搬出や調査期間等の関係から部分的な調査に留まるが、検出面での規模は上幅4.5m、下幅2.8m、確認面よりの深さは110cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は16層に分層でき、すべて自然堆積である。

第179～181図はSD18出土遺物である。第179図1～4は白石產陶器で13世紀後半～14世紀前半。5は土師質鉢型土器の部から底部で内面に油煙痕がみられる。第180・181図は木製品である。連歛下駄が1点と差歛下駄が1点、へら状木製品が出土している。連歛下駄は台部が小判型をなし、鼻緒穴は方形に近い。歯部は使用により甚だしく磨り減っている。木取りは板目材である。差歛下駄は露卯下駄で、台部の形状は方形に近い。歯部とも木取りは板目材である。へら状木製品は長さが67.7cmあり、幅は欠損のために不明である。明確に柄と身に分けて加工されており、断面形はそれぞれ柄が楕円形に身が扁平に作られている。木取りは柾目材である。



SD18 土層注記

層No.	土 色	土 質	特 様
1	にじい・黄褐色	10YR4/3	粘質シルト 黄褐色シルト中プロックやマンガンをやや多く含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	黄褐色シルト小プロックをやや多く、灰白色シルト粘を微量含む。
3	にじい・黄褐色	10YR4/3	粘性強い、マンガンを少許含む。
4	オリーブ褐色	5YR1/1	粘土 灰褐色シルト小プロックを多量含む。植物遺体の薄層が下位にみられる。
5	オリーブ黒色	5YR1/2	粘土 分解が進んだ植物遺体を認める。少許含む。
6	にじい・黄褐色	10YR4/3	シルト マンガンを多量、黄褐色シルト粘を微量含む。
7	暗褐色	10YR3/3	泥炭 未分離の植物遺体を多量含む。灰白色粘土やプロックを少許含む。
8	灰黄褐色	10YR4/2	シルト 灰褐色シルト小プロックを少許含む。
9	灰褐色	2.5YI1/1	粘土 灰白色をプロック状に多量含む。
10	黑褐色	10YR3/1	泥炭 灰褐色粘土やプロックを多量、植物遺体を全層に含む。
11	黒色	2.5YI2/1	泥炭 灰白色粘土の薄層を五層状に含む。
12	鵝灰色	10YR5/1	砂 粘粒状主体。褐色砂を少許含む。
13	オリーブ褐色	5YR1/1	粘土 灰褐色細粒砂を五層状に含む。植物遺体を少許含む。
14	黒色	2.5YI2/1	泥炭 灰色シルト中プロックをやや多く含む。
15	オリーブ褐色	5YR1/1	粘土 灰白色粘土や五層状に含む。
16	鵝灰色	10YR5/1	砂 灰褐色砂主体。灰褐色粘土や大プロックを多量、植物遺体をごく微量含む。
17	黒褐色	10YR3/2	シルト 灰白色粘土小プロックを少許含む。

SD19 土層注記

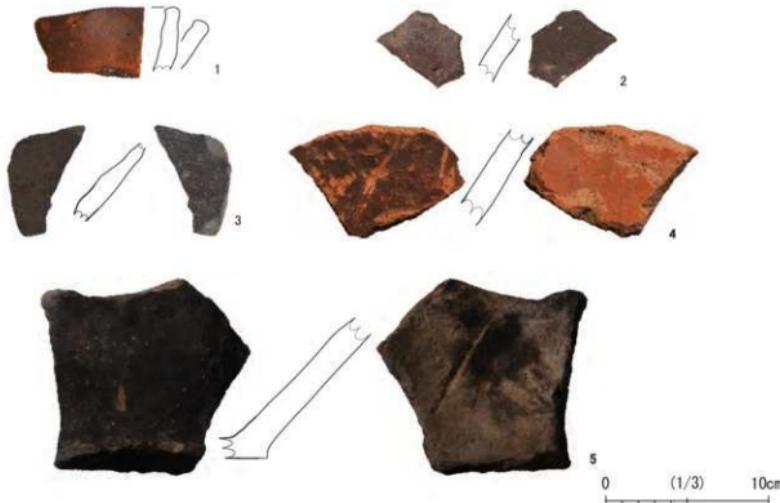
層No.	土 色	土 質	特 様
1	灰褐色	2.5YI5/2	粘質シルト マンガンをやや多く含む。
2	黄褐色	10YR4/6	シルト 灰褐色シルト中プロックを極めて多量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト 後付粘をこぶし状含む。
4	鵝灰色	10YR4/1	シルト 上位にマッシュ状葉理、植物遺体を少許含む。
5	にじい・黄褐色	10YR4/3	シルト 灰褐色シルト大プロックをやや多く含む。
6	暗褐色	10YR3/2	シルト 灰褐色シルト小プロックをやや多く含む。
7	にじい・黄褐色	10YR4/3	砂質シルト 灰褐色シルト小プロックをやや多く含む。
8	黒褐色	10YR1/2	粘質シルト 植物遺体を少許含む。灰白色粘土の薄層を含む。
9	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト 灰褐色粘土を多量含む。
10	灰オリーブ色	5YR2/2	粘土 黑褐色粘土の薄層を少許含む。

第 178 図 SD18・19 土層断面図

SD19 (第 153・178・182・183 図、第 117・118 表)

調査区西部に位置し、南北方向へ直線的にのびる構跡である。SB02、SK19・20、SD01・03と重複し、SB02、SK19・20より古く、SD01・03より新しい。総長約 3.3m にわたって検出している。全長は 21.4 m で主軸方位は N-7° -W。検出面での規模は上幅 2.1m、下幅 0.4 m、確認面よりの深さは 80cm を測る。断面形状は U 字状を呈する。堆積土は 10 層に分層でき、1~3 層が人為的埋土、そのほかはすべて自然堆積である。

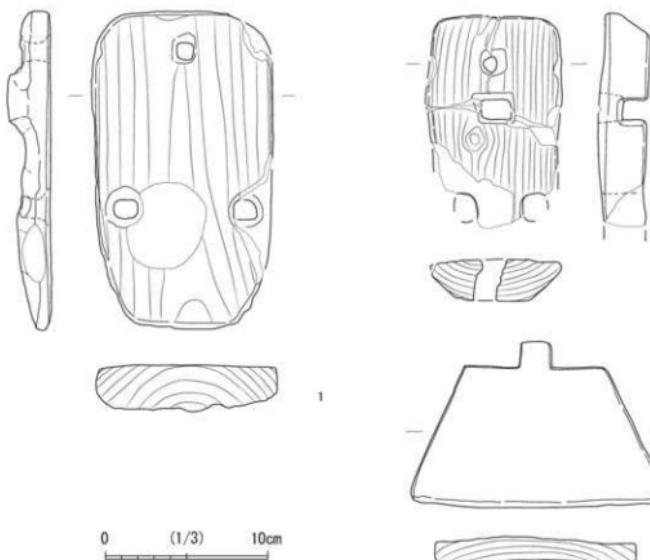
第 182・183 図は SD019 出土遺物である。第 182 図 2 は岸窯系陶器の擂鉢で 17 世紀後半から 18 世紀。1・3~5 は白石産陶器で 13 世紀後半~14 世紀前半である。第 183 図は SD019 から出土した砥石である。角柱状の形態で、4 面とも研磨面である。



第179図 SD18出土遺物

第114表 SD18出土遺物観察表

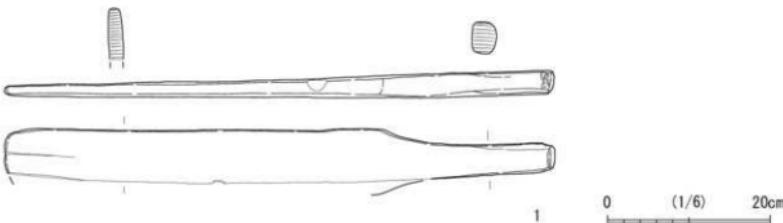
番号	遺物・部位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD18	陶器	片口鉢	白石	内面は褐色。外面は明赤褐色。断土は褐色で砂粒を含む。内外面にココ方向ナデ。 13世紀後半～14世紀前半。			(3.9)
2	SD18	陶器	片口鉢	白石	内面は褐色。外面は灰褐色。断土表面にぶい褐色。断土内は褐色。13世紀後半～14世紀前半。			(4.1)
3	SD18	陶器	便	白石	内面は褐色。外面は褐色。断土は黄褐色で白色粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(4.8)
4	SD18	陶器	便	白石	内面(1)ぶい褐色。外面はにぶい赤褐色。断土は浅黄褐色で白色粒、赤色粒を含む。 内面に30方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(5.8)
5	SD18	陶器	片口鉢	不明	内面は灰白色。外面は灰褐色。断土は浅黄色で砂粒を多く含む。内面に泡練痕。時期不明。			(19.0) (7.6)



第180図 SD18出土木製品1

第115表 SD18出土木製品観察表1

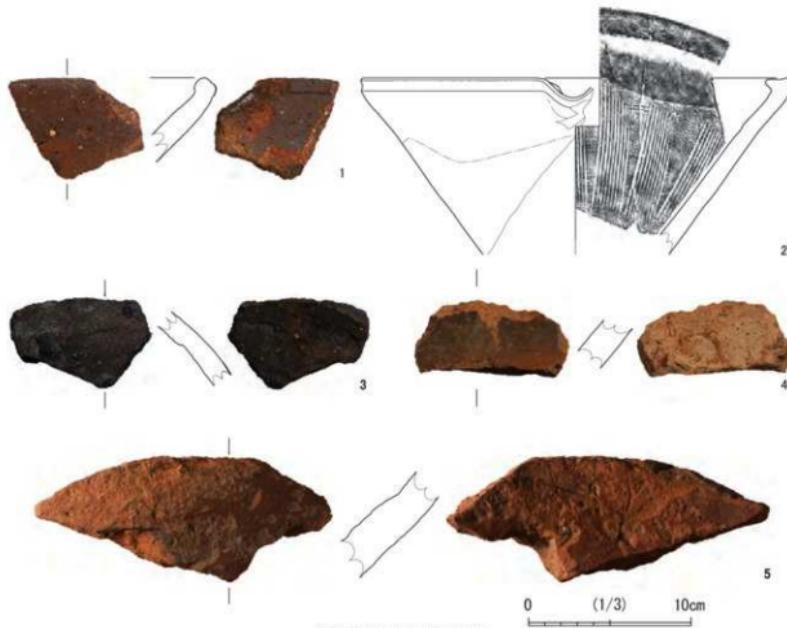
番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	法量(cm)			絹種	
					長さ	幅	厚さ		
1	SD18	木製品	車軸下駄	表面に使用により甚だしく擦り減っている。	一端欠 損	19.6	11.2	2.7	マツ属
2	SD18	木製品	車軸下駄	轔卯下駄。台部、車軸上板目材。 右は一面 欠損 左側 車軸上木 板目材	右は一面 欠損 左側 車軸上木 板目材	(13.0) 10.3	(2.6) 1.5	(0.6) 1.5	マツ属



第181図 SD18出土木製品2

第116表 SD18出土木製品観察表2

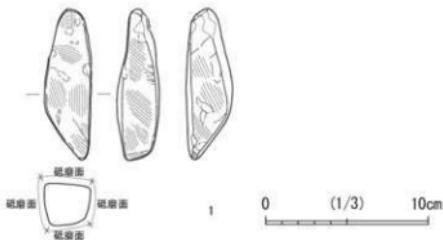
番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	法量(cm)			絹種
					身	幅	厚さ	
1	SD18	木製品	へん状 木製品	柄と身に分かれている。板目材。	身 長半	67.7 (6.3)	1.8	マツ属



第182図 SD19出土遺物

第117表 SD19出土遺物観察表

番号	遺構・部位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						対径	底径	部高
1	SD19	陶器	杯	白石	内外面ともに褐色。胎土表面は明赤褐色。胎土内に2箇灰色。砂粒を非常に多く含む。内外面にヨコ方向ナギ。13世紀後半～14世紀前半。			(5.1)
2	SD19	陶器	埴輪	岸葉系	内外面ともに2箇い褐色。口縁部に鉄錆。胎土は2箇い褐色で砂粒を微量含む。17世紀後半～18世紀。	26.4		10.9
3	SD19	陶器	甕	白石	内外面ともに褐色。胎土は暗褐色で砂粒を多く含む。内外面にヨコ方向ナギ。13世紀後半～14世紀前半。			(4.6)
4	SD19	陶器	片口鉢	白石	内面は浅黄色。外表面に2箇い黄褐色。胎土は2箇い黄褐色で白色粒、赤色粒を多く含む。内面にヨコナギ。外面に斜方向ナギ。13世紀後半～14世紀前半。			(3.0)
5	SD19	陶器	甕	白石	内外面ともに2箇い赤褐色。胎土は2箇い暗褐色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(6.5)



第183図 SD19出土石製品

第118表 SD19出土石製品観察表

番号	遺構・部位	種別	器種	特徴					残存	法量		
										長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
1	SD19	石製品	砥石	角柱状の形態で、4面とも砥磨面である。中縦とみられる。石材はディザイナーブレード 花崗岩。	自然→人為	青緑、白緑、深 青、紫、白、土、土製品、 石製品	SD08・SD10・12・18・19より古、SD04 より新	元存	9.3	2.8	2.6	88.5

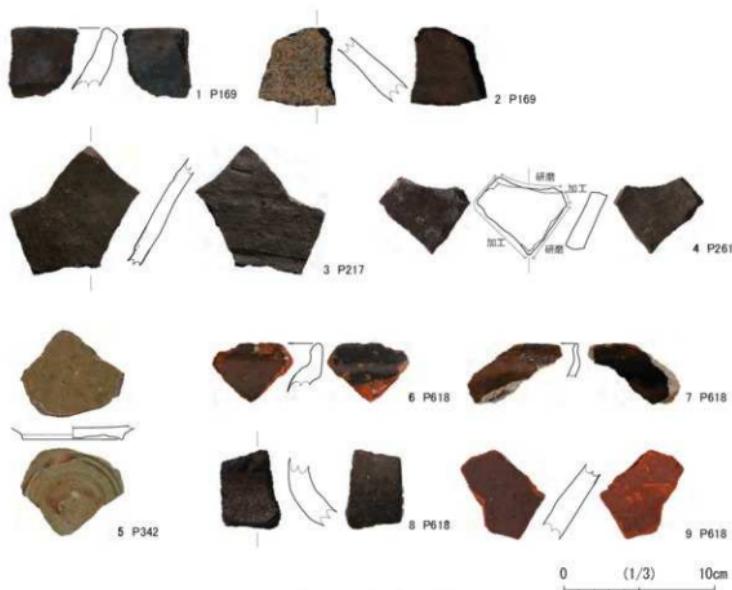
第119表 平成28年度調査 溝跡属性表

遺構名	棟出長 (m)	断面形	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	方向	堆積土	出土遺物	備考	平面図	断面図	
SD01	35.8	逆台形	2.2 ~ 3.5	0.5 ~ 1.8	0.7	N~80°~E	自然→人為	青緑、白緑、深 青、紫、白、土、土製品、 石製品	SD08・SD10・12・18・19より古、SD04 より新	100	154	
SD02	22.8	圓形	1.6	0.7	0.5	N~74°~E	自然→人為	SD04・05・SD06・SD07より古	100			
SD03	20.0	逆台形	1.9	1.0	0.6	N~73°~E	自然→人為	SD01・SD09・SK19・20・SD18・ 19より古	100	168		
SD04	27.2	U字	0.8 ~ 1.3	0.4 ~ 0.6	0.5	N~11°~W	自然	錫貨	SD01・SD01・09より古	100		
SD05	15.6	U字	1.2	0.4 ~ 0.6	0.4	N~77°~E	自然→人為	SD02より古、SD16より新	100			
SD06	10.4	圓形	0.8	0.6	0.2	N~40°~E	人為	白石か	SD07より古、SD06より新	100		
SD07	13.3	U字	2.4 ~ 3.5	0.2 ~ 0.8	1.0	N~67°~E	自然	白石、常滑	SD03・04より古、 SD06・SD02より新	100	172	
SD08	4.6	U字	1.6	0.5	0.5	N~65°~W	自然	SD09より新	100			
SD09	24.0	U字	0.5 ~ 1.4	0.2 ~ 0.4	0.3	N~67°~E	自然→人為	白石	SD01・SD08より古、 SD04より新	100	172	
SD10	25.0	U字	0.9 ~ 1.5	0.4 ~ 0.8	0.5	N~7°~W	自然	青緑、青花、肥 前系磁器、廻刀 美濃、小山焼	SD01より古、 中世陶器、廻刀 SD12より新	100		
SD11	3.3	V字	2.4	0.6	1.0	N~7°~W	自然			100		
SD12	1.7	U字	0.6	0.3	0.3	N~7°~W	自然		SD11より古、SD01より新	100		
SD13	4.0	U字	0.6	0.4	0.3	N~11°~E	人為			100		
SD14	2.1	圓形	0.5	0.4	0.2	N~23°~W	人為		SD13より新	100		
SD15	1.4	逆台形	0.4	0.3	0.2	N~25°~W	人為			100		
SD16	4.8	圓形	0.4	0.3	0.1	N~26°~W	人為		SD05より古	100		
SD17	4.4	圓形	0.4	0.2	0.1	N~72°~E	自然		SD10より古	100		
SD18	25.6	逆台形	4.5	2.8	1.1	N~8°~W	自然	白石、瓦質土器、 木製品	SD02・SD12・SD02より古、 SD01より新	100	178	
SD19	21.4	U字	2.1	0.4	0.8	N~7°~W	自然	白石、岸葉系陶 器、石製品	SD02・SK19・20より古、 SD01より新	100	178	
SD20	3.2	圓形	0.4	0.1	0.1	N~88°~E	人為		SD01より新	100		

## 7. ピット（第184・185図、120.121表）

調査区の中央部から南東部では柱穴が多数確認されている。これらの中には柱痕跡をとどめているものも見受けられたが、建物などの復元には至っていない。大部分のピットは長軸 0.3 ~ 0.6 m、短軸は 0.2 ~ 0.4 m の範囲に収まるものであり、形状は梢円形が多く、ほかに隅丸方形、円形、長方形などがみられる。

第184・185図はピット出土遺物である。第184図4は常滑産かと思われる陶器片で、2面を加工、2面を研磨使用している。1~3・6~9は白石産陶器で13世紀後半~14世紀前半。5は瀬戸美濃産灰釉皿。7は瀬戸美濃産天目茶碗で17世紀後半である。第185図はP18出土の銭貨で錢種は不明である。



第184図 ピット出土遺物

第120表 ピット出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	地	特徴		法量(cm)
					口径	底径	
1	P169 上層	角部	植林	白石	内面は灰色。外面はにぶい黄褐色。断土は黒褐色で粗く、砂粒を多く含む。	13世紀後半~14世紀前半	(4.05)
2	P169	角部	甕	白石	内外面ともに褐色。外面に自然植林着。断土は赤褐色で砂粒を多く含む。内面に30方角ナギ。	13世紀後半~14世紀前半	(4.3)
3	P217	角部	甕	白石か	内外面ともに褐色。断土は灰色で白色粒を多量に含む。内面に30方角ナギ。外縁にタケ方向ナギ。	13世紀後半~14世紀前半	(7.0)
4	P261	角部	甕	常滑か	内面は黄色。外面は褐色。断土は黄褐色で白色粗粒を含む。時期不明。研磨土器	13世紀後半~14世紀前半	(5.15)(5.9)(1.1)
5	P342	角部	甕	瀬戸美濃	内面に灰褐色(浅黄色)。断土は白色で精良。軟質。	13世紀後半~14世紀前半	(6.6)(9.9)
6	P618	角部	甕	白石	内面は灰褐色。外面は黒褐色。断土は褐色で白色粒。黑色ガラス質粒を含む。内外面に30方角ナギ。13世紀後半~14世紀前半。	13世紀後半~14世紀前半	(3.55)
7	P618	角部	大口茶碗	瀬戸美濃	内外面鐵鋸。断土は灰白色。頸部、茎部第4~5小節。17世紀後半。	17世紀後半	(15.60)(3.0)
8	P618	角部	甕	白石	内面は赤褐色。外面は灰褐色。自然植林着。断土は暗褐色で砂粒を含む。内面に30方角ナギ。13世紀後半~14世紀前半。	13世紀後半~14世紀前半	(4.5)
9	P618	角部	甕	白石	内面はにぶい赤褐色。外面は灰褐色。断土は赤褐色で砂粒(特に白色粒)を多く含む。13世紀後半~14世紀前半。	13世紀後半~14世紀前半	(5.0)



第185図 ピット出土金属製品

第121表 ピット出土金属製品観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	法量		
					径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	P01R	金属製品	錢貨		23.26	1.46	2.13

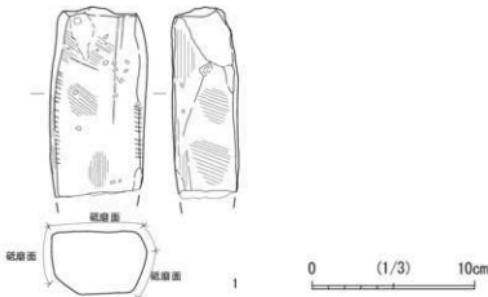
## 8. その他の出土遺物（第186～191図、第122～127表）

遺構精査、表土掘削時、及び攪乱内において、少量の遺物が出土している。

第186・187図は精査時の出土遺物である。第186図は砥石である。角柱状の形態で、主に3面が砥磨面である。第187図4は常滑産陶器か。断面の2辺と内面の一部を研磨に使用する。1～3・5～8は白石産陶器である。5は外面に円形のスタンプを持つ陶器片で、4辺を加工成型し外面に叩打痕をもつ。6は2辺を加工成型し1辺を研磨に使用する。7は外面に長方形スタンプを押印する。9・10はかわらけ。11は瓦質土器の擂鉢。12～14は土鍤である。

第188～190図は表土出土遺物である。第188図1は肥前産磁器碗で17世紀後半か。2は肥前産磁器碗で底部外面に「大明成化年製」の銘款がみられ、18世紀後半である。3は瀬戸美濃産天目茶碗で17世紀中頃～後半。4・5は肥前産磁器皿で、17世紀前半～中頃。8は青花磁器皿で素描による草花文を描く。17世紀後半か。7・8はロクロ成型のかわらけ。9・10は土鍤、11は輪羽口である。第189図3は常滑産陶器で3辺を研磨に使用する。13世紀後半～14世紀。1・2・4～8は白石産陶器で7は4辺を加工成型し内外面を研磨に使用する。13世紀後半～14世紀前半。第190図は錢貨である。1は錢種不明、2は寛永通宝である。

第191図はその他の出土遺物である。1は古瀬戸瓶子の胴部片で、2辺を加工2辺を研磨している。2は白石産陶器で1辺を加工成型し1辺を研磨に使用している。3は常滑産陶器片口鉢で13世紀後半である。



第186図 精査出土石製品

第122表 精査出土石製品観察表

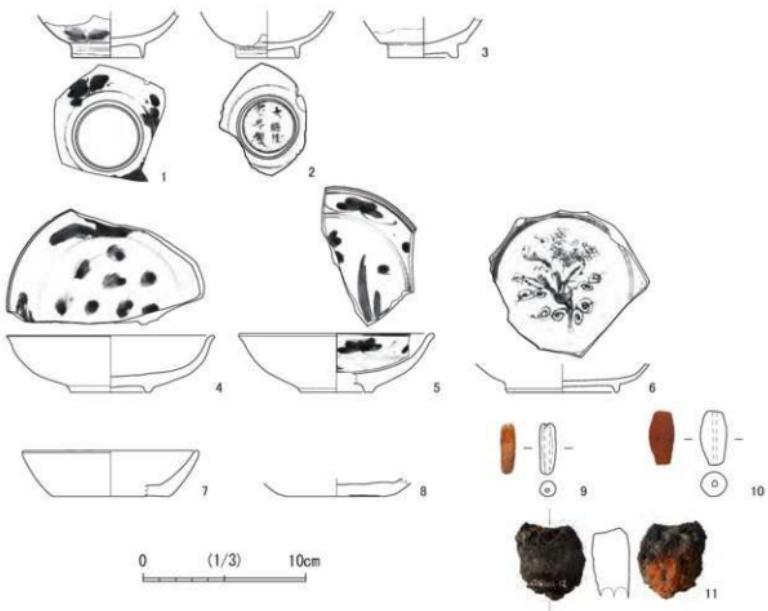
番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	縫合	石製品	砥石	角柱状の形態で、主に3面が砥磨面である。仕上げ砥とみられる。石材はダイサイト質斜灰岩。	半欠	(11.60)	(3.99)	(3.99)	(484.5)



第187図 精査出土遺物

第123表 精査出土遺物観察表

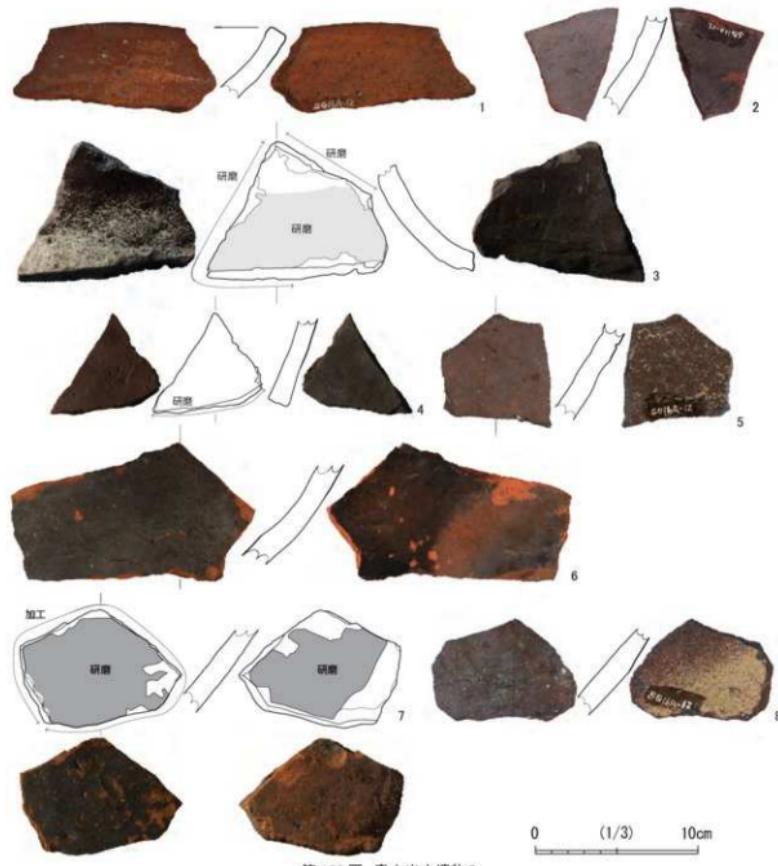
番号	道標・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						41種	底幅	器高
1	精査	陶器	片口鉢	白石	内外面とも褐灰色。胎土は赤褐色で白色粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。		(5.8)	
2	精査	陶器	片口鉢	白石	内面は橙色。外表面は褐色で自然縫合部。胎土は黄褐色で砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。		(5.6)	
3	精査	陶器	片口鉢	白石	内面は褐色。外表面には凹凸褐色。胎土は黄灰色で薄く。砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。		(6.4)	
4	精査	陶器	便	常滑か	内面は灰色。外面に自然縫合部。胎土は灰褐色で砂粒を多く含む。研磨土器に転用。研磨土器に転用。	最 大長 (3.6)	最 大 幅 (3.3)	最 大 高 (1.1)
5	精査	陶器	便	白石	内面は褐灰色。背面に灰褐色。胎土は褐灰色。外面に円形のスタンプ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。外面に押打痕。		(5.5)	
6	精査	陶器	便	白石	内外面とも褐色。胎土は黄褐色で砂粒を含む。下側縁と内面が研磨。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	最 大長 (4.5)	最 大 幅 (4.3)	最 大 高 (1.2)
7	精	陶器	便	白石	内外面とも褐色。外面に自然縫合部。胎土は黄褐色で白色粒を多く含む。		(4.4)	
8	精査	陶器	便	白石	内面は明赤褐色。背面は灰褐色。胎土は褐灰色で白色粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。		(5.3)	
9	精査	小口付			口の使用。内外面ともに凹凸褐色。胎土は暗色。			(2.8)
10	精査	小口付			口の使用。底既外(底)23年輪止め。内外面とも褐色。胎土は浅黄褐色。	(6.6)	(1.3)	
11	精査	瓦質土器	埴輪	不明	胎土は凹凸黄褐色。赤色粒を多く含む。全体的に磨滅が進む。		(8.2)	(3.3)
12	精査	土製品	土器		胎土は凹凸黄褐色。	最 大長 (3.8)	最 大 幅 (1.2)	最 大 高 (1.2)
13	精査	土製品	土器		胎土は凹凸黄褐色。	最 大長 (4.0)	最 大 幅 (1.2)	最 大 高 (0.35)
14	精査	土製品	土器		胎土は黄褐色。	最 大長 (3.6)	最 大 幅 (1.6)	最 大 高 (0.5)



第188図 表土出土遺物1

第124表 表土出土遺物観察表1

番号	遺構・層位	種別	22種	産地	特徴	法量(cm)		
						口徑	底径	高さ
1	表土	染付細器	瓶	肥前	丸綱。17世紀後半。	4.5	(2.8)	
2	表土	染付細器	瓶	肥前	丸綱。18世紀後半。	3.95	(2.9)	
3	表土	陶豆	天日茶碗	瀬戸美濃	内外面鉄錆。新土口灰白色。精良。軟質。登窯第2～5小窯。17世紀中後～後半。			2.5
4	表土	染付細器	瓶	肥前	高台置付に砂目。17世紀前半～中期。	(12.8)	4.9	3.5
5	表土	染付細器	瓶	肥前	高台置付露筋に砂目。17世紀前半～中期。	(12.0)	(4.5)	3.6
6	表土	青花細器	瓶		見込に青釉にによる唐花文。17世紀後半。	6.8	(1.7)	
7	表土	小口付			ロクロ使用。底部外側は回転条切。底部内面はロクロナザ。内外面ともに明黄褐色。新(10.7)→7.00	7.0		2.8
8					土口に淡い褐色。			
9	表土	小口付			ロクロ使用。内外面ともに明黄褐色。新土口に淡い黄褐色。	長大	長大	長大厚
10	表土	土製品	土錠		新土口淡黄褐色。	(3.1)	(1.6)	(0.9)
11	表土	土製品	輪羽口			長大	長大	長大厚
						(3.3)	(1.2)	(1.2)
						長大	長大	長大厚
						(4.3)	(4.2)	(2.2)



第 189 図 表土出土遺物2

第125表 表土出土遺物観察表2

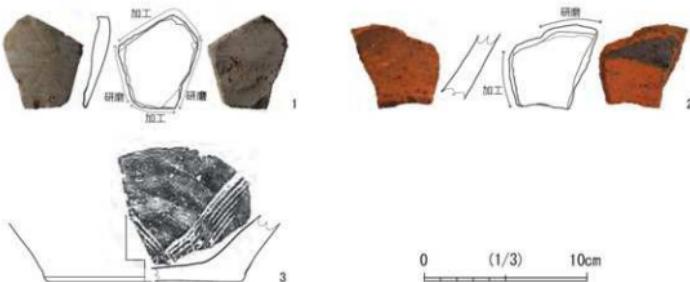
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm)
					口径	底径	高さ	
1	表土	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに赤い褐色。胎土は褐色で粗く、砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。	230.0	14.0	
2	表土	陶器	便	白石	内外面ともに褐色。胎土表面には赤い赤褐色。胎土内は灰土。白色粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。		6.0	
3	表土	陶器	便	常滑	内面は赤褐色。外面は灰褐色。自然縫付着。胎土は黄褐色。精良。6b～8型式。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。		6.0	
4	表土	陶器	便	白石	内面は赤褐色。胎土は灰色で白色粒を含む。研磨土器に転用。	最大長 6.13	最大幅 6.63	最大厚 1.4
5	表土	陶器	便	白石	内面は赤い黄褐色。外面は灰褐色。胎土は褐色で砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			5.30
6	表土	陶器	便	白石	内面は灰褐色。外面は褐色。胎土は明褐色で砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀後半。			6.00
7	表土	陶器	便	白石	内面は赤い黄褐色。外面は灰色。胎土は灰色で砂粒を少く含む。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 7.0	最大幅 9.0	最大厚 1.30
8	表土	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに褐色。内面に自然縫付着。胎土表面は褐色。胎土内には赤い赤褐色。白色大粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			5.30



第190図 表土出土金属製品

第126表 表土出土金属製品観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴			法量
				径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	
1	表土	金属製品	錢銭			24.60	1.34 3.10
2	表土	金属製品	錢銭			24.35	1.42 4.02



第191図 その他の出土遺物

第127表 その他の出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴			法量(cm)
					口径	底径	高さ	
1	残土	陶器	瓶	古瀬戸	13世紀～15世紀。研磨土器に転用。	最大長 66.4	最大幅 65.95	最大厚 1.00
2	北側側溝	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに褐色。内面に重ね焼きの板跡あり。胎土は褐色で黑色粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。			4.00
3	廻り下げ	陶器	片口鉢	常滑	内面は灰褐色。外面は赤い赤褐色。胎土は褐色。白色砂粒を多く含む。内面に節目(唐城)有。第2段階 6a～6b小窓。13世紀後半。	12.2	4.0	

## 9. 平成 28 年度調査のまとめ

平成 28 年度の調査は、平成 27 年度に実施したトレンチ調査で中世の遺構・遺物が発見された地点を中心として実施した。発見された遺構は、中世では掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、近世では掘立柱建物跡、井戸跡、護岸施設、溝跡のほか土坑・ピットが多数ある。

中世の遺構には掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などがある。このうち調査区中央付近で発見されたSE01 では、丸太を3つに分割し、その内側を削り取ったのちに改めて組み合わせたものを井戸枠として使用しており、井戸枠の内外からは常滑産の甕、白石市周辺で生産されたと考えられる中世陶器甕が出土している。また調査区の南北では東西方向に走る溝跡、東側では南北方向に走る溝跡が発見されている。特にSD01 からは大量の中世陶器甕・鉢のほか、白磁碗、青磁碗、茶白などが出土している。なお、SD01・03ではともに作り替えが行われており、強い区画性が考えられる。

近世の遺構には、掘立柱建物跡、井戸跡、護岸施設、性格不明遺構、溝跡などがある。調査区の北東部で発見された掘立柱建物跡は、東西8間以上(17m)、南北3間(6.5m)の規模を測り、建物面積は110 m<sup>2</sup>以上となる非常に大きな建物跡である。この北側で発見された護岸施設は、地山を大きく掘り込んだのちに杭や板材で木枠を作り、水流から岸を保護するために木枠の中に川原石を積み上げていた。さらに石積みが施設内部に転落しないようにするために、100cmほどに切りそろえた竹を横板と石積みの間に縦方向に並べていた。施設は北側へ開いた「コの字」状となっており、調査地点の北側にかけてさらに延びるものと考えられる。このほかに注目される遺構としては井戸跡がある。近世井戸跡は11基確認されているが、うち4基では井戸枠を有していることが確認されている。井戸枠の構造は多様であり、今後のさらなる検討が必要である。

調査では中世陶器、貿易陶磁(青磁・白磁・青花)、近世陶磁器、瓦質土器、金属製品(銭貨ほか)、石製品(石臼・砥石)、漆器(椀・折敷)、木製品(鉢・鞘など)が出土している。このうち最も多いのが、13世紀後半～14世紀前半に白石市周辺で生産されたと考えられる中世陶器であるが、12世紀後半頃の年代観が考えられる渥美焼甕や貿易陶磁である白磁碗・青磁碗は、遺跡の初現を示す可能性がある資料として注目される。また16世紀末葉～17世紀前半頃の年代観が考えられる青花は、現時点で県内でも仙台城をはじめとし、武士階級に関係する遺跡でのみの出土が確認されるものであり、本遺跡地を拝領した人物の階層性が高いことを示唆する資料になるものと考えられる。なお、矢ノ目足軽が当地で活動した18～19世紀の年代観が考えられる遺物は、平成28年度調査地点ではほとんど認められていない。

今回の調査では、これまでの岩沼市内での調査では例が無いほどの、多数の中世遺物が出土した。中世の名取郡南方の様子を記した文献では、この地域のことについて記したもののは見当たらぬが、出土した遺物の年代観から鎌倉期を中心として、小河川の結節点の地に河川交通・物流を掌握する在地勢力が存在した可能性が考えられるようになった。また近世では、出土遺物の年代観は17世紀代でまとまるところから、発見した遺構については矢ノ目足軽が成立する以前にこの地を拝領していた佐藤氏・奥山氏の時期と考えられる。なお、今回の調査地点は江戸時代中期以降に成立した矢ノ目足軽関連の遺構・遺物を多数発見した第1～4次調査地点に近接しているが、この時期の遺構・遺物がみられなかつたことは領主が移転した後も土地を利用する上で何らかの制約が存在していた可能性を考慮できるようになった。



調査区全景（東側上空から）



調査区全景（西側上空から）



SB01 堀立柱建物跡 全景（西から）



SB01 堀立柱建物跡（東から）



SB02 堀立柱建物跡（北から）



SE01 井戸跡（西から）



SE01 井戸跡 井戸枠検出状況（西から）



SE02 井戸跡（北西から）



SE02 井戸跡 遺物出土状況（北から）



SE03 井戸跡（南から）



SE03 井戸跡 水灌施設（北から）



SE04 井戸跡（南から）



SE05 井戸跡（西から）



SE06 井戸跡 土層断面（北から）



SE06 井戸跡（南から）



SE07 井戸跡（東から）



SE07 井戸跡 遺物出土状況（南から）



SE07 井戸跡 井戸枠（南東から）



SE07 井戸跡 井戸枠材近景（南から）



SE08 井戸跡 土層断面（西から）



SE09 井戸跡（東から）



SE09 井戸跡 石積の状況（東から）



SE09 井戸跡 石積下部の状況（東から）



SE10 井戸跡（南から）



SE11 井戸跡 土層断面（東から）



SE11 井戸跡（北から）



SE12 井戸跡（南から）



SX01 護岸施設 調査風景（北から）



SX01 護岸施設 遺物出土状況①（北から）



SX01 護岸施設 遺物出土状況②（西から）



SX01 護岸施設 遺物出土状況③（東から）



SX01 護岸施設 全景①（北西から）



SX01 護岸施設 全景②（東から）



SX01 護岸施設 内部の状況（東から）



SX01 護岸施設 石積の状況（北東から）



SX01 護岸施設 石積の断面（西から）



SX02 性格不明遺構 土層断面（東から）



SX02 性格不明遺構の構造（北から）



SK04 土坑 土層断面（北から）



SK06 土坑 土層断面（東から）



SK20 土坑 土層断面（東から）



SK20 土坑（東から）



SD01 溝跡（東から）



SD01 溝跡 土層断面（西から）



SD01 溝跡 遺物出土状況① (南から)



SD01 溝跡 遺物出土状況② (南から)



SD02・07 溝跡 (東から)



SD02 溝跡 土層断面 (東から)



SD03 溝跡 土層断面 (東から)



SD03 溝跡 (南東から)



SD10 溝跡 (南東から)



SD10 溝跡 遺物出土状況 (南から)



SD11・19 溝跡（南から）



SD18 溝跡 遺物出土状況①（東から）



SD18 溝跡 遺物出土状況②（北から）



SD18 溝跡 土層断面（南東から）



調査区全景（南側上空から）



SE01 (第 120 図 1)



SE02 (第 121 図 1) 内面



SE02 (第 121 図 1) 外面



SE03 (第 123 図 2)



SE03 (第 123 図 1)



SE03 (第 123 図 3)



SE11 (第 134 図 1)



SE12 (第 135 図 1)



SX01 (第 137 図 1)



SX01 (第 137 図 2)



SX01 (第 137 図 9)



SX01 (第 137 図 10)



SX01 (第 138 図 1)



SX01 (第 138 図 7)



SX01 (第 138 図 12)



SX01 (第 140 図 1)



SX01 (第 140 図 3)



SX01 (第 140 図 7)





SD10 (第 176 図 2)



SD10 (第 176 図 3)



SD11 (第 177 図 1)



SD18 (第 180 図 1)



SD18 (第 180 図 2)



SD10 (第 176 図 4)



表土 (第 188 図 2)



表土 (第 188 図 4)



表土 (第 188 図 5)



表土 (第 188 図 6)

## 第VII章 平成29年度の調査成果

平成29年度の調査は、市道矢野目下野郷本線の西側に位置し、平成25年度調査区の北に接する部分を対象とした。隣接する宅地への進入路として一部を確保し、その北側をA区、南側をB区として調査を実施した。調査前の状況は、北半は宅地を解体撤去した後の造成地で、南半は休耕した水田である。田面の標高は1.18mである。

### 1. A区の調査

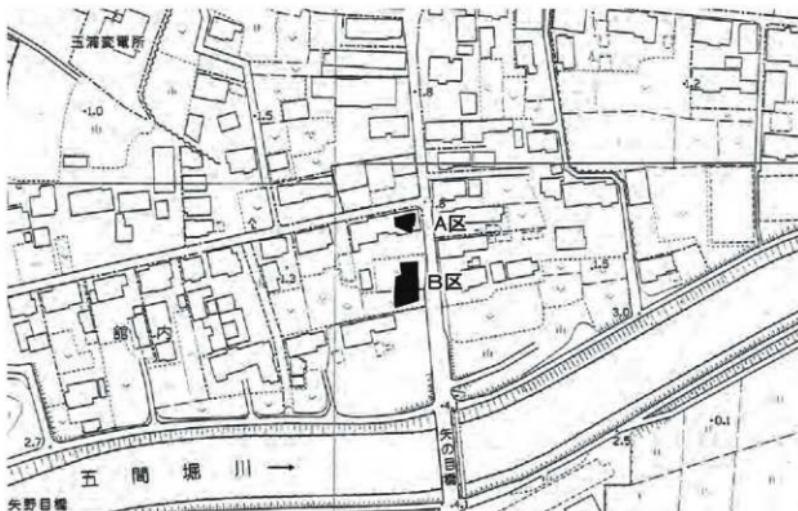
#### a. 調査の概要

A区は、北辺11m、南辺8.5m、東辺10.5m、西辺5mの不正台形の調査区で、調査面積は76m<sup>2</sup>である。重機により表土を除去したところ、旧水田面上に厚さ約1.0mの造成土が確認できた。造成土中には多量の礫等がみられ、水田面を掘り込むカクランも多数みられた。遺構は、造成土と水田耕作土を除去したのち、五間堀川の自然堤防を形成するにぶい黄褐色砂質シルト層上面で確認された。遺構確認面までの深さは現表土から約1.3m、旧水田面から約0.3m、遺構確認面の標高は0.65mである。自然堤防を形成しているにぶい黄褐色砂質シルト層は厚さ0.25mを測り、以下は第II浜堤を形成する砂層となる。

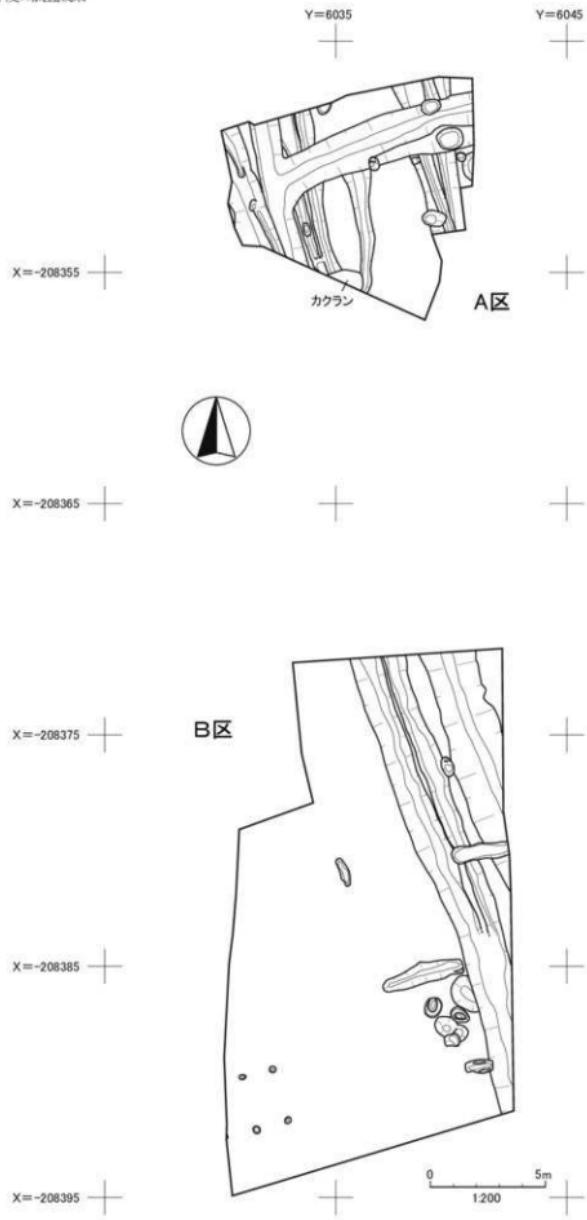
調査の結果A区で発見された遺構は、溝跡7条、土坑5基、掘立柱跡1列である。

#### b. 掘立柱跡（第195図）

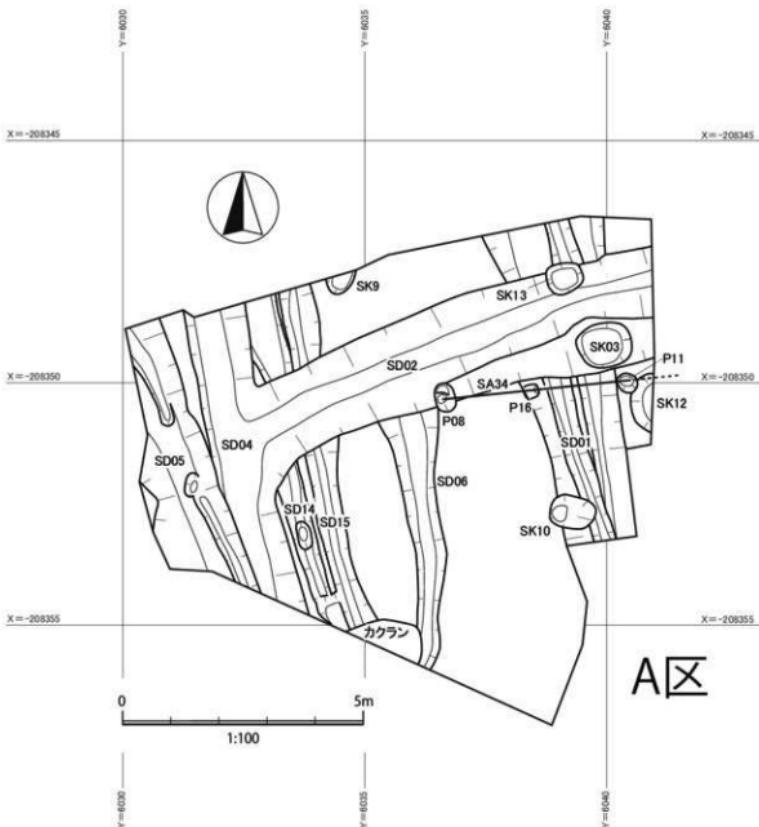
掘立柱跡SA34を調査区東より、SD02の南側に確認した。柱穴跡3口（P08・11・16）がほぼ等間隔に一直線に並び、柱痕跡の認められるものが1口あることから、東西に並ぶ跡と考えられる。重複関係は、



第192図 平成29年度調査区配置図 (1/2500)



第193図 調査区全体図



第194図 A区全体図

P08はSD02より新しく、P11はSK12より新しい。P16は遺構確認作業時に認識しておらず<sup>#</sup>、SD01の壁面で確認したため、新旧関係を把握できなかった。確認した壙跡は長さ3.85mで、壙跡の示す軸方位はE-6° -Nである。調査区外東側に伸びる可能性がある。柱穴跡は、P08（径0.6×0.42m、深さ0.45m）、P11（径0.43×0.4m、深さ0.29m）、P16（0.3m以上、深さ0.4m）で、P08で柱痕跡を確認した。

#### c. 土坑（第196～198図、第128・129表）

土坑はSK03・SK09・SK10・SK12・SK13の合計5基を確認した。

SK03は調査区東より、SD02の壁面のテラス面で確認された。新旧関係はSD02より古い。平面形は不正長方形、規模は径1.12×0.9m、深さ0.44mで、底面は平坦だが若干の段差がある。壁は垂直に立ち上がる。第197図1はSK03から出土した常滑産と考えられる陶器である。壺もしくは甕の方部分の破片で外面に釉

が付着している。また、断面を研磨に使用している。

SK09は調査区北寄りで確認され、半分が調査区外となり部分的な調査である。重複する遺構はない。平面形は梢円形、規模は推定径 $0.8 \times 0.56$ 、深さ0.35mで、底面は平坦、壁は播鉢状に立ち上がる。

SK10は調査区東よりで確認され、新旧関係はSD01より新しい。平面形は不正長方形、規模は $0.94 \times 0.67$ m、深さ0.26mで、底面は部分的に平坦で、壁は西側は垂直に、東側は斜めに立ち上がる。第198図1はSK10から出土した温石である。板状の素材の側面を研磨により、全体をほぼ方形に整形しており、その上部には推定径が0.7mmの孔が開けられている。片面は黒化しており、火鉢などで加熱した状況を示すものと考えられる。石材は黒雲母片岩である。

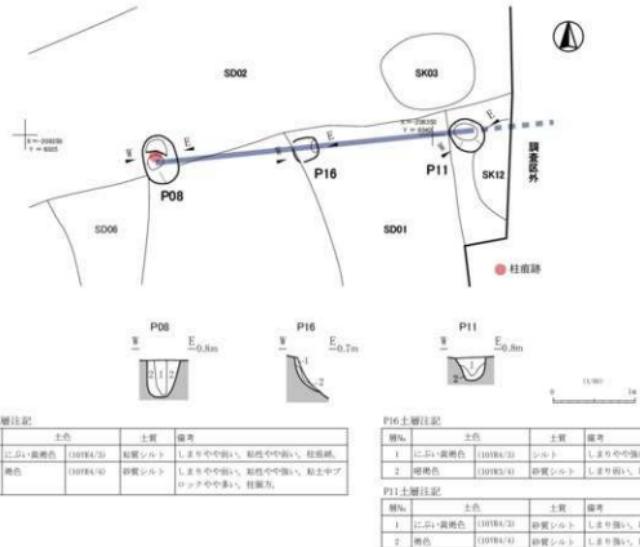
SK12は調査区東端で確認され、重複関係はない。平面形は円形、規模は径1.28m、深さ0.22m、底面から壁は丸みをもって立ち上がる。

SK13は調査区北東寄りで確認され、新旧関係はSD01およびSD02より新しい。平面形は方形、規模は $0.75 \times 0.65$ m、深さ0.09mで、底面は平坦、壁は斜めに立ち上がる。

#### d. 溝跡（第199～205図、第130～135表）

溝跡はSD01・SD02・SD04・SD05・SD06・SD14・SD15の7条を確認した。

SD01は調査区東寄りに位置する南北溝で、4m分を確認した。新旧関係はSD02・SK03・SK10・SK13より古い。幅は最大で1.55mを測る。断面の観察から、主軸方位をN-6°-Wに振る溝を、N-17°-Wに振る溝に掘り直していることが推測される。1期目は、断面緩いV字状だが、2時期目は幅の広い浅い溝の底部からさらに細い溝を彫りこんでいる。確認面からは深さ0.55mである。第200図はSD01から出土した常滑産・白石産陶器である。片口鉢・甕があり、断面及び内外面を研磨に用いたものがみられる。時



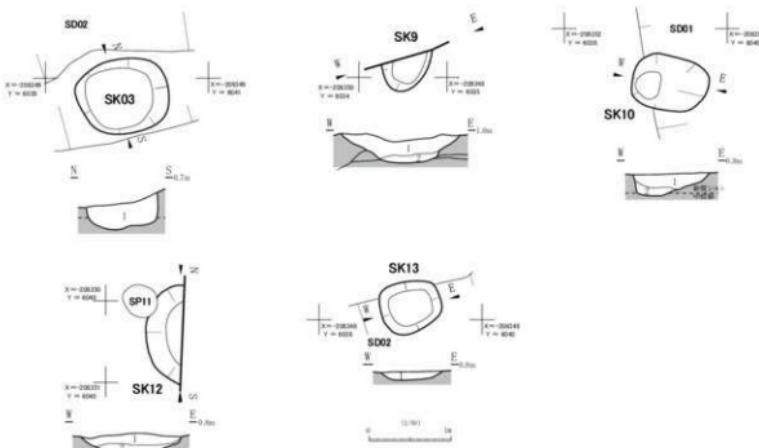
第195図 A区 SA34、土層断面図

期は13世紀後半～14世紀前半である。第201図1はSD01から出土した不明石製品で、3辺を打ち欠いて整形しており、1面には擦痕が観察される。石材が黒雲母片岩であり、温石の可能性が高い。

SD02は調査区中央に位置する東西溝で、5.25m分を確認した。新旧関係はSD01・SD06・SD14・SD15より新しく、SK03・SK13・P08より古い。SD04との新旧関係は平面および断面の観察からは判断できず、同時存在の可能性がある。軸方位はE-21°-Nを示し、幅は最大1.38mを測る。断面形は南側にテラスを有し、確認面からの深さは0.45m、底面は丸みを帯びるが平坦である。第202図1はSD02から出土した白石産陶器で、断面を研磨に使用している。時期は13世紀後半～14世紀前半である。

SD04は調査区西よりに位置する南北溝で、3.95m分を確認した。新旧関係はSD15より新しく、SD05より古い。SD02との新旧関係は平面および断面の観察からは判断できず、同時存在の可能性がある。軸方位は全体ではN-11°-Wを示し、南側でやや屈曲してからはN-16°-Wを示す。最大幅は0.78mを測る。断面形は逆台形で、確認面からの深さは0.52m、底面は平坦である。断面の観察から数度の堀直しが行われたものと考えられる。第203図1はSD02とSD04との合流点付近から出土した常滑産と考えられる陶器である。断面の3辺を加工成型し1辺を研磨に用いているほか、内面に叩打痕が多数見られ、研磨と同時に作業に用いた際についたものと考えられる。

SD05は調査区西端に位置する南北溝で、3.65m分を確認した。新旧関係はSD04より新しい。軸方位は



## SK03土層注記

剖面	土色	土質	備考
1 喬褐色 (10YR5/3)	砂質シルト	細粒砂やブロックや小石混入、しまりや中の い、粘性や中強い。	

## SK09土層注記\*

剖面	土色	土質	備考
1 にぶい黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりや中強い、粘性やや弱い。	
2 黄褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	しまりや中強い、粘性やや弱い。	

## SK10土層注記

剖面	土色	土質	備考
1 にぶい黄褐色 (10YR6/2)	砂質シルト	しまり強い、粘性やや弱い。	
2 黑褐色 (10YR6/4)	砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、(層より砂質)	

## SK12土層注記\*

剖面	土色	土質	備考
1 にぶい黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	しまり強い、粘性やや弱い。	
2 黄褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	しまり強い、粘性弱い。	

## SK13土層注記

剖面	土色	土質	備考
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	しまり強い、粘性弱い。	

第196図 A区 SK03・09・10・12・13、土層断面図

N-24° -W を示し、最大幅は 1.64m を測る。断面形は V 字状で、確認面からの深さは 0.93m である。第 204 図は SD05 から出土した磁器皿・常滑産陶器・白石産陶器・土垂である。常滑産陶器・白石産陶器はいずれも断面を研磨に用いており、内面に叩打痕のみられるものも 1 点含まれる。溝跡の時期は磁器皿の存在から近世に下る可能性がある。

SD06 は調査区中央に位置する南北溝で、10.5m 分を確認した。新旧関係は SD02・P08 よりも古い。南壁付近で湾曲しており、最大幅は 0.75m を測る。断面形は逆台形で、確認面からの深さは 0.2m である。

SD14 は調査区西寄りに位置する南北溝で、4.3m 分を確認した。新旧関係は SD15 より新しく、SD02 より古い。軸方位は N-12° -W を示し、最大幅は 0.4m を測る。断面形は開いた U 字状で、確認面からの深さは 0.48m である。

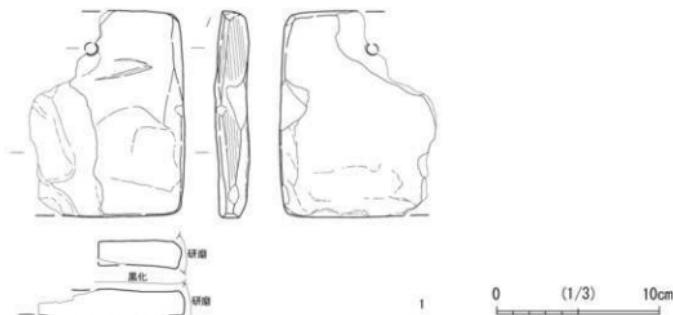
SD15 は調査区西寄りに位置する南北溝で、4.1m 分を確認した。新旧関係は SD05・SD15 より古い。軸方位は N-25° -W を示し、最大幅は 0.48m を測る。断面形は開いた U 字状で、確認面からの深さは 0.47m である。第 205 図 1 は SD15 から出土した産地不明の陶器である。外面に交互に施された斜方向のタタキがみられる。12 世紀代の所産か。



第 197 図 A 区 SK03 出土遺物

第 128 表 A 区 SK03 出土遺物観察表

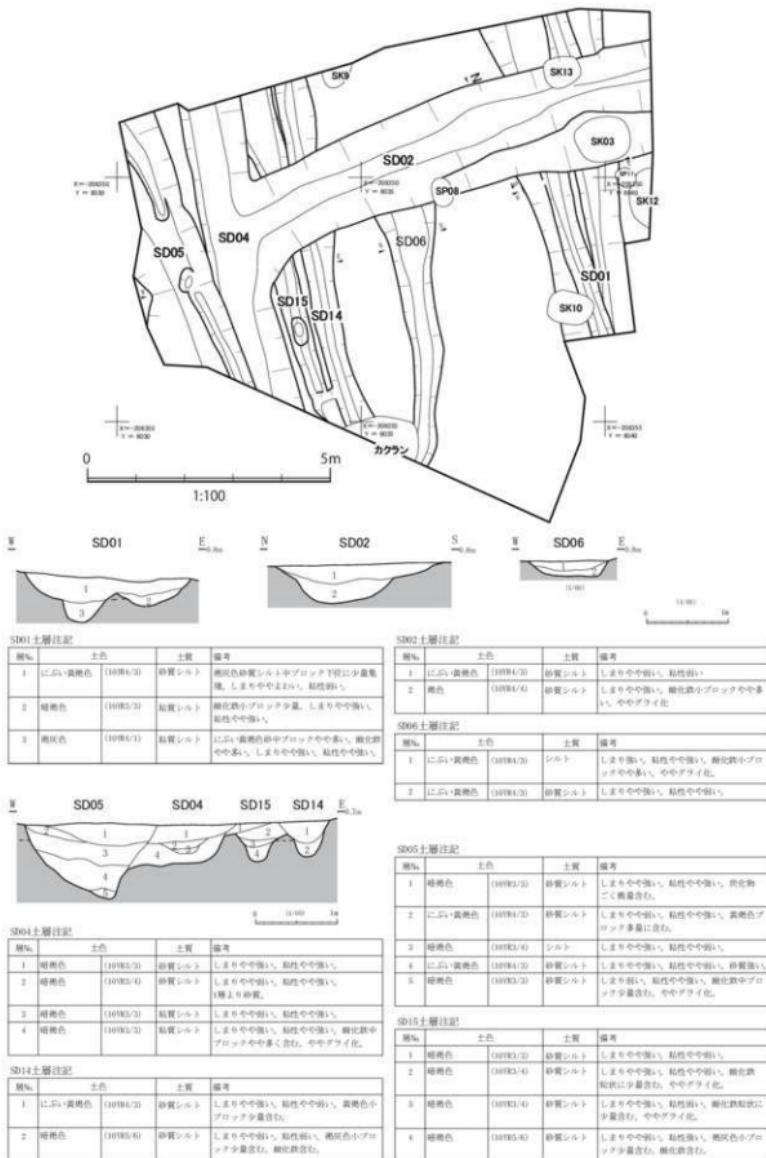
番号	遺構・層位	種別	認種	產地	特徴				法量(cm)
					口徑	底径	高さ		
1	SK03	陶器	波	常滑か 新選土器に利用。	内面は灰・黄褐色。外面に輪行筋。胎土は灰白色で白色粉を含む。内面に斜方向ナデ。	縦大 (6.1)	横大 (6.1)	幅 (1.0)	最大 (1.0)



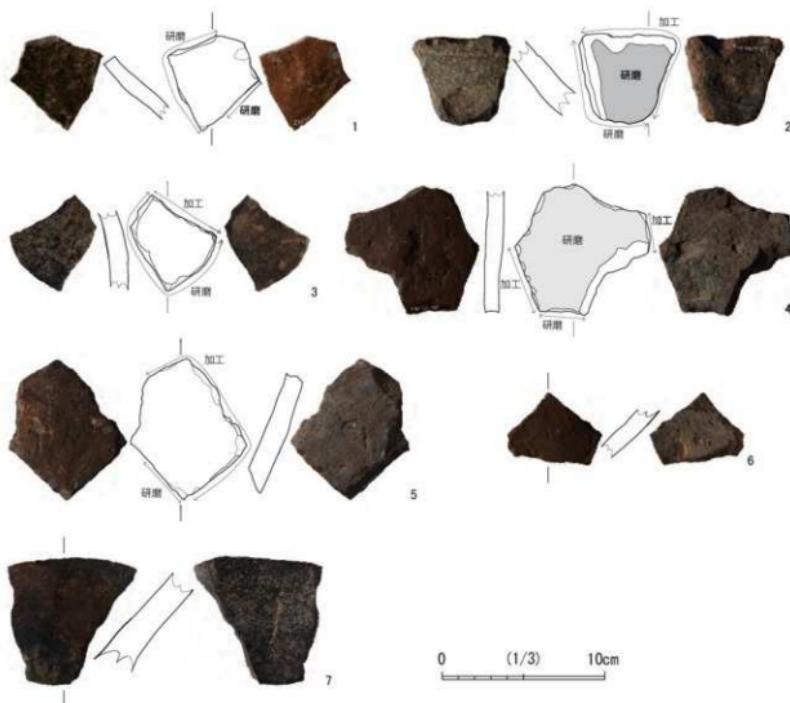
第 198 図 A 区 SK10 出土石製品

第 129 表 A 区 SK10 出土石製品観察表

番号	遺構・層位	種別	認種	側面	特徴				法量
					存	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
1	SK10	石製品	墨石	側面は研磨により整形している。片面は被膜により黒化している。石材は墨色母片岩(ホルンフェルス)・熱産成を受けている。	一部 相	12.7	69.5	0.80	047.0



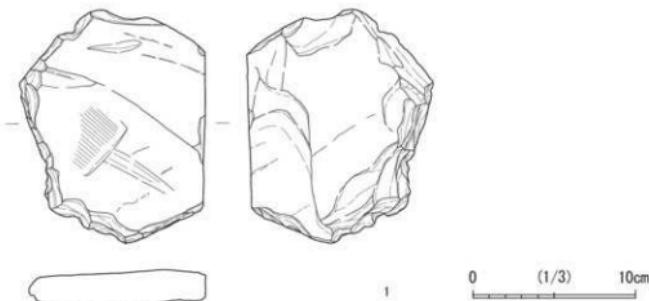
第194図 A区 SD、土層断面図



第200図 A区 SD01出土遺物

第130表 A区 SD01出土遺物観察表

番号	遺物・部位	種別	基種	産地	特徴	法量(cm)			
						口徑	底径	高さ	最大幅
1	SD01	陶器	便	常滑	内面はにじむ黄褐色。外面は灰白色。自然釉付着。断土灰白色。研磨土器に転用。	最 大 口 径 6.4	最 大 底 径 (5.6)	最 大 高さ (1.0)	最 大 幅 (6.1)
2	SD01	陶器	便	白石	内面は灰色。外面は灰白色。自然釉付着。断土は灰色で白色粒を多く含む。13世紀後半～14世紀頭。研磨土器に転用。	最 大 口 径 (5.6)	最 大 底 径 (6.1)	最 大 高さ (1.1)	最 大 幅 (4.9)
3	SD01	陶器	便	白石	内面は灰色。外面は黒色。自然釉付着。内外面に斜方向ナデ。13世紀後半～14世紀頭。研磨土器に転用。	最 大 口 径 (5.6)	最 大 底 径 (6.1)	最 大 高さ (1.1)	最 大 幅 (4.9)
4	SD01	陶器	便	白石	内面は梅灰色。外面は灰褐色。断土は梅灰色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀頭。研磨土器に転用。	最 大 口 径 (6.0)	最 大 底 径 (6.4)	最 大 高さ (1.1)	最 大 幅 (6.1)
5	SD01	陶器	便	白石	内面は黄褐色。自然釉付着。外面は灰褐色。断土は梅灰色で白色大粒を含む。内面に斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀頭。研磨土器に転用。	最 大 口 径 (6.7)	最 大 底 径 (7.2)	最 大 高さ (1.3)	最 大 幅 (7.2)
6	SD01	陶器	片口鉢	瀬波川	内面は黒褐色。自然釉付着。外面は陶色。断土は灰褐色で白色粒を含む。				(2.9)
7	SD01	陶器	便	白石	内面は黒褐色。自然釉付着。外面は陶色。断土は梅灰色。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀頭。				(6.1)



第201図 A区 SD01出土石製品

第131表 A区 SD01出土石製品観察表

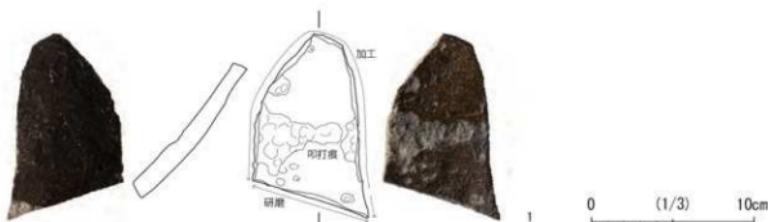
番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	現存	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	SD01-1層	石製品	不明石製品	3辺を打ち欠いて整形している。1面にコマガタに痕跡が観察される。石材は黒雲母片岩で、墨岩の可能性が高い。	完存	14.3	11.4	2.3	528.0



第202図 A区 SD02出土遺物

第132表 A区 SD02出土遺物観察表

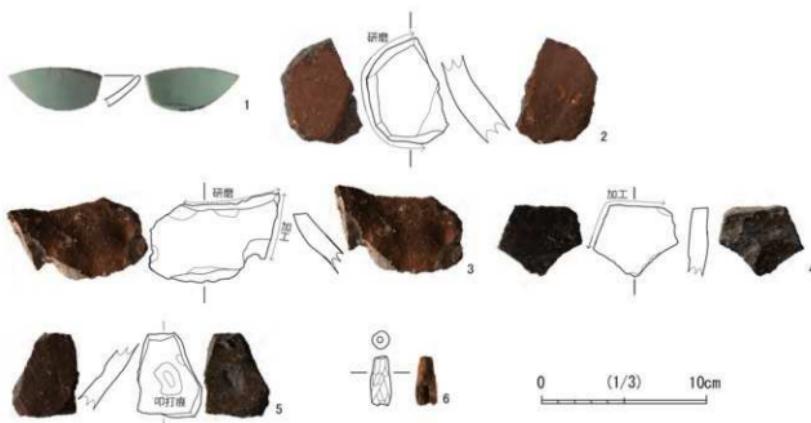
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD02	陶器	便	白石	内面は灰白色。外面は灰褐色。胎土は灰褐色で砂粒が多く含む。内面に斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。			15.3



第203図 A区 SD02とSD04の合流点出土遺物

第133表 A区 SD02とSD04の合流点出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD02とSD04の合流点	陶器	便	黒瀬か	内面は灰白色。自然神社。外面は黒褐色。胎土は灰黄色で砂粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。研磨土器に転用。			



第204図 A区 SD05出土遺物

第134表 A区 SD05出土遺物観察表

番号	遺物・部位	種別	器種	座地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD05	愛付縁部	盤	黒面か 白石	内外面に深い褐色。胎土は黄褐色で白色粒を含む。内外面にヨコ方向ナメ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	(13.0)	(1.9)	5.3
2	SD05	陶器	便	白石	内外面に深い褐色。胎土は黄褐色で白色大粒を含む。研磨土器に転用。	(17.0)	(5.3)	1.1
3	SD05	陶器	便	紫青	内面は褐色。外側に自然練打看。胎土には深い黄褐色で白色大粒を含む。研磨土器に転用。土器。内面は黄褐色で白色大粒を含む。内面にヨコ方向ナメ。外側にタテ方向ナメ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	(17.0)	(5.3)	1.1
4	SD05	陶器	便	白石	研磨土器。内面は黄褐色。外側は褐色。胎土は灰白色。内面にヨコ方向ナメ。外側にタテ方向ナメ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	(4.3)	(5.2)	1.2
5	SD05	陶器	便	常滑か 白石	内面は褐色。外側は灰褐色。胎土は黄褐色で砂粒を含む。内面にヨコ方向ナメ。外側にタテ方向ナメ。研磨土器に転用。内面に叩打痕跡。	(5.0)	(3.9)	1.0
6	SD05	土製品	土師			(3.0)	(1.25)	0.5

第205図 A区 SD15出土遺物

第135表 A区 SD15出土遺物観察表

番号	遺物・部位	種別	器種	座地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD15	陶器	便	不明	内外面に灰黄色。胎土は灰白色で砂粒を多く含む。内面にタテ方向ナメ。指輪状压痕。外側にタキシ（新方向、交互）。12世紀前半。			(0.6)

## 2. B 区の調査

### a. 調査の概要

B 区は北辺 9.0m、南辺 12.6m、東辺 19.9m、西辺 15.8m の一部突出した不正長方形の調査区で、調査面積は 310 m<sup>2</sup>である。重機により水田耕作土を除去し、五間堀川の自然堤防を形成するにぶい黄褐色砂質シルト層上面で遺構を確認した。遺構確認面までの深さは現表土から約 1.2 m、確認面の標高は 0.54 m である。自然堤防を形成しているにぶい黄褐色砂質シルト層は厚さ 0.1 ~ 0.15 m を測り、以下は第 II 浜堤を形成する砂層となる。調査の結果 B 区で確認した遺構は、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 9 基、溝跡 3 条である。

### b. 掘立柱建物跡（第 207 図）

掘立柱建物跡 SB35 は調査区南西に位置する東西棟の掘立柱建物跡である。桁行 2 間、梁行 1 間を確認し、さらに西側へ延びる可能性がある。確認した桁行長は 2.75m、梁行長は 2.3m、桁行柱間寸法は 1.375m 梁行柱間寸法は 2.3m である。SB35 の主軸方位は E-16° -N を示す。柱穴跡は P17（径 0.22 × 0.16m、深さ 0.16m）、P18（径 0.33 × 0.3m、深さ 0.15m）、P19（径 0.24、深さ 0.2m）、P20（径 0.29 × 0.27m、深さ 0.23m）、P21（径 0.31 × 0.2m、深さ 0.05m）で、P17・P18・P20・P21 で柱痕跡を確認した。出土遺物はなく時期は不明である。

### c. 土坑（第 208・209 図、第 136 表）

土坑は SK25・SK26・SK27・SK28・SK29・SK32・SK33 の合計 7 基を確認した。

SK25 は調査区南東より確認され、新旧関係は SD23 より新しい。平面形は不正長方形、規模は 1.20 × 0.56m、深さ 0.14m で、北壁および南壁にテラスをもち、遺構中心部は一段下がる。第 209 図は SK205 から出土した土器である。白石産陶器の片口鉢が出土しており、13 世紀後半～14 世紀前半と考えられる。

SK26 は調査区南東寄りで確認され、新旧関係は SK32 より新しい。平面形は不正楕円形、規模は 0.83 × 0.60m、深さ 0.16m で、断面形はごく浅く底面は凹凸がある。

SK27 は調査区南東寄りで確認された。平面形は不正楕円形、規模は 0.86 × 0.69m、深さ 0.16m で、断面形はごく浅く底面は凹凸がある。

SK28 は調査区北東寄りで確認された。平面形は不正楕円形、規模は 0.86 × 0.46m、深さ 0.16m で、断面形は皿型である。埋土は焦土と炭化物とともに骨小辺を多量に含み、火葬骨の可能性が考えられる。

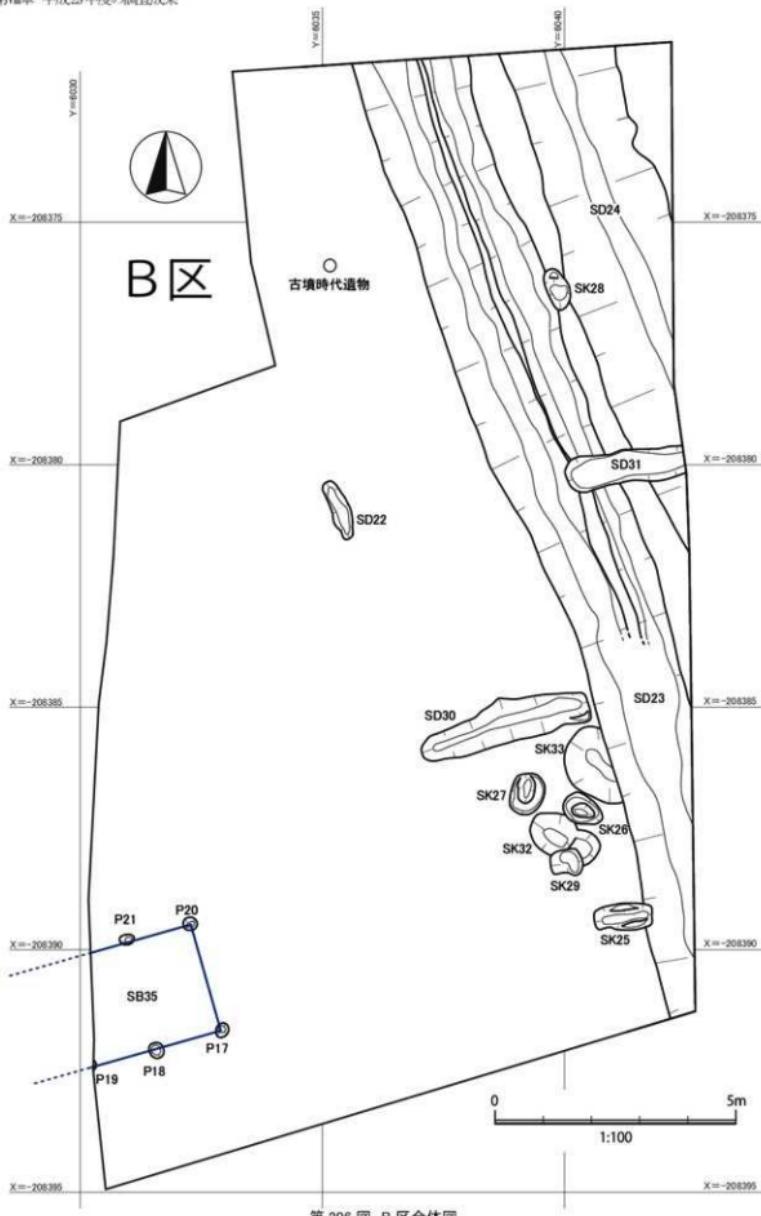
SK29 は調査区南東寄りで確認され、新旧関係は SK32 より新しい。平面形は不正方形、規模は 0.67 × 0.60m、深さ 0.43m で、壁はややオーバーハングして立ち上がる。

SK32 は調査区南東寄りで確認され、新旧関係は SK26・SK29 より古い。平面形は不正双円形、規模は 1.50 × 0.88m、深さ 0.24m で、底面は凹凸がある。

SK33 は調査区南東寄りで確認され、新旧関係は SD23 より古い。平面形は不正円形、規模は 1.64 × 1.25m、深さ 0.48m で、断面形は緩い V 字状を呈する。

### d. 溝跡（第 210 ~ 217 図、第 137 ~ 142 表）

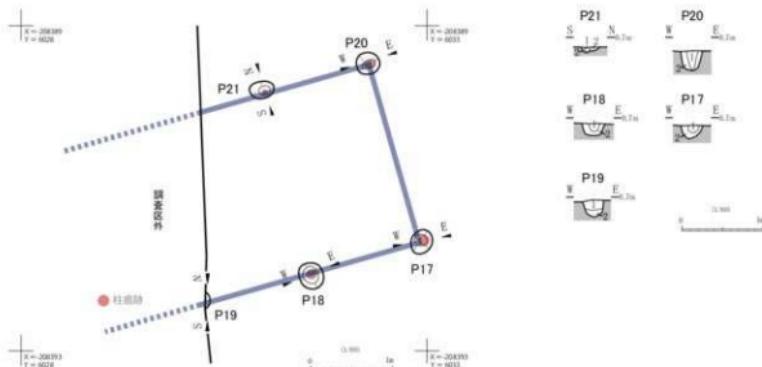
溝跡は SD22・SD23・SD24・SD30・SD31 の合計 5 条を確認した。



SD22は調査区中央に位置する南北溝で、1.24m分を確認した。軸方位はN=20° -Wを示し、最大幅は0.42mを測る。断面形は浅い皿状で、確認面からの深さは0.7mである。

SD23は調査区東寄りに位置する南北溝で、20.7m分を確認した。新旧関係はSK24・SK28・SD31より古い。軸方位はN=18° -Wを示し、最大幅は2.42m、深さは0.42mを測る。南セクションの観察から、断面形逆台形を呈する1期目の溝を、埋没後に断面形が浅いV字状に近い2期目の溝に掘り直していることがわかる。溝底面の標高は北セクションで0.17m、南セクションで0.08mで南へ下っている。第211図から第213図はSD23から出土した土器である。白石産陶器と常滑産陶器が多く出土している。陶器片の断面および内面を研磨に転用したものが多数みられる。第213図7は肥前産陶器碗で17世紀後半の所産であるが、溝の底面に近い高さから中世陶器片が出土しており、SD23の時期は中世陶器片の時期13世紀後半～14世紀前半と判断できる。第14図は石製品である。堆積土の上層と下層から石臼が1点、磨面をもつ礫が1点、不明石製品が3点出土している。石臼は茶臼下臼の受皿縁部の一部である。磨面をもつ礫はやや扁平な円礫の側面に数面の磨面が認められる。不明石製品は縁辺を打ち割ったり、打ち欠いて整形している。その中の4は板状の素材で、石材が黒雲母片岩であることから、温石の可能性が考えられる。

SD24は調査区東寄りに位置する南北溝で、11.0m分を確認した。新旧関係はSK24・SK28・SD31より古い。



P21土層注記

No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(107K2/2)	シルト しまりやや弱い、粘性やや強い。に高さ 黒褐色シルトに鉛量含む。
2	褐色	(107K6/4)	粘質シルト しまりやや強い。粘性やや弱い。黒褐色 シルト小ブロックや多く含む。

P20土層注記

No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(107K2/2)	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。に高さ 黒褐色シルトに鉛量含む。
2	褐色	(107K3/2)	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色シルト 小ブロック多く含む。

P17土層注記

No.	土色	土質	備考
1	褐色	(107K3/2)	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。 鉛化合物ごく微量含む。
2	江戸・黒褐色	(107K4/2)	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。黒褐色 シルト小ブロック多く含む。

P19土層注記

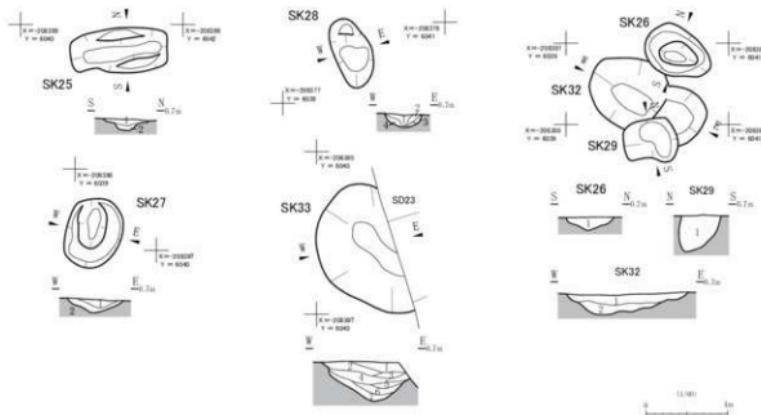
No.	土色	土質	備考
1	褐色	(107K2/2)	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。 鉛化合物ごく微量含む。
2	江戸・黒褐色	(107K4/2)	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。黒褐色 シルト小ブロック多く含む。

第207図 B区 SB35、ピット土層断面図

軸方位はN-21°-Wを示し、最大幅は2.42m、断面形はV字状を呈し、深さは0.94mを測る。溝底面の標高は北セクションで-0.45m、南セクションで-0.26mを測る。第215図はSD24から出土した土器である。白石産陶器・常滑産陶器・産地不明陶器が出土している。溝の時期は白石産陶器の時期13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

SD30は調査南東よりに位置する東西溝で、3.60m分を確認した。軸方位はE-16°-Nを示し、最大幅は0.83m、断面形は浅いV字状を呈し、深さは0.24mを測る。第217図1はSD30から出土した白石産陶器の壺または甕の底部である。13世紀後半～14世紀前半である。

SD31は調査区東よりに位置する東西溝で、2.5m分を確認した。新旧関係は、SD23・SD24よりも新しい。軸方位はE-9°-Wを示し、最大幅は0.66m、断面形は浅い皿型で、深さは0.16mを測る。



SK25土層注記

層番	上色	土質	備考
1	黒褐色	(19V34/2) シルト	じかやや強め、粘性やや弱め、黒褐色シルトやブロック多く含む。
2	黒褐色	(19V34/2) シルト	じかやや弱め、粘性やや弱め。

SK27土層注記

層番	上色	土質	備考
1	灰黒褐色	(19V34/2) シルト	じかやや強め、粘性やや弱め。
2	紺褐色	(19V33/3) 粘質シルト	じかやや弱め、粘性やや弱め。

SK28土層注記

層番	上色	土質	備考
1	黒褐色	(19V32/3) 粘質シルト	じかやや強め、粘性やや弱め、酸化鉄跡・鐵上シルト・多量に含む、小片多量に含む。
2	黒褐色	(19V32/4) 粘質シルト	じかやや強め、粘性やや強め。
3	黒褐色	(19V32/2) シルト	じかやや強め、粘性やや強め、酸化鉄・鐵上シルトに少量含む。
4	紺褐色	(19V32/2) シルト	じかやや強め、粘性やや強め。

SK29土層注記

層番	上色	土質	備考
1	灰黒褐色	(19V34/2) シルト	じかやや強め、粘性やや弱め、酸化鉄跡全体に散在してじかやや含む。

SD24土層注記

層番	上色	土質	備考
1	紺褐色	(19V33/3) 粘質シルト	じかやや強め、粘性やや弱め、黒褐色シルト・ブロック多く含む。

SK30土層注記

層番	上色	土質	備考
1	灰黒褐色	(19V34/2)	シルト
2	黒褐色	(19V33/3)	シルト

SK31土層注記

層番	上色	土質	備考
1	紺褐色	(19V32/2)	粘質シルト
2	黒褐色	(19V32/2)	シルト
3	紺褐色	(19V32/2)	シルト
4	にごく黒褐色	(19V32/2)	シルト

SK32土層注記

層番	上色	土質	備考
1	黒褐色	(19V34/2)	粘質シルト
2	黒褐色	(19V33/2)	シルト
3	黒褐色	(19V33/2)	シルト
4	にごく黒褐色	(19V34/2)	シルト

第208図 B区 SK、土層断面図

#### e. その他の出土遺物（第218図、第143表）

第218図は遺構外から出土した遺物である。1は古墳時代中期の土師器坏である。遺構確認面となっている自然堤防上面で出土したもので、慎重に状況を確認したが、削平され、深さ残りわずかになった遺構内に入り込んだものか、砂質シルト中に包含されていたものか、判断できなかった。全体の3分の1が欠損しているが、保存状況は良好で、現地性の高いものである。器形は底部が丸底で、体部は内窵し口縁部で屈曲して短く外反する。製作にロクロは使用しておらず、成形後に外面はヘラケズリ、ヨコナデ、ヘラミガキ、内面はヘラミガキによりそれぞれ調整され、全面が焼成前に赤彩されている。2はB区の機械による表土除去時に出土した瀬戸美濃天目茶碗で17世紀中頃の所産である。

### 3. 平成29年度調査のまとめ

確認された溝跡はいずれも区画溝と考えられるが、これらの溝跡の主軸方位は南北軸で $12^{\circ}$   $16^{\circ}$   $17^{\circ}$   $18^{\circ}$   $21^{\circ}$   $24^{\circ}$   $25^{\circ}$ で、 $12^{\circ}$   $16^{\circ}$   $18^{\circ}$   $21^{\circ}$   $25^{\circ}$ のグループングが可能である。一方東西軸は $9^{\circ}$   $16^{\circ}$   $21^{\circ}$ となる。またA区で確認した掘立柱跡は東西軸 $6^{\circ}$ 、B区で確認した掘立柱建物跡は東西軸 $16^{\circ}$ である。以上のことから $6^{\circ}$   $9^{\circ}$   $12^{\circ}$ は少数ではらつきが多いが、 $16^{\circ}$   $18^{\circ}$   $21^{\circ}$   $25^{\circ}$ は企画性の高い軸方位といえる。

区画溝のうち重複関係・出土遺物から最も古い溝はSD15である。SD14は軸方位はやや異なるが重複し同様な断面形を持つことからSD15に後続する溝と考える。この2本の区画溝が立て続けに機能した時期を1期とする。2期は重複関係からSD01である。3期は同時に存在した可能性があるSD02とSD04である。4期はA区で最も新しい区画溝であるSD05とSD24である。SD24は軸方位が近く断面形が近似するためSD05の延長の可能性が考えられる。5期は軸方位の近いSD23・SD30と、さらに同様な軸方位を持つ掘立柱建物跡SB35である。6期はさらに軸方位を変えたSD31とSA34が該当する。

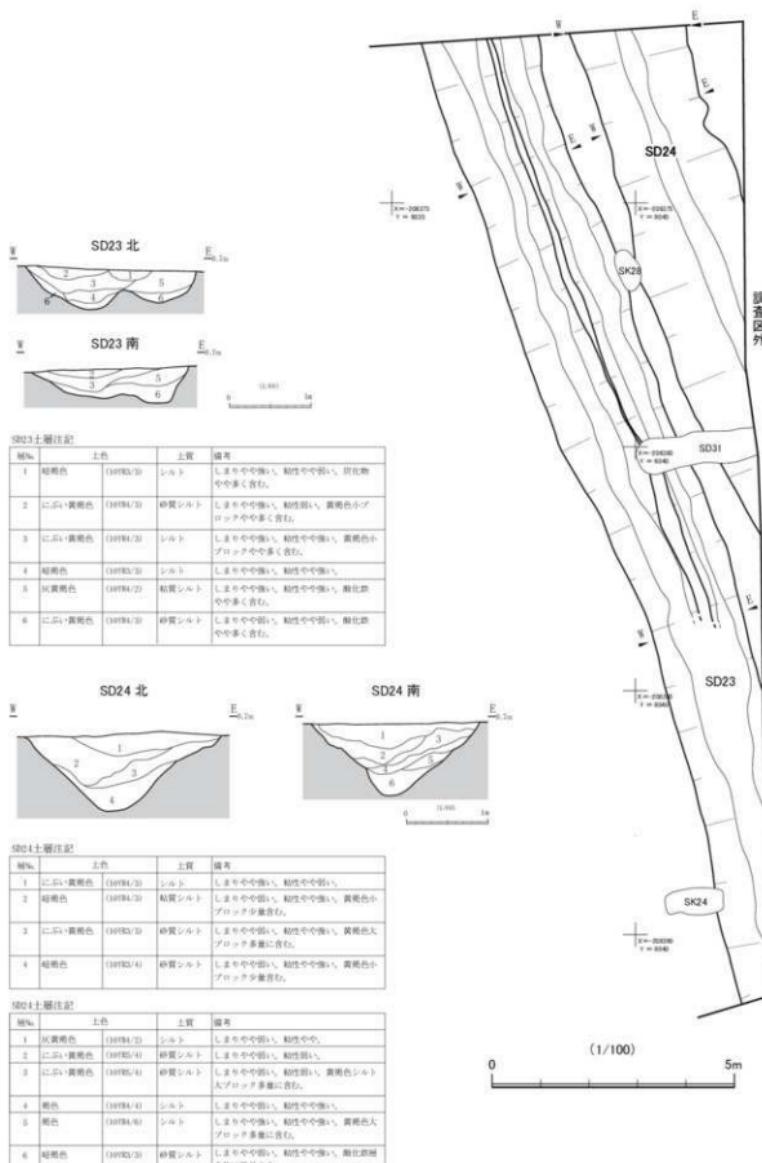
出土遺物は、もっとも古い1期の溝跡であるSD15からタタキのある陶器が出土しており12世紀代か。2～5期の溝跡からは白石産陶器・常滑産陶器の出土が多く、13世紀後半～14世紀前半を中心とした中世前半といえる。6期の遺構からは出土遺物がなく時期は不明である。また、白石産陶器・常滑産陶器に含まれる研磨使用への転用例が多いことが指摘できる。当調査区周辺地区的性格を表している可能性がある。



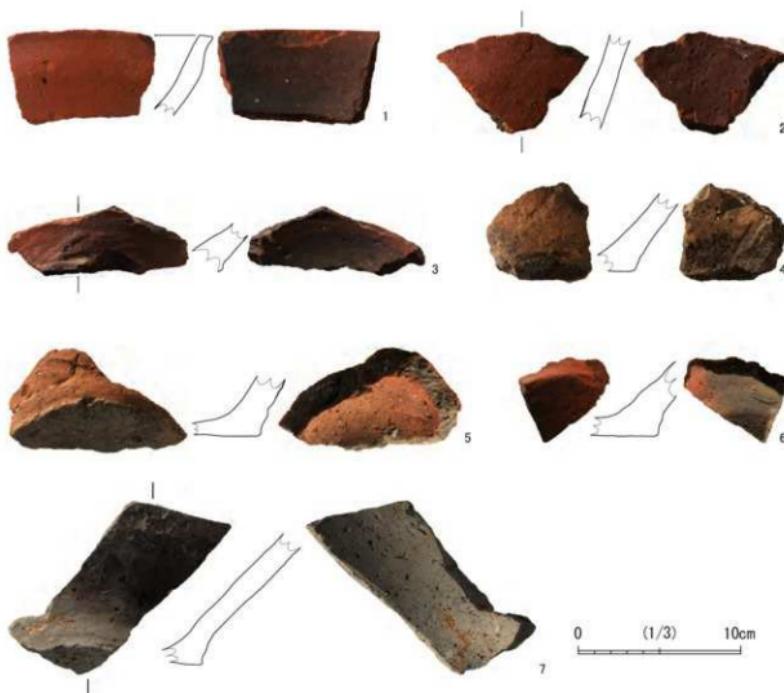
第209図 B区SK25出土遺物

第136表 B区SK25出土遺物観察

品名	遺構・層位	種別	認 種	產 地	特 徴	法量(cm)
						11号 底径 器高
1	SK25	土師器	坏		井口式壠型、内面はヘラミガキ、外面は鉛方向ヘラケズリ、内外面に炭化物付着。	(2.0)
2	SK25	陶器	罐		内外面ともに灰褐色。胎土表面は明るめ灰褐色。胎土内に褐灰化。内外面にタテ方向ナデ。	(3.4)
3	SK25	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は灰褐色で砂粒(特に無色ガラス質粒)を多く含む。内外面にロクロナデ、使用により内面剥離。	(5.0)



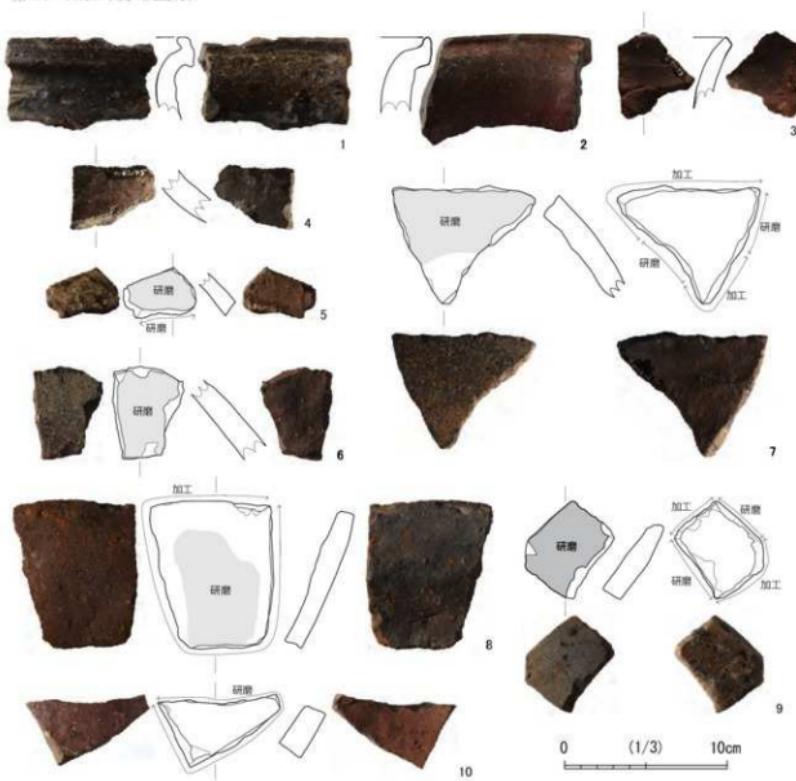
第210図 B区 SD23・24、土層断面図



第211図 B区 SD23出土遺物1

第137表 B区 SD23出土遺物観察表1

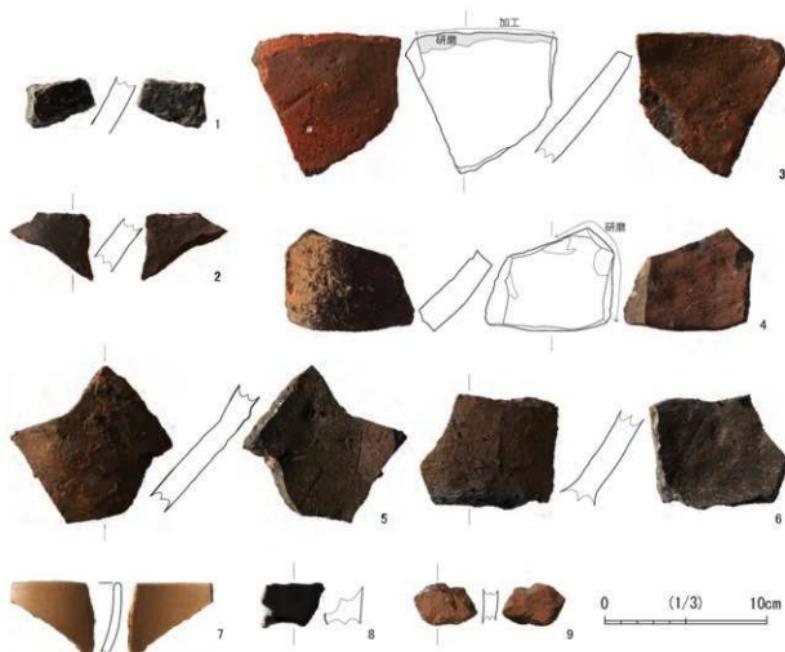
番号	遺構・層位	種別	記録	产地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD23	陶器	片口鉢	白石	内面は褐色。外面は赤褐色。新土は赤褐色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(4.0)
2	SD23	陶器	片口鉢	白石	内面と外側に赤褐色。新土表面には赤褐色。新土内は黄褐色で砂粒を含む。内外面に凹凸方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(5.8)
3	SD23	陶器	片口鉢	白石	内面と外側に赤褐色。新土は褐色で白色粒を少量含む。外側に凹凸方向ナデ。使用により内面磨滅。			(2.9)
4	SD23	陶器	片口鉢	白石	内面と外側に黄褐色。新土は灰褐色で砂粒を多く含む。外側にクロコナデ。使用により内面磨滅。13世紀後半～14世紀前半。			(15.0) (4.8)
5	SD23	陶器	片口鉢	白石	内面と外側に褐色。新土は灰褐色で砂粒(特に白色粒)を多く含む。外側にクロコナデ。使用により内面磨滅。13世紀後半～14世紀前半。			(3.2)
6	SD23	陶器	片口鉢	白石	内面と外側に赤褐色。新土は褐色で砂粒を多く含む。外側に凹凸方向ナデ。使用により内面磨滅。13世紀後半～14世紀前半。			(16.0) (4.6)
7	SD23	陶器	片口鉢	不明	内面と外側に灰白色。新土は灰褐色で白色粒を含む。外側にクロコナデ。使用により内面磨滅。			(8.3)



第212図 B区 SD23出土遺物2

第138表 B区 SD23出土遺物観察表2

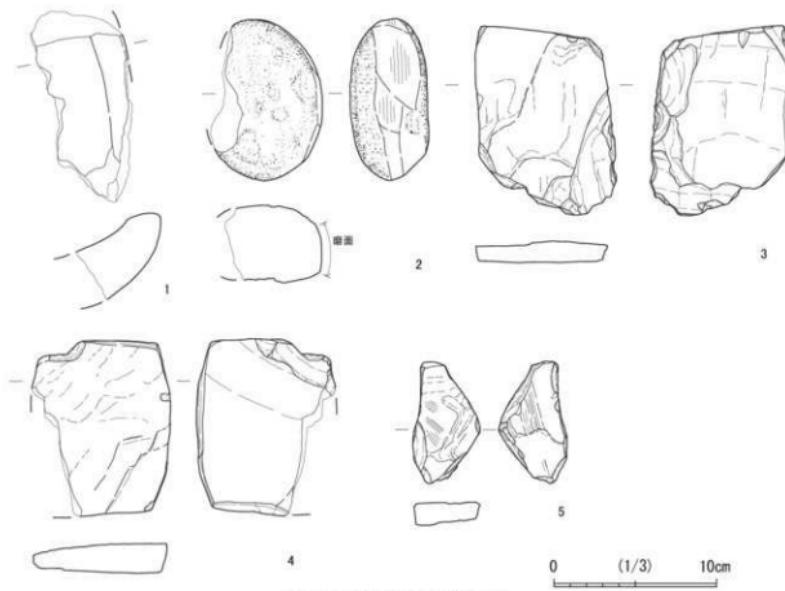
番号	遺物・部位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD23	陶器	便	滑石	内外面は褐色、内面に自然釉付着。胎土は灰白色で白色粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。滑石6a型式。13世紀後半四隅削。			(10.2)
2	SD23	陶器	曲	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は灰白色で白色粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(4.7)
3	SD23	陶器	便	白石	内外面ともに褐色。胎土は褐色で砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(4.4)
4	SD23	陶器	便	白石	内面は灰褐色、外側は灰褐色。自然釉付着。胎土は黄褐色。内外面にヨコ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(3.2)
5	SD23	陶器	便	白石	内面は灰褐色、外側は自然釉付着。胎土は白石。胎土は褐色で砂粒を含む。内面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	段 大	段 大幅	段 大厚 (3.1) (4.5) (1.0)
6	SD23	陶器	便	白石	内面褐色。外側に自然釉付着。胎土は白石。胎土は褐色で白色粒、黒色ガラス質粒を含む。内面斜方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	段 大	段 大幅	段 大厚 (5.6) (4.4) (1.5)
7	SD23	陶器	便	白石	内外面ともに褐色。外側に自然釉付着。胎土は黄褐色で白色粒、黒色ガラス質粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外側にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	段 大	段 大幅	段 大厚 (7.2) (8.9) (1.2)
8	SD23	陶器	便	白石	内面は褐色。外側に灰褐色。胎土は白石。胎土は褐色で白色粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	段 大	段 大幅	段 大厚 (9.0) (7.6) (1.5)
9	SD23	陶器	直	滑石	内面は灰褐色で外側は灰白色。胎土は灰褐色。内面に斜方向ナデ。研磨土器に転用。	段 大	段 大幅	段 大厚 (6.0) (5.5) (1.6)
10	SD23	陶器	便	白石	内面は灰褐色。外側は灰褐色。胎土は黄褐色で白色粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外側にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	段 大	段 大幅	段 大厚 (4.1) (7.5) (1.7)



第213図 B区SD23出土遺物3

第139表 B区SD23出土遺物観察表3

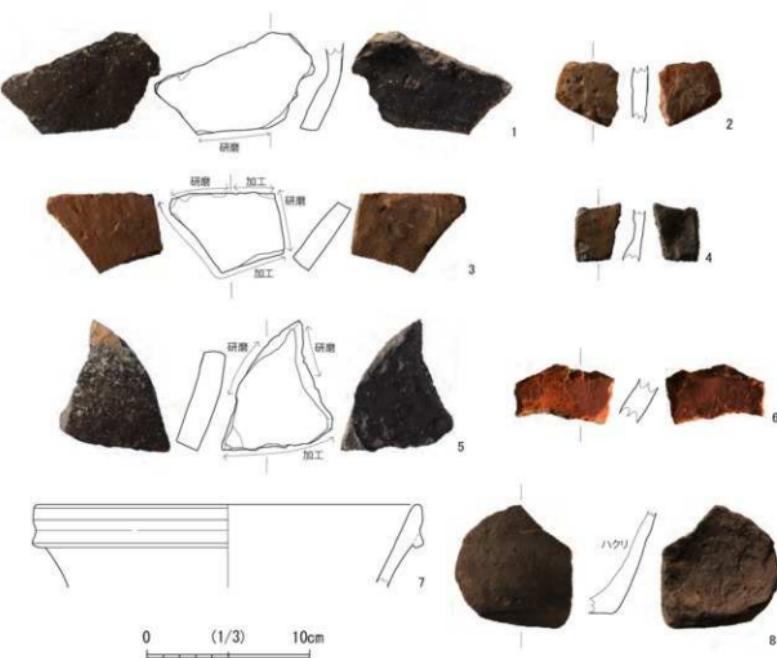
番号	遺跡・層位	種別	器種	産地	特徴			法線(cm)
					口径	底径	高さ	
1	SD23	陶器	便	小町	内面は黄灰色。外面は黒褐色。胎土は灰色で砂粒を含む。			(3.5)
2	SD23	陶器	便	白石	外表面は灰褐色。胎土はにじみ赤褐色で白色粒を含む。内面はヨコ方向ナデ。外面は斜方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(0.9)
3	SD23	陶器	便	白石	内表面はにじみ黄褐色。胎土は黄褐色で砂粒を含む。内面は斜方向ナデ。外面にタテナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (8.6)	最大幅 (9.2)	最大厚 (1.4)
4	SD23	陶器	便	白石	内面はにじみ褐色。外表面は褐色。自然釉付着。胎土は褐色で白色粒を含む。内面はヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (6.3)	最大幅 (8.0)	最大厚 (1.3)
5	SD23	陶器	便	白石	内面は褐色。外表面は灰褐色。胎土は黄褐色で砂粒を多く含む。触感質で堅く締まる。			(7.0)
6	SD23	陶器	便	白石	内面は黄褐色。外表面は褐色。胎土は黄褐色で多く含む。触感質で堅く締まる。			(5.8)
7	SD23	陶器	便	肥前	内面ヨコ方向ナデ。外表面はタテ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(4.7)
8	SD23	瓦質土器	不明		瓦器手綱。外表面灰褐色。胎土はにじみ黄褐色。触感質。軟質。17世紀後半。	(11.0)		(2.5)
9	SD23	土師器	便		窓口部壘形。外表面ハケ痕物。			(2.2)



第214図 B区SD23出土石製品

第140表 B区SD23出土石製品観察表

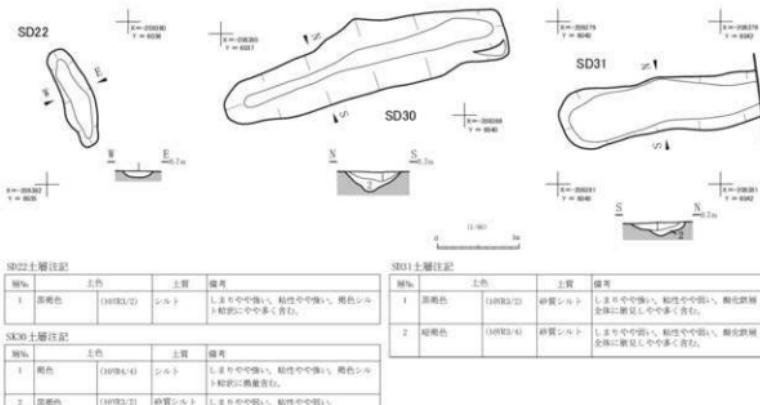
番号	遺構・層位	種別	岩種	特徴	保存				法算
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
1	SD23-上層	石製品	石臼	基部下臼の受盤跡。石材は安山岩。	一部欠損	(11.7)	(5.6)	(1.5)	(222.0)
2	SD23-下層	石製品	磨面をもつ種	やや扁平な円錐の側面に磨面が認められる。石材はタイサイ。	一部欠損	9.9	(6.9)	4.7	(215.5)
3	SD23-上層	石製品	不明石製品	打ち削ったり、打ち欠いて整形している。石材は粘板岩。	完存	11.6	9.7	1.3	206.5
4	SD23-上層	石製品	不明石製品	不規則の断面を打ち削ったり、打ち欠いて整形している。石材は黒雲母片岩で、鑿石の可能性が高い。	一部欠損	(10.0)	(8.5)	1.8	(283.5)
5	SD23	石製品	不明石製品	打ち削ったり、打ち欠いて整形している。両面の一側に磨痕が認められる。石材は粘板岩。	完存	7.5	4.2	1.4	96.0



第215図 B区 SD24出土遺物

第141表 B区 SD24出土遺物観察表

番号	遺構・部位	種別	刃種	液堆	特徴	寸法(cm)		
						口径	底径	高さ
1	SD24	陶器	便	常滑か	内外面ともに暗灰色。胎土は灰白色で白色粒を多く含む。内外面にヨコ方向ナデ。研磨土器に転用。	最大大 径(6.3) (9.0)	最大幅 (1.1)	
2	SD24	陶器		不明	内外面上方に灰黄色。胎土はにじむ褐色で白色粒を含む。内面は縦方向にナデ。外面上方に斜方向にナデ。			(3.5)
3	SD24	陶器	便	白石	内面はにじむ黄色。外面上方にじむ黄褐色。胎土は灰灰色で砂粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面上方にタケ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	最大大 径(4.9) (7.1)	最大幅 (1.3)	
4	SD24	陶器	便	白石	内面は黄褐色。外面上に自然釉付着。胎土は灰褐色。			(3.2)
5	SD24	陶器	直	不明	内外面上方に灰褐色。外面上に自然釉付着。胎土は灰褐色で砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。研磨土器に転用。			
6	SD24	陶器	便	白石	内外面上方にじむ赤褐色。胎土表面は明赤褐色。胎土内は黄褐色で砂粒を少量含む。内面にヨコ方向ナデ。外面上にタケ方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(2.7)
7	SD24	陶器	直鉢	不明	内外面上に灰褐色。胎土は灰褐色。粘性強く硬質。口縁部、内外面上にヨコ方向ナデ。17世紀後半～18世紀前半。	最大大 径(23.7)	最大幅 (5.0)	
8	SD24	瓦質土器	直	不明	外面は灰褐色。胎土は黄褐色で砂粒を含む。			(6.3)



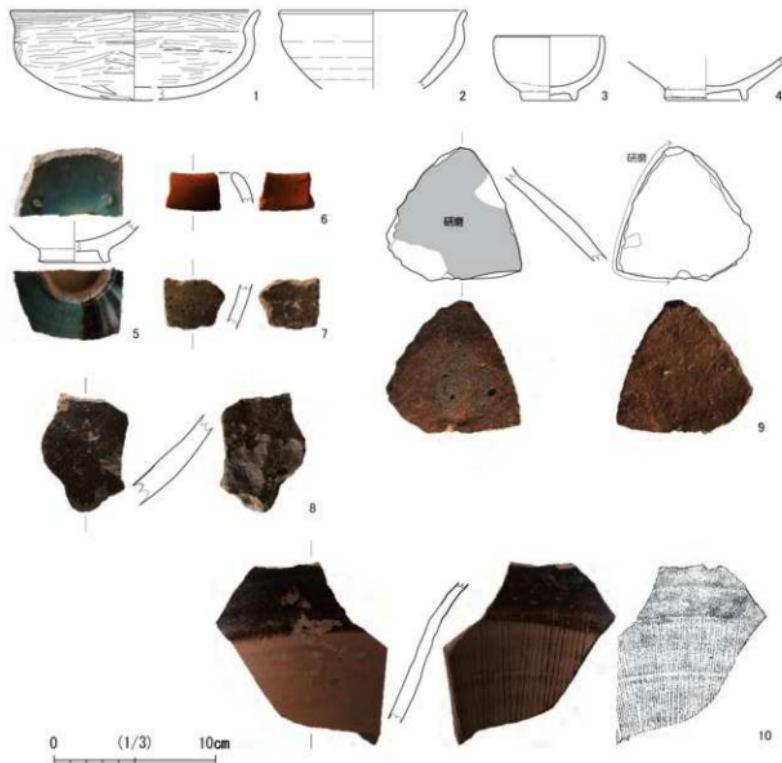
第216図 B区 SD22・30・31、土層断面図



第217図 B区 SD30出土遺物

第142表 B区 SD30出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	認種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	遺構	器高
1	SD30	陶器	罐	白石	内外面ともに灰黄褐色。断土は褐色で白色粒。黑色ガラス質板を含む。外面に凹凸がありナデ。13世紀後半～14世紀前半。			(1.8)



第218図 B区その他の出土遺物

第143表 B区その他の出土遺物観察表

番号	遺物・部位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						面積	周長	深さ
1	埴輪	土師器	鉢	全面赤色。口縁部3コナデ。体へ底部へワカズリ。ヘラナデの中全面へワカギキ。胎土は砂粒をほんと含まない。焼成温度(表面1/5強度)。色調は赤褐色。古墳時代中期。	15.5		(5.6)	
2	陶印下げ	陶器	天目系陶	鹿戸美濃	内外面に赤褐色。胎土は薄黄色で軟質。器底第3～3小頭。17世紀中期。	0.140		(4.9)
3	灰土	陶器	小碗	鹿戸美濃	内外面に灰褐色。体部上部～高台ナデ。胎土は灰黄色。精良。軟質。底部内面磨滅。登場第8小頭分。18世紀後半。	0.7	3.4	4.0
4	北朝	陶器	碗	不明	内外面に青灰色釉。胎土は灰白色。精良。軟質。ロクロ成形。高台ロクロ削り出し。		(5.3)	(2.7)
5	精良	陶器	碗	不明	内面は青白色釉。外側は有彩色釉。胎土は灰白色で粘性強く硬質。		(5.0)	(2.6)
6	残土	土師質土	不明	胎土表面に明赤褐色。胎土内は暗赤色。内外面ともに明赤褐色。横方向にヘラシガキあり。			(1.9)	
7	陶印下げ	陶器	碗	鹿戸美濃	内外面に灰褐色。胎土はにぼい黄色で砂粒を含む。			(2.8)
8	陶印下げ	陶器	碗	鹿戸美濃	内面に自然筋付着。外側は黄灰色。胎土は灰褐色で白色釉を含む。外側斜方向ナデ。			(3.7)
9	精良	陶器	碗	白石	内外面ともににぼい褐色。胎土は熟褐色で砂粒を多く含む。内面にタケ方向ナデ。外側に斜方向ナデ。13世紀後半～14世紀前半。研磨土器に転用。	0.2	(8.3)	(0.9)
10	堅納灰土	陶器	植林	御器所	内外面ともに灰褐色。口縁部内面に鉛錆。胎土は灰褐色。17世紀後半～18世紀前半。			(0.5)

第144表 A区・B区構造属性表

建物名	間数	棟方向	前柱 延長 (m)	柱間寸法 (m)	測定 柱判	梁行 延長 (m)	柱間寸法 (m)	測定 柱判	方向	柱距 跨径 (m)	柱穴 直径 (mm)	平面形	備考
SA34	2段上	東西	3.85	1.95; 1.9					E-6°~N	15	40~60	円形、椭円形	SK12・SD02より新しく
SH35	1×2以上	東西	2.75	1.88, 1.37	南北	2.3	2.3	南北	E-16°~N	9~19	20~33	円形、椭円形	

遺構名	平面形	断面形	幅員 (m)	深さ (m)	地盤土	出土遺物	備考	平面図	断面図
SK03	不正長方形	船型	1.12 × 0.9	0.41	人為	骨渣か	SD02より古い	196	196
SK09	楕円形	船型	0.8 × 0.56	0.35	自然			196	196
SK10	不正長方形	船型	0.94 × 0.67	0.26	自然	石製品(墨石)	SD01より新しく	196	196
SK12	円形	船型	1.28	0.22	自然		SA34 (T11)より古い	196	196
SK13	方型	船型	0.75 × 0.65	0.69	自然		SD01・SD12より新しく	196	196
SK25	不正長方形	船型	1.20 × 0.56	0.14	自然			208	208
SK26	不正長方形	船型	0.83 × 0.68	0.16	自然		SK32より新しく	208	208
SK27	不正楕円形	船型	0.86 × 0.69	0.16	自然			208	208
SK28	不正楕円形	船型	0.96 × 0.46	0.16	人為	骨片・陶化物・埴土	SD23, SD24より新しく、火葬骨灰	208	208
SK29	不正方型 バーンディング	U字型、オーバーライフ	0.67 × 0.60	0.43	自然		SK32より新しく	208	208
SK32	不正楕円形	船型	1.50 × 0.88	0.24	自然		SK26, SK29より新しく	208	208
SK33	不正円形	V字状	1.64 × 1.25	0.48	自然		SD23より新しく	208	208

遺構名	棟出長 (m)	断面形	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	方向	堆積土	出土遺物	備考	平面図	断面図
SD01	4.0	直型	1.55	0.22	0.55	E-21°~N	自然	粘土、白石	SD02・SD03・SK10・SK13より古く	199	199
SD02	5.25	直型	1.38	0.7	0.45	E-23°~N	自然	白石	SD01・SD06・SD14・SD15より新しく、SK03・SK13・P08より古く	199	199
SD04	3.05	扇形	0.78	0.46	0.52	N-36°~W	人為→自然	粘土層か、 人為	SD15より新しく、SD05より古く	199	199
SD05	3.65	V字	1.64	0.8	0.93	N-24°~W	自然	粘土、白石、磁器、SD04より新しく 土塊	SD04より新しく	199	199
SD06	10.5	破壊形	0.75	0.68	0.2		自然		SD02・SA34(P08)より古く	199	199
SD14	4.3	U字	0.4	0.10	0.48	N-17°~W	人為		SD15より新しく、SD02より古く	199	199
SD15	4.1	U字形	0.48	0.13	0.47	N-25°~W	自然	不明陶器	SD05・SD15より古く	199	199
SD22	1.21	直型	0.42	0.2	0.7	N-20°~W	自然			210	210
SD23	20.7	直型、壁台形	2.42	1.3	0.42	2.42N-18°~W	自然	粘土、白石、磁器、SK24・SK28・SD01より古く、 壁面陶器、瓦質土器、不明石製品		210	210
SD24	11.0	V字形	2.42	0.29	0.94	N-23°~W	自然	粘土、白石、瓦質土器、不明陶器		210	210
SD29	3.60	V字形	0.83	0.21	0.24	E-16°~N	自然			210	210
SD31	2.5	直型	0.66	0.45	0.16	E-9°~W	自然		SD23・SD24より古く	210	210



17A・17B 区（西側上空から）



17A・17B 区（東側上空から）



17A 区完掘（北西から）



17A 区完掘（南西から）



17A 区 SD02（西北から）



17A 区 SD04・SD05（北から）



17A 区 SD05（南から）



17B 区上空から



17A 区 P08 断面（南から）



17B 区完掘（南から）



17B 区 SD23・SD24（南東から）



17B 区 SB35・P20 土層断面（南から）



17B 区 SK28 土層断面（南から）



17B 区 古墳時代土師器出土状況（西から）



17B 区 古墳時代土師器出土状況（南から）



A区 SK10 (第198図1)



A区 SK10 (第198図1)



A区 SD 01 (第201図1)



A区 SD 02・SD 04 (第203図1)



A区 SD 05 (第204図5)



A区 SD 05 (第204図1)



B区 SK25 (第209図1)



B区 SD 23 (第213図7)



B区 SD 23 (第212図9)

A区 SD 15 (第205図1)



B区 SD 23 (第214図1)



B区 SD 23 (第214図2)



B区 SD 23 (第214図3)



## IX章 自然科学分析－出土材の樹種

吉川純子（古代の森研究会）

### はじめに

下野郷館跡は岩沼市下野郷字館内、阿武隈川左岸の標高約0.3～1.8mほどの自然堤防及び仙台湾沿岸部の第II浜堤列上に立地している。中世には井戸跡や溝跡、近世では掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡や多数の土坑が検出されたほか、護岸施設も発見された。下野郷館跡は下流で貞山堀と合流する五間堀川に面しており、外洋と結ばれていたと考えられることから水運の要として立地していたと考えられている。

### 1. 平成27年度の調査

平成27年度の調査では15A区の近世あるいは近代とみられる溝跡などが検出され下駄、容器、木鍤などが確認された。また15C区では13世紀～14世紀とみられる井戸跡から下駄や柄杓などの木製品を出土した。そこで当時の木材利用状況を調査するため樹種同定をおこなった。平成27年度の試料は8点で、同定に供した器種は下駄、柄杓、容器の蓋、木鍤である。木製品からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取し、封入剤でプレパラートを作成して生物顕微鏡で観察・同定した。2015年度調査の木製品樹種同定結果を表1に示す。同定の結果7分類群を確認し、アスナロ属が2点で、スギまたはヒノキ科、ヤナギ属、クリ、ケヤキ、タカノツメ、針葉樹がそれぞれ1点ずつであった。

**第145表 平成27年度下野郷館跡出土木製品の樹種**

番号	遺構名	時期	種別	特記事項	樹種
1	SD03	近世・近代	連歯下駄	表面に文様が線刻されている	針葉樹
2	SD03	近世・近代	連歯下駄	子供用とみられる	スギまたはヒノキ科
3-①	SE02	13世紀～14世紀	差歛下駄本体	露卯下駄	ヤナギ属
3-②	SE02	13世紀～14世紀	差歛下駄歯	露卯下駄の歯	タカノツメ
4	SE02	13世紀～14世紀	柄杓	曲物を樹皮で縫ってあり柄孔あり	アスナロ属
5	SE02	13世紀～14世紀	蓋	柳の上蓋、栓孔残	アスナロ属
6	SD03	近世・近代	蓋	容器あるいは曲物底板	クリ
7	SE02	13世紀～14世紀	木鍤	芯持木材	ケヤキ

下駄には13～14世紀の露卯下駄には広葉樹のヤナギ属とタカノツメが、近世の連歯下駄には針葉樹が使われていた。東北の中世頃の差歛下駄にはモクレン属やケヤキなどの広葉樹が比較的おおく使われる傾向にあり(伊東ほか, 2012)、本遺跡の差歛下駄も広葉樹であった。一方連歯下駄は東北の中世以降ではクリが多いもののスギやアスナロ属といった針葉樹も多く用いられている。本遺跡の連歯下駄は保存状況が悪く属の特定には至らなかったがともに針葉樹を用いているという点でやや調和的である。13～14世紀の曲物と蓋にはアスナロ属を使っており曲物に針葉樹を多用する宮城県の既存の出土傾向と一致する。東北の木鍤はコナラ節、ヤマグワなどが多いが樹種にはばらつきが多く本遺跡で出土したケヤキは確認されていないようである。鍤にはさまざまな樹種が用いられる傾向にあり、大径木を加工する段階で生じた端材を利用していたことも考えられる。

### 2. 平成28年度の調査

平成28年度の調査では13世紀の井戸跡、中世後半の流路、17世紀の井戸跡と護岸施設の各遺構から木製品を出土した。そこで当時の木材利用状況を調査するため樹種同定をおこなった。試料は43点で、

漆器、下駄、柄杓、曲物など木製品と井戸枠、護岸施設のクサビなどの建築部材である。木製品からはステンレス剥刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取し、封入剤でプレパラートを作成して生物顕微鏡で観察・同定した。平成28年度調査の木製品樹種同定結果を表2に示す。樹種同定の結果17分類群を確認し、針葉樹はマツ属、モミ属、スギ、ヒノキ、サワラ、アスナロ属、スギまたはヒノキ科と風化が進んだ針葉樹で、広葉樹はヤナギ属、ハンノキ属、クリ、コナラ属、ブナ属、ケヤキ、サクラ属、ハリギリであった。

第146表 平成28年度下野郷館跡出土木製品の樹種

番号	遺構名	遺構の種類	時期	種別	特記事項	樹種
1	SX01 下層	護岸施設	17世紀	漆器椀	黒、高台に線刻	ケヤキ
2	SX01 下層	護岸施設	17世紀	漆器椀	赤、高台に壺文様	ブナ属
3	SX01 下層	護岸施設	17世紀	漆器椀の蓋	外赤内黒、文様あり	ブナ属
5	SE07	井戸跡	17世紀	漆器椀	黒、高台に文様	ブナ属
6	SE07	井戸跡	17世紀	漆器椀	黒、高台に文様	ブナ属
7	SE06	井戸跡	17世紀	連歛下駄	子供用か	クリ
8	SD18	溝跡	中世後半	連歛下駄	一部欠損	マツ属
9-①	SD18	溝跡	中世後半	差歛下駄軸本体	露卯下駄、差し歛1本	ヤナギ属
9-②	SD18	溝跡	中世後半	差歛下駄の軸	露卯下駄、差し歛1本	サクラ属
10	SX01 上層	護岸施設	17世紀	刀鞘	鋒は精先端まで及ばず	ヒノキ
11	SX01 上層	護岸施設	17世紀	摺鉢	口縁部肥厚、端部平坦、底部平ら	ハリギリ
12	SX01 下層	護岸施設	17世紀	折敷	赤、割れ部に漆付着	ヒノキ
13	SE07	井戸跡	17世紀	柄杓	曲物2枚を樹皮で縫ってある	針葉樹
14	SE07	井戸跡	17世紀	曲物底板	木釘残る、補修痕あり	サワラ
15	SX01	護岸施設	17世紀	曲物底板	木釘残る	スギ
16	SE01	井戸跡	13世紀	曲物底板	周間に5個孔あり、再利用品か	針葉樹
17	SD18	井戸跡	17世紀	へら状木製品	柄と身がある	コナラ節
18	SD18	井戸跡	17世紀	側板	桶の側板か	スギまたはヒノキ科
19	SX01	護岸施設	17世紀	クサビ		クリ
20	SX01	護岸施設	17世紀	クサビ		クリ
21	SX01	護岸施設	17世紀	クサビ	杭の転用か	サクラ属
22	SX01	護岸施設	17世紀	クサビ		クリ
23	SX01	護岸施設	17世紀	クサビ	樹皮残	クリ
24	SX01	護岸施設	17世紀	クサビ		クリ
25	SX01	護岸施設	17世紀	クサビ	樹皮残、一部炭化	クリ
26	SX01	護岸施設	17世紀	クサビ		クリ
27	SX01	護岸施設	17世紀	クサビ		クリ
28	SX01	護岸施設	17世紀	クサビ		クリ
29	SX01	護岸施設	17世紀	クサビ		クリ
30	SX01	護岸施設	17世紀	部材	角状材を鉄釘で結合	アスナロ属
31	SX01	護岸施設	17世紀	部材	角状材を釘で結合	アスナロ属
32	SX01	護岸施設	17世紀	部材	一端に木釘2本	針葉樹
33	SX01	護岸施設	17世紀	部材	側面2か所に鉄釘1、一部炭化	サワラ
34	SX01	護岸施設	17世紀	建築材	枘穴あり	スギ
35	SX01	護岸施設	17世紀	建築材	枘穴あり	スギ
36	SX01	護岸施設	17世紀	不明木製品	5孔あり	マツ属
37	SX01	護岸施設	17世紀	不明木製品	容器の一部か	コナラ節
38	SX01	護岸施設	17世紀	不明木製品	1孔あり、側面に切り込み	マツ属
39	SE09	井戸跡	17世紀	井戸枠(桶)		サワラ
40	SE01	井戸跡	13世紀	井戸枠(丸木)		モミ属
41	SX01	護岸施設	17世紀	杭	護岸施設構築材	ハンノキ亜属
42	SX01	護岸施設	17世紀	枝木	護岸施設構築材	サワラ
43	SX01	護岸施設	17世紀	横板	護岸施設構築材	針葉樹

表3に器種別樹種集計を示す。全43試料のうち最も多かったのはクリ11点で25パーセントを占め、次はサワラとブナ属が4点ずつ各9パーセントであった。東北では全時代を通して特に建築土木材にクリが多用され(伊東ほか, 2012)、本遺跡の近世初頭も同様の傾向が見られた。また宮城と福島に特徴的とされるサワラの利用も本遺跡で高かった。本遺跡の楓材におけるブナ属の多用は中世以降の東北の用材選択におけるケヤキ材からブナ材への変化(伊東ほか, 2012)と調和的であった。最も多かったクリは護岸施設の楔がほとんどで、1点は下駄材である。クリは土木材として優れていることから水域の施設材として利用されたと考えられる。護岸施設の用材で注目されるのは、クサビはほぼクリを利用しているのに対し、部材や桟木などはサワラ、スギなどの針葉樹を多用し、施設材の細かい用途別に樹種選択が働いているとみられる。宮城県の近世では他の遺跡でもこうした傾向が見られ、仙台市の貞山塙1区で同定された杭材4点は、印御杭2点にクリ、押さえ杭2点にスギを利用しており(ノリノサーヴェイ2018)、仙台城の土木材でも杭材はスギ、割材と柱材はクリを用いている(吉川ほか, 2012)など、土木材の中でも微妙な使い分けをしていた可能性もある。なお、東北ではほとんど多用されないとされるヒノキは折敷と刀鞘として出土しており、いずれも製品として流通してきた可能性がある。

第147表 器種別樹種集計表(平成28年度)

樹種・器種	服飾具	容器	調理加工具	武具	建築部材	施設材	不明	樹種計
マツ属	1	-	-	-	-	-	2	3
モミ属	-	-	-	-	-	1	-	1
スギ	-	1	-	-	2	-	-	3
ヒノキ	-	1	-	1	-	-	-	2
サワラ	-	1	-	-	-	3	-	4
アスナロ属	-	-	-	-	-	2	-	2
スギまたはヒノキ科	-	1	-	-	-	-	-	1
針葉樹	-	1	1	-	-	2	-	4
ヤナギ属	1	-	-	-	-	-	-	1
ハンノキ亜属	-	-	-	-	-	1	-	1
クリ	1	-	-	-	-	10	-	11
コナラ節	-	-	1	-	-	-	1	2
ブナ属	-	4	-	-	-	-	-	4
ケヤキ	-	1	-	-	-	-	-	1
サクラ属	1	-	-	-	-	1	-	2
ハリギリ	-	1	-	-	-	-	-	1
器種計	4	11	2	1	2	20	3	43

### 3. 平成27年度及び平成28年度で同定された樹種の細胞構造学的記載

モミ属(*Abies*)：晩材部の幅は狭く早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。放射細胞はすべて放射柔細胞からなるが上下縁辺部に不規則に突出した形の細胞が見られ放射柔細胞の壁が厚くじゅず状末端壁である。分野壁孔はスギ型で1分野に2～4個存在する。

マツ属(*Pinus*)：晩材部が厚く大型の垂直・水平樹脂道がある。放射柔細胞の上下にある放射仮道管の内壁が鋸歯状に突出し、放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。

スギ(*Cryptomeria japonica* D. Don)：晩材部が厚く年輪界が明瞭で早材部から晩材部への移行は緩やかである。放射細胞はすべて放射柔細胞からなり、分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に2個存在する。

ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc.)：晩材部の幅が薄く早材部から晩材部への移行は緩やかである。放射細胞はすべて放射柔細胞からなり、分野壁孔はヒノキ型で孔口が縦に開き1分野に2個存在する。

サワラ(*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endl.)：晩材部の幅が薄く早材部から晩材部への移行は

緩やかでヒノキに似る。放射細胞はすべて放射柔細胞からなり、分野壁孔はやや大きく孔口が斜めに開くヒノキ～スギ型で1分野に2～3個存在する。

アヌラ属 (*Thujopsis*)：早材部から晩材部への移行はやや急で年輪界は明瞭、樹脂細胞は少ないが晩材部に散在する。分野壁孔はヒノキ～トウヒ型で開口部が比較的立った斜めで1分野に3～4個ある。放射細胞は単列で比較的短い。

ヤナギ属 (*Salix*)：中程度の管孔が単独ないし数個複合して年輪内にほぼ均一に分布する散孔材で、晩材部で道管径が急減し年輪界は比較的明瞭。道管の穿孔板は單一で放射組織は単列異性で道管放射組織間壁孔が大きいふるい状である。

ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus subgen. Alnus*)：年輪界はやや不明瞭な散孔材で管孔は数個が放射方向に連なって年輪内にほぼ均等に分布する。集合放射組織の部分で年輪界が樹芯方向に大きくへこむ。道管の穿孔板は階段状で階段数は20～30段ある。放射組織は平伏細胞からなる同性で、単列と幅の広い集合放射組織がある。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：年輪最初に大道管が數列配列しその後徐々に径を減じて小管孔が火炎状に配列する環孔材。道管は單穿孔でチロースが多く放射細胞は単列同性である。

ブナ属 (*Fagus*)：中程度の管孔が均等に分布する散孔材で道管の密度が高く、晩材部では道管径が次第に小さくなる。放射組織は異性で単列と数列と広放射組織があり、広放射組織の部分で年輪界が外側に突出する。

コナラ属コナラ節 (*Quercus sect. Prinus*)：クリに似て大道管が數列配列したのち薄壁のやや角張った小管孔が火炎状に配列する環孔材。放射細胞は同性で単列と複合状の大きいものがある。

ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)：年輪はじめに大きい道管が1列並び小さい道管が接線状、花づな状に多数集合して連なる環孔材で道管は單穿孔があり、小道管の内壁にらせん肥厚がある。放射組織は同性時々異性で1～7列幅程度で周囲がややごつごつしており上下縁辺に時々結晶がみられる。

サクラ属 (*Prunus*)：中程度の管孔が単独ないし数個複合してややまばらに均一に分布する散孔材で、道管径は徐々に小さくなる。道管の穿孔板は單一でらせん肥厚があり内腔に着色物質が見られる。放射組織は異性で1～3細胞幅の材と10細胞幅くらいの材がある。

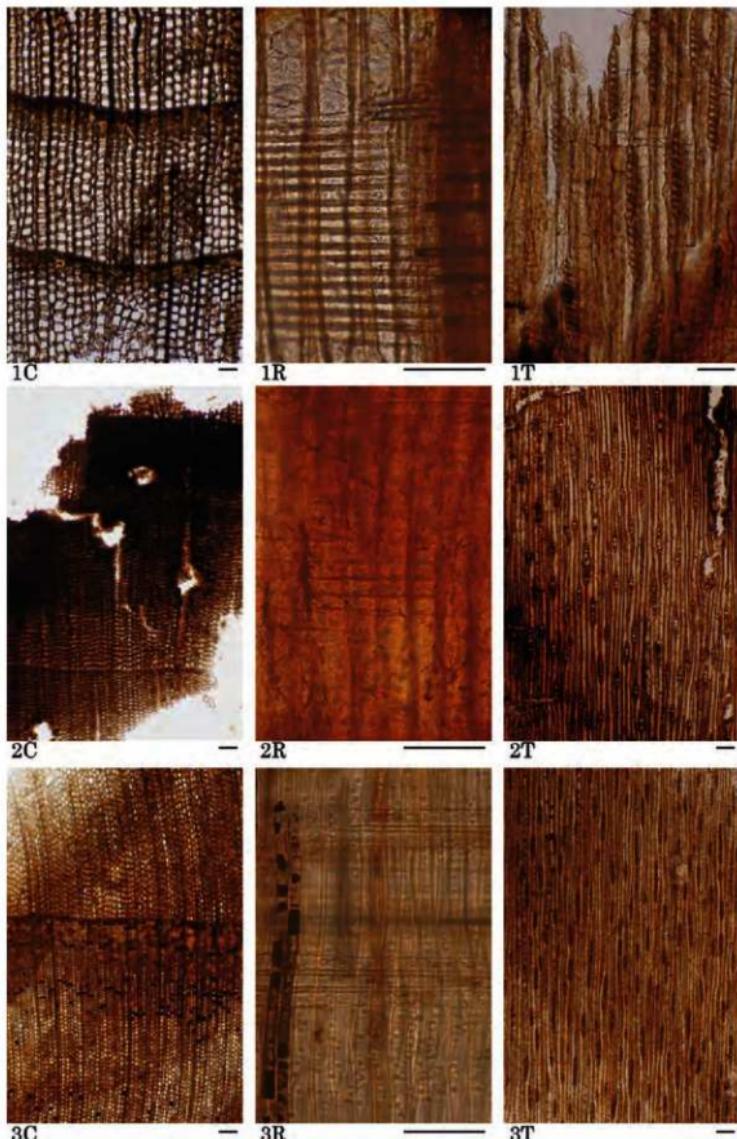
タカツメ (*Evodiopteranx innovans* Nakai)：年輪初めに大きい道管がまばらに1列あり、中～小管孔が単独および2～4個複合してややまばらに分布する半環孔材。道管は單穿孔で放射組織は異性で1～3細胞幅である。コシアブラに似るが大きい道管径が小さい。

ハリギリ (*Kalopanax pictus* Nakai)：年輪初めに大きい道管が1列配列し小道管が数個帯状に集合し接線方向や花づな状に配列する環孔材。道管は單穿孔で放射組織は異性で1～7列である。ニレ属やケヤキに似るが放射細胞が小さめでなめらかで大きさが揃っている。

## 引用文献

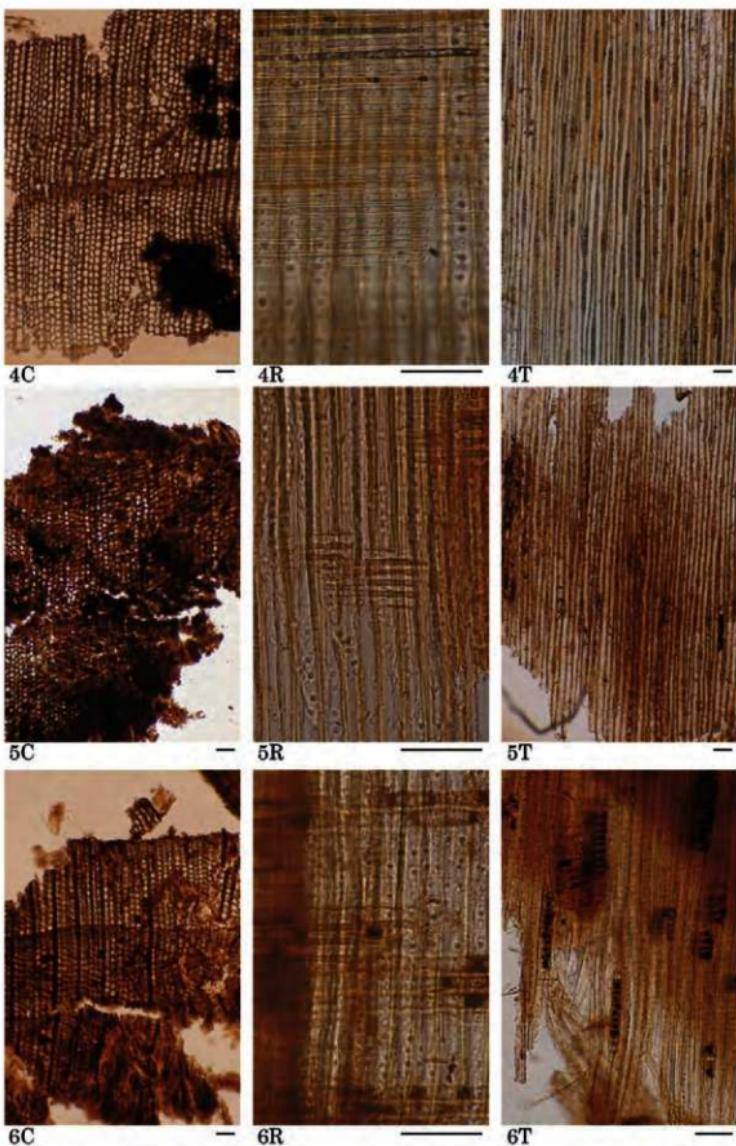
- 伊東隆夫・山田昌久. 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社. 449p.
- バリノサーヴェイ株式会社. 2018. 第2節 貞山堀1区出土杭の樹種同定と年代測定. 仙台市文化財調査報告書第464集 貞山堀・蒲生御藏跡ほか一平成27・28年度蒲生北部被災市街地復興土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書一. 仙台市教育委員会. 98-102.
- 吉川昌伸・吉川純子. 2012. 第2節 平成21年度自然科学分析 扇坂トンネル上段部と亀岡トンネル進

入路部の植物化石、仙台市文化財調査報告書第402集 仙台城跡ほか一仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ一、仙台市教育委員会、202-216。



図版1 下野郷館跡出土木材の顕微鏡写真(1)

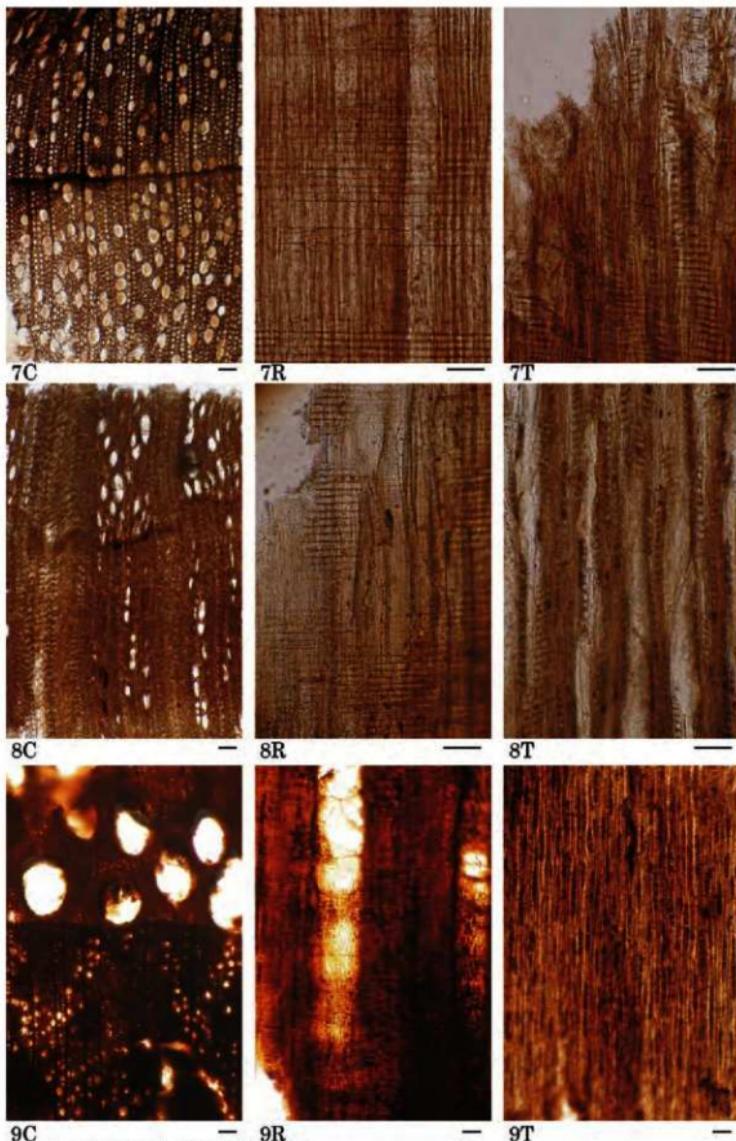
1. モミ属(28年度-No.40 井戸棒) 2. マツ属(28年度-No.36 不明木製品) 3. スギ(28年度-No.35  
建築材) C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは0.1mm



図版2 下野郷館跡出土木材の顕微鏡写真(2)

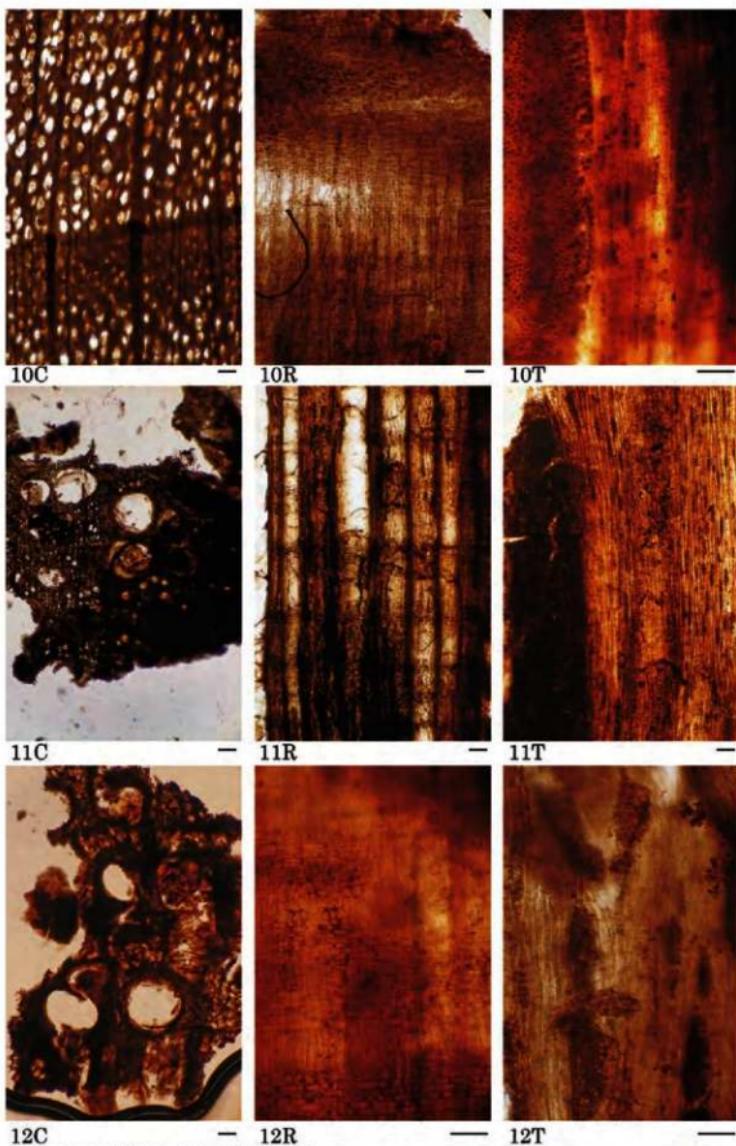
4.ヒノキ(28年度-No.12折敷)5.サワラ(28年度-No.39井戸枠)6.アスナロ属(28年度-No.30

部材) C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm



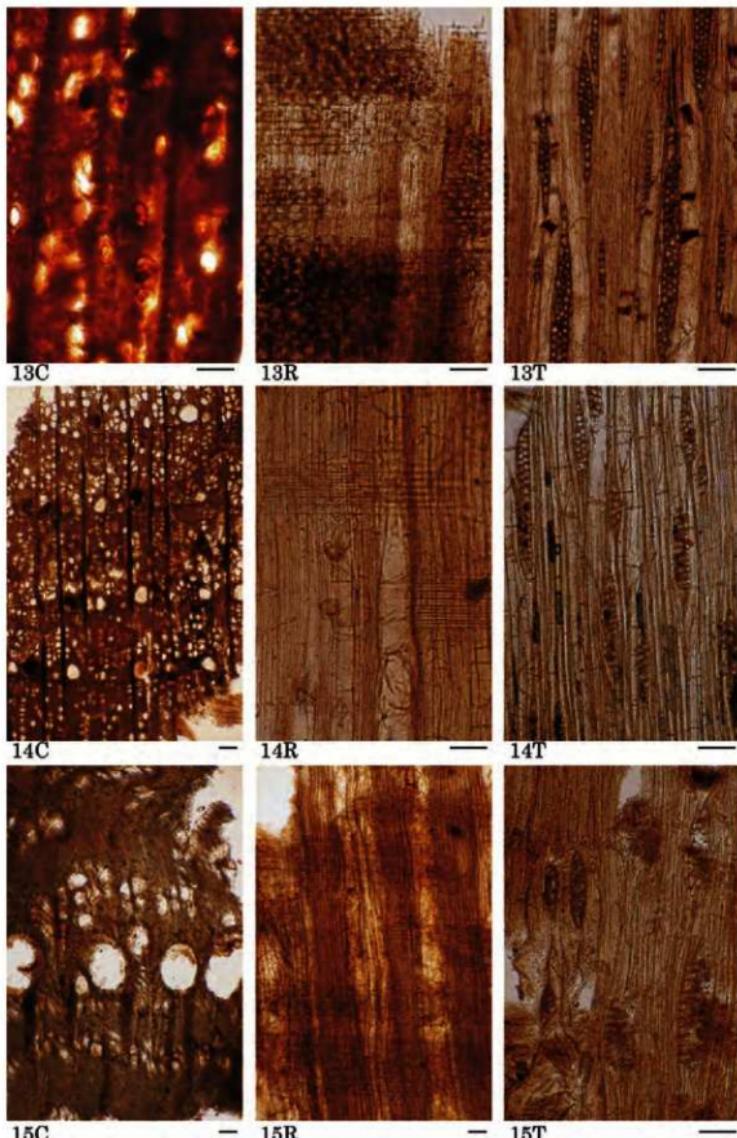
図版3 下野郷館跡出土木材の顕微鏡写真(3)

7. ヤナギ属(28年度-No.9-①下駄) 8. ハンノキ亜属(28年度-No.41 杖) 9. クリ(28年度-No.25 桟)  
C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは0.1mm



図版4 下野郷館跡出土木材の顕微鏡写真(4)

10. ブナ属(28年度-No.3 桧蓋) 11. コナラ節(28年度-No.37 不明木製品) 12. ケヤキ(27年度-No.7  
木鍤) C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは0.1mm



図版 5 下野郷館跡出土木材の顕微鏡写真(5)

13. サクラ属 (28 年度 -No.9- ②下駄齒) 14. タカノツメ (27 年度 -No.3- ②下駄齒) 15. ハリギリ  
(28 年度 -No.11 捺鉢) C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは 0.1mm

## 第X章 総 括

平成 24 年度から 29 年度までの 5 年に及ぶ調査では、岩沼及び宮城県南部域の地域史をみる上での様々な知見が得られている。ここでは発見された遺構・遺物の中でも特徴的ないくつかの点に絞ってみていきたい。

### 1. 遺跡の概要

今回の調査では大別すると、中世と近世の遺構・遺物が多くみられる。遺跡内では平成 12 ~ 15 年度にかけて県道亘理塩釜線改良事業に伴う調査、または個人住宅建築に伴う調査が実施されている。さらに遺跡が所在する一帯では江戸時代中期に成立する「矢ノ目足軽」と呼称される、仙台藩によって組織された足軽集団が成立・展開しているが、今回の調査成果を検討する上では足軽集団成立前夜の状況についてもしていくことが必要であり、ここでは矢ノ目足軽を含めた地域の歴史的背景を史料上からまず俯瞰したい。

#### a. 佐藤家・奥山家と矢ノ目足軽

矢ノ目足軽とは、仙台藩によって元禄 16 年（1703）に新規に召抱えられた足軽であり、本遺跡地内の下野郷字館内・館外に居住した。矢ノ目足軽については、文政 12 年（1829）に書かれた『矢ノ目状』と、昭和 44 年（1969）に市教育委員会に提供された『佐藤三郎家文書』によって、実像がかなり解明されつつある。これらを参考に、矢ノ目足軽成立以前から廃絶までを概観する。

#### 【「矢ノ目」地区の領主の変遷】

伊具郡小斎（現・丸森町）領主の佐藤紀伊勝信が、慶長 10 年（1615）の大坂の陣の後に隠居し、隠居分として名取郡矢ノ目邑の荒田を拝領して開墾し、300 石を得て本禄に加えられた。佐藤氏の本拠地である小斎領は勝信の実子である実信が継いだため、隠居分である矢ノ目邑は娘婿として迎えた村田領主奥山隼人兼義の弟である藤三郎が相続する。寛永 13 年（1636）に、藤三郎の生家の当主である兼義の死去に伴い、藤三郎は生家へ戻り家督を相続する。この後、藤三郎は奥山与市左衛門重信と改名し、あわせて矢ノ目邑も奥山領となる。重信は国番頭、小姓頭を歴任し、明暦 3 年（1657）に死去する。奥山氏の家督は、実子の奥山与市左衛門常信が相続し、元禄 4 年（1691）に死去するまでに駒番頭、小姓頭を勤めた。常信の実子の奥山与市左衛門常尚が家督を相続して間もなく元禄 9 ~ 13 年（1696 ~ 1700）にかけて、矢ノ目領主の奥山氏は磐井郡東山藤澤本郷（現岩手県磐井郡藤沢町）へ所替えとなり、空領となった矢ノ目に元禄 16 年（1703）、仙台藩によって矢ノ目足軽が新規に召抱えられた。矢ノ目足軽は成立当初 230 人で構成されたが、享保 7 年（1722）に 50 人が川崎、中津川に移され、以後は 180 人となる。慶応 4 年（1868）に戊辰戦争の際には矢ノ目足軽も出陣し、『仙台受難史小史』では 2 名の戦死が記載されている。明治 2 年（1869）に矢ノ目足軽は「永の暇」を賜り、足軽組織は解体する。その後の明治 5 年（1872）には、156 軒に減少したことが記され（岩沼市史所収『佐藤三郎家文書』）、他所を求めて移転した人々の姿を垣間見ることができる。

#### 【矢ノ目足軽の任務】

矢ノ目足軽は大番頭の支配下にある。大番士は平士 3,600 人で 10 隊（各 360 人）あり、仙台城の番役を勤める。矢ノ目足軽 180 人は、これらの 10 隊に各 18 人ずつが属し、その任務は大番大旗の護衛であった。矢ノ目足軽同様の旗本足軽は桃生郡成田の成田足軽、同郡小舟越の小舟越足軽があり、矢ノ目足軽はこの中では最大規模を誇る。矢ノ目足軽は鉄砲足軽でもあるため、平時においては藩より賜った 150 挺の鉄

砲を用いて旧暦4月1日から8月1日まで稽古を仰せつかり、また稽古用の費用も藩から授かっている。

#### 【矢ノ目足軽の組織と統制】

矢ノ目足軽は、一組 18 人ずつの 10 組に分かれ、それぞれを○番方（ばんほう）と呼んだ。一つの番方は組頭 1 人、床頭 2 人、並足軽 5 人組 4 つより成立していた。組頭・床頭は同姓が歴任するケースが多いことから、大方世襲制であったと考えられる。苗字が使用できるのも、これら組頭・床頭のみであり、他の者は使用できなかった。なお、苗字を使用できた役付のある者も、基本的には在職中のみの許可であり、例外を除ぐと苗字の使用は許されていない。居住区域も番方毎に分かれているが、順列通りではなく、不規則な配置となっている。

#### b. 県道部分の調査成果

今回の調査地点の周辺では、これまで第1～3地点で発掘調査が行われている。以下にこの3地点の調査によって得られた成果の概略を記す。

##### 【下野郷館跡第1地点】

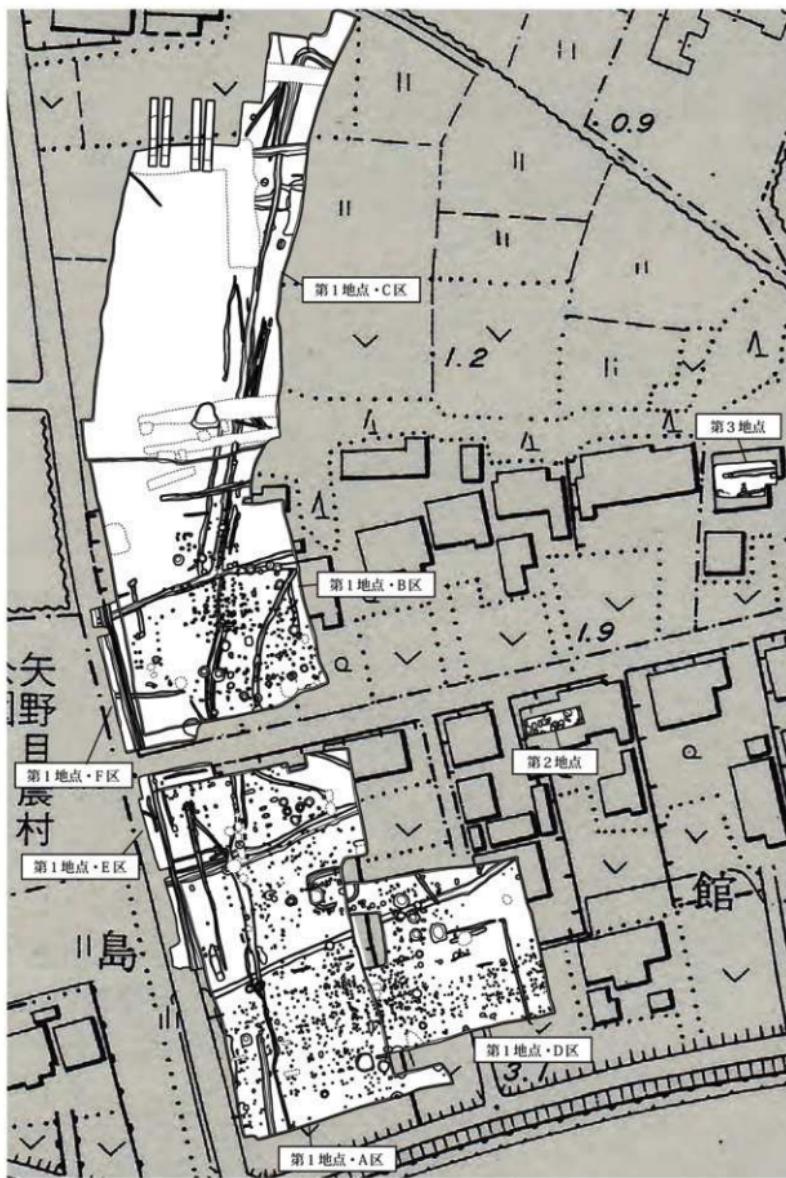
第1地点は県道亘理塩釜線の改良工事に伴い、平成 12～15 年まで 4 次にわたる調査が行われている。検出遺構は掘立柱建物跡 61 棟、堀・柱列 2 条、井戸跡 58 基、溝跡 53 条、土坑 31 基などであり、主に五間堀川に近い調査区南半部に集中して分布していた。出土遺物の年代観から古代、中世、近世にかけて土地利用が断続的になされていたと考えられるが、中世の遺構・遺物は限定的であり、主体となる時期は近世段階である。掘立柱建物跡の多くは重複関係にあるが、主軸方位などから 3～4 期にわたる画期が想定される。しかしながら、柱穴内よりの出土遺物量は僅少であることから明確な変遷は提示できていない。井戸跡は大多数が素掘りであるが、中でも上部が漏斗状を呈するものが最も多い。また木製の井戸枠を有する井戸跡も 3 基存在しているが、隅柱として杭を用いて横桟を渡し、外側に轍あるいは半截した竹を密に立て並べるという構造を呈している。溝跡は調査区全域で確認されているが、これらは規模や走方向から区画溝、取水・排水溝などの機能が考えられている。このうち区画溝では SD10・407 は建物の周囲に L 字状に巡ることから屋敷地内での区画を目的に掘られた可能性が考えられる。これに対し調査区西側で直線的に南北方向に延びる SD60・506 は、大局的にはこの地区的居住区域の境界を示し、併せて排水を目的に掘られたものと考えられている。なお南側の一部を開口する SD31 は極めて小規模な区画であることから、内部に屋敷神などを配していた可能性が考慮されている。土坑で特筆されるのは SK401 である。この土坑は略長方形を呈しており、内部からは白石市周辺で生産された中世陶器焼片のみが出土していることから中世段階の遺構である可能性が高く、また規模も長軸・短軸とも他の土坑と較べて大きいことから倉庫的な機能を有していた可能性も考慮できる（岩沼市教育委員会 2004）。

##### 【下野郷館跡第2地点】

第2地点は東日本大震災により被災した個人住宅建築工事に伴い、平成 23 年に調査が行われている。検出遺構は井戸跡 2 基、溝跡 2 条、土坑 9 基、焼土・炭化物を上面に有する性格不明土坑 4 基、ピット 15 口である。出土遺物の年代観から大半が近世以降の遺構であると考えられている。中でも焼土層を有する不明土坑が 4 基確認できたが、これらの覆土中からは鍛冶関連遺構の可能性を示す遺物の出土が無く、第 1 地点でも同様の遺構は未検出であり、これらの性格については遺跡地内での分布も含め今後の検討課題である（岩沼市教育委員会 2013a）。

##### 【下野郷館跡第3地点】

第3地点は東日本大震災により被災した個人住宅建築工事に伴い、平成 24 年に調査が行われている。



第 219 図 下野郷館跡第1~3地点合成図

検出遺構は溝跡2条、土坑4基などであり、出土遺物の年代観から大半が近世以降の遺構であると考えられている。このうち調査区のほぼ中央から東側にかけて東西方向に走方向を有しているSD01は、第1地点B区で確認されたSD245の延長線上に相当することから、近世段階での区画溝である可能性が考慮される（岩沼市教育委員会 2013b）。

以上のように、史料上での矢野目地区の初見は江戸時代初頭頃から見られるが、発見された考古資料からは中世期にも人々の生活の営みが行われていたことが明らかとなっている。

## 2. 出土遺物について

下野郷館跡の調査では、土師器・須恵器・中世陶器・輸入磁器・近世陶器・近世磁器・近現代陶器・近現代磁器・石製品・木製品・金属製品等が出土している。出土量は遺物用コンテナで土器等74箱、石製品3箱、木製品8箱、金属製品3箱、合計88箱分である。以下に種別ごとに概要を示す。

### a. 土師器

土師器は平成29年度の調査で遺構確認面となる自然堤防のシルト層上面から壺が1点出土している。これは底部が丸底で口縁部が屈曲して外反するもので、東北地方における土師器編年の南小泉式の壺に共通する器形である。南小泉式は以前は当初に設定された南小泉式に後続する引田式を包括していたが、その後に細分案が出され、現在ではカマド出現の5世紀中頃を境に前を南小泉式、後を引田式に分離する考えが広まっている。それによると本資料は特徴的に引田式に近く、5世紀後半を中心とした年代のものと考えられる。下野郷館跡ではこれまで古代以前の遺物の出土は皆無に等しかった。今回、古墳時代中期の5世紀後半の土器が出土したことにより、下野郷館跡が立地する第II浜堤列や自然堤防がこの時代から生活領域に含まれていたことが明らかとなった。今後さらに、堅穴住居跡などの居住域を示す遺構の発見が期待される。

### b. 須恵器

平成28年度SD01から7世紀後半のものかと考えられる波状文の須恵器甕口縁部片が出土している（第155図6）。SD01は中世陶器が出土しており、13世紀後半～14世紀前半を中心とする時期の区画溝で、周辺から混入したものと考えられる。第II浜堤上ではにら塚遺跡で古代の土師器と製塙土器、高大瀬遺跡で古代の土師器・須恵器が出土している。またこの須恵器は断面1辺と内面を研磨に使用しており、研磨に適した材として中世陶器と同様に用いられたものと考えられる。

### c. 中世陶器

ほとんどが白石産で、渥美産が1点、常滑産が52点（可能性ありのもの含む）出土している。白石産陶器を生産した代表的な窯跡は宮城県白石市白川大卒塔婆に位置した一本杉窯跡群で、赤褐色～橙色を呈する胎土と色調を有するが、異なる胎土・色調を示す窯跡が存在することも知られている。下野郷館跡からも様々な胎土・色調を示すものが出土しているが、本報告では一括して白石産と表記した。また白石に先行して陶器を生産する窯跡として福島県伊達市に所在する八郎窯跡がある。遺物を実見したが、胎土・色調・形態いずれも過去に報告されているものよりバラエティーに富んでおり、八郎窯跡の製品が下野郷館跡出土遺物に含まれている可能性は十分に高いと感じたが同定には至らなかった。渥美は12世紀末～13世紀初、常滑は12世紀後半～13世紀後半、白石は13世紀後半～14世紀前半である。古瀬戸は瓶子と折縁深皿が平成28年度の調査で出土している。また12世紀後半の山茶碗が1点平成28年度の調査で出土している。

**d. 輸入磁器**

輸入磁器は龍泉窯系青磁の碗が3点、皿が1点、瓶が1点、白磁の碗が1点、皿が1点、青花磁器が6点出土している。このうちSD01から出土した白磁碗と青磁碗は、遺跡の開始時期に係わる資料となりうるもので重要である。平成28年度SD10出土の折縁の白磁皿（第176図2）は16世紀後半か。青花は芙蓉手の中でも桃果形の文様区画をもつ明山手（第123図1・2、第176図3）と、素描のみで草花文を描く皿（第134図1・第176図1・第188図6）がある。後者は類例に乏しく不詳であるが、17世紀後半頃と考えられる。

**e. 近世陶器**

16世紀末～17世紀初頭の瀬戸美濃産皿、肥前産の碗が出土しているほか、平成28年度SE02から中國漳州窯産の皿（第121図）が1点出土している。大堀相馬は皿・土瓶・徳利が多く出土している。19世紀中葉であろう。平成25年度SD01から大堀相馬に似た軟質薄手の施釉陶器の皿・鉢が出土している。口縁端部をナデて三角形にしたり、水平に長く引き伸ばすなどの特徴を持つ。産地は不明である。擂鉢は丹波産（第15図13）、岸窯系、堤焼が出土している。京焼と考えられる色絵の軟質施釉陶器片がわずかに出土している。

**f. 近世磁器**

肥前産磁器碗・皿は17世紀後半～18世紀前半のものが出土している。瀬戸美濃産磁器は碗・皿・徳利・段重などが出土している。碗は端反碗・丸碗・平碗があり18世紀末～19世紀末である。切込は碗・手塙皿・徳利等が出している。山形平清水や会津本郷産と考えられる碗や小壺も複数出土している。

**g. 近現代陶器**

堤焼の擂鉢・甕・捏鉢・焙烙等が出土している。

**h. 近現代磁器**

型紙摺り・銅板転写・酸化クロム青磁・ゴム印等の装飾技法を用いる19世紀末～20世紀前半と考えられる磁器が多く出土している。およそ瀬戸美濃産が大部分を占めると考えられ、碗・皿・鉢・徳利等が出土している。碗は幕末から続く丸碗と、1920年代頃までに定着するとされる平碗がある。体部がハの字に開きゴム印装飾のみられる平成26年度出土の平碗（第67図1）は1910～1950年頃に比定される。また底部外面に太平洋戦争中の統制経済下で用いられた生産者標示記号を有することから1941～1945年の生産と限定できる。体部がハの字に開き高台が高くなる平碗（第67図2）は1960～1980年頃である。20世紀前半の兵隊盃が4点出土している。「支那事変記念」「眞臺灣」などが見える。「塩釜鎗木商店」などは宣伝杯・印物と呼ばれる販促品であろう。

**i. 石製品**

石硯、石臼、温石、砥石など23点が出土している。これらの中で時期がおよそ確定できる石臼や温石、砥石の一部について詳述する。

石臼は平成28年度と29年度の調査で、それぞれ1点ずつ出土している。両者とも茶臼の一部で、前者（第167図3）は下臼の台部と受皿縁辺が意図的に打ち欠かれたものである。これはSD01から鎌倉時代後半の陶器や磁器とともに出土しており、時期については鎌倉時代後半に位置づけられる。後者（第214図1）は下臼の受皿縁部で、出土したSD23からは鎌倉時代後半の陶器や磁器が出土しており、本資料もこの時期のものと考えられる。いずれも石材は安山岩である。

茶臼は鎌倉時代頃から普及した喫茶に伴う粉末の抹茶にする道具である。宮城県内では中～近世の出土

例が各地で認められるが、中世では15世紀以降の後半期の資料が多く、鎌倉時代を中心とした前半期の資料は極めて少ない。これらの出土した遺跡は武士や在地有力者などの領主階層に関わる性格が考えられている。こうした階層などに中世後半期には喫茶の風習が広く普及しており、今回の下野郷館跡から発見された石臼は鎌倉時代後半に位置づけられることから、その開始が13～14世紀ごろまで遡ることが考えられる。石材の安山岩は岩沼市西方を南北に連なる岩沼西部丘陵（高畠丘陵の一部）から豊富に産出される岩石である。

温石は「懐炉と同様、懷に入れるなどして、暖を取ったり空腹を押さえたり、あるいは患部に当てて痛みを和らげるなどの治療を行う採暖具および治療具の一つ」（江戸遺跡研究会2001）と考えられている。内部に熱源をもつ懐炉と違い、温石は火鉢などの中で熱し、その余熱を利用するもので、懐炉が普及する近世前期以前は広く利用されていた。中世には滑石製の石鍋の破片を再利用したり、専用の方形の石製品があり、加熱後に火ばしなどで移動するために孔をもつことが多い。

この温石が平成29年度の調査で、土坑から1点（第198図）出土している。板状の方形形状の形態であり、その一端には孔が開けられており、火鉢などで加熱したように片面が黒化している。時期については伴出する資料はないが、鎌倉時代後半の溝跡を切っており、鎌倉時代後半以降とみられる。石材は黒雲母片岩である。これと石材が共通するSD1とSD23から出土した各1点の不明石製品も、板状で方形に近い形状から温石の可能性を考えた。ともに鎌倉時代後半期の溝跡であり、不明石製品もこの時期のものと考えられる。

温石は宮城県内では10数点の出土例がある。形態は板状の方形形状のもので、多くが一端に1孔をもっている。石材は黒雲母片岩などの片岩系か滑石、粘板岩などである。仙台市王ノ壇遺跡の温石は黒雲母片岩を多く石材としており、その産地は阿武隈山地南部とされ、そこから阿武隈川水系の水運によりたらされた製品である可能性が指摘されている（仙台市教育委員会2000）。またこのほかに県内の数少ない例としては多賀城市新田遺跡や多賀城跡から出土した滑石製の石鍋を一部転用した温石がある（千葉1992、多賀城跡調査研究所1983）。温石の時期は登米市佐沼城跡から出土した近世の時期の温石1点を除いてはすべて中世の時期で、その多くが中世前半の鎌倉時代後半のものである。出土した遺跡は武士層の政治的な拠点、在地領主層の屋敷などの性格が考えられており、前述の茶臼と同様、主に地城の有力層が所有していた生活用具の一つと推定される。

下野郷館跡から出土した温石は黒雲母片岩を石材としており、王ノ壇遺跡例と同じく阿武隈山地南部から製品として持ち込まれた可能性が考えられる。その場合、王ノ壇遺跡でも推定されているような阿武隈川水運による流通品と考えると、阿武隈川に近く、五間堀川や志賀沢川沿いに位置する当館跡が水運に関わる要衝地だったこともこうした製品が持ち込まれやすい理由だったのではないかと考えられる。

中～近世の遺跡からは普遍的に主に刃物を研ぐのに用いる砥石が出土する。砥石は大きく石質や石目から荒砥、中砥、仕上げ砥に分類される。荒土は「研ぐ」よりも「削る」に近い用途に使用され、石材は砂岩質が多く、調整などに使用される中砥は、石材は流紋岩質凝灰岩が、最終段階の鋭利な刃先にする仕上げ砥は粒子の細かい細粒凝灰岩か頁岩などが石材として用いられている。

下野郷館跡から出土した砥石は12点あるが、近代以降、擾乱、掘削時出土の砥石が多く、中世のものは平成26年度のSD01とSD15出土の各1点、28年度のSD01出土の2点、SD19出土の1点の5点である。その中で荒土の置砥が1点の他は、携帯可能な提砥であり、後者の内訳は火山岩の荒砥1点とディサイト質凝灰岩の中砥、および仕上げ砥が3点である。仕上げ砥は角柱状と不定形状のもので、いずれも複数の砥磨面をもっている。これらの砥石は形状や砥磨面の状況など多様で、主な石材のディサイト質凝灰

岩も周辺から入手が可能であることから、広域的な流通をもつ製品としての砥石というよりは、在地から供給される石材やその加工品を使用している可能性が高いと考えられる。

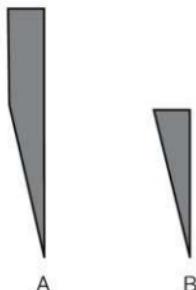
#### j. 木製品

平成 27 年度には下駄が 3 点、柄杓が 1 点、蓋が 2 点、木錐が 1 点の計 7 点、28 年度には漆器が 6 点、下駄が 3 点、刀鞘が 1 点、捏鉢が 1 点、折敷が 1 点、柄杓が 1 点、曲物 1 が 3 点、へら状木製品が 1 点、桶の側板が 1 点、クサビが 11 点、部材・建築材が 6 点、不明木製品が 3 点の計 38 点の木製品がそれぞれ出土している。

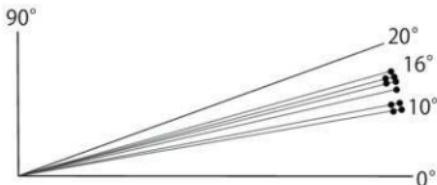
平成 27 年度に木製品が出土した SD03 は近世～近代の時期の遺構で、2 点の連歛下駄、1 点の容器の蓋もその時期の遺物（第 90 図）と考えられる。大人用の連歛下駄では表面に山や川などの写実的な線刻が施されているのが特徴である。同じく木製品が出土した SE02 は 13 ～ 14 世紀の鎌倉時代の遺構で、各 1 点ずつの差歛下駄、柄杓、樽の上蓋、木錐（第 83 図）もその時期のものと考えられる。差歛下駄は露卯下駄である。平成 28 年度の木製品は井戸跡や護岸施設、溝跡から出土している。13 世紀の鎌倉時代の SE01 から出土した曲物底板（第 120 図）はこの時期のものと考えられる。SE06、SE07 は 17 世紀の江戸時代前期の井戸跡であり、SE06 から出土した連歛下駄（第 128 図）、SE07 から出土した 2 点の漆器と柄杓、曲物底板（第 130 図）もこの時期のものと考えられる。

SE01 は 17 世紀の江戸時代前期の護岸施設であり、28 点の木製品が出土しているがすべてその時期のものと考えられる。漆器は椀身と蓋が 4 点（第 140 図 1 ～ 4）あり、赤漆や黒漆で仕上げられている。捏鉢（第 140 図 7）は口径が 60cm を超す大型のもので、ハリギリが利用されている。部材とした 4 点（第 141 図 5・6、第 142 図 1・2）は細い角状の材の両端などに、別部材を結合するように釘が打ち込まれている。ほかの刀鞘（第 141 図 1）と折敷については、東北地方では材として少ないヒノキが利用されており、製品として流通品してきた可能性が考えられている（IX 章 自然科学分析）。

ここではこのほかの 11 点のクサビについて詳述する。これらのクサビ（第 143 図）は護岸施設の杭と横板を固定するために用いられたもので、打ち込まれた状態か抜けた状態で確認された数十点クサビの一部である。1 本の杭の再利用を除き、他の 10 本はすべてクサビとして製作されたもので、樹種はクリ材である。この 10 本のクサビには形状の異なる台形状の A と三角形状の B がある。量的には A が多く、また A の先端部（差し込み部）の長さが B の長さとほぼ等しいことから、通常のクサビの形状は A で、B は臨時的な形状と推測さ



第 220 図 クサビの形状



第 221 図 クサビの先端部角度

れる。しかしBでもクサビとして最低限の機能は果たしたものと考えられる。クサビの先端部角度の分布を示したのが第221図である。10点のクサビは形状A・Bとも $10^{\circ}$ から $16^{\circ}$ の範囲に集中しており、極めて規格性が高い。次にクサビの長さと幅、および厚さの関係を見たのが第222図である。形状Aについては、長さが12~16cmとやや分布が広がるのに対し、幅や厚さは2から3cmの約1cmの範囲に集中している。このことは形状Bでも同様であり、幅や厚さなどが同規格にする意図のもとに製作されていることがわかる。規格的な先端部（差し込み部）を作り出す前提条件だったのだろう。これらのことから、護岸施設を構築する部材の一つ、クサビについても高い規格の元に計画的に製作された可能性が考えられる。前述したように10点のクサビはクリ材を用いて製作されており、その木取りなどを見ると、1本のクリ材を元に分割して製作されたことも想定できる。

SD18は中世後半の溝跡であり、伴出した下駄2点とへら状木製品、桶の側板もその時期のものと考えられる。

下駄の1点（第180図2）の差歎下駄は露卵下駄である。へら状木製品（181図）は柄と身に分けて加工されており、形状や大きさから食物の調理などに関わる道具の可能性が考えられる。

#### k. 金属製品

平成27年度攢乱から近代磁器とともに完形の鉄瓶（写真図版）が出土した。体部に鶴？の文様が見える。前後に形態の違う宝珠型の耳がつぶが後ろのものは補修した痕跡がみられる。破損したのち別部品で補修したものであろう。銭貨が10枚出土している。遺構出土のものでは27年度SD04、28年度SD04、P18から天祐通宝、大觀通宝、元豐通宝、元祐通宝が出土したほか、表土から寛永通宝が出土している。

#### 1. その他

土製の指人形（第68図4）、人形（第30図6）、人形もしくは機材形（第30図7・8）、土錘が出土している。

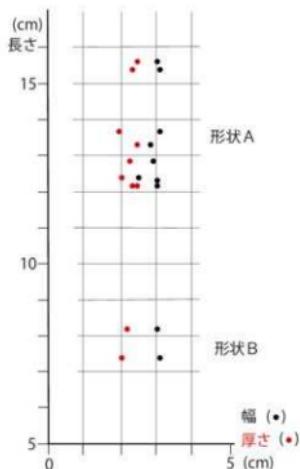
### 3. 遺構の変遷と年代

各調査年度の遺構変遷及び年代観についてはそれぞれで記載している。ここでは多数の遺構・遺物を検出した平成28年度の調査の中で、特に主要な遺構の時期別変遷についてみていく（第223図）。

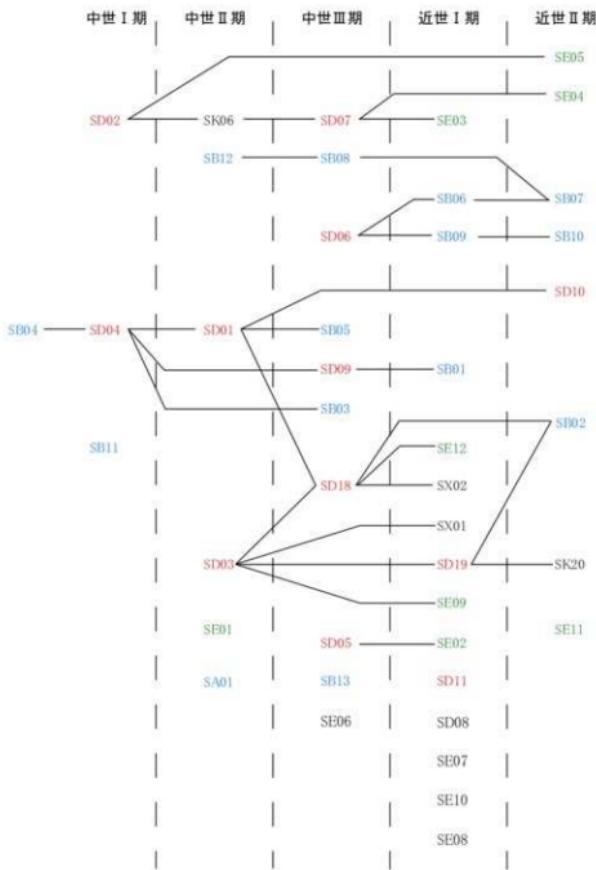
#### a. 中世

中世については遺構ごとの重複関係、出土遺物から3期の変遷が考えられる。

中世I期は調査区南部で確認された東西溝であるSD02と、調査区東部で確認されたSD04を中心とする。またSD04に先行するSB04についても時間幅の範囲内としてここに含める。さらにSD02と同様の主軸を有するSB11が含まれている。各遺構内からは年代を明確に示す遺物は出土していないが、調査区内での最古の遺物の年代観をもとに12世紀後半～13世紀前半と考えられる。



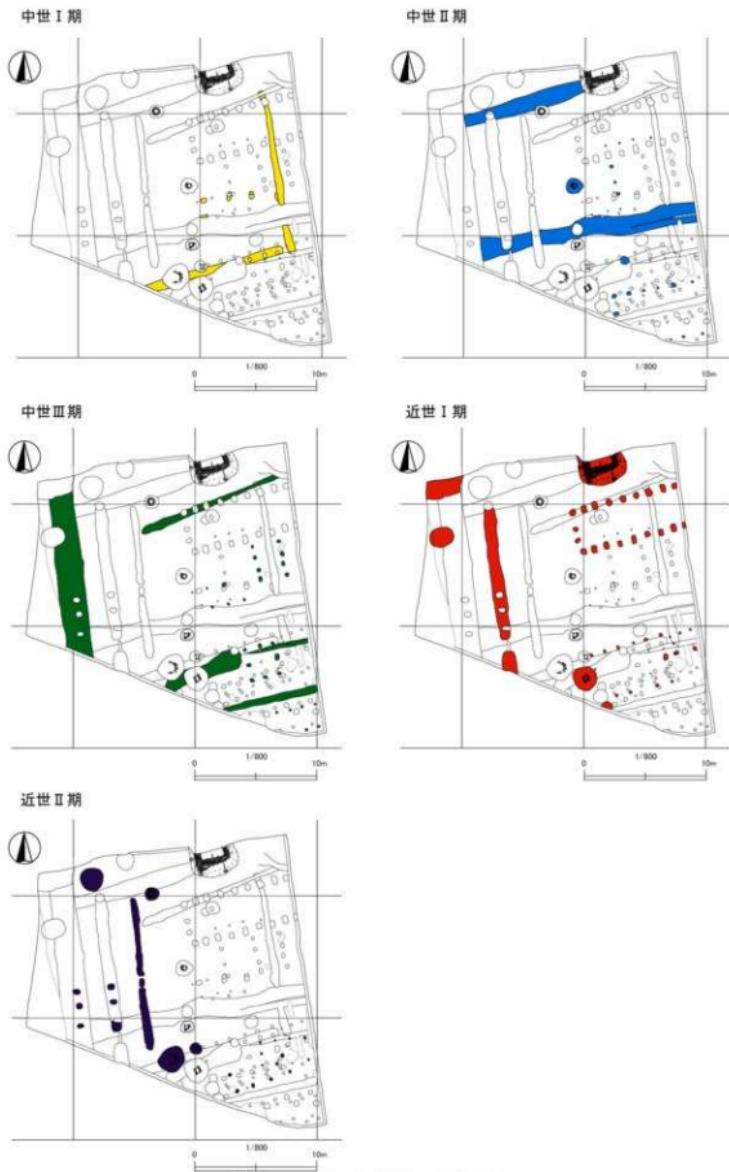
第222図 クサビの長さと幅、厚さの分布状況



第223図 平成28年度調査区遺構相關図

中世Ⅱ期は調査区中央部南寄りで確認された東西溝であるSD01と、調査区北部で確認された東西溝であるSD03を中心とする。また調査区中央部で確認された井戸枠に丸太を割り貫いたものを使用しているSE01、そして調査区南東部のSB12、SK06によって構成される。SD01・03はほぼ並行して存在し、さらにともに2~3時期の作り替えがなされていることから強い区画性を有するものと考えられるが、調査区内では主屋等の存在は確認できない。むしろSD01の南側に位置するSB12は規模が大きいことから主屋であるとみられ、南北に連なって複数の区画が並立していた可能性が考えられる。中世Ⅱ期の時期についてはSD01・03、SE01の出土遺物の年代観から13世紀後半~14世紀前半と考えられる。

中世Ⅲ期は調査区北部で確認されたSD09、調査区西部で確認された南北溝であるSD18と、規模の点からこれに接続する可能性があるSD07を中心とする。また調査区中央部で確認されたSB05、その東側で



第224図 平成28年度調査区遺構変遷図

確認されたSB04、調査区南東部で確認されたSB08によって構成される。なお、調査区南東部で確認されたSD05・06は同じ主軸方位を有するものであり、道路側溝の可能性も考えられる。年代を明確に示す遺物は出土していないが、重複関係から中世II期の遺構群より新しく、後述する近世遺構よりは先行することを考慮すると14世紀前半～後半と考えられる。

#### b. 近世

近世についても遺構ごとの重複関係、出土遺物から2期の変遷が考えられる。

近世I期は調査区北部で確認されたSB01、調査区南東部で確認されたSB06・09、そして調査区北部で確認されたSX01、SE09を中心とする。SB01は非常に規模の大きな建物であり、当初は主屋として捉えていたが、詳細は後述するSX01に面して存在していることから倉庫的な機能も想定できる。近世I期の時期については、SX01下層の遺物の年代観から17世紀前半頃と考えられる。なお、SX01、SE09、SD19からは17世紀後半頃の遺物が出土しているが、すべて最上層からの出土であり、機能時の年代を示すものではない。

近世II期は調査区南西部で確認されたSB02、調査区南部で確認されたSE04・06、調査区北西部で確認されたSE11、そして中央部で確認された南北溝であるSD10を中心とする。このうちSD10は底面が凹凸し、また上場も直線的には伸びないことから垣根のような植栽の痕跡とも考えられる。近世II期の時期については、SD10出土遺物の年代観、SB02とSD19との重複関係から17世紀前半～17世紀後半と考えられる。

### 4. SX01護岸施設について

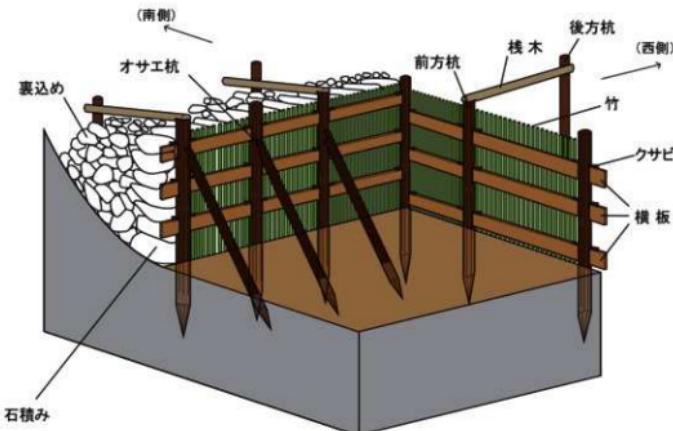
平成28年度の調査では宮城県内だけではなく、全国的にも類例が少ない遺構としてSX01護岸施設が検出されている。ここでは改めて遺構の概要を述べ、さらに遺構の性格、構造的な特徴をみていきたい。

#### a. 遺構の概要

SX01は調査区の北側中央に位置する。確認できた遺構はまず自然堤防形成土である砂質シルト層を大きく掘削し、その後内部に礎・杭・桟木・竹を用いて東西幅4mの空間を確保している。遺構の北側は調査区外へさらに展開するために全体像は明らかではないが、これらの材を用いた区画の東西列は南北1.2m以上にわたって検出されている。遺構の時期は出土遺物から16世紀末葉～18世紀と幅があるが、17世紀後半～18世紀にかけての遺物はすべて上層からの出土であり、下層出土遺物の年代観は17世紀前半頃で占められることから、17世紀前半に機能していたと考えられる。これは254頁で詳述した地域史に照らし合わせれば、矢ノ目足軽成立以前にこの地を拝領していた佐藤氏・奥山氏の遺構と想定できる。

以下にこの遺構の構築過程について改めて述べる。なお、本稿で使用する各部位の名称は第225図の復元図に示している。

- ①大きく掘削した内部に施設の前面を構成するための前方杭を打つ。
- ②打ち込んだ前方杭のうち、特定の杭の背後(70cm前後)に後方杭を打つ。
- ③前方杭のラインに長さ30～50cmほどの川原石をほぼ直立するように積み上げる。また石積み作業と並行して背後に裏込めを行う。
- ④打ち込んだ前方杭にホゾ穴を穿ち、幅12cmほどの横板を上・中・下の3段に設置する。この横板の固定にはクリを主な材料とするクサビを使用する。
- ⑤前方杭と石積みの間に長さ100cmほどに切りそろえた竹を縦位で密に立て並べる。



第 225 図 SX01護岸施設模式図

⑥前方杭と後方杭を連結するための部材（棟木）を固定する。この棟木の固定にあたっては、前方杭との固定にあたっては釘を用いるが、後方杭との固定には釘やホゾ穴に差し込むなどの連結は行われておらず、繩などで縛り付けていた可能性がある。なお、後方杭同士の連結は行われない。

⑦石積み・裏込めの部分に砂利混じりの土を敷き、捣き固める。

以上が完成当初の姿であったと思われる。なお、使用時に前方杭が内部に傾いた際、区画内部で補強のためのオサエ杭を斜めに打ち込むことが行われている。

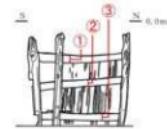
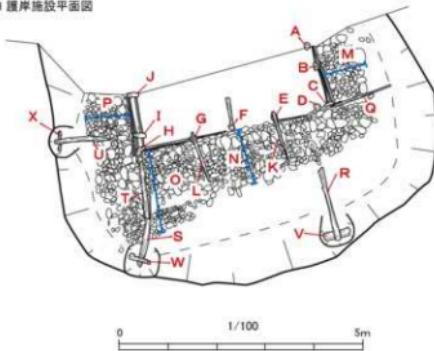
本遺構は南側の一辺が完全に姿を現しており、そこでの各部位間の規模等については第 226 図に記した。

#### b. 遺構の性格

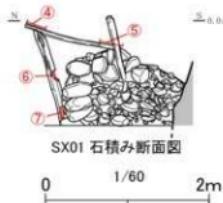
本遺構は自然堤防形成土である砂質シルト層を大きく掘り込み、その内部に種々の構築材を用いて作られている。調査時には施設内部は恒常に湧水が激しく、調査区の壁面がたびたび崩壊したが、遺構壁面はこれらの構築部材によって保護されており、浸食等は一切確認されていない。この事実はこれらの構築材が水流からの浸食を防ぐことを目的として作られたことを如実に裏付けるものであり、今回の報告に関しては本遺構を「護岸施設」として呼称してきた。

では、本遺構は何を目的として作られたのだろうか。一般的に護岸施設は河川の堤防や溜池などでみられるものである。溜池としての構築を考えると、これまで岩沼市内では西須賀原遺跡で溜池の可能性がある遺構が発見されているが、そこでは底面から壁面の立ち上がりの勾配は比較的緩やかであり、構築材を用いて護岸を行った痕跡はみられない。一方、河川の堤防という点については調査区内で南辺を検出していることから完結しているために考えられない。そこで手がかりとなるのは、平成 27 年度に実施したトレーン調査で確認された、志賀沢川の旧河道と考えられる堆積土の存在である。この堆積土の分布から、旧流路は

SX01 護岸施設平面図



SX01 竹・横桿検出状況立面図



SX01 石積み断面図

SX01護岸施設の各寸法表(単位:cm)

区間名	長さ	区間名	長さ	部材名	長さ×幅	部材部位	長さ×幅
A-B	45	E-K	90	Q	132×6	①	15
B-C	85	G-L	80	R	152×9	②	12
D-E	40	M	80	S	148×12	③	12
E-F	90	N	125	T	118×9	④	29
F-G	90	O	174	U	110×9	⑤	38
G-H	80	P	95	V	55×12	⑥	17
H-I	45			W	46×10	⑦	21×5
I-J	85			X	42×7		

第 226 図 SX01 各部位の計測値



後方杭と桟木の状況



前方杭と桟木の固定状況



クサビによる横板の固定状況



縦位で並べられた竹材

現在の流路の北側を通り、平成28年度調査区の西側あたりで南に折れ曲がることが想定でき、この屈曲部分を直線的に延長すると、SX01の北側あたりに達することとなる（第227図）。詳細な調査は今後の課題となるが、河川の合流地点の付近に位置するという遺跡の立地条件を鑑み、現段階では河川交通を介して物資を集め積むための船着き場として機能していた可能性を考慮しておきたい。

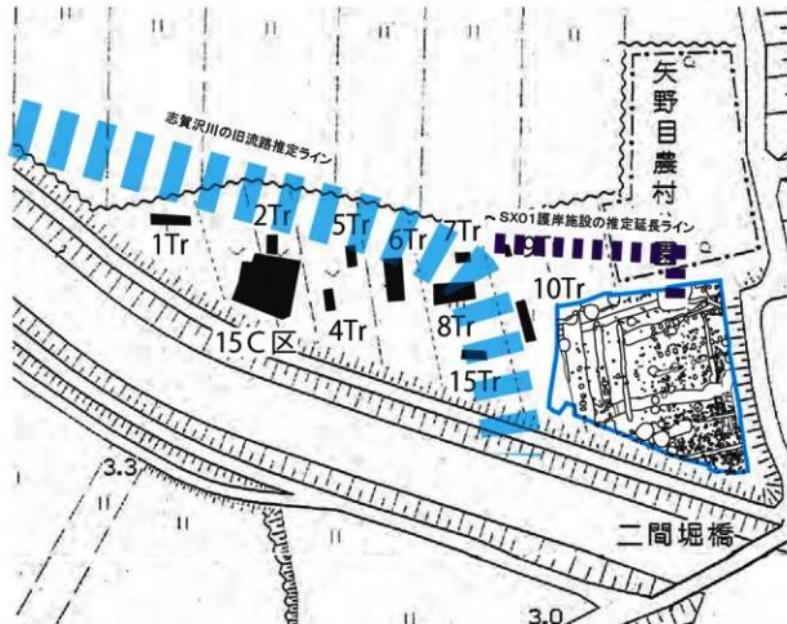
### c. 構造面の特徴

SX01のような構造を有する護岸施設は、宮城県内では初めての確認事例であり、また東北地方においても管見に触れた限りでは類例は見当たらない。

SX01の構造で最も特徴的な部分は、前方杭から後方杭へかけて控えのために桟木を渡すことである。このような構造を有する護岸施設については様々な先行研究（森田2014、畠2010・2013、北垣2010・2014）があり、ここではこれまで述べられている各遺跡の護岸施設の構造的特徴を俯瞰していく。なお、これまでの先行研究や土木史料では施設の各部位名称が若干異なる。筆者は土木史料にも疎く、さらには土木工学的な知識も持ち合わせておらず、いずれの名称が妥当であるか判断できないため、ここでは基本的に前項で使用した模式図の名称を用い、この模式図に含まれていない名称については便宜的に森田氏が提唱している部位名称を用いる。

この後方へ「引っ張る」護岸工法は、鎌倉市若宮大路周辺遺跡をはじめとした中世の鎌倉市内遺跡で側溝の護岸としてみられるものが国内での初源と考えられている。

その後、17世紀前半になると、このような「引っ張る」構造を持つ護岸施設は大阪城や高槻城、狭山



第227図 SX01と志賀沢川旧流路推定図

池など畿内を中心に確認事例がみられる。これらの事例はいずれも本遺跡での前方杭・後方杭を桟木で連結するものであるが、後部枷杭の有無、控えのための桟木（縦貫）の本数など種々の点で相違がみられる。一方で共通する部分としては、④前方杭（枠杭）と後方杭（控杭）と桟木（縦貫）を組み合わせて「枠」を作る、⑧竹を横位に用いた「しがらみ」を施す、⑨前方杭の列に枷杭を打ち込む、⑩前方杭を陸側に傾けて打ち込む、といった点が挙げられる。

本遺跡地で発見されたSX01との共通点としては⑩が該当する。また部分的な確認であるが⑨の存在も否定できない。一方で異なる点としては⑧・⑩、及び後部枷杭がみられないことである。特にここに挙げた事例、さらにはこれらより後出となる東京都汐留遺跡の事例では、いずれも長い竹材を横位に並べる、あるいは前例の枷杭と編み込むという状況であるのに対し、SX01での竹材の用い方は「1mほどの長さに切りそろえ、縦位に並べる」というものである。そして最も大きな相違点として挙げられるのは、前方杭と後方杭、そして桟木によって構成される枠内に充填したものである。大阪城・狭山池では土砂や礫が用いられ、高槻城では俵土のうが用いられているが、本遺跡のSX01では単体でも十分な強度がある石積みが行われている。この十分な強度を必要とした背景は、単に水流から岸辺を保護するためというよりは、この箇所である種の作業を行うことを目的としていたと考えられ、前述のように河川交通の要衝に位置するという遺跡の立地条件を加味すると、物資の運搬にかかる施設としての利用が想定できる。そのために⑧、及び石積みを含めた前面の施設についてもほぼ直立気味に設置されたと考えられる。

以上の点を踏まえると、本遺跡で発見されたSX01は当時畿内で用いられた護岸方法を基にしながらも、使用する目的に即して独自に発展を遂げたと理解することが可能であろう。そして想像をたくましくすれば、畿内で用いられた護岸施設が大坂の陣の頃に出現していることから、本遺跡地での導入を主導したのは大坂の陣に参陣し、現地で最新の土木技術を目の当たりにした伊達家中の人々、すなわち佐藤紀伊勝信本人もしくはその近親者であったと考えられるのではないかだろうか。

## 5. 井戸跡について

今回の調査で発見された井戸跡は、平成 26 年度調査区で3基、平成 27 年度調査区で3基、平成 28 年度調査区で 12 基の計 18 基を検出している。

位置をみると掘立柱建物跡に近接、または重複しているものが多く、ある程度のまとまりをもって分布する傾向にある。また数基が隣接しているものもあることから、屋敷地の内部で井戸を中心とした水場の位置が限定されていたことが推定できる。

規模は径3m以上のもの、2mに満たないものの2者があり、形状は楕円形と円形を基調としている。断面形状は上部が開く漏斗状、円筒状があり、漏斗状が最も多い。

井戸枠をもつものと素掘りのものがあり、後者が多数を占める。井戸枠をもつものはすべて平成 28 年度調査区での検出である。確認できた井戸枠は湧水が激しいことから底面までの掘り下げが行えなかったものもあるが、①丸太を割り、内部を刳り貫いたのちに組み合わせて井戸枠とするもの（SE01）、②底面の四隅に隅柱を立て、横桟を渡し、その外側に葦を立て並べるもの（SE05）、③下位は円筒形状の素掘りであるが、上位にのみ隅柱・横桟を用いて井戸枠を1段作り、横桟の外縁に竹を立て並べるもの（SE07）、④底面に底板を外したやや大型の桶を設置し、その上部に石を円筒形状に積み上げるもの（SE09）、そして⑤底面付近に建築部材と思われる廃材を方形状に横位に積み上げ、その外縁に葦を立て並べるもの（SE03）など、

様々な構造のものがみられる。なお、今回確認された木枠を有する井戸跡では、隅柱と横棟の結合部分に釘は用いられておらず、隅柱に穿ったホゾ穴に横桟を通してしている。これらの構築された時期をみると、①については中世の時期の遺構であるが、そのほかはすべて近世段階と考えられ、17世紀前半から後半にかけての時期とみられる。

今回確認された井戸枠を有する井戸跡のうち、市内での調査事例と照らすと②に近似するものが平成28年度調査区と隣接する県道亘理塩釜線改良事業に伴う調査の際に3基ほど確認されている。また石積みの井戸跡については、近世後期の段階のものが岩沼要害拝領者である古内氏家臣の屋敷跡である丸山遺跡の調査で1基確認されているが、今回のようやや大型の桶と石積みの組み合わせは現時点では管見に触れていない。井戸枠を有する井戸と素掘りの井戸の相違、大型の掘方を有する井戸跡の構築時期など井戸跡に関する種々の課題については改めて別稿で述べたいが、井戸枠を有する井戸跡が集中して確認された箇所が矢ノ目足軽成立以前にこの地を拝領していた佐藤氏・奥山氏の時期の遺構・遺物のみが確認されている地點であることを踏まえると、近世初頭の段階ではある程度の土木技術が不可欠となる井戸枠の設置に関しては限定的な身分にある者のみが可能となるような階層性が介在していることも予想される。

## 6.まとめ

- ・下野郷館跡は、中世～近世の城館・屋敷地跡である。岩沼市下野郷字館外・館内に所在する。五間堀川左岸に形成された自然堤防、及び仙台平野沿岸部で顕著に発達する浜堤上に立地し、東西約1.2km、南北0.6kmの範囲である。平成24・25・29年度調査区は下野郷字館外、平成26～28年度調査区は字館内所在する。
- ・平成24・25年度の調査では遺構が極めて少ないとから畠地あるいは荒蕪地的な状況であったと考えられる。また25年度調査のSD01より出土した近世・近代陶磁器は焼土塊や炭化材とともに出土しており、火事後の処理で一括して投棄された可能性が考えられる。
- ・平成26年度の調査では調査区の南北で遺構密度に大きな差異を生じている。この地点では複数期にわたる東西溝跡が確認されているが、この溝を境として南側は過去の洪水によって運搬されたやや軟質の土壌で形成されていたことから、地盤の軟弱な範囲を避けて生活を営んでいたことが判明した。
- ・平成27年度の調査で設定したA区は、県道亘理・塩釜線改良事業に関連して調査を実施したD区に東隣している。過去の調査では東側で遺構が希薄となることが判明していたが、A区の調査においてはさらにその傾向が強まることが明らかとなった。また志賀沢川沿いに設定したC区は、従来湿地と考えられてきた箇所においても部分的には多数の中世遺構が存在していることを確認した。なお、このC区では元禄16年にこの地に成立した矢ノ目足軽に係わる遺構・遺物は一切確認されておらず、中世と近世では土地利用のあり方が大きく異なることが判明した。
- ・平成28年度の調査では、最も多くの遺構・遺物が発見された。特に中世では、これまで文献史学上で当地は空白地となっていたものの、鎌倉期を中心として、小河川の結節点の地に河川交通・物流を掌握する在地勢力が存在した可能性が考えられるようになった。また近世では、出土遺物の年代観は17世紀代でまとまるところから、矢ノ目足軽が成立する以前にこの地を押領していた佐藤氏・奥山氏の時期の遺構と考えられ、一方で矢ノ目足軽成立以降の遺構・遺物が見られなかつた背景には、旧領主が移転後も土地を利用する上で何らかの制約が存在していた可能性が伺えた。
- ・平成29年度の調査では、中世の区画溝と考えられる溝跡が発見された。出土した中世陶器には、断面や内外面を研磨に使用するものが多数みられる。この陶器の研磨使用は砥石等への転用が考えられるが、平成29年度調査区での出土中世陶器に占める研磨使用の割合が高く、周辺地区的性格を示す可能性がある。

## 引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 潬戸系』
- 愛知県史編さん委員会 2012 『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』
- 岩沼市 1992 『岩沼市土地分類調査（細部調査）報告書・現況調査編』
- 岩沼市教育委員会 2004 『下野郷館跡』岩沼市文化財調査報告書第2集
- 岩沼市教育委員会 2005 『鶴ヶ崎城跡 -第4地点-』岩沼市文化財調査報告書第6集
- 岩沼市教育委員会 2009 『竹駒神社境内遺跡』岩沼市文化財調査報告書第8集
- 岩沼市教育委員会 2010 『丸山遺跡』岩沼市文化財調査報告書第9集
- 岩沼市教育委員会 2011 『西須賀遺跡』岩沼市文化財調査報告書第10集
- 岩沼市教育委員会 2013 a 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書I』岩沼市文化財調査報告書第12集
- 岩沼市教育委員会 2013 b 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書II』岩沼市文化財調査報告書第13集
- 岩沼市教育委員会 2013 c 「熊野遺跡（第2次調査）の概要」
- 『平成27年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 岩沼市教育委員会 2016 a 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書III』
- 岩沼市文化財調査報告書第14集
- 岩沼市教育委員会 2016 b 『高大瀬遺跡・にら塚遺跡』岩沼市文化財調査報告書第16集
- 岩沼市教育委員会 2017 a 『貞山塙発掘調査報告書』岩沼市文化財調査報告書第17集
- 岩沼市教育委員会 2017 b 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書V』
- 岩沼市文化財調査報告書第18集
- 岩沼市教育委員会 2017 c 「岩沼市・原遺跡の調査概要」『第43回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 岩沼市教育委員会 2018 『原遺跡第2次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第19集
- 岩沼市史編纂委員会 1984 『岩沼市史』
- 岩沼市史編纂委員会 2015 『岩沼市史 第4巻 資料編I 考古』
- 岩沼市史編纂委員会 2018 a 『岩沼市史 第1巻 通史編I 原始・古代・中世』
- 岩沼市史編纂委員会 2018 b 『岩沼市史 第9巻 特別編I 自然編』
- 江戸遺跡研究会 2001 『図説江戸考古学研究辞典』柏書房
- 大橋 康二 2004 『世界をリードした磁器窯 肥前窯』シリーズ遺跡を学ぶ005 新泉社
- 北垣 聰一郎 2010 『近世河川の護岸堤防における付属構造物の「水制」-とくに枠木（木枠）について-』
- 『帝京山梨文化財研究所研究報告第14集』
- 北垣 聰一郎 2014 『近世における石積み技術』『江戸の開府と土木技術』吉川弘文館
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1995 『柴田コレクションIV -古伊万里様式の成立と展開-』
- 佐藤 洋 2002 『仙台市内出土の陶磁器集成 -近世-』『仙台市博物館調査研究報告第』22号
- 篠田 恒男 2006 『盃物語』光雲出版
- 関根 達人 1998 「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報』10
- 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2007 『窯跡出土の近代陶磁 -瀬戸・美濃窯の近代I-』
- 瀬戸市歴史民俗資料館 1993 『明治時代の瀬戸窯業 -時代を彩ったやきもの-』
- 芹沢 長介編 1978 『切込』

- 芹沢 長介 1976 「切込焼の碗と皿」『東北考古学の諸問題』寧楽社
- 仙台市教育委員会 2000 『王ノ壇遺跡』仙台市文化財調査報告書第249集
- 仙台市史編さん委員会 2004 『仙台市史 通史編5 近世3』
- 多賀城跡調査研究所 1983 『多賀城跡』多賀城跡調査研究所年報 1983 43次調査
- 太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 -』
- 千葉 孝弥 1992 「留守氏の館と市のにぎわい 屋敷のくらし」『よみがえる中世 7』平凡社
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 東北中世考古学会 2003 『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
- 東北陶磁文化館 1987 『東北の近世陶磁』
- 東北歴史史料館 1995 『仙台・堤のやきもの』
- 長佐古 真也 2007 「続・お茶碗考 - 近代・現代の中形碗に飯碗を探る -」  
『考古学が語る日本の近現代』ものが語る歴史 14 同成社
- 西田 宏子・大橋 康二 監修『別冊太陽 古伊万里』
- 西田 宏子・出川 哲郎 編 1997 『中国の陶磁 第10巻 明末清初の民窯』平凡社
- 畠 大介 2010 「引っ張り構造をもつ護岸施設の展開」『帝京山梨文化財研究所研究報告第14集』
- 畠 大介 2013 「治水・利水の技術と系譜」『水の中世 治水・環境・支配』高志書院
- 原町市 1999 『相馬のやきもの - 収蔵資料を中心として -』
- 原町市教育委員会 1995 『相馬地方の古陶』
- 宮城県教育委員会 1996 『一本杉窯跡群』宮城県文化財調査報告書第172集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1985 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』
- 森田 克行 2014 「近世をきりひらいた土木技術 - 桧木棒と枠工法護岸施設 -」  
『江戸の開府と土木技術』吉川弘文館
- 山野 英雄 2012 『切込焼』無明社

## 報告書抄録

岩沼市文化財調査報告書第 20 集

## 下野郷館跡

- 五間堀川河川改修所業に伴う発掘調査報告書 -

平成 30 年 10 月 26 日

発行 岩沼市教育委員会

岩沼市桜 1 丁目 6 番 20 号

生涯学習課 TEL0223-23-1111 内線 573

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町 2-10 TEL022-288-6123